

---

# マテリアル・メモリ

和貴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マテリアル・メモリ

### 【Nコード】

N6156F

### 【作者名】

和貴

### 【あらすじ】

大切な人が人獣の血と共に蘇った。連邦中央統括機構FCIに所属している岬に与えられた指令は、彼女の身柄確保と射殺命令。再び蘇った命を消すか？生かすか？過去を失った彼女の身体には、彼を愛した記憶は存在しないのか？

流血、残酷シーンがあるため、R15としています。 デリートシリーズ第3弾。こちらはサブキャラの高城が主人公。本ストーリー完結後に二人が受けた任務が『ドール（デリート2）』の後半へと続きます。

## 第1話 女…

何台ものパトカーがけたたましいサイレンを鳴らし、賑々しく回転灯を点灯させながら、まだ夜も明けきらぬ暗くて細い路地の入口を、幾重に塞ぐようにして慌ただしく停車する。

到着した警部達は、事件が起こった現場へ足早に歩を進めながら、それぞれが両の手に白い手袋を嵌める。

警部の一人が、先に現場へ到着していた警察官に声を掛けた。

「富樫、被害者の身元は？」

ガイシヤ

「は、ボブ・マークウエル。男性。年齢不詳。職業は霊媒師です」  
「霊媒師い？ この科学万能の時代にか？」

警部は胡散臭そうに眉を顰めて頭を掻いた。そして地下に通じている石造りの階段を、足を滑らさないように用心深く下つて行くと、要所々に配置された警官が、それぞれ警部に対して軽く敬礼をし、案内誘導を執る。

現場は地下五階の繁華街の入り組んだ狭い迷路の中だ。地上から離れたその辺りの気温はぐつと下がっていて、年中温度差に変化は無い。空調が悪く、淀んで湿った空気がひんやりと背後から纏わり付いて来て、これから事件が起こった現場へ赴かなければならない浮かない気分を、より一層陰鬱としたものにしてくれる。

警部は自分の後に数人の警察官を伴って、事件現場のドアを潜った。遺体のある部屋へ踏み込むと、誰もが目の前の惨状に我が眼を疑って息を呑む。

被害者の身体は血液に塗れた肉の塊と化していた。腹部が大きく抉られて、本来あるべき内臓器官の大半を失っていた。

壁に何度か激しく叩き付けられたのだろう。室内の至る所には、壮絶に飛び散った血痕が凄惨な状況を生々しく伝えていた。辺りには夥しい血と肉片が散乱しており、被害者が男か女かの性別さえ判断に時間を要するほどだ。

「ほ、本当に……喰われて……いるのか？」

警部は惨状に眼を逸らす事が出来ないまま、喉の奥から言葉を振り絞るようにして呟いた。

\* \* \*

「大型の肉食獣だとお？ 何処の馬鹿がそんなくだらん冗談を言ってる？ ああ？ 動物園のトラだかライオンだかが逃げて人を襲ったとでも言うのかよ？ そんな報告は聞いてないぞ？ もっと真面目に仕事しろよ！ この真つ昼間から何を寝惚けた事言つてやがる！」

桐嶋署きりしまの芹澤課長は、隣の所轄内で起きた事件の報告書を、机に乱暴に叩き付けて吼えた。四十代後半の中間管理職。彼の薄くなつた頭頂部がその神経質さを物語っている。

通り掛つた婦警が彼の大声に驚いて、会議用の資料CDと書類一式をばら撒いてしまった。

「こんなモノを遣して……在り得ない！」

手にしていた報告書には、長年自らの目で確かめて培つて来た経験からは在つてはならない出来事の詳細内容が記されていた。余りにも非現実的な報告に、芹澤は自分達警察官が馬鹿にされたのだと勘違いしている様子だ。

「高城は何処へ行つた？ ああ？ 奴あまたサボりか？」

署内に召集を掛けて集まつて来たメンバーの中に、彼の部下である高城岬の姿は無かつた。

芹澤は苛々しながら部署内を見回して彼の姿を捜した。

芹澤と視線を合わさないように署内の誰もが顔を背ける。わざとらしくデスクに向かい、書類作成を始める者や、何処かに連絡を取ろうと受話器を持つ者までいる。皆、芹澤の怒りの矛先を回避しようとしての行動だ。

「ああ、岬なら、今日は居らんぞ？」

署内の片隅にある来客用のソファで、日本茶を啜りながら年配の婦警相手に詰将棋をしていた老人が口を開いた。既に現役を退いてもう何年になるのだろうか。見掛けは七十をとうに超している小柄な老人だが、豊饒とした物言いだ。

「何だとお？」

ピクリと芹澤の片方の眉が上がった。

「幾らお前さんが喝を入れて遣ろうと思っても、今日ばかりは勘弁してやれ……っと、おっ？ うーん、そう来たか」

老人は芹澤へは目もくれず、終始腕組みをして正面の棋盤に集中している。

「爺さん、そいつはどういう意味だ？」

「ああ？ どういう意味も、こういう意味もありやあせん。そのまんまじゃ」

「……」

芹澤は鼻息を荒くして老人の小柄な背中を睨み付けた。『年寄りが出しゃばりやがって』と言わんばかりの態度だ。そんな芹澤を見兼ねて、老人の相手をしていた婦警が困った表情を浮かべる。

「芹澤さん、肩の力を抜いて。ね？」

「自分が……で、ありますか？」

心外だと言わんばかりに、芹澤は猶も鼻息を荒らげた。

「ガイシャの名を、お前さんなら聞いた事がありやあせんか？」

「え？」

老人の不意な問い掛けに芹澤は怯み、一旦は目を通していたはずの報告書類へと慌てて視線を落とす。

「ああ、ありやあ奴の偽名じゃったかな？」

「偽名？」

「本名はゲイル。元は大陸からの流れ者でな、奴はあ一昔前にこの辺りを根城にしとった麻薬組織の頭取じゃった男じゃよ。わしと同じで、引退してもう何年になるかの……大方、若い者の遣り方に

口でも挟んで消されたのと違うか？」

老人は手を止めて顔を上げると、昔を思い出すような遠い目をした。

「組織の……？」

耄碌していても不思議ではない老人の達者な記憶力に舌を巻き、芹澤は呆然として立ち竦んだが、すぐに自分の背後に立った人の気配を感じて我に返る。

「芹澤君、高城なら今日は非番で此処には居らんよ」

背後から穏やかな声を掛けられた。振り返れば、背の高い白髪交じりの紳士が立っている。

「あつ……し、署長」

芹澤は相手を見るなり狼狽し、慌てて姿勢を正した。

「構わん。気を遣わなくていい。あれは今頃墓参りだ」

「墓参り……で、ありますか？」

「君は『あの後』の異動で此処に来たな……まあ此方での私事だ。各国の閣僚会議が開催される上、組織間での不穏な動きもある今、人手が不足しているのは十分承知している。が、もう少し。あと一、二時間。今だけはあれに時間を遣ってはくれまいか？」

「はあ」

署長から頭を下げられてしまった芹澤は、氣勢を殺がれて肩を落とすとした。

署長も苗字が高城タカシヨウ 芹澤が捜している男の父親だ。

赴任して暫くの間は、この署長と同じ姓を持つ部下の岬が、実は親子関係だったとは、ついぞ思わなかった事だった。本人達も、二人を取り巻く周囲の者も、業務中では誰もが一切の馴れ合い感情を持ち合わせては居なかった。それだけ公私混同を微塵も見せない徹底した姿勢を維持していた署長が、非番である息子の岬を庇い、初めて身内として芹澤に謝罪したのだ。

恐らく、岬と深く関わりを持つ大切な人物の墓参りなのだろうと言う事は、芹澤にも理解出来たので、それ以上の言及は憚られた。

鬱陶しい雨雲が低く垂れ込み、煙るように降頻る雨は、静かに辺り一面を浄化して行く。

一台の黒塗り高級車が、郊外にある公営墓地の駐車場に停まった。墓地は海が望める小高い丘にあった。周囲の敷地を取囲むようにして、凝ったグラデーシヨンの白いフェンスで外部と切り離されている。木々の緑をふんだんに取り入れた静かな場所だ。

車から降りて来た人物は、日焼けした肌を持つ背の高い男だった。髪は緩く癖を持った茶髪をしており、切れ長の眼は涼しげで、一見アウトドアが似合う遊び人と間違えられそうな容姿だが、彼はこれでも歴とした警察官である。

彼の名は『高城岬』タカシヨウノササキ。桐嶋署の芹澤課長が捜していた人物だ。

岬は複雑な面持ちで雨雲を見上げると、黒い無地の傘を広げた。喪服の黒いスーツを着用しているのだが、手には墓参りに似つかわしく無い、真紅の薔薇の花束を持っている。

岬は手にしていた薔薇に視線を落とした。それは生前『彼女』との記念日に幾度も手渡していた花束だった。

敷地に入る為には三箇所の門が在り、その何処からも入る事が可能だ。但し、門は通常施錠されている。鍵を外す為にはセキュリティカメラへ本人を証明出来るI・Dカード等証明書の提示か、既に登録されていれば網膜や指紋、声紋による照合が必要だ。

岬は施錠解除の為に、左の人差し指をセキュリティ画面に押し付けた。

軽い電子音とともに、紅く光っていた表示ランプが青色表示に切り替わり、セキュリティが岬を登録者だと承認する。

何処からか甘い花の香りが漂って来ていた。

「駄目だ。絶対に反対だ！」

岬は頑としてその要求を拒否した。

「しかし……」

一同は言葉を濁す。

「タダの人質交換じゃない。奴は薬を遣っている！ そんな事は身代わりのドールに遣らせればいい！ 奴はあの状態だ。誰だっていい！ 君じゃなくても解らない！」

険しい表情をした岬の瞳には、毅然として彼を見詰め返す長い亜麻色の髪を持つ女性刑事が映っていた。

薬物中毒患者が病院内に立て籠もってから、既に六時間が経過しようとしていた。初期の段階で取り押えれば良かったのだが、第一通報で駆け付けた警官は、犯人を捕らえるどころか逆に拳銃を奪われて射殺されてしまった。

健常者であった頃の犯人はかなりのガンマニアで、有名な射撃大会には必ず上位に名前が出るほどの人物だった。

しかし、二年前に地方で起こった拳銃による連続殺人事件で逮捕されてしまう。刑期が確定してから七カ月後に真犯人が別件で逮捕され、晴れて冤罪であった事が証明されたのだが、既に彼の人生は総てが手遅れになっていた。

以後、薬物に逃避してしまい、身内の介添えで都内のこの病院で入退院を繰り返していた。

犯人の要求は、自分を誤認逮捕してしまった当時の警察官への報復だったが、無論聞き入れられる次元の要求等では無い。しかも時間の経過とともに、薬物の副作用で錯乱状態の症状が顕著になっていった

岬達が駆け付けた時には、既に人質の患者数名と医師一人が射殺されており、院内には猶も数人の人質が居り、その中には透析を必



要としている重篤な患者も含まれていた。

犯人の過去の事件を調べ上げたマスコミ連中がどつと押し寄せた為、警察は身動き出来ずに膠着状態が続いたのだが、透析患者には時間的な余裕など残されてはいない。

眼の前で刻一刻と症状が悪化して行く患者の容態に、警察は患者の人命を優先して人質交換の交渉を申し出ると、犯人は偶然警官隊の前で指示をしていた亜麻色の髪の女性　主任の玲奈を交換条件に指名して来たのだ。

『ドールを此方に遣っている猶予は無いわ。マスコミが押し掛けて来ているのよ？　何より人質にされている人達がいる。此処で犯人を欺いても他の人達は欺けない。ただでさえ警察に対する民衆の不信感を払拭出来ないのにこれ以上煽る事は……犯人の弾はあと一発。大丈夫、行きます』

彼女の明るい栗色の瞳には、反対する岬の言葉を撥ね返すだけの毅然たる信念があった。

『玲奈、止せ！　君が今その全ての責任を負う事は無い。行くな！』  
必死で説得を繰り返す岬の声も、人質を助けたい一心に駆られた彼女の心には届かなかった。

同僚達に背を向け、犯人に向って歩み始めた玲奈を見た岬は、慌てて車内からスナイパーライフルを掴み走り出した。犯人に気取られぬよう移動する岬の背を嘲笑うように、無情の銃声が響き渡った

\*  
\*

気が付くと、岬はいつの間にか彼女の墓前に立って居た。

俯いていた顔を僅かに上げて、花束を供えようとしたその手が止まる。虚ろな視線の先には、大輪の見事なカサブランカが、降頻る雨の中で濡れそぼっていた。誰かが先に献花をしていたのだ。辺り

に甘い香りが拡がっていたのは、この大輪のカサブランカの香りだったのだ。

誰だろうと思った。

一年前に彼女が亡くなってからというものの、何度か此処に足を運んだが、決まって自分よりも先に誰かが献花をしている。墓参りとは言っても、此処に彼女の遺骸は無く、形式だけの物だ。遺体は彼女の生前の同意を汲んで、ドナーとして然るべき所に冷凍保存されているにも関わらず。

「遅かったですね？」

振り返ると、黒いトレンチコートを着た、岬よりも五、六歳くらい年下の男が傘を差して立っていた。細身で背が高く、赤銅色の肌に銀髪。そして澄んだ蒼い眼を持った彼には、まだ少年の面影が残っている。

彼の片手には、淡い紫のトルコ桔梗の花束が携えられていた。

「アーヴィン……お前か。俺に付き纏っても、ネタなんか無いぞ？」

お約束の言葉を浴びせて睨み付けたが、報道関係者である彼が力メラではなく花束を手に使っていたのを見て、岬は硬い表情を幾分か和らげる。

「俺は単に、彼女のファンでしたから」

「お前が？ 玲奈の？」

岬はアーヴィンを見下すよう鼻で笑った。

アーヴィンは自分を見て不機嫌になっている岬を後目に、さつさと墓前に花を手向けた。そして墓前に暫く手を合わせて黙祷すると、徐に岬の方へと振り返る。

「俺は今でも貴方を許せない。何故こんな事になってしまったんです？ 貴方が傍に付いて居ながら……何故、彼女を死なせてしまったんだ？」

「お前から玲奈の事を許して貰おうとは思っちゃいない」

岬はアーヴィンの問い掛けに答えられず、視線を逸らせた。そし

て、自分の利き手である左手を広げると、掌へ視線を落として凝視した。

『何故助けられなかった』アーヴィンの言葉が、岬の胸に重く押し掛かる。尤もその問い掛けは、岬が自身に対して何度も問い掛け続けていた言葉なのだ。

押し黙ってしまった岬を、アーヴィンは怪訝そうな眼で見返すが、済んでしまった事を今更問い質してみた処で、納得出来る答え等在ろう筈も無い。

「貴方にどう思われようと結構です。俺の気持ちの問題ですから……ところで、最近貴方の身边で変わった事はありますか？」

「ああ？」

心無い言葉を投げ付けられたすぐ後だ。まともに返事をする事でさえ億劫だった。尤も、アーヴィンは普段顔を突き合わないマスコミ関係のハイエナだ。公でも、個人的にも彼と関るのは願ひ下げだ。

「そのぶんじゃ、異常無しですか。今の所は……」

アーヴィンの蒼い瞳が、懽然としている茶髪の岬を映し出す。

「何の事だ？」

岬はアーヴィンの心の内を読み取れないもどかしさに苛立ち、眼を細めた。

「そのうちに判ります……アレックス通りにある会員制クラブ『ラジエンドラ』をご存知ですか？」

「ああ」

「行った事は？」

「馬鹿言え。公務員の俺には敷居が高過ぎて入れるか」

急に何を言い出すのかと思えば、高級クラブの話題だ。岬は、突拍子も無いアーヴィンの問い掛けを見下して笑った。

「貴方が……ですか？」

アーヴィンは意外だなといった表情を浮べると、肩を揺らせてクスクスと笑った。

「まあ、いいや。行くか行かないかは貴方次第だ」

アーヴィンの言ったクラブ 『ラジエンドラ』は上流階級層に人気が高く、マスコミによく採り上げられている。当然の事ながら、芸能界はもとより政財界の要人の利用客も多く、訪れた事が無くてもクラブの名前くらいは知っている者は多い。どうやらそこに行った要人を取材していて、彼は何かを見付けたらしい。

「きつと驚かれますから」

意味ありげな笑みを湛えると、アーヴィンは岬をその場に残して立ち去った。

「ンだよ」

揶揄われたのだと思った岬は、ムツとして口を尖らせた。暫くの間アーヴィンが消えて行った通路に向かい、じつと降頻る雨の中に佇む。

遠くから近付いて来る数台のパトカーのサイレンに気付いた岬は、音のする方を気にして振り向いた。が、此処からでは木立に遮られて何も見えない。

事故でも起きたのかなと暢気に構えていられるのは非番だからだ。それに、この辺りは管轄外でもある。自分には関係が無いなと思っ  
ていると、無意識に左手が煙草を捜していた。慣れた手付きで一本を取り出して銜えると、今度はライターを捜す。

「ん？」

思い当たる箇所をスーツの上から弄るが、ライターと思しき硬い金属の感触は何処にも無い。

何を遣っているのだろう……

岬は自分の不甲斐無さを痛切に感じていた。

その気になれば、セキュリティの検索履歴で、誰が彼女の墓参りに来ているのかはすぐに判る事だ。しかし、今の岬はそれを調べよ

うとはしなかったし、知る気にもなれなかった。

一年前に『彼女』を失って以来、岬は自分の時間が停まっている。後から着任して来た上司の芹澤は、そんな腑抜けた岬を格好の弄りネタにしていた。

「もう、一年になるんだな……」

岬は低く呟くと、黒曜石で出来た墓石にそつと利き手を伸ばし、そこに刻まれている彼女の名前を愛おしそつに指先で辿った。

一年と言う歳月が、これほど途轍もなく長く感じられた事は無い。今でもあの時の事は夢であつて、何かの悪い冗談だと強く願わずには居られない。だが、彼女が二度と還らぬ人になつてしまったのは、変える事の出来ない事実なのだ。

雨に濡れた墓石から、触れる者総てを拒絶しているように、指先へ硬く冷たい質感を与えて、沈んだ気分を一層落ち込ませられてしまつた。

何故、彼女が犠牲にならなければならなかつたのか？

何故？

幾ら問い掛けても、答えは戻つては来ない。戻る筈が無いのだ。虚しさを覚えて肩を落とし、頂垂れた岬は持つて来た花束を供えると、両手を組んで静かに黙祷する。彼女にもう一度逢いたいと言ふ強い想いが胸にこみ上げて来て堪らなくなつたが、岬はその想いを擦じ伏せるように硬く眼を閉ざした。

「？」

偶然だろうか？

一瞬、何者かの強い視線を感じ取り、岬は弾かれたように顔を上げた。身体の中で警報が鳴り響き、咄嗟に緊張の糸を張り巡らせて警戒する。

何処かの組織の者かとも思ったが、まだ事を荒立たせるような状

態ではない。それに視線には殺気が全く感じられず、寧ろ救いを求めて縋り付くような気配さえ窺えた。

気配のする方向に視線を奔らせながら、同時に左手が無意識の内に上着の懐に滑り込む。

その時だった。

視界の隅で、質感を持った白い塊が、岬から十数メートル程離れている緑の生い茂った大木からどさりと落ちた。大木の手前にある生垣に遮られて、何が落ちて来たのかを確認出来ない。

岬は軽く舌打ちをして傘を放り投げると、握っていた拳銃を懐から取り出した。安全装置を素早く外し、腰を低く落として構えると、用心しながら小走りに生垣に向って駆け寄るが、一メートル程の高さの生垣に阻まれて、近寄っても未だに確認出来ないでいる。

これは畏かも知れない……とも思った。しかし、躊躇している場合では無い。

左手に握った銃を構え直し、一旦大きく息を吸い込むと、意を決して息を詰め、一気に生垣を飛び越えた。

素早く銃口が獲物を捕らえる。

「！」

瞬間、岬の視界に信じられないモノが飛び込んで来た。

白く見えたものの正体 それは、横向きに倒れ伏している長い亜麻色の髪を持つ若い女性の姿だった。しかも彼女は一糸纏わぬ姿なのだ。

「うわ？」

岬の無意識下の良心が、素早く彼女から視線と銃口を逸らせたが、その行動を執った事で逆に我に返った。接した相手から一瞬でも眼を逸らせる事はセオリーに反する。相手が銃を所持していれば、完全にアウトだ。

彼女の姿に度肝を抜かれて驚いてしまった岬だが、すぐに冷静さを取り戻した。そして意識の有無を確認しようと彼女の背後に廻り込んで顔を覗き込んだ途端、岬の心臓がドキリと大きく脈打った。

絹のように輝き、身体のラインに沿って流れる柔らかな長い髪。透き通るような白い肌。長い睫に、紅く甘やかな形の良い唇。肩から腰にかけての滑らかな曲線。その総ての何もかもが岬の知っているものだと思えたからだ。

「れ……玲奈！」

女性が余りにも亡くなった玲奈に似ていた為に、思わずその名が口を突いて出てしまった。

そして岬は、自分が口にしたその名前で、一気に現実を引き戻されてしまう。

「違う……いや、そうだよな。そんな筈……無い」

岬は自分の思い込みを振り切るように、首を静かに横に振った。どんな奇跡が起こったとしても、彼女が亡くなったのは紛れも無い事実なのだ。他人の空似でしか無いと、岬は何度も自分に言い聞かせる。

女性の背後に片膝を着くと、利き手の左指先でそつと女性の頸動脈に触れた。指先に、不規則ではあるが、速いテンポで脈打っている脈拍が伝わって来る。

「……玲奈」

もう一度、その名を呼んでみた。何度人違いだと思っても、彼女は想い人の玲奈とそっくりだ。信じられないくらい良く似ている……いや、似過ぎているのだ。

岬は彼女が『玲奈』であると証明出来る手懸かりは無いかと、必死になって辺りを見回すが、周囲には彼女の身元を証明出切るような物は何ひとつ見当たらず無かった。唯一、彼女が身に着けていたものは、細い首にしていた、プラチナ製の凝った飾り細工が施されたチョーカーのみだ。だとすれば、彼女は一糸纏わぬ姿で今まで何処に居たのだろうか？ しかも墓地のセキユリティを容易にパスして。

「う……」

意識を取り戻しつつあるのか、気を失っている彼女の表情が苦痛に歪んだ。

岬が彼女の肢体に視線を這わせると、左足首から夥しい出血が認められ、蒼白い素足が真っ赤に染まっている。

それが銃創だと言う事は一目で判った。貫通していない為、まだ彼女の足に銃弾が残っている。それでも血の匂いに気付けなかったのは、この降頻る雨のせいなのだと判った。

岬は上着を脱いで彼女の身体を包み隠した。そして、黒いネクタイを解き、止血の為に傷口の上部をきつく縛る。

「弱ったな……」

彼女を両腕で軽々と抱き上げたものの、流石にこのままの状態では救急車を呼び出すのは躊躇われた。

\* \* \*

鉗子を用いて彼女の足から血塗れの銃弾を抜き出すと、金属のトレーに落とした。切開部に化膿止めの消毒スプレーを吹き付け、岬は慣れた手つきで手早く傷の処置を完了させる。銃弾を摘出した際の出血は思ったより少なく、傷口も小さくて済んだ。

一気に緊張感から解放されて、岬は大きな溜息を吐いた。未だに頭の中が真っ白だ。思考回路が全くと言っていい程停止している。

この女性は一体誰なのだろうか？

彼女が横たわっているベッドのすぐ傍で膝立ちをしたまま、岬は自分のスーツを掛けて遣っている、意識不明の女性に視線を這わせた。

見れば見るほど、彼女は亡くなった玲奈に似ているのだ。まさか死んだ筈の彼女が、再び黄泉の世界から舞戻って来たとも言っただろうか？ そんな在り得ない馬鹿げた妄想でさえ脳裏を過り、岬は心を掻き乱されてしまう。夢なら早く醒めてくれと思った。一目でも良いから彼女に逢いたいと願って已まない岬にとって、この女



性の存在は余りにも酷過ぎる。けれどその半面、岬はこの女性が誰なのか知りたい欲望に駆られてしまった。何れにせよ、彼女が目覚めれば総てが明るみになる事ではあるのだが、今はもう少しの間だけ、彼女の安らかな寝顔を見守っていたいと思った。

運悪く、ものの五分と経たないうちに、テーブルの上に放置していた携帯が鳴った。墓参りに行っている間、わざと自宅に置いていた為に、着信があったとの履歴ランプが点滅している。

呼び出し音で特定の相手を登録設定しているので、呼び出しが上司の芹澤なのだとすぐに判った。こちらの都合で電源を切ったとしても、芹澤は何処までも執拗に探し出そうとする性格だ。何より、岬の直属の上司なので無視するわけには行かない。

通話の遣り取りで彼女が目覚ましてしまうのも悪いと気が引けて、慌てて椅子から立ち上がった。そしてテーブルの上から引っ手繰るようにして携帯を掴むと、急いで部屋から出て、静かに後ろ手でドアを閉じる。

「何度掛ければ出て来るんだ？ ああ？ 『携帯』の意味が無いぞ！」

通話ボタンを押した途端に聞き慣れた罵声が飛び、岬はウンザリとした表情を浮べる。

「芹澤さん？ 俺、今日非番ですよ？」

「非番だろうが何だろうがそんな事は関係無い！ 一時間後に署まで来い！」

「けど……」

「緊急召集だ。いいか？ 必ず来いよ！」

「ち、ちよつと待って下さ……あ！」

芹澤は、岬に有無を言わせないまま一方的に捲し立てて携帯を切った。身勝手な上司に閉口すると、岬は忌々しそくに手にしていた携帯を睨む。

ドア越しに、彼女が眠っている部屋から小さな物音がした。もしかすると彼女が意識を取り戻したのかも知れない。そんな期待を持って、少しだけ岬の表情が和らぐが、不思議な事に、ドアの向こう側からは人が起きて居るだろう気配は一向にして来ない。

怪訝に思いつつ、それでもいきなりドアを開けて彼女を驚かせる訳には行かないと、一度ドアノブに掛けた手を離して、逸る気持ちを落ち着かせようと、その手で自分の鳩尾辺りを押えた。

一呼吸おき、ノックをしてドアを開ける。

自分の部屋なのに変だなと思いつながら、岬は中に入った。

「……………」

開け放たれた窓から吹く風が、呆然と立ち尽くす岬の身体を撫でて通り過ぎた。

先程までベッドに居たはずの彼女の姿は何処にも見当たらない。窓に続く床には、彼女の身体を包んでいた岬の上着が無造作に落ちていた。いるだけだ。

咄嗟に身体が動き、空け放たれている窓に駆け寄った。窓のその先はベランダが続いているが、地上十六階のベランダだ。その空間の左右に視線を素早く奔らせて彼女の姿を捜すのだが、彼女の姿は何処にも見当たらない。

考えたくは無かったが、ベランダの手摺から身を乗り出してその下を覗き込んだ。

マンションの片側は都内が一望出来る崖の上に建てられている。

岬が居るベランダは崖の斜面の上であり、実際には二十階以上の高さには匹敵する高さがある。落下すればまず命は無いが、此処にも彼女の姿は無かった。

最悪の状態を想像していた岬はほつと胸を撫で下ろした。けれども今度は替わって彼女に対する猜疑心が頭を擡げて来る。

自分はおかしくなってしまうのだろうか？ それともやはり彼女の姿は幻だったのだろうか？ ……と。

岬は不思議な出来事に首を傾げながら部屋に戻った。

そのまま脱力してベッドに倒れ込み、彼女が居た辺りに触れてみる。シートからは、まだ仄かな温もりが伝わり、彼女が落としただらう長い亜麻色の髪が指先に絡まった。

室内の照明に、その髪を透かしてみると、明るい亜麻色の髪は、光の加減で輝く金の糸のようにも見える。

本当に『人』だったのだろうか？

まさか、自分の墓参りに遣って来た男の許へと現れた幽霊でもないだらう。その証拠に、サイドテーブルのトレーには、彼女の脚から摘出した銃弾が残っている。証拠がある以上、確かに彼女は存在して、此処に居たのだ

岬は上体を起こして、トレーに残された銃弾へと眼を凝らした。間違い無く、それは所轄の警官が所持している銃弾だった。彼女を発見する少し前に、岬はパトカーのサイレンを聞いている事や、摘出した銃弾を考慮すれば、彼女は警察官から撃たれている。しかも、彼女は岬に気配を感じさせる事無く、忽然と姿を消したのだ。

一体、彼女は何者なのだろうか？

\* \* \*

マンションのチャイムが鳴った。

「居る？ 涼子だよお」

インターフォンから明るい声が聞こえた。同じ桐嶋署の交通課に居る婦人警官だ。彼女は玲奈が亡くなった後、岬を案じてよく身の回りの世話を焼きに来てくれている。

「涼子、どうして今日非番だって判つ……いや、そんな事はどうでもいいや。俺、召集掛かってるんだ」

「良いよ。戻って来るの待ってるから」

「いや、待って貰っても……」  
「そう言っただけ籠る。」

「あー、何？ 来ちゃ駄目な事でもあるの？」

「べ、別に」

「ふうん。ん？ あれ？ この……匂い」

妙にソワソワとして落ち着かない岬の態度に、涼子の女の勘が働いた。彼女は仄かに岬から漂う甘い香りに気が付いたのだ。

涼子は岬の胸元から彼の顎の辺りまで、爪先立ちになって頻りに匂いを嗅いで来る。

「？ お、おい？」

首筋の辺りを頻りに嗅がれて、自然と岬の顎が仰け反った。疾しい事をした覚えなど無い心算だが、自分の匂いを嗅がれていると妙に気恥しくなってしまう。それが異性からであれば尚更だ。

「ん？ 怪しいな。それにこの香水。何か隠しているでしょ？」

「えっ？ 香水？ お前のじゃないの？」

慌ててスウェットの裾を持って嗅いでみると、爽やかな甘い花の香りが岬の鼻を擽った。

「何言っているのよ。イヴニファールでしょこれ？ 涼子、こんな高いのなんかしてないわよ」

「イヴ？ 何って？」

聞いた事のない名前に岬は首を捻った。

「呆れた。香水ブランドの名よ。知らないの？ 少しはそう言う事を知識として知っておかないと、モテないわよ」

涼子はそう言っただけ笑いながら、岬の部屋へ入ろうとしてドアノブに手を掛けた。

「お、おい！ そこは……」

「なに？ どうした……の？」

室内には、まだ彼女の傷を処置したものが散らかっている。岬は慌てて涼子を止めるのが、既に時遅しだった。

ドアを開けた涼子の髪が逆立った。彼女の視界には、シートが乱れて真新しい血が付着しているベッドが映っていたからだ。

\* \* \*

「ただいま。あれえ？ お兄、居るの？」

サラサラの栗色の頭がドアから覗いた。大きな瞳が、リビングのソファで仰向けに寝そべっている岬を見付ける。

「んあ？ 環？<sup>たまき</sup> お前、学校は？」

岬は片目を開けて環を見上げた。

環は中学一年生。岬とは一回りも歳の離れた腹違いの妹だ。二つの赤い球が付いたゴムで頭の上を縛った、栗色のボブが良く似合っている。サラサラの髪と同じ色の大きな瞳がよく動いて活発そうな女の子だ。父親の仕事の都合上、今は岬が環の保護者になっている。

「ん、今日は参観日だったから」

「はあ？ 聞いてないぞ」

「だって、今日は……」

「ンだよ？」

鬱陶しそうな岬の返事に環は口籠った。

「もう。言えないよ。本当は、今日お兄がお休み取ってたのは環の為かな？ なんて勝手に思ってたけど、やっぱり違ってたね」

環なりに岬の事を気遣ってか、玲奈の名を口にはしない。岬もそんな環の心遣いに気が付いた。

「ごめんな」

「良いよ別に。だって、今までお兄が来てくれてたワケじゃなかったモン。それより、さっきマンションの下で涼子さんと会った。涼子さん、泣いてたよ」

「あ、ああ……」

「どうしたの？ ケンカ？」

「せえな！」

環が押揃ってニヤニヤしながら岬を見詰めると、岬は声を荒らげてわざとらしく寝返りを打ち、環に背を向けてしまった。

「うわっ機嫌悪っ！ もお、オトナ気無いなあ」

環は岬の態度にムツとなるが、岬が妹の環に突っ掛るのは珍しい事だった。尤も岬に取っては、一回りも離れた妹の言葉に一々角を立てていては堪ったものではない。

「せえつての。首、突っ込むな！」

「はいはい。オトナの付き合いだって？」

環は二人の喧嘩に心当たりが無い訳ではなかった。今日は玲奈の命日だ。岬の気持ちを考えれば、世話焼き女房を気取って通って来る涼子との喧嘩も、ある程度の察しは付く。けれど、岬が喧嘩をする事自体珍しいなと環は思った。岬は妹の環にさえ、滅多に怒りの感情を見せるような事は無く、それは同居していた玲奈に対しても同様だったからだ。

玲奈の生前、環は玲奈が岬に対して何度か声を荒らげていた所を眼にした事があった。職務権限上、玲奈の方が岬よりも役職が上ではあったが、ずっと黙ったまま弁解すらしようとしない岬を、環は不甲斐無いと思って軽蔑していた時期もあった。

しかし、その玲奈が亡くなった。

以来、環は岬がどんなにだらし無くても、苛立ったり妙に気になったりはしなくなっていた。思えば、激情に任せて相手を傷付けたくは無いと言う、岬の不器用な優しさが意図しての事だったのだからと納得出来るようになったからだ。

「あれ？ お兄？」

岬からいつの間にか姿を消されてしまい、リビングに取り残された環は、慌てて視線を泳がせる。

「ここだ」

返事の後で少し間があってから、別室のドアが開いた。

自室から出て来た岬は、薄いグレーのスウェット上下から、黒っぽい上着を手にしたスーツ姿に着替えている。

「召集。遅くなるかも知れないから。戸締り、ちゃんとしておけよ」  
岬は環の視線に気付き、背広に腕を通しながらそう言った。

## 第2話 特命

「以上の条件でチームを編成。各自、単独の行動は控える。拳銃の携帯を怠るな。拳銃使用の際の行動には、細心の注意を払う事。いいいな？」

大型肉食獣に因るものと疑われる殺人事件が再び起こった。被害者はホームレスに変装していた麻薬密売人。彼は取引場所だと思われる公園内で、大木に引き摺り上げられ、血塗れになって絶命していた。

しかも今回は岬達が居る桐嶋署所轄内での事件だった。広域に亘る凶悪事件に対して、各警察署は捜査範囲を拡大するため、隣接している警察署との連携を余儀無くされた。

「遅れてすみません」

歪んだネクタイを直しながら、岬は足早にブリーフィングルームへと入室した。

思ったよりも道が混んでいて、芹澤との一方的な約束時間に若干遅れてしまった。当然ではあるが、招集が掛けられた者全員が着席して居り、打ち合わせは予定時刻通り既に始まっていたのだ。その中には見知らぬ署員の顔も揃っている。岬はその面々に圧倒されて居心地が悪くなり、所在なく頭を掻いた。

「遅い。何処で寄り道をしていたんだ？」

芹澤がちらりと岬を一瞥して顔を背けると、厭味混じりにそう言い放って露骨に顔を歪める。

「はあ……」

正式な手続きをして許可を貰っている休日に、いきなり呼び出されて「遅い」と文句を言われる道理に納得出来ないが、芹澤が岬の上司である以上無視する訳にも行かない。

「『はあ……』じゃない！……ったく。何だア？ 相変わらずの



「覇気の無さは！」

署内だけでなく、他の警察署から来た初対面の署員達が居る前で、頭ごなしに怒鳴られた。

「早くそこに座れ」

「あ、はい」

ふと眼を逸らせたその先で、テーブルの隅で日本茶を啜っていた老人と視線が合った。

「お前さんも豪いに見込まれちゃったのお」

老人は悪戯つ子のような眼で、棒立ちに突っ立っている岬に向かって器用にウインクを遣すと、カカカと笑った。

「こ、小島さん、聞いてますよ？」

岬は小声で小島を嗜めながら着席するが、岬の声も完全に芹澤の耳に届いていたらしい。こちらをキツと睨んで顔を引き攣らせた芹澤の肩が戦慄き、手にしていた書類に力が籠って皺が寄った。

不快感を露わにする芹澤の様子を面白そうに窺いながら、小島は尚も続けた。

「ナァ〜に。本当の事を言うて、何が悪いんじゃ。わしゃあ何も嘘は言つとらんぞ？」

「けど……」

岬は『もう止めてくれ』とばかり、訴えるような視線を小島に送る。

只ならぬ緊迫感が周囲の空気を満たし、誰もが固唾を呑んで芹澤と小島、そして岬の三人を見守った。

その時だ。

署内にサイレンが鳴り渡り、ほぼ同時にマナーモードに切替えてあった筈の岬の携帯が、強制的に鳴った。非常時エマージェンシーのサインが携帯画面に赤字で大きく点滅表示されている。

「ほおお、お前にも『お呼び』が遣つと来おつたか。これで暫くは愚痴も聞かんでええじゃろう」

「何だとオ？」

芹澤が真っ赤になっていきり立つ。

小島は芹澤とは同じ桐嶋署の署員だと言う事以外、上司・部下の関係は無い。当然ながら小島の方がキャリアは上である。そのせいか、他の誰もが関わり合いにならない芹澤に対しても、平気で厭味たつぷりに毒を吐く。岬を庇つての事なのだろうが、芹澤には逆効果だった。彼を焚付けている事に気付いているのかいないのか？ 何より岬にとってはいい迷惑だ。

「じいちゃん、もう言うなよ」

場の険悪な空気に堪らなくなり、岬が口を挟む。その間でも容赦なく手にした携帯からの呼び出し音は鳴り止まない。

強制的に鳴り続ける携帯を握った岬は、已むを得ず席から立ち上がった。

「おい、高城！ 何処へ行く？ まだ終わつとらんぞ！」

ピリピリした状況下での芹澤の鋭い声に、場の空気が凍ったが、岬は一向に構わず携帯に対応しながら席を離れて行ってしまった。

上司に対しての余りな態度に、芹澤は言葉を失くして全身を怒りに戦慄させる。

「まあまあ、芹澤課長」

見兼ねた副所長の日浅が芹澤を宥めた。恰幅の良い体格に、いつも笑っているように見える眼鏡の奥の細い目が温厚そうな印象を与える人物だ。日浅はにこやかな笑みを湛えながら席を立つと、半ば強引に芹澤の腕を取って立ち上がらせ、押し遣るようにして室内を後にする。

「な、何が、まあまあですか！ 奴は私の部下ですよ？」

「そつでもあるが、この場合は違うよ」

「副所長！」

芹澤は通路から振り返り、今出て来たばかりの室内を見廻した。

重要な打ち合わせで勝手に席を空けた岬を、日浅を含む他の上司連中は、咎める処か一ように見てみぬ振りを決め付けて平然としている。幾ら岬が桐嶋署高城署長の息子であっても、こんな勝手が許

されて良いものなのか？

芹澤にとつては、この光景が一種異ように見えた。怒りを通り越して呆れ返ってしまう。被害者が何れも犯罪者だとはいえ、人が殺されているのだ。それなのにこの署内の結束力の無さはどうした事なのだろうか。

「君は此処に来てから、このサイレンを聞いた事は無いかね？」

苛立つ芹澤とは打って変わって、日浅は穏やかに問い掛けた。

「あります。ですが、何のサインかは存じません」

「そうかね。では、この署の七階より上と、地下三階より下には何があるのかは？」

「確か、連邦の機関があると窺っていますか……え？」

芹澤はそこで初めてはつとする。

日浅は芹澤の様子を見取って頷いた。

「彼は本来その人間だよ。表向きには桐嶋署の刑事になっておるがね。高城本人から何も聞いてはおらんかったのかね？」

「いえ、その……」

自分が一方通行で、岬と繋がっていなかった事に芹澤は気付いた。此処へ配属されて来た半年近くが経つが、何をさせても中途半端な岬に業を煮やしていた芹澤は、初対面の印象が悪かった為に、岬とじっくり腹を割って話した事はただの一度も無い。それどころか、岬の話の聞こえとさえしていなかったのだ。

「はい」

芹澤は神妙な面持ちで俯き、肩を落とした。

「その……とても……そうには見えませんが……」

\* \* \*

立っている岬の前には、白衣を着た一人の男性の立体映像（3D）が映し出されていた。

年齢は岬とほぼ同じくらいで、背は百八十五の岬よりも少し低い。

身長の割りには若干細身ではあるが、武道を嗜み、日頃から鍛錬を怠らないでいる健康的な岬とは違って、男は華奢な身体に、女性かと見紛うばかりの端正な顔立ちだった。けれども、その眼鏡の奥の瞳は何処か怪しげで陰惨な光を湛えている。色白の肌から日を浴びないモヤシを連想させてしまふ、所謂インテリタイプの男だ。

「彼がどうかしたのですか？」

男の顔に見覚えがあった。同時に不愉快な事を思い出し、岬は眉を顰めて3 Dディスプレイを見詰める。

「無論、彼が誰かは知っているな？」

白髪交じりの小柄な老紳士であるFCI（連邦中央統括機構）部長兼第九課所属部長の三島は、机上で両手を組みながら深刻な表情を浮べて岬を見上げた。

「ええ。脳神経外科医のジェフ・ランディア。学生時、医学部開設以来の秀才だと評価されていた人物です。確か数年前にバイオ・ケミカル社の研究員になったと聞いていますか？」

脳神経外科医の彼がどうして製薬会社の研究員になったのか、岬は未だに理解出来ないで居る。彼はエリート一直線で、それこそ自分の恵まれた才能を鼻に掛け、相手を見下す態度を平気で執るような、いけ好かない男だった。

「それだけではあるまい？」

三島は意味ありげな上目遣いをして岬を見詰め、岬は三島が何を自分に言わせようとしているのかを察して、気分を害した。

「桐嶋署の元上司、綾瀬玲奈あやせ れいなのストーカー」

岬は言いたくなくかつたその名前を、喉の奥から振り絞るようにして言い、三島を恨めしげに睨んだ。今日が彼女の一週忌である事くらい、知らない三島では無い筈だ。

「元上司……か。まあ良い。一時期、お前達は彼をかなり持て余しておったな？」

岬の頬に僅かな赤味が差す。

本庁から遣つて来たキャリア組の玲奈は、業務面では文句の付け

ようが無いほど完璧であったが、繊細な見た目の美しさからは想像がつかないくらい、自分の身の回りに無頓着で、しかも家事一切が出来ない不器用な女性であった。異動で桐嶋署に配属される以前から、彼女はジェフの奇行に悩んでおり、岬が玲奈と知り合うきっかけを作ってくれたのも、ジェフの異常な執着心が在ったからだ。

玲奈と行動を共にする男（岬）の存在に気付いたジェフは、彼女から離れて行ったと思われていた筈なのだが……

「奴は一種、変質的な所がありましたからね。自分の毛髪とか妙なモノを彼女宛で署に送り付けて来た事もありましたから。けど、今回の件と何の関連が？」

「今から二十分前にジェフ・ランディアの失踪届けがバイオ・ケミカル社から提出された。だが、彼が実際に失踪したのは半年も前だ。自社で内々に事を収めようとしていたが、手に負えなくなったらしい。彼は大麻を大量に自社農園で栽培、精製して売捌いていた。それを組織に知られて脅迫されていた事が会社側に知れたのが失踪の原因……と、まあそう言うて来ておる。」

岬は深く腕組みをして、胡散臭そうに三島を見上げると眼を細めた。

「よくある話のようですが？ それに、どう見たって薬に携わったのは企業ぐるみでの関与でしょう？ バイオ・ケミカル社は、先月破綻したミューズ社に次ぐ大手の企業だ。それがあろう事か一研究員の遣っていた事を知らなかった……では済まされないでしょう？ 言い逃れにしても一寸説得力がありませんよ。大方、失踪したついでに別件か何かで発覚した麻薬関与の責任も、失踪した奴に押し付けたって所じゃないですかね？ けど、これは所轄で何とか出来るのでは？」

岬の予測に、三島も同意だとばかり軽く頷いて見せる。

「彼には個人的に多くの資金が必要だったようだ」

「と、仰いますと？」

「バイオ・ケミカル社は全面否定しておるのだが、彼が失踪する直

前まで研究に没頭していたのは『人獣』の研究だったそうだ」

「は？ ジン……ジユウ？」

岬は意表を衝かれて首を傾げた。

「聞き慣れない言葉だろう？ これはうちの捜査で既に裏を取っている。私も初めは何を馬鹿なと一蹴してしまったのだが……事実この数日間、大型の肉食獣に因るものと思われる殺人事件が数件起こった。お前は知らないだろうが、実は二十数年前にもこれと酷似した事件があったのだ。当時の人獣は三体。内、二体は爆死。一体は失踪したまま一時は足取りが掴めずにいたのだが、これも後に死亡が確認されておる」

そこまで言うと、三島は口外するのを憚るようによくと身体をデスクに近付けて声を潜めた。

「実はな、先に死亡した二体の細胞組織を軍が極秘で回収し、冷凍保存していたのだが、先日その細胞胚が盗まれていた事が発覚した。しかもこれがいつ盗まれたかさえ不明だ」

「巷で騒ぎになって、慌てて冷凍保管庫を調べたら無くなっていた……ですか？」

岬は大きく息を吐いて肩を聳やかすと、三島の言葉を言い換える。「まあ察しの通りだ。管理システムの杜撰さが今回の事の発端を引き起こした要因とも言える」

三島は苦々しく顔を顰めた。その表情から、三島がシステムからの尻拭いを強要させられてしまったのだと観て取れる。

「それと今回の殺人事件が繋がる……と？」

岬の問い掛けに三島は黙って大きく頷いた。

「細胞胚を紛失……いや、盗まれたのは我々の落度だ。あまり考えたくはないが、失踪したジェフ・ランディアが今回の事件の重要参考人だと考えるに至ったのは、条件が当て嵌まり過ぎたからだ」

三島は組んでいた手を徐に組み直した。

「勿論、この件はわしの処で止めておる。お前は失踪したジェフ・ランディアの捜査と彼と関りを持っている……かもしれない人獣の

捜査だ。ジェフに関しては、バイオ・ケミカル社がセキュリティを遣して未だに血眼になって捜しておる。抵抗すれば最悪の手段を執ると仄めかしておるのだが、此方側としては、彼は重要参考人だ。手遅れになる前に先に手を打て」

「その、当時の人獣とは？」

「三体は共に大型の猫科。唯一目撃者だったホームレスからの証言では、黄色っぽい体毛に、豹のような斑点があったそうだ」

「豹？ それって……」

岬の問い掛けに、三島は黙ったまま深く頷いた。

「豹……ですか。だから二人目の犠牲者が公園の大木に引き摺り上げられて……」

「今でこそ、高性能のナノマシンだのと云われるモノが開発されておるが、当時の科学力で人を獣に変身させられる事が可能だったのかは疑わしい。科捜班（科学捜査班）は呪術等の類か、元々の遺伝的な要因か……とだけコメントされておるだけだ」

岬はがっくりと肩を落として首を傾げる。

「呪術……って、科捜班もお粗末な言いようですね？ 理論的な尤もらしい検証さえ出来なかったのですか？ 変身するエレメンタルとか」

一寸、ムリがあったかな？ と、自分で言っておいて後悔した。

「今でこそ『エレメンタル』と呼ばれる突然変異種がその辺りに居ても不思議では無いようになりつつあるが、もっと人種差別が激しかった当時に彼等が出没する事自体極めて稀で、容易には考えられない。当時の回収された細胞組織には、何ら人の細胞との相違は認められなかったそうだ。これでは丁重に扱えと言われて管理に廻されても、杜撰に扱われてしまう訳だな。しかも死亡した三体の何れもが犯罪歴が無い上に、失踪届けですら警察の履歴に残っておらんかった。その為、犠牲になった被害者さえ何処の誰かも判らず終いだ。身元不明の民間人。結果がこれでは已むを得まい？」

「……」

「彼の捜査で『当たり』が来ている。いつもと同様に桐嶋署の者として捜査に付随しろ。人獣の件だが、これも大型獣の件で、既に警察側が対応に取り掛かっている。実質二股捜査にはなるが、関連性は高い。出来るか？」

三島は一呼吸置くと、岬が黙って顎を引いたのを確認して後を続けた。

「場合によってはその大型獣が人獣である可能性も在るわけだ。一部からは捕獲しろと言う意見も出ているが、それでは同じ失態を繰り返すと見做して、反対意見が大半を占めた。九課では射殺を許可し、任務完了とする。だが両件とも可能な限り表沙汰にはするな。報道規制は既に打っているが、そう長くは持つまい。今回はジンがお前のサポートを務める」

「ジンが……ですか？」

岬は不満そうな顔を浮かべた。ジンはつい最近、三課から九課に異動して来た元研究員だ。

「そつだ。ジンでは不服か？」

運動能力、持久力ともに岬とは違って、満足な数値さえ出せないジンと組まされるのかと思うと、岬は気が重くなって来る。

「アイツが俺のサポートですか？」

「ジン本人からのたつての希望だ。直接言っただけで来た以上、遣って貰わなければ困る」

「理由はやはりバイオ・ケミカルですか？」

三島は黙って顎を引く。

岬の居る九課は他の部門とは違い、非公開で捜査するエージェンツ<sup>レスキュー</sup>への救命救急を目的とした部署だ。場合によっては地元警察と対立する事もあり、常識では到底考えられない過酷な状況下での救助活動が存在し、体力や精神力を強く要求される。

デスクワーク専門だったジンにとって、異動直後の今回の活動を



期待する方が無理だろうと思われた。しかも、ジンの生真面目な性格も然る事ながら、本来ならば薬品関連を扱う三課での勤務が相応だと思われていただけに、彼の異動に関しては奇妙な噂が流れていた。

彼には、半年前まで同じ三課に勤めていた彼女

クドウ アヤカ  
『工藤彩香』

と言う女性が居た。その彩香が、バイオ・ケミカルでの捜査業務に携わり、企業情報と一緒に突然失踪したと言う報告が成されていたのだ。

彩香が関わっていたのは、ミューズ社が開発し、破綻後はバイオ・ケミカル社が後を引き継いでいた細胞蘇生液。事故や病気等で亡くなった人の身体を特殊培養して、再び生き返らせると言う驚くべき蘇生術である。

しかし、人間の蘇生となると数多くの厄介な難題が存在している。『死』に対しての概念の在り方も問われるが、人間の完全蘇生を最終目的とする為、宗教的倫理と真っ向から対立し、多くの宗教団体から異端だと見做され、しばしばテロの攻撃目標となった。けれど幾多の開発妨害を経た結果、成功例など皆無だとされていたにも拘らず、度重なる非合法な実験を隠蔽していたミューズ社は成功例を手にしたと同時に、ある事件をきっかけに摘発され、今世紀最大と謳われていた業界最大手のミューズ社は、それが原因で破綻してしまっただ。

その後はバイオ・ケミカル社に総ての利権が譲渡され、各連邦機関監視下で部分的な細胞蘇生術を確立した。嚴重な監視下での開発とされているが、裏ではミューズ社が行っていた蘇生術を未だに引き継いで開発を続行しているのではないのかと噂されているのも事実だ。

彩香は二人の同僚と共に監察官として捜査を行っていたのだが、後日、会社から社外秘のデータをコピーされたとの通報があり、同時に彼女達からの連絡が途絶えてしまった。

数日後、彼女と一緒にだった監察官の二人がバイオ・ケミカル社が

ら数百キロ以上離れた海岸で、水死体となって発見される。警察は行方不明になつている工藤彩香を参考人として手配するよう動いたが、今日に至るまで、依然として彼女の行方は判らないままだ。

自社データを盗まれたとして、バイオ・ケミカル社から監察官だった工藤彩香と彼女を遣して来た三課に対して法外な賠償を要求されたが、三課の代表者である田幡課長は一切の関与を否定して、居なくなつた彼女に債務の総てを押し付けた。

ジンの異動は、彼女が失踪ではなく行方不明なのだと言張して、上司の田幡と真つ向から対立し、口論になつた末の異動だと噂されている。が、何故か彼が上司と険悪な仲になつた事実を知る者はいない。その噂自体、彼が異動になつた後から出たものだ。

彩香を見知つていた岬には、彼女が捜査中の情報を持ち逃げするような人物には思えなかつた。恐らく、彼女は何らかの事故か事件に巻き込まれてしまつたのだらうと思つている。

「バイオ・ケミカル絡み……ですか。俺、薬理は苦手なんすけど」  
思わずぼやく。薬品関連には何か因縁めいた響きが感じられて、余り気が進まない。自分が面倒な事に巻き込まれそうになれば、平気で部下を切り捨てる田幡の遣り方も熟知している岬だ。そう考えると、自ら異動を希望して今回の件に関わりたいと言うジンの気持ちも、強ち判らなくも無いのだが……

「偶然だと思いたいのだが、バイオ・ケミカルでの件と、示し合わせたようなジンの異動と言い……なにか割り切れん闇の部分があるようだ」

「九課がこの件に関与するであろう事を予測しての異動……ですか？」

「あるいはな」

三島は意味深な岬の言葉に頷いて見せる。

「まあ、課長の田幡は信用出来ないですからね」

「そう言えば、お前も三課からの異動だったな？」

三島は視線で以って、言葉が過ぎる岬を暗に注意した心算のようだが、矛先が自分に向けられたと勘違いした岬は、心外だとばかり仏頂面になった。

「俺の場合は例外です。他に適所が無かったから、暫く三課に行けと言って遣したのは、三島さんじゃないですか。ジンと一緒にしないでくださいよ」

「はて、そうだったかな？」

「そうですよ」

「まあお前の事は別にして、表向きにはジン本人からの異動申請だと聞いておるぞ」

「誤魔化さないでくださいよ。ったく。でも……おかしいな？ 何か裏があると思ったのですがね」

岬はうわ言のように呟くと、黙り込んでしまった。田幡課長の名前を口にした途端、一層気が進まなくなるのは異動する前から毎度の事だ。

彼女は四年前まで岬の上司であった。業務に難癖を付けては、しつこく岬にプライベートでの係を迫っていたが、岬は全く相手にしなかった。今でも岬にとっては個人的に疎遠にして貰いたい苦手な女性なのだ。

「田幡課長が一筋縄では行かないのは承知の上だ。だが、彼女は極めて大きな人脈を持っているだけに、わしでも迂闊には手出し出来ん。しかもこれは内部告発になる。間違っていたでは済まされん」

「泳がせてみるのも手……ですか？」

「いや、彼女に鈴を付けても効果は期待出来そうも無い。却って此方がリスクを負う危険性が高くなる」

「そんな弱気でどうするんです？」

岬は腰に利き手を当てると、三島を睨んだ。遣り取りだけを聞いていれば、どちらが上官だか判らなくなりそうだ。

「このわしを棺桶に一刻でも早く入れたがっつておるのか？」

「まさか。何を馬鹿な事言ってるんです」

岬に睨まれた三島は、唸って腕組みをする。単純な事件だと思われたのだが、三課の動向も無視出来ない。何より三島の長年の『勘』がざわめいているのだ。

「以後、通常時の連絡はジン経由で伝える。但し、ジンには他の者と同様、バイオ・ケミカル社の捜査にも就かせる心算だ」

「解りました」

\* \* \*

机上で無造作に置かれた何枚ものDカードを前に、集まった捜査課の刑事達は歓声を上げてどよめいた。彼等とは反対に、数名の女性刑事は壁の花になり、軽蔑の白い視線を彼等の背に浴びせ掛けている。

彼等が手にしているカードには、グラビアに出て来てもおかしくない美女が、際どいドレスを纏って写っていた。中にはドレスと言うよりも、幅の広い『紐』を身体に撒き付けただけのSMチックな女性もいる。野郎共は、それらのカードに熱い視線を注いでいた。

カードは客引き目的の名刺カードだ。しかも、カジノで有名なクラブに通りにある、高級クラブ『ラジエンドラ』ともなれば、各界の大物が頻繁に出入りしている。このカードの美女達は、夜毎彼等の相手をする一流ホステスなのだ。

「本当、鼻の下伸ばしちゃって……やあ〜らしいつたら……」

「何処がいいのよ。フェロモン丸出してエロいだけじゃない」  
女性刑事達は不快感を露わにする。

「何だ？ ジエシカ嫉妬か？」

相川の眼が笑った。

「煩いわねっ！ どうせアタシは貧相ですわよッ！」

「そっぴやお前、その胸は造り物で実は貧乳って噂があるんだっ…

…てっ！　いつ、痛ってええ！」

フンと鼻を鳴らしたジェシカの細いヒールが、相川の足に容赦無く突き刺さり、相川が堪らずに悲鳴を上げた。彼女を囓り立てる口笛や冷やかしが湧き、まるで全寮制の男子校のような有ようだ。

「お前等……仕事中だぞお」

捜査係長の檜山は、彼等の態度に一抹の不安を過らせて情けない表情を浮かべた。

「良いじゃないっすか。俺等じゃあ滅多に拝めない垂涎モノの美女達だし」

相川が涙眼の顔を綻ばせながら、檜山を宥める。

「捜査は楽しくしないと。ムサくてゴツイ野郎供を取り締まるよりも、こういう仕事の方が気分も盛り上がりつつ張り合いがありますよ」  
傍に居た西田が、カードに夢中になりながら威勢の良い声で相川の言葉を補う。

「判っているのか？　この中の誰かが麻薬の取引と……っておい！  
聞けよッ！」

自分の声に全く聞く耳を持たない勝手な連中に、檜山は呆れて舌打ちした。

一枚を手にした谷口が、顔を綻ばせて短く口笛を吹いた。

「俺、なんか好みだな。この黒髪……」

「え？　どれどれ」

彼の周りへと、カードを漁っていた連中が手を止めて、我先に谷口へと押し掛ける。

「おいおい、何処の綺麗処だ？」

「コッチにも見せてみるよ？」

谷口の手にしたカードを覗き込もうと、数人がにやけた笑いを浮べて割り込んで来た。

「そう、慌てるなって」

谷口がカードを手にして少し経つと、カードに組み込まれていた

I・Cチップが彼の体温を感知した。するとカードに映っている、黒髪をアップにした紅い眼のホステスの3D立体映像が浮び上がり、同時にノリの良い音楽とクラブのCMアナウンスが流れた。男達の歓声が湧き上がる。

濡れたような漆黒の髪に、肌の白さが一際艶めかしい。淡いブルーのイブニングドレスを纏った映像の彼女は、思わせ振りに肩を竦めて媚びて魅せると、両手で優しく投げキッスをする。

「ちよっ!」

見ていていた一人が言葉を失い、続いて何人かが事の重大さに気付いた。

「このホステス、亜麻色の髪にしたら……これって?」

「こ、こりゃあ……」

『綾瀬』主任?

映像を見た誰もがそう思った。口にしなくても誰を脳内イメージしているのかは、お互いの目配せで判ってしまう。しかも彼女が亡くなってから、今日が奇しくも一年目。因縁めいたものを感じ取り、一気にテンションが下がってしまった。

「や、ヤバイ?」

「ああ。マジでヤバイかもな」

指摘されて気付いた谷口が、焦って一同に問い掛けるが、皆当然のように表情を曇らせてしまった。

「ん? どうかしたのか?」

彼等の空気がガラリと変わった事に気付いた檜山が口を挟む。

「このホステス、亡くなった主任に……そのう……そっくり……」  
彼女のカードに現を抜かしていた谷口が、言い難そうに口を開いた。

「何イ?」

檜山の眉が寄り、思わず椅子から腰が浮いた。

「あッ！」

谷口の手にしていたカードが、背後から伸びて来た何者かの手に依って一瞬のうちに引っ手繰られた。

「何すっ……たっ、高城？」

手の主が岬だと知って一同は慌てて息を飲み、しまったとばかりお互いの顔を見合せる。

「ふーん」

岬はそのカードを一瞥して鼻を鳴らすが、全く表情に変化は無い。檜山達の方が逆に動揺を隠せないでいた。

「も、もう良いのか？」

「はい。指示は受けましたから。これから報告に行きます」

返事をしながら何食わぬ顔をして、カードを胸のポケットに押し込んだ。

「あっ！ コラッ！ 資料を……」

気付いた何人かが岬を咎める。

岬は悪びれた様子で場を誤魔化すように軽く笑うと、手にしたカードを谷口に返した。そして何事も無かったように彼等に背を向けると、軽く左手を上げて先を急ぐ。

「ったく。油断も隙もねえな……って？ あ、あれっ？」

谷口はボヤキながら岬の後ろ姿を見送ると、返して貰ったカードを見ようと自分の手元に視線を戻したのだが、何故かカードが忽然と無くなっている。

「どした？」

岬と同期である香川とロブ達も岬を見送っていたが、騒ぎ出した谷口に気付いて視線を遣した。

「カードが……無い」

谷口は猶もカードを捜して、辺りをキョロキョロと見回している。

「ははは、久し振りに遣られたな？」

香川が白い歯を見せた。

「ああ。ったく、相変わらず手癖の悪い野郎だぜ」

ロブが岬の事を口汚く言うが、その眼は完全に笑っている。

二人は岬と同期で、普段でも飲みに行ったり、お互いの家を行き来するほどの間柄だ。

岬は表向きには桐嶋署の刑事ではあるが、本来は同じ建物館内にある連邦機関の人間だ。本人は決して口外する事は無かったが、岬が医師免許を取得しており、所属もエリートクラスの部門なのだと噂で耳にしていた。岬が桐嶋署の署長の息子であると言う事も知っている。けれど、当の本人は少しもその肩書きを鼻に掛ける風でも気取る事も無かった。出逢った頃は岬に対して斜に構えていた二人だったが、岬の気さくな性格も相俟って、いつの間にか気心知れた仲になっていた。

「で、何枚遣られた？」

「一枚だよ」

「一枚？」

谷口はそうだと頷いて見せる。

「良いのかよ？ 折角の捜査資料を勝手に……」

「つま、良いんじゃない？ 一枚や二枚、此処はどうか穏便に……ってね？」

二人は、お互いに表情を緩めながら、岬が消えて行ったドアを見詰めた。

「奴もやっぱ男だったんだねえ。で？ どんなカワイイ娘ちゃんのカードを持って行ったって？」

暢気に香川が尋ねる。

「綾瀬主任ソックリのカード」

「は？」

谷口の思い掛けない言葉に、香川とロブは固まって、頻りに瞬きだけを繰り返す。

「だから、さつき見せただろう？ 綾瀬主任にソックリのホステス」

「んな、何イ？」

我に返った二人が同時に叫んでお互いの顔を見合わせた。



「気付いてる？ 気付いてた？」

「ツたり前だろ！ けどよ、奴が顔色一つ変えなかったから、そうじゃなかったんだと安心してたんだぞ。一枚だけしか盗って行かないだなんて、ヤツにしちゃあ謙虚過ぎるし変だなとは思ってたんだよ」

「マジかよオイ、どーすんだよ？ それヤバイだろ？」

「知るかよ」

慌てる二人に谷口が素っ気なく言い放つ。

「いい加減、人の話を聴ける状態になつてくれんかあ？」

折り畳みの簡易椅子に逆向きに腰掛けて、彼等が落ち着くのをずっと待っていた檜山は、沈静化しつつあつた空気に再び燃料を投下してくれたロブ達へ、困った顔で見上げて頭を抱えた。

「今気付かなかったとしても、本人には何れ判ってしまう事だ。差し当たつて、お前等は高城が私情を挟まないように配慮する必要性が出て来たな。ま、各自心してくれ」

「はあ……」

香川とロブはお互いの顔を見合った。

「奴がマジにキレたら誰が止められるんだよ？」

ロブが小声で香川に耳打ちするが、香川は俺に訊くなと言わんばかりに首を横に振った。

\* \* \*

さらさらと微かな衣擦れの音がする。香水と整髪料、その他諸々の高級化粧品が香りが入り乱れ、咽返っているホステス達の控え室。時折囁き合つては、クスクスと優雅に笑っている者もいれば、今日の衣装を未だにあれこれと悩んでいる者もいる。彼女達は今日も自らをより美しく魅せようとして余念が無い。

「ねーえ、イヴ。その脚どうしたの？」

小夜子とチカが、レイナの傍に擦り寄つて来た。『イヴ』とはレイナがこのクラブで使用している店の名だ。互いの本名は、三人と

も知らない。

小夜子とチ力は髪を高く結び上げて、身体の曲線に沿うように仕立てられた艶やかなピンクとブルーのチャイナドレスをそれぞれが身に纏っていた。

レイナは背中が大きく開いたマーメイドタイプの黒いイブニングドレスを着用している。大型の鏡台トレッサーの前に、裾が邪魔になるのか膝までたくし上げている。そこから殆ど色素の無い白い素肌が覗いているのだが、細い左足首には白い包帯が痛々しく巻かれていた。

「今日、此処に来た時から気になっていたのよね。イヴってば、脚引き摺っているじゃない？ 痛そうだもん」

「そうそう。危つく遅刻する所だったのよね？ どうしちゃったの？」

「え？ ええ……ちよつと……ね」

話を合わせて軽くあしらったのは、彼女自身が怪我をした時の事を覚えていなかったからだだった。

眼が覚めると、レイナはいつものベッドの上だった。何故か長い髪も身体も濡れていて、寒さに震えて気が付いたのだ。その間、自分が何処で何をしていたのかさえ全く覚えていなかった。

ただ、微かに舌先に残っている血の味と血の匂い以外は

何故？ とレイナは自分に問い掛けた。意識が飛ぶ前まで、レイナは別の場所に居たからだ。何処をどうして戻って来たのか、肝心の部分を思い出せずに曖昧な記憶が混乱する。

「痛……」

不意に痛覚がレイナを現実に取り戻した。

顔を顰めて身体を折り、足首の包帯に手を軽く押し当てるのだが、その傷に心当たりなど無かった。何処で誰が手当てをしてくれたのかさえ覚えてはいない。

ただ、意識が殆んど無くなっていた自分が、見知らぬ男に抱き上

げられた微かな浮遊感だけが残っている。恐らく、その男が傷の処置をしてくれただろう事は、臆気ながら判断出来た。

『れいな!』

少し掠れた男の声が、耳底に残っている。何処かで聞き覚えのある声質が、彼女の記憶の糸を弄っているように思えた。けれどもそれでいて不快感は全く覚えない。寧ろ懐かしいような心地良い響きさえ感じられる。

誰なのだろう? どうして自分の本当の名前を知っているのだろうかと思つた。明るい栗色の瞳が、鏡を通して向き合っている自分の姿へ問い掛けてるようにじつと見詰めるのだが、どうしても思ひ出せない。そのもどかしさに焦燥感が募り、切なくなつて胸が熱くなるばかりだ。

「……!」

急に軽い耳鳴りがして、目の前が真っ暗になった。

血塗れの人の腕。随分低い視線からの、ショーケースに映つた鋭い真紅の怪しい瞳。誰かの断末魔の叫び声と、飛び散る血飛沫に血塗られた腕。優しげに微笑む眼鏡を掛けた男。恐怖に怯えて歪んだ老人の顔……それら総てが、一斉にレイナの頭の中でイメージアツプされ、スライド映像を見ているようにフラッシュバックする。

その余りにも惨たらしい光景に、レイナは息を飲んだ。言いようの無い不快感と恐怖に襲われて、ガクガクと身体が震える。

「い、厭あッ!」

レイナは断片的に次々と浮かんで来る情景を振り解くように、激しく首を振つた。優しく微笑んでいる眼鏡の男を除いて、他は彼女にとって全く見覚えの無い残酷なシーンだ。なのに余りにも生々しい。実際にその場に居合わせたような感覚さえある。

まるで白昼夢だと思つた。恐怖で身体の震えが止らない。心臓の心拍数が上昇して呼吸が乱れる。ぬるりとした掌の濡れた感覚にはつとして、目の前で震える両手を上げた。自分の両手が真っ赤な鮮

血に染まっている

堪らなくなつてレイナは悲鳴を上げた。

居合わせた者達がみな一ように驚いて、一斉に彼女へと振り返る。レイナは目の前に映っている自分の姿に救いを求め、縋り付こうと腕を伸ばした。ドレッサーの前に置かれていた化粧品に腕が当たり、ばらばらと床に散乱する。

『レイナ、君は僕のものだ!』

眼鏡を掛けて微笑んでいた彼の声が、耳元で聞こえたような気がした。

「イヴ、イヴったら!」

「はっ?」

チカから乱暴に肩を揺らされたレイナは我に返つた。不安と恐怖に怯えて荒い息を全身で吐く自分を、心配して気遣つてくれるチカと小夜子の曇つた表情が視界に飛び込む。

「大丈夫?」

「え……ええ」

レイナは震えながら何度も頷く。そしてもう一度、震える両手を恐る々目の前で拡げて見た。

「……」

今のは幻覚だったのだろうか? 再び見詰めた掌には、血痕など何処にも付着してはいない。それでも、レイナは動揺を隠す事が出来なかつた。薬を使用した時のような突然のフラッシュバックはこれが初めてでは無い。自分の執つた奇妙な行動に、不安を抱いて怖くなる。

「な、何でも……無いの。本当よ。お、驚かせてごめんなさい」

震える自分の身体を止めようと、両手で二の腕を抱えながら必死に作り笑いを浮べた。しかし、その顔は蒼白だ。

「ごめんなさい」

周囲に居たホステス達へとレイナは席を立ち、畏まって深々と頭

を下げる。

「煩いわね。もっと静かに出来ないの？ 貴方一人の控え室だと思っ  
っているのかしら？」

「良いわよね？ 何をしてもご鼻屑にされていらっしやるお方は」  
レイナの様子を伺っていた者達が、それぞれ厭味を吐いて、元に  
戻って行く。

「……………」

彼女達の痛い視線を感じたレイナは、もう一度黙って頭を下げた。  
何事も無かったように、辺りは元の時間を取り戻す。

レイナは気を取り直そうとして、細いブラシに口紅を取ったが、  
その手が小刻みに震えていて口紅が上手く引けなくなった。

「もう、見てらんないわ。貸して」

小夜子がレイナの手からブラシをもぎ取った。小指と薬指にパフ  
を挟み、慣れた手つきで口紅を差してやる。

レイナは軽く上を向いて薄っすらと唇を解き、瞳を閉じて小夜子  
に任せた。

「お客さん？ だったら、駄目よ。深入りしちゃあ……はい。OK  
よ」

「ありがとう……そうじゃないの。ちょっと私の不注意で怪我をし  
ただけなの」

多分きつとそうなのだと思理思い込もうとするのだが、それ  
でも尚レイナの視線は、傷付いた自分の左足首に吸い寄せられるよ  
うに引き付けられてしまう。そしてジェフとは似付かない力強さを  
持った逞しい腕で抱き上げて、介抱してくれたであろう人物に淡い  
想いを馳せずには居られなかった。

### 第3話 潜入捜査

時間が来た。

ホステスの『華』達は、それぞれが優雅に毛足の長いリアルファ  
ーのストールや薄絹のショールをふんわりと肩に打ち掛けて、衣擦  
れや細いピンヒールの軽やかな音を立てながらフロアに赴いて行っ  
た。防音性の高い素材で造られたドアが堅く閉ざされると、辺りは  
異よつな静寂に包まれて耳がどうにかなくなってしまいそんな錯覚さえ  
覚える。

控え室に残っているのは、レイナ達三人だけになった。

「大丈夫ならいいけどお。イヴ、あんまり顔色も良くないよ？ ど  
うする？ 今日はおたし達が交代しようか？」

二人はまだ心配している様子だが、レイナは細い首を力無く左右  
にゆっくりと振った。

「うん。大丈夫よ」

「だって、イヴ、もう髪染めている時間ないわよ。いいの？ その  
ままで」

「ありがとうチカ、小夜子。心配してくれて。でも、今日は取引が  
終わったダグラスさんが来る日でしょう？ 会ってお礼を言うだけ  
ですもの。このくらいの怪我は大丈夫よ。問題無いわ」

彼女は蒼白い顔で微笑んだ。微かに解けた唇の色にも生氣は無く、  
それが彼女の空元気だと言う事くらい、二人にはとつくに判ってい  
る。

「……」

チカと小夜子はお互いの顔を見合せた。レイナの事を気遣ってい  
るよつな素振りだが、彼女達の瞳の奥に潜んでいる得体の知れない  
暗い影に、まだレイナは気付いてはいない。

「はい。これえ、少しは気分が良くなるよ？」

チカは、軽く気泡が出ている透明な飲み物を出して、レイナに勧めた。

「あ、ありがとう。丁度喉が渴いていたの」

炭酸飲料か何かだと思っていたレイナは、喜んでチカから飲み物を受け取った。

一口含むと、炭酸の弾ける感覚が喉の奥に染み入って心地良い。ジュースのような甘さも酸味も感じられないが、喉越しの軽さから単なる炭酸水ではないかと彼女は思った。

しかし、レイナがそれを飲んでいる間、小夜子はずっと後ろめたそうにチカの横顔を見詰めていたのだ。

「ん？ 何？」

小夜子の妙な素振りに気付いたレイナは、小首を傾げて声を掛ける。

「えっ？ な、何でも無いよ。そ、それよりもさあ、此処ってヤバくない？ ジェフに頼んで、三人とも何処か余所へ行かせて貰おうよ？」

チカが何かを隠し立てするように話を逸らせた。

「そうねえ……」

レイナも何となく賛同する。

他のホステスからの風当たりが強くなっていたのは、寧ろ当然だった。ジェフを介した自分達の雇い主オーナーからの指示で、このクラブに遣って来てまだほんの数ヶ月。それなのにレイナ達新人三人は、並み居る古参の売れっ子ホステス達を差置いて、あつという間にトップに上り詰めていたからだ。

最近では各業界のお偉いさん方からの指名が捌けなくて、客同士での揉め事が増えていた。指名制度がエスカレートの兆しを見せ、レイナ達三人の独占に、大金を振舞う客まで現れる始末。

ホステス連中から、ただでさえレイナ達三人の存在が疎まれているのに、この状況は火に油を注ぐだけだった。彼女達を妬み、事を荒立てて面白がる者が居ても、レイナ達の肩を持つ者は誰一人とし

て居ない。妬みや嫉妬は嫌がらせといった形で現れ、次第に彼女達を追詰めていた。

「で、でも、アタシは……この街を離れるのは嫌だなあ」  
小夜子が慌てた。

「そーよねえ。アンタには関谷が居るものねえ」  
「い、いいじゃないのよ」

チカの突っ込みに小夜子は頬を膨らませる。小夜子にはつい最近、ブライベートで知り合った彼氏が居た。有名大学や企業の肩書すら一切持たない、普通のサラリーマンの青年だったが、小夜子がホステスであると知っても、変わりなく小夜子を大切にしてくれているらしい。レイナは、一途で純真な彼が居る小夜子を、密かに羨ましく想っていた。

「？」  
グラスを手にして、二人の遣り取りを微笑みながら眺めていたレイナに、突然軽い眩暈が襲った。

レイナの手から、飲み掛けのグラスがするりと滑り落ち、彼女の身体がソファに凭れ掛るようになってしまう。長い亜麻色の髪が彼女の細い身体に掛かり、まるで彼女の姿を包み隠そうとしているようだ。

二人は毛足の長い絨毯に零れた飲み掛けのグラスと、『薬』が効いてぐったりとソファに身を預けた彼女の姿を交互に見詰めた。

「『会ってお礼を言うだけだ』って、それだけで終るとでも……イヴ、何も知らないんだ」

細い柳眉を寄せて、倒れたレイナを見詰めながら小夜子がチカに言った。

「そうね、何も知らない方がいいんじゃない？」

チカは平然として言った。

「もう……もう、止めようよ」

「どうして？ ジェフがそうしろって言っているのよ。こっちは前



払いで貰ってるし」

「でも……」

「これも『仕事』なのよ。それとも何？ 自分に男が出来たからって急に良い子になるの？」

チカの黒目がちで大きな瞳が、イヴの身を案じて気の毒がっている小夜子を睨み付ける。

「そんな事無い。でも、イヴをあたし達騙しているのよ？」

「なら、小夜子がイヴの代わりになってあげる？」

「そ、それは困るわ。だって、あんな男の相手だなんて……薬で眠らされていたって御免だもの」

小夜子は不快感を露わにして、レイナの肢体から視線を逸らせた。「なら、小夜子は黙っていて。小夜子もアタシと同罪なのよ。お互い、裏切る事なんて出来はしないんだから」

チカは小夜子を説き伏せた心算だったが、小夜子の表情は硬いまままだ。チカはそんな小夜子に業を煮やした。

「誰だって綺麗な鳥や蝶の羽を塗り取って、滅茶苦茶にして遣りたいたいと思っただ事はある筈でしょ？」

「そんな……チカ、貴方って……」

小夜子は信じられないという目でチカを見る。

「そうよ。あたしはイヴに嫉妬しているの。今頃気が付いたの？」

「何を……何を言っているのよ？」

小夜子の声が震えた。目の前で倒れて意識を失っているレイナが、鳥や蝶だとも言うのだろうか？ チカにとつてのレイナはその程度の存在でしか無かったのだろうか？ 平然と言って除けるチカに、小夜子は恐怖さえ覚えて身震いした。

「あたしって欲張りなの。イヴの代わりにはなれないけれど、イヴの周りにあるものなら、あたしの手容れる事だって……出来るわ！」

チカは倒れているレイナに視線を這わせ、唇をきゅっと引き締めると、自分の胸元を掴んでいる白い手を、きつく握り締める。

「チカ……貴方そんなにジエフの事が……」

「だったら？　だけど、ジエフの頭の中にはイヴしか居ない……居ないのよ！」

溢れる悔し涙を拭おうともせず、チカは小夜子をキッと睨み付けた。

「……」

小夜子は黙って視線をレイナに落とす。

来た時から、チカがジエフにご執心だったのは知っていた。けれどもジエフには、既にレイナと言う存在があった。

小夜子はチカと違って、端整な顔立ちをした頭の良い青年医師であるジエフを、どこか薄気味が悪いと感じていた。それは、ジエフの何もかもが完璧過ぎて非の打ち所が無かったから。余りにも人間味が薄過ぎて、人間らしい温かみや感情が感じられなかったからだった。

\* \* \*

「あ、あの人女優の三上ユウと安城路ミホ。歌手のティードも居る。で、その向こうは元レーサーのケント。格闘家のシボレー……うっわあ〜スツゴイ！　……あっちでもこっちでも皆ＴＶや雑誌で見たことのある顔ばかりだわ。しかもナマよ？　モノホンよお？」

見渡せば、メディアで一度は眼にした事のある有名人ばかりのフロアに、南はチェックの余念が無い。感激しながらキョロキョロと周囲を見渡している。

ゲストの有名人達も凄いが、彼等をエスコートする店のホストやホステス達も、皆引けを取らない美男美女揃いだ。

「きゃあ〜！　嬉しい〜、来てよかつたあ〜！」

「南、みつとも無いぞ。遊びで来たんじゃない」

興奮して舞い上がる南を見兼ねた香川が、ゴツイ片手で彼女の頭を鷲掴みにし、強引にくるりと向きを変えた。

「あん！」

水を差されて南が膨れた。

「係長、此処で取引があるって情報、ガセじゃないでしょうね？」

「俺ア何だか落ち着かなくて……」

不安気な表情をモロに浮かべて香川は檜山に問い掛けた。とにかく何処か居心地が悪くて仕方が無いと言った様子だ。

「『係長』って呼ぶな」

檜山が不満そうにウーロン茶を一気に呷る。

香川とロブはともかく、口から顎にかけて髭を蓄えた檜山は、一見スーツを着たホームレスか何かと勘違いされそうな風体で胡散臭い。

「けど、何だか此処だけ浮いてませんか？」

ロブも香川の意見に同意して大きく頷いた。幾ら勤務中とはいえ、クラブ内でのアルコールの無いテールは奇妙に見える。檜山の存在だけでも、十分浮いていると言うのに。

「まあな。敷居が高いイメージがあって、俺も今までこういった処には全く寄り付かなかったが、プライベートで来るには感じの良い店じゃないか。店の娘も若い別嬪さんばかりだし、値段も思っていたより良心的だ。今度娘と一緒に来てみるかな？」

「娘……さん？」

ロブがあさつての方を見上げてゲンナリする。どうやらゴツイ檜山のDNAをそっくり引き継いだ女の子を想像しているらしい。

「奥さんじゃないところが檜山さんらしいっすね」

香川がボソツと聞えるように溢した。

「ヤダ、檜山さあん。オヤジ」

隣に座っていた南が香川に相槌を打つ。彼女は他店から客の檜山達が連れて来たホステスという設定でそれなりの格好をしているが、流石にクラブ内の彼女達とは比べようが無く、気の毒なくらい霞んでしまっている。

「はああ？ オヤジがオヤジらしくして何が悪いんだあよ？ 第一、

カミサン連れて若いお嬢さん相手に酒が呑めるかってーの」

南の一言に檜山は開き直った。

「帰宅後に半殺しっすか？」

香川がニヤニヤと笑いながら想像する。

「うるせえよ。店出た途端に殺されらあ」

檜山は仏頂面で再びウーロン茶を一気に飲み干した。

「どうしたんです？ 此処だけ変ですよ？」

タキシード姿の店の男が、クスクス笑いながらトレーにカクテルを載せて現れた。

「変って言うな……うん？」

檜山が腕組みをしてムスツとするが、店の男に知り合いが居る筈がないと我に返って慌てた。

「え？ って、あ、あんだよ岬？ おまつ、ひよつとして……ホストってか？」

遣って来た店員の顔を拝むなり、香川が軽く腰を浮かせる。

「そ、似合う？」

岬は余裕を扱いて、軽く一同に流し目を遣した。

「ホストお？」

ロボの声が裏返る。

「これはまた……誰かと思ったぞ？」

檜山が意外だという素振りです、岬の爪先から頭の天辺まで何度も視線を這わせた。

岬はいつもの、剃り残した無精髭を蓄えた二枚目半ではなくなっていた。毛先が痛んで元の色を失っていた髪もすっきりと短く切っている。肌が若干色黒の部分差し引いても、爪先まで寸部の隙も無くそれらしい格好だ。笑顔を浮かべれば、素が結構女性受けする甘い顔立ちなので、違和感無く受け入れられる。

「はい、これは南に。俺からのプレゼント」

岬はウインクしながら淡いピンク色のカクテルを南の前に置いた。

グラスの縁には熟したオレンジが、櫛型にカットされて綺麗に飾られている。

「きゃあ！ 高城刑……んぐぐ？」

南が感激して奇声を上げた途端、左右に座っていた檜山と香川が慌てて、ほぼ同時に彼女の口を塞いで黙らせた。

驚いた南は大きな眼をキョロキョロさせて息を飲む。危うく公衆の面前で岬の正体をばらしてしまう所だったからだ。

「南君、此処での肩書きはご法度だぞ？」

檜山が小声で南を注意する。

「う……すみません」

南はシユンとなって反省する。

岬は含み笑いをしながら奥に一旦引つ込むと、ボトルとグラスのセットを持って再び彼等の前に現れた。

「高城？ 何のマネだ？」

檜山の顔が引き攣った。視線が岬の持つトレーに引き寄せられ、固定されてしまう。トレーの上にはウイスキーのボトルと水割りのセットが乗っていた。

「しかも『響』じゃないか？」

プライベートで滅多に取らない物を持って来た岬を軽く睨んだ。

「このままじゃ周囲に警戒してくれと言っているようなものですよ？ これでご不満なら、此方での最高級ワインをお持ち致しますよ  
うか？」

後半はホストになりきった口調で決めた。中々ようになっていた岬を見た一同は、檜山を除いて「ほう」と感嘆の声を漏らす。

「高城おクン……ワインだなんて、ウン百万もするようなモノを、  
ローン持ちの俺に払えってか？」

檜山は縋り付くような情けない声を出したが、岬は意地悪な表情を浮かべて聞かない振りを決め付ける。

「あ、今回は檜山さんにツケておきますね？」

岬がしれっと言う。

「な、なにいい？」

「よっしゃあー！」

場が一気に盛り上がり、俄かに活気づいた。係長の檜山を除いては。

「俺はロックでいいぞ……ん？ 高城？」

岬の視線に気付いた檜山が岬に囁く。

「え？ あ……はい、解りました」

岬はテーブルの傍に片膝を突き、水割りを作る。しかし、岬の視線は目の前の同僚ではなく、彼等の向こう側にある幾つものブースに居る誰かを捜している様子だった。

「ねえ、此処のクラブ『ラジエンドラ』って名前、神話に出てくる翼竜のドラゴンの事？」

南が岬の手元を見詰めながら、興味深そうに訊ねた。

「大元の由来はそうだけど『ラジエンドラ』は此処のオリジナルのリキール名だよ」

南の質問に一応な受け答えしてはいるものの、岬は気も漫ろの様子だ。

「例のイヴとか言う女を捜しているのか？ だったら今日は来ないそうだよ」

見兼ねて檜山が気を廻す。

「えっ？ あ、いえ。そ、それは……知っています」

「ザンネンだったなー？ 初出勤でイキナリ空振りかよー？」

香川が意地悪く『へへっ』と笑った。

揶揄われた岬は、ムツとして少しだけ頬を赤く染めたが、また直に真剣な表情に戻り、視線を檜山の背後で止める。

「うん？」

檜山は岬の様子に気付き、自分の目の高さに合わせてロックグラスを持ち上げた。琥珀色のウイスキーを満たしたグラスの曲面が鏡となつて彼の背後を映し出す。

そこには上流階級層とはおよそ縁の無さそうな、一目で『それらしいと判るサングラスの男と、目鼻立ちのはつきりとした中近東方面の風貌を持った色黒顎鬚男が居た。その彼等と談笑して此方に背を向けている大柄な銀髪の男が誰なのかは不明だ。銀髪男の左右には、チカと小夜子が寄り添いしな垂れ掛っている。彼女達二人の様子から、銀髪男がこのクラブに幾度と無く足を運んでいる常連客だと見て取れた。しかも評判のホステス二人を従えている事から判断して、余程のVIPなのだろうと思われた。

「ほおおお？　　ありやあ手配中の臓器バイヤーのラル・ミーヤンじゃないか？　　隣に居るのは麻薬密売人のセフェム？　　セフェム・アジャフか？」

岬は彼等に視線を逸らさずに、檜山の言葉に黙って顎を引いた。

「此方に背を向けている銀髪の色黒男が誰だかよく判らんが……」

「<sup>コロニ</sup>第二衛星の実業家……レヴィですね。間違いありませんよ」

岬が囁く。

「何？　レヴィか？」

彼は、人種差別の標的とされて来た奴隷難民の人権を謳って、何度も暗殺されそうになったが、その度に奇跡的に難を逃れて生きている。『不死身の男』と称されている男だ。虐げられた歴史でしかなかった難民達にとって、レヴィは英雄的存在の男であり、コロニの影の実力者だ。

「そんなのがあいつ等と同席しているのか」

他にも見知らぬ男達が三人。風体はどう見てもその辺に居る冴えないリーマンだ。差し詰め彼等が臓器や薬を捌いているのだろう。

「檜山さん」

先程まで調子を扱いて締まりの無かった一同の面構えが変貌した。檜山は承知したとばかり、彼等に注意喚起の合図を視線で送る。

「まあ、今の所は動きが無いし……」

「いや、そうでも無い」

言い掛けた香川の言葉を遮ると、岬は檜山達の居るテーブルから

唐突に離れた。

一瞬、岬の行動を訝った香川達だが、その岬の向こうで同じく動きを確認する。セフェムと同席していた背広組、そしてその後を追うようにしてラルとセフェムが其々席を離れて行ったのだ。

「檜山さん」

香川とロブがほぼ同時にソファから腰を浮かせた。二人が檜山に目配せを送り、追跡の是非を問うと、檜山は彼等に追跡許可の視線を返し、軽く顎を引いた。

「行きます」

「了解」

ロブはすぐに席を離れたが、香川は一旦立ち上がったものの、素早く座り直して、まだ口さえ付けていなかったグラスを掴んで一気に叩いた。そして口元を手の甲で乱暴にぐいと拭って立ち上がる。

檜山と南が呆気にとられるのを後目に、香川は何事も無かったかのように彼等とは反対方向へ足早に消えて行った。

少し間を置いてから、檜山と南がそっと席を立った。

\* \* \*

背中を強く突き飛ばされて、男はビルの谷間の壁に拉げた蛙のようにへばり付いた。男は既に何度も顔を殴られたらしく、口元が紫色に腫上がり血が滲んでいる。

「いい、良いのか？ 俺に手を上げるって事がどう言う事になるのか……判ってんだろうか？」

サングラスの男は僅かに残った虚勢を振り絞り、血の味がする唾を乱暴に吐き捨てた。彼は先程までクラブ『ラジエンドラ』にいた臓器バイヤーの男ラルである。

桐嶋署刑事のロブがラルの後を付けていたのだが、ラルはまんまとロブの裏を掻き、彼を撒いていた。口ほどにも無いと地元警察を舐めていたラルだったが、今度は別の男から追詰められている。口



ブとは全く違うその男の『氣』に気圧されて、ラルは今まで味わった事の無い畏怖の念を抱いて舌打ちした。

ラルは懐からジャックナイフを取り出すと、乱暴にサングラスを投げ捨てる。左右の指には凶器になりそうな大きな石が付いた指輪が幾つも輝いていた。

ナイフをちらつかせて見せても、ラルを殴った男は微動だにしない。

「へへっ！ 怖くなったのかよ？ さっきの威勢はどうしたい！ ああ？」

ラルは凶器を手にした事で丸腰の男よりも自分が有利に立ったと勘違いし、男が怯んで竦んでしまったのだと錯覚したのだ。

薄暗い路地裏に微かに零れる明かりが、ラルの持つナイフの刃を残酷に光らせる。ナイフの刃先を上向きにさせると、左右にひよひよいと器用に持ち替える。臓器バイヤーと言う違法行為を生業としているだけあって、ナイフの扱いは手馴れたものだ。その凶器が何人もの生血を嚼っていたであろう事は言うまでも無い。刃を上向きにして持つ事で、相手へより一層深い致命傷を負わせる事が出来るからだ。

ラルは左右どちらからでも切り込める状態にして構えると、薄ら笑いを浮べて自分よりも背の高い男を値踏みするように斜め下から睨め上げる。狂気にも似た陰鬱な光りを湛えた細い眼を更に細くすると、血の味を思い起こしているように、ゆっくりと自分の唇を舐め廻す。

「デメエもバラして遣らあ！」

ラルは素早く斬り掛かった。

暗闇に青白い閃光が鋭い光の弧を描き、空を切り裂く甲高い音がするのだが、相手の男は、予備動作無しにラルの動きを見切つて最小限の動きでかわす。

何度遣つても同じだった。ラルは多々良を踏んで足取りを乱し、呼吸を大きく掻き乱す。自分の技量がこの男には全く通用しないの

だ。

「あつ、この……畜生！」

ラルが舌打ちして吐き捨てる。肩で大きく息を吐き消耗しているラルに対して、男は呼吸一つ乱した様子さえ窺え無い。ラルにとってはそれが堪らなく腹立たしいようだ。言葉にはならない雄叫びを上げて激高し、歩を乱しながら大きくクロスを描くよう二、三度斬り掛かり、『突き』で男の顔面を襲った。

男は微動だにせず、目の前に迫った刃を左手人差し指と中指でピタリと挟み、完全に動きを止める。

「くっ！」

渾身の力を込めるのだが、押す事も引く事も儘ならず、ラルの身体が戦慄いた。

男は空いている右腕を巻き込むようにして肘を張り、流れるようにラルの内腕から深く懐へと一步を踏み出して一気に接近する。

あつという間に男の右肘が深々とラルの顔面にヒットして、鼻が潰れる鈍い音がした。ラルは手からナイフを放り出し、悲鳴を上げて路上でのたうち回る。

男はラルが落としたナイフの柄の端をタイミング良く踏んだ。ナイフはくるくると回転しながら垂直に跳ね上がり、まるで意志のある生物のように男の手の中に納まる。

「お前、スタミナ不足だ。無駄な動きが多過ぎる。防御も今一つ。なつてないな」

男は冷静に分析しながらそう言うと、刃の部分に指先を軽く宛がい、刃先の具合を確かめる。

「ふうん。状態は中々良いじゃないか」

自分の身に何が起こったのか判らない状態で眼を剥いたラルは、血が噴出する鼻を両手で押え、戦意を消失して怖じ気付く。

「たつ、頼むつ。い、いい命ばかりは……かつ、勘弁してくれえ……」

悲鳴混じりに懇願し、小刻みに何度も首を横に振る。ラルの顔は

恐怖に引き攣り失神寸前だ。

男は無造作にラルへと一步近寄った。

威圧感に縮み上がったラルが、声にならない悲鳴を上げて二、三步後退りすると、ぱっと身体を翻して駆け出そうとした。けれど、腰が抜けてしまったのか上手く立ち上がれずに、その場で足を空回りさせてもんどり打ち、男に背を向けてアスファルトの上を四つ這いで逃げ出す羽目になってしまった。

「った、助けてくれえええ！」

陰湿とした薄汚い路地裏で、必死に泣き叫ぶラルの悲鳴が響く。余りの取り乱しように呆れたのか、ラルの様子を窺っていた男が動いた。

ラルの頬に何かが掠る。それが自分のナイフであることに気付くのに時間は全く掛からなかった。がたがたと震え上がりながら頬を手の甲で擦ると、生温かくてヌルリとした感触がする。薄暗い中でも、それが自分の血であることが判るのだが、極限状態に追い込まれている為に痛覚が麻痺しているらしい。

「よお、ひとつ訊いても良いか？」

男は懐から取り出した煙草を徐に銜えると、ラルのすぐ傍へ両膝を折って屈み込む。必死になったラルから刃物を振り回されていたにも関わらず、何も無かったような素振りを見せて普通の口調で話し掛けて来る男に、ラルの恐怖心が一層強く煽られた。

「な、何を……？」

ラルの視線が無駄に宙を泳いだ。額には珠のような汗が噴出し、呼吸が一層乱れて苦しそうな表情を浮かべる。

「ジエフ・ランディアを知っているな？」

男が徐にライターに火を点ける。炎に照らし出されたその男の顔に見覚えがあったラルは、思わず眼を剥いて驚いた。

「あ、アンタあホストの！」

クラブの大半が美人ホステス達だが、勿論ホストも控えて居る。

ラルは最近見掛けのない顔のホストが居ることを知っていた。無口で物静かなホストの岬は、新入りには目立とうとはせず、決して出しゃばる事は無い。分を弁えた男らしいとは思っていたが、ラルは岬の事を、どこか侮れない奇妙な雰囲気を持っている気に入らない奴だと言う印象を持っていた。

「無駄口はいい。答える」

岬は煙草の煙をラルの顔に吹き掛けた。呼吸を乱していたラルは、煙に激しく噎せ込んで涙を溢す。

「うっ、げほ！　げほ！　……はっ、はいっ……し、知ってますっ！」

完全に岬に気押されて萎縮している。

「今、何処に居る？」

「バババ、バイオ・ケツ、ケミカルのラボに……いつ、居ます」

「そりゃ、この前までのハナシだろうが？　訊いているのは、奴の今の居所だ」

岬は眉を顰めて凄んで見せた。

「おちよくってんのか？」

すつくと立ち上がり、脅しの心算で片足を軽く後ろに引いて見せる。

蹴られると思ったラルがまたもや情けない悲鳴を上げた。両腕で頭を抱え、身体を縮めて丸くなり、防御しようとする。

「で、ですから、いつ、今の奴の居所ですつ。いつ、一時はそこいらのホテルを転々としていましたけど施設ラボが無いと、こっ、困るとかで……」

「はあ？　出戻りかよ？　ってか、何処でそんなハナシになってるんだ？」

バイオ・ケミカルのセキュリティが先にジェフを見付けて引き戻したのか、或いはジェフの方から赴いて行ったのか……今の所、F C Iにはバイオ・ケミカル社からの届出が、却下されたと言う情報は入っていない。通りで散々捜しても足取りが掴めなかった筈だ。

岬は自分達が無駄足を踏んでいた事を覚って自嘲した。

「ほ、本当ですう！ ガセじゃねえ。し、信じてくれよお！」

ラルはもう半泣きだ。

「だと」

岬は視線をラルに落としたまま、自分の後ろに控えている男に向かって声を掛けた。

「ああ」

相槌を打ったのは、相棒であるジンだ。彼はすぐさま踵を返してその場を離れる。

「も、もう良いですかい？」

ラルは岬がこれ以上危害を加えないと見て、逃げ出そうとする素振りを見せた。

「そうだな。じゃあもう一つ」

「え？」

「来て貰おうか。署まで」

「じよ、冗談。ここに来て、俺アまだ何にも遣っちゃいねえ。アンタ警官じゃ無いし、逮捕状も無いってのにどうやって……」

眼を剥き、汗だくになって取り乱したラルに向かって、岬は黙ったままニヤリと笑った。

\* \* \*

岬は彼女が歩いて来る通路の途中で座り込み、ぐったりとして壁に寄り掛かっていた。この先の化粧室には、先程レイナが入室していたのをチェック済みだ。

やがて化粧室のドアが開き、コツコツとリノリウムの床を歩く、硬いハイヒールの音が近付いて来る。

その音が、岬の前でピタリと止まった。

声を掛けようか、掛けまいかと少し迷ったような『間』があったが、その後直ぐに身体を屈めて岬を覗き込んで来る気配がする。

「あ……あの、大丈夫？」

案の定、レイナは新入りのホストである岬に声を掛けて来た。『イヴニファール』 岬にとっては覚えのある、仄かな甘い香水が鼻を擽る。

潜伏して三日目。今日の岬は、何故かホステスの『イヴ』 レイナと度々視線が合っていた。そして偶然にも、岬がかなり客から飲まされていたのをレイナはこの時も見掛けていて、気になっていたらしい。彼女が何度か心配そうな視線を送って来ていたのを、岬はとうに承知していた。二人きりになれば、きっと彼女から声を掛けて来るだろうと予測しての行動だ。

「だ、大丈夫……夫」

岬は抑揚の無い答を返した。しかし、大丈夫だと言っているが、レイナの眼に映った岬は、言葉通りには見えなかったようだ。

「貴方、この前入って来た人ね？」 岬『さん……だったかしら？』 岬の名前を口にして、レイナははつと我に返った。胸が締め付けられるような何とも言えない感覚。そして、何処かで聞いた事がある名前の響きだった。何だか懐かしいような気がして、レイナは戸惑い、落ち着かなくなる。

「ああ」

岬はゆっくりと顔を上げた。

「そっだよ……レイナ」

岬の瞳には、名前を言い当てられて息を飲み、眼を大きく見開いて驚いているレイナの表情が映っている。

クラブでは、皆本当の名前ではない源氏名を使用している。身内同然である小夜子やチ力達でさえ知らない名前を、ましてや新入りのホストである岬が知っている事自体、有り得ない事だ。

レイナは不安な面持ちで、問い掛けるような視線を岬に送った。

\* \* \*

「暫らく此処で酔いを醒ませばいいわ」

レイナはそう言つて岬をベッドの端に据わらせた。上着を脱がせてハンガーに掛け、ネクタイを解いて襟元を緩めて遣ると、手を借りていた岬は少々乱暴な動作で自分のネクタイを解く。

「そうさせて貰うよ」

岬は俯き、片手で額を押えたまま呻るように言った。そして空いているもう片方の腕を彼女の肩に掛けようと、そつと背後から手を廻す……

岬の気配に勘付いたのか、レイナは彼の腕を見事にかわして立ち去り、後に残された岬の右手が、目標を失つて泳いだ。

偶然……かも知れない。それとも、馴れ々しく腕を廻して来た岬に気付いて、自然な流れで逃げたのだろうか？ もしかしたら、後者なのかも知れない。

岬が『酔つた振り』をするのは久し振りだった。元々酔つような体質ではない。それだけに、彼女を何処まで騙すことが出来たのか自信が持てなかった。

見破られたのかも知れないなと岬が疑っていると、シャワールームから水音が聞え始めた。怪しいと疑っている女が、無防備にシャワーなど浴びる筈が無い。どうやら彼女は岬の打つた芝居にまだ気付いてはいないようだ。

岬はゆつくりと上体を起こすと、肩で安堵の息を吐いた。そして彼女が消えて行ったシャワールームのドアを見詰める。

総ガラス張りのシャワールームには真つ白な湯気が立ち込めて、此方に背を向けているレイナの裸身を包み隠している。

美しい彼女の姿に思わず見惚れてしまいそうになるが、今は勤務中だと自分に言い聞かせ、彼女の立てる水音に気を配りながら、サイドテーブルに置かれていたシャネルの黒いセカンドバッグに手を滑り込ませる。しかし、捜していた物は見付からない。代わりによく似た散剤の白い包みを捜し当てた。

岬はシャワールームを気にしながら、手早く包みを広げ、小指で

ごく少量を舐めてみた。

「！」

舌先に軽い痺れを覚え、慌てて吐き出した。仕事柄、それが危険な劇薬であるのは簡単に判断が付く。

程無くして水音が止み、湯気に包まれたバスローブ姿のレイナが現れた。

岬は片腕で顔を覆ったまま、ベッドに仰向けに倒れ込んでいる。「眠ったの？」

レイナはじつとして動かない岬の様子を窺いながら近付き、そつと耳元へ囁いた。レイナの吐息が、甘く優しく岬を攪り誘っているようだ。

「いや」

岬は微かに反応する。

「頼みが……ある」

「何？」

「水を……くれないか？」

「お水？」

「ああ」

「……」

レイナの明るい栗色の瞳が妖しく光った。

彼女はキャビネットの中から程好く冷えたペリエを取り出して、細長いタンブラーグラスに注ぐと、バッグに潜めておいた白い粉をそつと溶き入れる。粉はグラスの底に辿り着かないうちに溶けて消えた。

グラスを手にしたレイナは、何食わぬ顔で岬の頭を抱き起こしたが、泥酔に近い状態のこの男に果たして水が飲めるのだろうか疑問を抱き、手に持ったグラスと岬を交互に見て戸惑った。

「お水よ」

その声に反応した岬が、素早くグラスごとレイナの手を掴み、貪



るようにして水を含む。余程喉の渴きを覚えていたのだろうが、慌てて飲んだ為に噎せ返り、全て吐き戻してしまった。彼女が手にしていたグラスの水も半分以上溢してしまい、レイナの着ていた純白のバスローブを濡らしてしまう。

「す、すまない」

「いいのよ。ゆっくり落ち着いて飲めばいいわ」

俯いて、申し訳なさそうに視線を逸らせてしまった岬を見たレイナには、それが岬の『演技』では無く、単に上手く飲めないでいるようにしか映らなかった。

『いいかい？ この薬は、いつか君の事を知っている奴が現れた時に使うんだ。でも、間違っても君が飲んだりしてはいけないよ？』

『何故？』

レイナは彼のキスを避けるようにして受け入れる。

『そいつは君を殺しに遣って来るからさ。君が殺られる前に殺すんだ』

『どう言う事？ 穏やかじゃ無いのね』

レイナは物憂げに顔を上げると、他人事のように呟いて視線を窓の外へと投げ掛けた。

彼女には過去の記憶がまるで無い。気が付いた時、自分の傍には

『彼<sup>ジエッ</sup>』が居たのだ。

レースのカーテンが微かな風に乗って揺らめき、甘い花の匂いを運んで来る。窓の外には辺り一面に涼やかな水色の花が咲き誇り、蝶や蜂が花から花へと行き交っていた。広い花畑は巨大なドームで覆われている為、今が昼なのか夜なのかさえ見当が付かない。

『聞いているのかい？』

男はレイナの白い首筋に着けているプラチナのチョーカーに指先をそっと這わせながら囁いた。

頭の中で『彼』の言葉が蘇る。しかし、この男がそうだとでも言

うのだろうか？ レイナは自分の目の前で、酒に酔って頂垂れている岬を見詰めた。

ホストとして遣って来た頃から、レイナにとってずっと気になる存在であった。岬は、新人ホストによく在りがちな、目立つパフォーマンスで自分を売り出すような素振りを全く見せない。寧ろ、自ら目立つ事を嫌っているようにも見えた。ホストにとって、目立つ事で客に自分を覚えて貰い、鼻負して貰うのが売り出す為の大切な最初の一步だ。それを煩わしいとでも言いたげな態度を見せる岬が、レイナには不思議に思えてならなかった。

比較的均整の取れた体格を持ち、魅力的なセックスアピールが出来るだろうと思われるのだが、その割には控え目で物静かな言動を執る珍しいタイプだった。尤も、それが落ち着いた大人の魅力なのだと思える客も多く居て、岬は意外と客受けが良い。そしてレイナもそのうちの一人で、いつの間にか心の何処かで岬の姿を追い掛けるようになっていた。

けれど視線が合って胸が高鳴るにも関わらず、一方では澄んだ岬の瞳に射抜かれてしまいそうな気がして怖くなる。その度にレイナは虚勢を張って気の無い素振りを見せ付け、ツンと澄ましてそっぽを向いていた。

相手が酔っているとは言え、レイナは無防備な姿で居る。岬にその気があれば、簡単にレイナを押し伏せて襲う事も可能だ。だが、今の岬にはそんな気配すら窺えない。とてもこの男が自分を殺しに来たのだとは思えなかった。

しかし『彼』からの指示は、レイナにとって絶対だ。彼女は過去の記憶を取り戻そうとして、何度も『彼』から逃げ出そうとしたが、その度に見付かり酷い暴行を受けていた。今度もまた逆らえばどうなるか考えたくも無い。

レイナは意を決して『彼』からの指示に従う事にした。

小さく震える手でグラスを持ち直し、握り締めると底に一口分だ

け残った透明な『水』に視線を落とす。

## 第4話 隙だらけの暗殺者

レイナはグラスに残った水を含むと、戸惑いの表情を浮かべながら、岬の唇に自分の唇をそっと押し当てる。

「！」

口移しで薬の入った水を送ろうとしたその時だ。

咄嗟に岬の腕がレイナの背に廻り込むと、力尽くで横倒しに身体を押し倒されて、二人の体位が上下逆になった。

酔っているとは思えない岬の素早い動作を目の当たりにして、レイナは瞳を大きく見開き、驚きを隠す事が出来なかった。頭に巻いていたタオルが解け、まだ濡れている長い髪がベッドの上に拡がる。手から離れた空のグラスが、毛足の長い絨毯の上をコロコロと転がる。

「んっ、んんっ！」

岬は素早く左手でレイナの口を正面から塞ぎ、開けられない状態にした。その手で両頬を強く挟んで、首を後ろに反らせるようにして顎を押さえると、右手で彼女の左手首を掴んで押さえ込む。

薬物を口に含んでいるレイナは吐き戻す事さえ叶わずに、くぐもった悲鳴を上げてもがき、片手で必死に抵抗した。

口中が切れて血の味がする。

「んっ！」

堪らなくなつたレイナの喉がごとりと大きな音を立て、岬はレイナから手を解いた。

「どういう心算だ？ 初めから俺を殺す目的だったのか？」

冷静な声で喋る岬からは、酔った様子も慌てた様子も全く窺えない。岬が無味無臭の薬を盛られていた事を既に承知していた事から、レイナは泥酔状態のそれが演技だったのだとようやく覚った。

「だ……騙したのね？」

薬物を飲まされてしまった彼女の顔がたちまち蒼ざめる。

「お互いさまだ。君にはまだ死なれると困る。解毒剤を遣るから質問に少し答えてくれないか？ 手荒な事はしたくない」

そうは言ってみたものの、レイナの口端から滲んだ血を見てしまった途端、充分手荒だったなと反省してしまった。そして彼女の応えの有無に拘らず、飲んだ薬を直ぐに解毒して遣ろうと、上着の内ポケットから携帯の医療用キットを取り出した。

「だ、誰が貴方になんか……ううっ！」

介抱など遣ってこの男と関るのでは無かったと強く後悔した。こんな事になるのなら、通路で岬を見付けていても、見捨てておけば良かったのにと。なのに、心の片隅では岬を快く受け入れようとす、相反する気持ちがあるのを否めない。どうしてそんな想いを抱いてしまうのかと自問するが、レイナの思考はそこまでだった。

自分が飲んでしまった薬が効力を発揮し始めたのだ。猛烈な勢いで呼吸器官全体が熱くなり、次第にその勢いは焼け付くほどの熱さを見舞って彼女の身体を苛んだ。そして殆ど色素の無いレイナの白い肌が、鮮やかな桜色に染まる。

不思議な事に、彼女の肌の至る所に何かの様相がオレンジ色の染みとなって浮き出して来た。白粉彫りにも見える肌に次々と浮き出てきた模様を、岬は黙って凝視した。看様によつては何かの柄にも見えるが、岬の経験上からは見た事も無い所見だ。

レイナの潤んだ明るい栗色の瞳から大粒の涙が零れ、喉が喘息の症状を起こしたようにゼイゼイと鳴った。蒼い顔色の額には珠のような汗が噴き始める。

「き、君も強情だな。意地を張っていると、本当に死ぬぞ？」

『拙いな……』と、岬は心の中で舌打ちした。落着いて尋問している心算だったが、反面、内心ではかなり焦っている。レイナの症状から、思っていたよりも即効性が高い薬だと十分に判断出来た。岬自身が服毒させてしまったとはいえ、彼女はこんな劇物を常に携帯していると言うのか？

何の為に？

『誰』の為に？

使う相手を間違えれば、今の彼女のように自分の命を危険に晒す事になり兼ねない。そんなリスクを犯してまで、彼女には『消した奴』が居て、『そいつ』が他ならぬ自分自身であった事実には、岬は納得出来なかった。

「君は一体誰なんだ？」

「何の……事かしら。どういう意味で言っているの？」

苦しさの形の良い柳眉が寄る。呼吸を乱したレイナは、肩を大きく上下させて艶めかしくはあはあと喘いだ。

「もう一度言う。君は誰だ？ 本当の名は？」

「ほ、本当の名前？ 何を言っているの？ 本当の名前だなんて……」

私は『レイナ』よ」

レイナの手足が痺れて来た。瞬く間に感覚が判らなくなり、意識が混濁して来る。

「嘘だ！ 君が『玲奈』の筈が無い！ いい加減な事を言っている……」

岬は乱暴にレイナの胸倉を両手で掴み上げた。豊かな胸の谷間が深く陰影を作るが、見惚れている場合では無い。

彼女が短く悲鳴を上げ、呼吸が更に浅くなる。

「誰の事……言っているの？ 人違い……よ」

全身が激しく痙攣を起こした。チアノーゼの症状を起こして皮膚が紫色に変色して来る。

「た……すけ……お願い……何でも……する……から……」

『死にたくない！』という強い強迫観念が、レイナの強情さを拭い去っていた。彼女の両手が女性とは思えない力で岬の腕を捕えたのだが、瞬く間に力が抜けて、彼女の細い手が岬の腕からするりと落ち、白い首ががくりと頂垂れる。

岬は解毒薬の錠剤を手にしてしたが、急遽即効性の高いアンブル

に切り替えた。薬を注射器に移すと本体を軽く指で弾く。彼女の肘の内側にある静脈血管を指先で探り、素早くラインを確保した。

既に彼女の意識は完全に無くなっている。先程の薄い染みのようなものも綺麗に消えていた。

「傷……？」

処置を施した岬は、レイナの左足首に微かに残っている傷跡を見付けた。その傷は、数日前に岬が銃弾を摘出した傷痕だ。あの時墓地で自分が助けたのは、間違い無くこの女だったのだと岬は強い確信を持った。

だとすれば、この女は……一体誰なのだろうか？

岬は何の躊躇いも無くレイナのバスロープの紐を解くと、襟元を握って大きく左右に肌蹴た。均整の取れた美しい曲線を描くレイナの肢体に思わず心を奪われてしまいそうになるが、岬の目当ては他にあった。彼女の身体を這っていた視線が左脇で止まり、岬ははつと息を飲んだ。

レイナの左脇には、亡くなった『玲奈』と同じ位置に小さな黒子があった。偶然だとしても、この状況は余りにも出来過ぎている。

墓地で助けた時には気が動転しており、加えて彼女に逃げ出されてしまい直接確認する暇さえ与えられ無かったのだが、彼女がその時に落として行った長い髪の毛のDNA結果は、紛れも無く死亡した『玲奈』自身のものだとの報告を受けていた。岬は俄かには信じられなく、何度も分析課に問い合わせて確認を取ったのだが、何度調べても帰って来る結果は皆同じだった。

「そんな……有り得ない」

岬は首をゆつくりと横に振った。

『玲奈』は確かに自分の目の前で息を引き取った。医師免許を取得している岬自身が彼女の臨終を看取っていたのだ。しかも彼女の遺

体は今、提供者として民間医療管理センターに冷凍管理されている筈だ。

適合者が現れば、相手の名前こそ明かされはしないが、彼女の身体がドナーとして提供されたとの連絡が岬に届くシステムになっている。だが、今のところ彼女がドナーになつたと言う通知は、一切手元には来ていない。

岬は亡くなつた筈の『玲奈』が蘇り得る手段を必死に頭の中で模索した。

一つは脳移植による『別人』の玲奈。そして、もう一つは全身を蘇生させる玲奈だ。

脳移植の処置を行い、ドナーである献体の全身をそのまま一個人に使用する事自体違法であり、嚴重な管理下では在り得ない手段だ。だが、実際にはある条件下で非合法な手段として存在している。

ところがこの手段を用いれば、肉体は単なる器になり、ドナー本人の人格ではない全くの別人が出来上がる。それはちょっとした本人の仕草や癖に顕著に顕われる為、外見上で容易に判断が可能だ。

もう一つだけ微かな望みではあるが、方法が存在していた。死体を再び生き還らせる蘇生技術は、現在でもタブーであり不可能とされている。但し、それは医学倫理上での話だ。

死亡した本人自身を蘇生させる事が可能な違法手段。連邦の医師であつても極僅かな者にしか知られてはいない極秘中の極秘事項。数年前に破綻したミューズ社が自社開発していた細胞蘇生液がそれだ。

これは死亡後の時間が長引けば長引くほど、本人の記憶や遺伝子の組織情報配列が曖昧になり、異常をきたしてしまう為に成功したと言う症例が殆んど無く、開発に協力していた連邦自らが撤退したと言う、いわく付きの製品だった。

だからと言って、成功例が全く無いと言う訳では無い。実際にはたった二件の成功例が報告されていた。



喩え何百、何千回行われた実験の結果として偶然成功した症例に過ぎないとされても、事実は事実なのだ。可能性は限りなくゼロに近いが、その症例の三番目の人物としてこの『レイナ』が存在したとしても不思議では無いのかも知れない。

岬には、レイナが『玲奈』の人格を引き継いでいるとしか思えなかった。もしかすると、自分は中々醒めない悪い夢をずっと見続けていて、彼女が本当は死んではいなかった……そう思い込みたい誘惑に駆られてしまう。

岬はそつと眼を伏せた。

何処かが違つてさえいれば、他人の空似だとして納得出来るかと思つた。この女性が『玲奈』ではないと言つ証拠さえあれば、諦めが付くのだ……と。

だがその一方で、彼女が『玲奈』であつて欲しいと願う微かな望みが湧き上がる。

「馬鹿な……何を俺は考えている」

ささやかな甘い希望を拭い捨てるように岬は首を振り、肩を落して俯いた。

「玲奈……」

愛していた彼女の名が、深い溜め息と共に漏れた。そして今、意識を失っているレイナの横顔を、沈んだ瞳でじつと見詰める。

的確な処置を施されて一命を取り留めたレイナは、解毒して血色を取り戻し、頬には仄かに桜色が差して来た。薄っすらと開いた唇は瑞々しい果実のようだ。

岬は手を伸ばして、長い睫毛に絡んでいた涙をそつと指先で拭いて取って遣る。

亡くなつたあの時以上に美しいと思つた。見れば見るほど綺麗だと。けれどそれは一種、獣が持つ凜とした気高さにも似ているような気がしていた。

どういった経緯が彼女の身に起こつたのか、起きて話を聞かせて

欲しかったのだが、付き合っていた岬の事さえ、ましてや自分の記憶さえ失くしてしまつた彼女に問い掛けてみても、恐らく答えは戻つては来ないだろう。強引に思い出させようとして彼女を苦しめ、悲しませる心算など毛頭無い。

岬は彼女の身体に違和感を覚えて、伏せていた顔を上げた。そこで初めて彼女の左肩に視線が止まる。

「疵？」

不審に思い、レイナの身体を返してうつ伏せにさせた。彼女の肌理細やかな白い素肌には、治りかけて殆ど目立たなくなっている痣や傷が、惨たらしく無数に奔っていた。特に左肩から袈裟懸けに刻まれた傷痕が痛々しい。それが何によつて出来た傷なのか、岬には容易に想像する事が出来た。

「何て事……しやがる……」

彼女に、異常なまでの性癖を持って触れた者に対して強い憤りを覚えた。自分が傍に居れば、決してそんな奴等には触れさせたりはしないし、こんな酷い事を遣らせずに済んだだけに……と。

「う……？」

レイナの表情が苦痛に歪み、意識を取り戻しつつあった。岬は彼女に怪しまれないようベッドの端に座ると、慌ててシャツを脱ぎ捨てて上半身裸になる。

「はっ？」

レイナはすぐ傍に居る岬の気配に驚いて跳ね起きた。

そして自分の裸身が曝け出されていると気付いて頬を染め、素早く脱ぎ捨てられていたバスローブを豊かな胸に掻き寄せる。そして細い脚を引き寄せて横座りをする、目の前に居る岬に向かって身構えた。

身体を見られたという羞恥心と、自分が岬に欺かれたのだと言う屈辱と怒りに全身が震えた。涙眼になつてキツと半裸の岬を睨み付

ける。

岬にはレイナのその仕草が、妙に可愛らしく思えた。

「眼が覚めた？」

にこりと笑ってそう言うと、岬はたった今脱ぎ棄てたシャツに腕を通して、いかにも彼女と関係を持った直後であるかのように見せ掛ける。

怯えたように辺りを所在無く見回していたレイナの視線が、ベッド脇のサイド度・テーブルで止まった。そこには彼女の解毒に使った、使用済みの注射器が置かれている。

「私に……な、何を……したの？」

声が震えた。

「何って、お医者さんごっこ」

平然として言っただけの岬の言葉に、彼女の表情がたちまち強張った。

「い、嫌っ！ 私に……私に触らないで！」

興奮したレイナは、涙眼になって岬を睨み付けた。

「何、初めてみたいいな事を言っている？」

岬はレイナの変わりように驚いてしまった。反応がまるっきり『処女』だ。クラブで見掛ける『女』のイメージが微塵も感じられない。

「あ……貴方には分からないわ」

「身体セックスが仕事みたいなものだろ？」

「止めて！ そんな言い方！ あ、貴方なんか言われたくはないわ！」

レイナは下唇を強く噛み締めると、ゆっくりと二、三度頭を振って岬から視線を逸らして俯いた。頬に光るものがポロポロと毀れ、素肌の細い腕を濡らす。

「……悪い」

彼女の涙を見た途端、岬は気不味くなって俯いた。軽く冗談であしらった心算だったが、レイナにとっては深刻な問題だったようだ。

在りもしない肉体関係かんけいを見せ掛けて、彼女から不自然に思われない為に打った『芝居』だったのだが、却って逆効果だったらしい。レイナは岬の事を、すっかり『要注意人物』だと決め付けて、警戒してしまつたようだ。

息が詰まりそうなくらい悪くなった『間』を振り切ろうと、岬は上着から煙草を取り出した。

岬の一挙手一投足を怪訝そうに警戒しながら眼で追っていたレイナは、取り出された煙草を見て、更に表情を曇らせた。

「良いか？」

煙草を持つた手を軽く上げて見せた。一応同意を求めるが、岬のそれには拒否は認められそうにない雰囲気だ。彼女が渋々黙って顎を引いたのを確認した岬は、彼女にくるりと背を向け、箱の中から一本取り出して火を点ける。

一息吐くと、岬は徐に口を開いた。

「君の彼は……彼だか客だか判らないが……知っているのか？」

岬の背後でレイナがバスローブを羽織る衣擦れの音がした。彼女が両手で長い亜麻色の髪をさらりと襟から引き出して首を軽く振ると、仄かな甘い香水が岬の鼻を優しく攪る。

「何の事？」

レイナは小首を傾げて岬の広い背中を見詰めた。

何か運動トレーニングをしているのか、無駄が無く引き締まっている岬の身体は、着痩せするタイプらしい。ほんの少しの間だけ目にした岬の鍛え上げられた身体を思い出したレイナは、ぽつと頬を赤らめた。

「旧ミューズ製薬会社の蘇生液を君に処方しているみたいだが、あの薬はもう使わない方がいい」

レイナが着終えた頃を見計らつて、ゆっくりと彼女に向き直る。

「どうしてその事を？ 貴方……本当にホストなの？」

レイナの岬を見る目が、何者なのかと疑っている。

「言つただろ？ 『お医者さんごっこ』だつて。君からもそのお相手に言つておくんだな。もう、妙な性癖は止めてくれつて。面白が

って傷付けている。君だって嫌だろう？」

「……」

自分の身体の傷がどんな手段で出来たのか、岬は総て理解しているなよう口振りだった。

レイナは頬を赤らめて岬から視線を逸らせてしまう。

「あれ？ ……別に厭じゃないんだ。そういうの」

岬はレイナの反応に、思いもよらず戸惑った。

「そ、そんなことっ！ ごっ、誤解しないで！」

首を乱暴に振り、レイナは慌てて否定した。恥じらいで耳朶まで真っ赤だ。

「ないけどお相手の為なら……か？ だったら猶の事だ。ミューズの蘇生液はある意味欠陥品だ。高価な分、初期治療には相当な効力を発揮するが、長期使用は出来ない。君の傷だってそうだ。使用頻度が高ければ高い程、治癒機能が低下する。君の身体が持っている本来の自然治癒機能さえも蝕んでしまう。現に君の身体の傷痕が中々消えなくなっているだろう？ 自分で気付いているんじゃないのか？」

「知ったような口を利かないですよ。医者でも無いのに！」

チカや小夜子ですら知り得ない隠し事をズバリと言い当てられたレイナは、俄かに不快感を覚えた。岬にはまるで何もかも見透かされているみたいだ。

「あれ？ 言ってなかったっけ？ 俺、昼間は医者だよ。ヤブ医者だけどね。ヤバイ患者をミスってさ、大金が必要なんだよ」

「あ、貴方の勝手な事情なんか……知らないわ」

レイナは口先だけでそう言ってしまったのだが、岬は彼女からあからさまに興味が無いと言われたのだと思ひ込み、心ならずもムツとなる。

「……？」

目の前に居るレイナから、岬は自分が今までに覚えていた彼女の雰囲気とは全く違うもう一人の人格を垣間見たような気がして退い

てしまった。

少なくとも『玲奈』は言葉を慎重に選ぶタイプだった。軽はずみな言動で相手を翻弄するような女では無かった筈だ。その『別の人格』を持った人物が誰なのかと記憶を探ってみるのだが、今の岬にはもう一人が誰なのか特定出来ない。

「あつそ。別に知つていようがいまいが君には関係無かつたよな？」

「だって……だってジエフがこの薬は大丈夫だって……」

「何ッ？」

灰皿で煙草を揉み消していた岬の手がピタリと止まった。聞き覚えのある名前に岬は眉を顰める。

「ジエフ？ ……ジエフだって？」

レイナは岬の反応にやや退きながら、指先で自分の首に着けているチョーカーに触れた。

「そうよ？ ジエフ・ランディア。わ、私の……私の『夫』よ」

レイナはチョーカーに触れた手をぐっと強く握り締めると、その言葉を口にするのを一瞬だけ躊躇った。

「……」

レイナの言葉に息を飲み、岬は暫らくの間金縛りに遭つたように動けなくなる。

『ジエフ・ランディア』は岬達が捜査している重要参考人であり、岬の学生時代の同期。そして亡くなった『玲奈』のストーカーだった男だ。

禍々しい因縁めいた現実息が詰まりそうだった。堪らなくなつて岬はソファの背凭れに身体を投げ出して大きく息を吐く。そして溜め息交じりにゆっくりと宙を見上げて『参つたな……』と呟いた。彼女の『夫』と言う最後の言葉に、強烈な留めのカウンターを喰らわされた気分になる。

「何が『参つた』なの？」

小首を傾げて不思議そうな顔をしているレイナと視線が合った。

岬はソファから立ち上がるとレイナに近寄り、彼女の細腰に手を廻

した。

「やー！」

レイナが驚いて身体を引こうとしたが、気付くのが僅かに遅かった。あつという間に岬の腕の中に納まり、捕らえられてしまう。

「さつき『何でもする』って言ったよな？」

「……」

「惚けたってムダだ。あの時点でまだ意識は飛んでいなかった」

「あ、アレは……あ！」

返事に困って言いよどむレイナの前髪を素早く掻き上げると、額に軽く音をたててキスをした。

「なっ、な、な、何をするのよっ！ し、失礼だわっ！」

反抗心を剥き出しにして、レイナは岬に咬み付いた。赤面して怒り出したレイナを見て、岬は悪戯っ子のように嬉しそうに表情を崩すと、ぐつと彼女を引き寄せて強く抱き締める。

「今度、俺とデートしよう」

その言葉に、レイナは瞳を大きく見開いて岬を見上げた。

「な、何を言い出すのかと思ったら……気は確か？」

「いけないか？」

岬は至って『真面目』な顔だ。

「お客でもない貴方にどうして……それに言ったでしょう？ 私に

は『夫』が居……」

「俺は君の命の恩人」

「！」

言い掛けたレイナの言葉を遮って、岬はやや強い口調でレイナを黙らせる。あからさまな命令形の言い方に、レイナは不快感を覚えて眉を寄せ、口元を強張らせた。

岬はそんなレイナの反応を窺うと、急に口角を上げて表情を崩す。

「……だ。なあーんて言ったら……付き合ってくれる？」

「駄目」

「やっぱり？ いや、今のは冗談だよ」

彼女からの即答『お約束の返事』に、岬は落胆したような言い方をしたのだが、表情はさして変わらなかつた。精神的には全くダメージを受けてはいないように見える。

「冗……談？」

「さあ、どうかな？」

「自分で『冗談』だって、言ったじゃない」

レイナは小首を傾げ、無責任な言い方をして言葉を濁す岬を、澄んだ明るい栗色の瞳で見上げた。この男の言葉の何処までが本気で、何処までが嘘なのだろうか。

仕事柄『付き合ってくれ』と言い寄る男はたくさん居る。中には自分の地位や名声を盾にしたり、大金を握って自分との情事を強引に迫る輩もいた。『仕事だ』と雇い主に強要されて仕方なく……意にそぐわない相手でも『お客様だ』と言われて応えてしまった事も一度や二度では無い。

言い寄ってくる『男』は『雄』であり、レイナにとってはそれ以上のものにはなり得ないものだと諦めていた。夫であるジェフだと大差は無い。性的欲望を満たすための関係を繋ぎ、行為に及んで満たされればそれだけでレイナの総てを征服したものだと思ってしまう男達ばかりを眼にして来た。

けれど、今自分の目の前で臆することなく堂々と『冗談』だと言った不粹極まりない筈の岬の言葉から……何故だか他の者とは違う仄かな温もりを感じている。

『デートしよう』

記憶を失ってしまう以前に、誰かにそう言われた事があったような、懐かしい響きを感じた。けれどもそれを口にした人が誰なのか全く思い出せない。思い出したい大切な事なのに、思い出せなくてもどかしい気持ちになり、切なくなる。

もしかすると、それは単なる思い込みであって、本当はそんな風



に誘われたりした事など無かったのかも知れない。だが、夫であるジエフはそんな冗談を口にするような人物では無いのは確かだ。

レイナの心が少しだけ震えた。

「酔って……いるの？ どうすればそんないい加減な言葉が言えるのよ？ 私には……」

包み込むような穏やかな眼で、自分を見詰めている岬が不思議でならなかった。その視線の先に在るものは一体何であるのだろうか？ 少なくとも、浮ついた単なる一目惚れという訳でも無さそうに思える。

岬は日焼けした浅黒い肌に、身長割には細身ではあるが、引き締まった身体つきで、一部が寝癖みたいに逆立っている茶髪を持ち、一見、遊び人の風貌を持つ。時折口にする冗談と、その折に見せる優しい眼差しにはどこか茶目つ気があるのだが、かと言って全く信頼出来ない人物にも思えず、妙に惹き付けられてしまう所がある。中性的で繊細な造りの自分の夫とは、中味も外見さえも全く違う両極端なタイプの男だった。ホスト姿の時の岬はどこか隙が無くて、レイナでも気後れしてしまいそうな凄味を持って居るのだが、今の岬は全く違っている。少しばかり人が良さそうな『ありきたりの一般人』くらいにしか思えない。恐らく、オンとオフの切り替えの差が激しいのだろうとレイナは思った。そして、そんな人物にずっと昔に出逢った気がしてならなかったのだ。

「貴方、どこかで……逢った？」

真顔で尋ねたレイナを見て、岬は軽く笑いながら『いいや』と首を横に振った。

人違いか錯覚だろうと言われた気がして、レイナの心が萎んでしまふ。

「誘っているのか？ 光栄だけど、そういうのは男の俺の方から言わせて欲しかったな」

今にもキスされそうな距離まで顔を近付けられて、レイナの心臓がドキリと跳ね上がった。呼吸どころか脈拍までが浅くなり、その

音を岬に聞かれてしまいはしないかと気が気では無い。

「べ、別に誘うだなんて、そ、そんな心算じゃ……だ、大体、私には……」

「デートする暇が作れない？ それとも外に出掛けるのが億劫？

俺とじゃ厭だとか？」

再び岬はレイナの言葉に被らせた。余程彼女の口から『その言葉を聞いたくないらしい。』

戸惑いを隠せなくなり、追詰められた気分になったレイナは、気圧されまいとしてキツと岬を見返した。

「ぜ……全部よ！」

咄嗟に心にも無い言葉を口にしてしまった。岬を意識する心算は無かったのだが、のぼせているように頬が、身体が熱くなる。レイナはそんな自分を岬に見られているのだと自覚せずには居られなくなり、更に肌が火照って熱くなる。

「なんだ……ガツカリ」

ニヤニヤしながら岬はそう言った。自分に余程自信があるのか、それとも単なる空気が読めない馬鹿なのか？

「ち、ちつともガツカリしているみたいには……みつ、見えないわよ」

「あれ？ そう見える？」

「みつ、見えるわよっ！」

余裕のある言い方は、何を根拠にしているのだろうか？ それとも単にレイナを揶揄って面白がっているだけなのだろうか？

少なくとも、レイナは此処で岬に劇薬を飲まそうとした。薬の詳細は教えられてはいなかったが、命の保障は出来ない危険な薬だと言ふ事くらい承知していた。まさかその薬を自分が逆に飲まされて効果の程を自分の身を以って知る事になるうとは思ひもしなかったが……薬で危うく死にそうになったのに、自分が殺そうとしていた岬から助けられ、しかも今こうして彼の腕に抱かれて口説かれているのだ。

『何故？』

レイナの岬に対する疑いは、深みに嵌まって行くばかりだ。直接的な情事を要求するでもなく、金に困っているような話を話してはいたが、彼女に金銭を要求するでもない。

「あのさ……」

岬が言い掛けた時、タイミング悪く携帯が鳴った。呼び出し音で判断出来るよう設定しているのか、岬は対応せずに素早く携帯を切る。

「ゴメン。急に帰らないといけなくなった」

「急患？ それとも取立て屋さん？」

急に余所余所しくなった岬を見て、レイナは少しだけ不満を感じて厭味を言った。岬との時間を共有していた事が馬鹿らしくなり、過剰に意識していた自分が色褪せて見えた気がする。

「ん、そんなトコ」

情け無く言うと、岬はレイナの背に廻っていた腕を緩めて拘束を解いた。

レイナは穢らわしいものでも扱うように、素早く岬の腕を振り払って離れようとしたのだが、いきなり岬から両の二の腕を捕まえられ、再び強引に引き戻されてしまう。

「何をす……はッ？ んッ……」

言い掛けた唇を強引に奪われた。

ほんの僅かなひと時……重ね合わせる程度のキスだったが、程好い弾力に包まれたレイナは、頭の芯が痺れて麻痺しているような感覚に陥った。

「また今度」

岬はやや強気に出た。呆然としているレイナの瞳を覗き込むと、自分の視線を強く焼き付けるように真正面から見据える。

岬からの強い視線を受けたレイナは、逃げ出す事も適わずにその場に立ち尽くしてしまった。彼女の動揺を読み取った岬は、ふわり

と笑って背広を右肩に掛けると、彼女の居る部屋を後にする。

「馬鹿……」

立ち去った岬の後ろ姿を見送ったレイナは、そつと自分の唇に触れてみた。舌先に残った苦手な煙草の辛味と香りに、レイナは軽く眉を顰める。

悲しくも無いし、嬉しくも無い　何の感情すら持っていないと思っていたのに、何故か涙が零れて頬を濡らした。今まで、一瞬でも夫を含める男達とのキスが心地好いと思つた事は無かつたし、そんな事は在り得ないのだと思つていた。

この涙は、岬に心を一瞬でも奪われてしまった自分への悔しさからなのだろうか？

『また今度』　そう言い残した岬の言葉が、レイナの心を攪り、戸惑わせた。

\* \* \*

「で？　彼女とは何処まで行つたんだ？」

ジンが無然として訊ねた。脚を組み替えて、署内のサーバーから注いで来たコーヒーを呷った。

桐嶋署の喫煙室で、シャツの両袖を捲りネクタイを緩めてだらしく座っていた岬とは対照的に、ジンは濃いグレーのスーツを乱す事無く着こなしていた。肩まで伸びた黒髪を後ろでスッキリと束ねている。男性の割にはやや線が細く、面長で整った顔立ちをしているが、柳眉の間に深く刻まれた皺が、彼を几帳面ではなくて神経質な性格なのだと言ひ表している。何れにせよ、見た目に拘るタイプのようなようだ。

「まるで尋問だな？」

岬は、鬱陶しそうに自分の眼の前に座るジンの動きを眼で追いながら、不機嫌に答えた。

「尋問結構。仕事だからよ。誰かさんの激甘話なんざ聞きたかねーが、コレも業務だ。さっさと吐け」

『面倒は御免だし、これから話すお前の艶聞も聞きたくないから省略しろよ』と言わんばかりの態度だ。

岬はそんなジンの態度が気に入らないとでも言うように、フンと鼻を鳴らして煙草を銜えると、無造作に火を点けた。

「ル・オー・ホテルのスイート」

一息吐くと、煙草を持った指で頭を搔いて面倒臭そうに答える。

「ばっ、馬鹿。ソツチかよ。別に行き先場所を訊いたんじゃないぞ？ それにしてもスイートなあ？ お前がか？ いきなり何でスイートなんだよ？」

ジンは露骨に軽蔑した視線を岬に投げ付ける。

「ンだよその言い方はア。彼女が予約してたのに決まってンだろ」  
岬はジンの視線が気に入らなくて、思わせ振りに勿体を付けた。

「お前の為にか？」

「違あーう。偶ー然。俺は予定外」

もう一度面倒臭そうに答える。

「ふ……だろうな」

今度はジンが鼻で笑って肩を揺らす番だった。

「あー、今の言い方に障るー」

「俺の質問にはまだ答えていないぞ？」

ジンの一言に、岬は口元に持って行き掛けた紙コップを止め、それを静かにテーブルに戻して真顔になった。

「あんな、そう言うプライバシーを俺がどうしてお前に話さないといけないんだ？ 俺があんな女と関係を持つとつが持つまいが、お前には関係ねーだろ？ それに此処は所轄の喫煙室だ。誰が入って来るか解らない。場所くらい弁えるよ」

ムツとして言い返す。勿論、レイナが自分を薬殺しようとして逆に危険な目に遭っていた事は伏せていた。

「いや、大いにあるね。お前が彼女をどう捉えているかで、サポー

トする俺の状況は確実に変わって来る」

「どうして？」

「『情』だよ。『情』。彼女は玲奈にそっくりだ。似過ぎているんだよ。『情』に絆ほどされて返り討ちにされた奴は、昔からゴマンとい  
るからな」

「……」

岬は顔を背けて聞かないフリを決め付ける。

「シカトかよ？」

「……」

ジンは質問に答ええない岬の様子を苛立ちながら暫らく窺っていたが、諦めて話題を切り替える事にした。

「お前が依頼していた件……」

予想通り、岬はジンの言葉に反応して視線を戻す。

「アレな、当たりだったぞ？ 玲奈の遺体は無くなっている」

「……」

一瞬で岬の顔色が変わった。テーブルの上に置いていた左手を強く握り締めて、血色を失う。

玲奈が亡くなった経緯を聞いていたジンは、岬の胸中を察して思わず視線を逸らせ、次の言葉を躊躇った。

「通常手続きが為されていなかった。管理会社にも当たったが、誰も気付いて居なかったそうだ。セキュリティにも引つ掛っていない。つてか、玲奈の身体は盗まれたと見て間違い無い。ま、ドナーは何千体と保存されている訳だ。四六時中引つ切り無しに身体の保存場所は入れ替わる……こんな事をお前に言いたくはないが、必要部分だけ切り取られて戻されるのならまだしも、バラバラで部位や器官ごとに管理される事だつてあるんだ。その中から玲奈の身体だけを監視しろと言ってもムリな話だ。お前にとつちやあ大切な一人であっても、会社からの認識は個別の一人ぐらいでしか無い。連邦の管理下にあった保管庫でさえ破られたんだ。民間会社の杜撰な管理なら、盗むのなんかもつと簡単だろうな。一体や二体無くなっていた

って気付かれやしないさ」

『そんな事はとつくに判ってる！ 俺が欲しい情報はそんな事じゃ無い……』 岬は言い出しそうになった自分の言葉を、無理矢理飲み下して強く口元を引き結んだ。

予測していた岬の反応だけに、ジンの胸は痛んだが、それでも尚気付かない振りをして先を続けた。

「この一年間の管理会社のセキュリティデータを、もう一度検索項目を増やして篩いに掛けている。俺が立ち会っていた時にも、既に履歴トレースにエラーが掛って行方不明になっていた遺体が数体。あまり精度に期待は出来ないが……結果が出ているそうさ。お前も見るか？」

「いや、いい」

岬は俯いて身動きしない。

「何か知っているのか？」

ジンは岬の顔色を探るように覗き込んだ。

「おい？」

「……」

「また『戻って』やがるのか？」

無反応の無関心。岬の瞳は何だか曇って見える。ジンは、岬が自分の中にまた閉じ籠ってしまったのではないかと思い、眉を顰めた。「今回の件をお前が担当する事自体、俺は反対だ。まだ復帰は早過ぎたんだよ。部長も一体何を考えているのか解らないね」

「あ？」

ジンの言いように岬は頭を上げた。

「何だよ。さつきと面構えが違っているじゃないか」

ジンは自分の思い違いだっただのかと、安心して気を緩めた。そんなジンを見た岬は、途端にキュツと口角を上げる。

「まああ、それって私の事を心配なさって下さっているの？」

岬は大袈裟にふざけて見せた。数日前から美人ホステス嬢に囲まれた潜伏捜査で覚えた冗談だ。

たちまちジンの表情が強張った。この手のおふざけは大の苦手だ。「く……馬ッ鹿野郎！ お前、冗談で済ませられるとも思っているのか？」

額にクツキリと青筋を浮き上がらせたジンが、派手に椅子を蹴倒して立ち上がった。右手にはたった今飲み終えた紙コップが、無造作に握り潰されている。

ジンは至って真面目だった。相棒の心の内を察して気の毒だと同情していたのに、当事者である岬がこの上なく不真面目に見えて無性に腹が立って来る。

岬もそんなジンの様子を心得ている節があり、両腕で頭部をガードして咄嗟に身構えた。

「俺が心配しているのは！」

興奮して自然に声が大きくなる。

「聞こえてる」

ジンの大声とは反対に、岬は静かに言った。思っていた以上にまともな受け答えを返して来た岬に、不意を突かれて調子を崩す。

急にその場に居辛くなって、ジンはそそくさと席を立った。

「おっ、俺が心配しているのは、これ以上同僚を死なせたくないからだっつーの！ 人がマジに心配してりゃ……このっ！」

「痛っ！ ……ってエな！」

喫煙室から出て行く序でに、ジンは岬の頭を拳で掠めるように叩いて行った。

本当に『玲奈』自身なのかも知れない……岬は直感的にそう思った。そして、もしそれが事実だとすれば、ジンは何と言うのだろうか？

岬は叩かれた頭を頻りに撫でながら、ジンが怒って出て行ったドアを見詰めた。岬自身、確証は何処にも無い。けれど、岬の勘がそうかも知れないと強く感じている。

ただ、容姿は『玲奈』であっても、彼女の一寸した仕草や雰囲気



は微妙に違っている。『玲奈』の中に、別の『レイナ』の人格が重なり合って存在しているように思えた。彼女の人格が誰なのか、或いは誰かを模して形成されているのかさえ、今の岬には皆目見当が付かない。

## 第5話 小悪魔

「おい、高城」

「はい？」

「美人さんのお出迎えだぞ」

係長の檜山がニヤリと笑い、背後に顎を杓つて見せた。

「今、行きます」

岬は『待ち人』の到着連絡に浮かれつつ、捲り上げていた両袖をそそくさと元に戻し、だらしなく緩めたネクタイをキュツと素早く締め直した。そして軽く両手で頬を叩いて『キアイ』を入れると、スツクと身軽に立ち上がる。

「ん？」

一步を踏み出して、ハタと思い当たる節があつた。そして檜山の普通の反応から、迎えに来たのは自分が希望していた『待ち人』ではなかつた事に勘付いて、がっくりと肩を落とす。

「あ、みつさきい！」

テンションの高い黄色い声が、岬を見付けて呼び止めた。見ると、チカが岬に向つて両手を大きく拡げて振っている。美人の存在は署内でそれだけでもかなり目立っていると言つのに、チカは希少種のリアルロングコートを身に纏っていた。毛足の長いコートは光に当たると金色に輝いて見える高価なもので、これ一着で数千万の高級車を何台も買う事が出来るらしい代物だ。

チカの背後の物陰から、署内の数人の頭が見え隠れしていた。まるでアイドルを陰から見守る粘着ファンかストーカー並み。こうなると警察官も単なる人間だ。暫しの間、業務を放つてチカを盗み見ている署員達の態度に岬は呆れた。

「や、やあ……」

岬の予測は当たり前だった。心待ちにしていたレイナから振られ

て、来ては貰えなかったのだから。けれど、亡くなった玲奈とそっくりの彼女が本当に遣って来ていたのなら、一騒動は免れそうに無かっただろうなと岬は思った。

来てくれなくて正解だったのか？

岬の胸中は複雑だった。

本署への報告序でに顔を出していたら、クラブの出勤時刻をとつくに過ぎてしまっていた。岬は已む無く、酔っ払いの喧嘩で巻き添えを喰らい、警察に保護されたとクラブに嘘の連絡をしていたのだ。「とんだ災難だったわねえ。怪我してない？」

「お陰様で」

岬はにこりと愛想笑いを披露する。

「ねね、チカが身元引受人だよお？　なんかさあ『身元引受人』って言葉の響きって、カツコよくない？」

「そう？」

岬は素っ気ない相槌を打っただけなのだが、何故かチカは仕事を中断されて警察に呼び出されたにも関わらず、嬉しそうに笑顔を浮かべた。

「でさあ、岬と初めて会った時も、チカが最初だったよねえ？」

チカは自分がどれだけ岬に尽くしているのかを認めて貰いたくてそう言った。事実、岬が簡単にクラブに潜入する事が出来たのも、チカの口添えがあったからこそだ。

愛想笑いを繰り返す岬のだが、チカは岬の笑顔にすっかり機嫌を良くして、彼の右腕に縋り付くと、猫のようにゴロゴロと懐いた。「……………」

桐嶋署を後にするも、署員達の殺気に満ちた視線が岬の背中に突き刺さり、岬は心中穏やかでは居られない。

\* \* \*

車のハンドルを握る岬の横顔へと、チカは熱い眼差しをずっと送っている。岬は気付かない振りをしていたのだが、それでも『間』が持たなくなつて限界が来ていた。

「何？ チカ」

惚けるのを諦めて岬の方から振つて遣ると、構つてくれたと思つたのか、チカは更に嬉しそうな顔をした。

「うふふ、あのねええ……」

「えっ？」

チカが喋り掛けた時、タイミング悪く車はクラブのあるビルの地下駐車場へと進入した。地下の駐車場で車のエンジン音とタイヤの軋む音が大きく反響して、チカの言つた言葉が掻き消されて聞き取れない。

これ幸いと車から降りた岬に、慌ててチカも続いた。車に遠隔錠リモートロックを掛けて、足早にエレベーターへと向かう。

「あん！ 待つてよう！」

チカは小走りで岬の後を追つたが、開いたエレベーターの前で急に立ち止まった岬の背中に、勢い余つて顔から突っ込んでしまった。「きゃ？ 痛つた〜い。急に停まらないでよね」

涙眼になりながら鼻を押さえて咎めるが、岬からの反応は無かつた。

「岬？ どうしたの？」

自分が無視されてしまったのかと訝り、チカは岬の陰からエレベーターの中をこそつと覗き込む。

はつとしたチカの心臓が、どきりと厭な音をたてた。

チカが眼にしたのは、岬をこの上なく不機嫌な形相で睨んでいるイヴ（レイナ）の姿だった。普段のおっとりとした物静かな彼女しか知らないチカにとって、こんな厳しい表情をする彼女を見るのは初めてだ。

「やば……」

チカはさり気無くそつと視線を逸らせると、岬の背後に身を隠した。

レイナは岬に気を取られてしまい、彼の背後に隠れているチカの存在にはまだ気付いていないようだ。警察からの連絡を受け取ったのはチカだったが、岬が身元引受人に指名していたのは、チカではなくレイナだった。チカは勿論この事をレイナには伝えてはいなかったし、岬本人には適当に嘘を吐いてごまかしている。

レイナに自分の遣った事がバレてしまい、それでこんなに彼女が怒っているのだとチカは勘違いして焦っていたのだ。

『レイナはねえ、』行きたく無い』って。だからアタシが代わりに来てあげたの』そう嘘を吐いたチカのことを、岬は何の疑問さえ持たずに鵜呑みにしてしまっただけらしい。

チカは岬の言葉に、内心ホツと胸を撫で下ろした。チカは自分のお気に入りになりつつある岬から、厭な女だと思われたく無かったからだ。けれども、チカの心配は徒労に終わりそうだった。チカの言葉を信じた岬は、どうやらレイナの事を疑い、酷い女だと思い込んでいるらしい。

「案外、冷たいんだな。君は」

チカに伝言を頼んでいた筈なのに、レイナは少しも悪びれた様子が無く素知らぬ振りをしているようだった。厄介事を頼んだのは自分だが、それでも来られなかった理由が欲しいと岬は思った。『行く気になれなかった』とでも言ってくれても良い。理由は何でも構わなかったのだ。

「何の事かしら？ 変な言い掛りを付けないでくださらない？」

「い、言い掛かり……って……」

レイナは肩に掛かった長い亜麻色の髪をサラリと後ろへ流すように軽く首を振った。トゲを持った余所余所しいその言葉には、決して他人を自分の心の中に立ち入らせようとはしない、毅然とした強い意志が感じられる。警察署に足を運んでの身元引受は、確かに迷

惑な頼み事ではあったが、それを断った理由を尋ねられて『言い掛かりだ』と平然と撥ね付けた彼女の態度に、岬は遣る瀬無さを感じてしまった。

まさか数日前の『あの時』の事を恨んでいるのだろうか？ レイナの親切心を逆手に取り、騙して近付いた岬の事を。そうだとも思えて、岬はレイナが来てくれなかった本当の訳を問い質せなくなり口籠ってしまった。

「退いてくださる？」

「あ？ ああ……」

レイナの進行方向を真正面から塞いでいた岬は、一步退いて彼女に先を譲った。彼女の手元で車のキーが光り、付けていた小さな鈴が澄んだ音をたてる。

「外出？ 今から？」

「貴方には……関係ないでしょ」

取り付く島も無い素っ気ない返事が戻って来た。

同じクラブ内でのホストとホステス。相手をしている客の目の前で必要以上に妙な馴れ合いは許されないのではあるのだが……レイナはあれ以来、ずっと岬を遠去けているようだった。素っ気ないのは勤務中だからなのかと、岬は勝手に思い込んでいたのだが、どうやらそれは岬の思い込みであって、実際は違っていたようだ。

「ふうん……」

岬の陰に隠れて、二人の遣り取りを黙って聴いていたチカは口端を吊り上げ、声を立てずに笑った。チカは初めから、岬がレイナに興味を持っていたのを知っていたのだ。

レイナの持て囃されようを面白く思わなかったチカは、勤務中であつても近付きそうになった二人を見る度に、間にワザと割り込んで妨害した。極力二人が出会う機会を遮り、阻止し続けて来たのだが、チカにとっては眼に見えての成果が認められずに焦っていた処だったのだ。

二人の間に何があったのかは知る由も無かったが、少なくともチカにとって二人が……レイナからの一方的ではあるのだが、いつの間にか険悪な仲になっており、チカの好ましい状況になりつつある事だけは理解出来る。

『これって、チャンスかもお！』

チカの黒目勝ちな瞳が小悪魔のように怪しく光った。

「ねええ、どうしたのお？ 早く行こうよお」

二人の会話が途切れて『間』が悪くなったタイミングを見計らうと、チカはわざと岬の後ろからひよっこりと顔を出した。

チカを眼にして驚いたレイナの表情が強張るが、チカはそんなレイナの反応をとくに心得ていた。

「あらあイヴ、誰かと思っただわよ。何処へ行くの？」

「し、仕事よ」

レイナは気不味そうに、少し頬を赤らめて戸惑った。

「ふ〜ん、じゃあ頑張ってねえ。ねえ岬い、あたし達も早く行こうよお」

チカは鼻に掛かった甘えた声で岬の気を惹こうとする。

「えっ？ あ？ ああ……」

チカはレイナの目の前で、大胆に岬と腕を絡めた。二人仲良くご出勤というシチュエーションを彼女にアピールした心算だったのだ。たちまちレイナの表情が翳り、軽く俯いて視線を逸らせてしまった。

「失礼するわ」

胸に湧き上がった蟠りを拭い去るようにして、先に歩き出したのはレイナだった。

岬達二人を無視して擦れ違う。二人を意識せずには居られない状況で、他人のフリをして通り過ぎることがレイナにとっての精一杯だった。

「ねーえ、さっきの事だけどおー」

チカは更に鼻に掛かった甘ったるい声で岬に話し掛ける。勿論擦

れ違って去って行くレイナには丸聞こえになるように……だ。

「あ？ ああ……何？」

岬は未だにレイナの後姿に気を取られていた。こうまでして甘えている自分には一向に振り向いてさえくれない気も漫ろの岬に、チカは腹立たしさを覚えた。自分達を無視して行ってしまったレイナなのに、岬は尚も彼女の後姿を眼で追い掛けて居るのだ。女性としてこれ以上の屈辱があるだろうか？

人一倍自尊心が強いチカの瞳が燃えた。美しい亜麻色の髪と魅力的な容姿を持っているレイナには多少引け目を感じてはいるが、それでも自分の容姿には自信を持っている。

自分を差置いて、去って行くレイナを眼で追う岬に憤りを覚えたが、岬の心を捉えて放さないレイナの美しさに嫉妬してしまった。そして、彼女の存在そのものが邪魔に思えて疎ましくなる。

「ウン！ もう。チカはご褒美欲しいなあー」

甘えた声でそう言ってウインクすると、本物の宝石が飾られた凝ったネイルアートの人差し指を自分の口元に持って行き、軽く指先にキスをして見せた。

「えっ？ う、嘘だろ？ 何も今此処で……」

「なあに？ 簡単でしょう？ それとももっつとイケナイコトをオネダリしちゃってもいいかしらあ？」

「……」

チカの要求を知り、岬はゲンナリとした表情を見せた。ご褒美を期待して待っている子犬のような目で、チカはじつと岬を見詰めている。

レイナにも二人の遣り取りが聞えていたらしく、足早に神経質そうなヒールの音が離れて行った。チカはそんなレイナの様子を探って、心の中でほくそ笑む。

「ね？」

ダメ押しに小首を傾げて祈るように両手を胸前で組むと、潤んだ瞳でおねだりした。



「う、うん……わ？」

レイナを気にしてか、曖昧な返事をして中々行動を起こさない岬にチカは焦れた。尤も、レイナがこの場を完全に離れてしまえばチカの計画は無駄になる。焦ったチカは思い切った首に両腕を廻して爪先立つと、そのままの勢いで強引に岬にキスをした。

「んむ……」

勝ち誇ったようにチカはレイナの方へ視線をちらりと遣した。

レイナは勢いよく車のドアを閉めた。素早くエンジンを掛けて暖気する間も置かずに、タイヤを鳴らして急発進させる。

荒々しい運転からレイナの動揺が手に取れるようだった。チカは岬の唇を奪いながら、自分の計画が一先ず成功を収めたと思って満足する。

駐車場の出口付近にエレベーターが設置されている。レイナが乗った赤い車は、嫌でも岬達の居る目の前を通り過ぎなければ出られない。

「……」

ハンドルを握るレイナの視線と、チカに唇を奪われたまま、目の前を走り去って行くレイナを見返している岬の視線が強く絡み合った。

『デートしよう』……つい先日、岬はレイナに対して嬉しそうに言った。

レイナは岬の言葉を真に受ける事が出来なかったが、それでもその言葉に少しだけ心を動かされていたのは事実である。そして言葉の真意が知りたくなってしまったのだ。そのせいか、レイナはあれからずっと岬の事が心の奥底で引っ掛って気になり、自然と意識せずには居られなくなっていた。

けれどその反面、直後に謝ったとは言え、ホステスであるレイナに面と向かって『身体が仕事だ』と貶める言い方をした岬の暴言がどうしても許せなかった。

仕事を抜きにして個人的に岬に近付いてしまえば、媚を売ったと誤解されるかも知れない。付け入られて心まで踏み躪られてしまいそうな気がして怖くなり、レイナは岬に近付く事を恐れて躊躇っていた。今のレイナには、岬に対して素っ気ない態度と言いつい方しか出来なくなってしまったのだ。

レイナ自身、自分のつれない態度は、岬にとって好意的には捉えられて貰えないだろう事は十分承知していた。しかし、だからと言って岬はレイナを諦めて、掌を返してチ力に取り入ってしまったのだろうか？

岬の変わり身の早さに呆れ、そんな岬に僅かでも心を動かされて淡い期待を持つてしまった自分がとても惨めで情け無くなった。

アクセルを踏み込むレイナの右足に力が籠る。心なしか、視界がぼやけて霞んで見える。

チ力からの強引だったキスを拒みもしなかった岬を見てしまったレイナは、胸を締め付けられるような辛い痛みを覚えていた。二人のキスを目の当たりにして、全く悔しくは無い……と言えば嘘になる。

それでもレイナは、岬を信用しなくて良かったのだと自分に言い聞かせ、無理にでも岬の事を忘れてしまおうと強がってみた。自分には夫が居る身だ。時折、端正な顔立ちからは想像も付かないような、冷たい表情を浮かべることがあるジェフではあったが、今となつては彼の存在を盾にして、自分の心の片隅に居座つてしまった『岬』という男の影を、拭い去る事が出来るかも知れない。穢わらしい『雄』の事など、一刻も早く忘れてしまった方がいい……そう思うとするのに、レイナは岬を忘れる事が出来そうになかった。

レイナには最近の記憶以外、『思い出』と言えるような記憶など何一つ残ってはいなかった。生活する上で必要な最低限の基礎知識的なものは、誰に教わらずとも覚えているのに、古い記憶や過去に出会った人や場所といった記憶の一切を完全に失っていた。

彼女の記憶は、ほんの数ヶ月前に見た真つ白な天井と医療機器に囲まれて眼が覚めた辺りから始まっている。そして彼女の担当医であるジェフと名乗る男から、彼女が事故で記憶喪失になってしまった事や、自分がレイナの夫である事を伝えられていた。

記憶喪失になったレイナには、ジェフしか頼る者が居ないのだと諭され、身体が動かせるようになってからは、ホステスとして『イヴ』と言う名を騙り、意にそぐわぬ『客』を取らされていた。

夫であるジェフの指示は絶対で、逆らえば容赦なく殴られ身体を痛め付けられて、何度も意識を飛ばしていた。

時には薬で眠らされたり、身動きが取れないように縛られて。

声を限りに叫んで救いを求めても、どんなに厭だと拒絶しても誰も助けてはくれない。眼には見えない頑丈な鉄格子の檻に囲まれて絶る事が出来るのは夫であるジェフただ独り。それ以外は諦める事しか選択の余地は与えられない。先の見えない汚れた現実から、自分は逃げ出したくても逃げ出せない籠の中の小鳥なのだ。　　ようやくその事を理解した頃には、レイナの身体はおるか心まで引き裂かれて傷だらけになっていた。

チカと唇を重ねている岬が、最中であるにも関わらず自分に視線を送っている。　　思い出したくも無い場面が頭の中で何度もフラッシュバックした。

自分とは関係の無い岬が何処で何をしても構わないし、それが当然の事だと思っていた。なのにレイナは、チカと岬のキスを思い返す度に、ザワザワと感情を逆撫でされているような不快感に見舞われて、我慢が出来なかった。理屈に感情が付いて来ないのだ。

無表情でハンドルを握っていた心算のレイナだったが、不意にくすんだ瞳から熱いものが頬に流れた。

『俺の事が許せない？　でも、自分だって同じ事をしているじゃないか』

頭の中で、聞える筈の無い岬の声が聞こえた。

これからレイナが赴く場所は、都内で有名な高級ホテル。そこにはレイナの『客』が待っている。相手は食事と会話を希望して誘っているが、午前零時までの『契約』が何を意味しているものなのか、大人であれば判りそうなものだ。

「違う……私は望んでなんかいないわ！」

『望まなくても同じだって』

「違う！ 違うわ！」

レイナは纏い付く幻聴を振り解くように何度も激しく首を横に振った。けれど、チカに強引にキスをされながら、別れ際に遣した岬の強い眼差しが、脳裏に焼き付いてしまい離れない。

もしかすると、あの視線の意味は、わざとレイナからの反応を窺う為のものだったのかも知れない。そしてその後自分は岬からどう思われたのだろうかと思いを廻らせて、心を掻き乱していた自分に気が付いた。

「ずるい……」

後から後からこみ上げて、涙が頬を伝った。

客を取らされ、待ち合わせ場所に赴いている今の自分が、軽蔑した岬と一体どれだけ違っていると言っただろうか？ レイナは自分が酷く穢らわしい女のように思えて堪らなかった。

あの時の岬の眼が、無言でレイナを追詰める。

時間が経てば経つほど岬の視線を思い出し、意識して胸が苦しくなっただけだった。

「厭！ やっぱり私……貴方にだけは汚れた私を見られたくない！」

何故？ どうしてそう思うのだろうか？

偶然クラブで会ったホストだと言っただけ……何故こうまで岬の事が気になってしまっただろうか。何かが胸の奥に悶えているような、もどかしい焦燥感に追い立てられる。

アクセルを踏む足に力が籠る。レイナは無理な追い越しを何度も仕掛けて、後続車からクラクションを浴びた。

信号が赤に切り替わったのに気付くのが遅れ、そのままレイナの車は交差点に進入してしまった。慌ててブレーキペダルを踏んだが、ブレーキは床面に簡単に密着してしまい、制動が掛かる手応えが全く無い。

「ああ！」

全身の血が凍った。

目の前を青信号で進入して来た大型トレーラーで遮られた。彼女の車は回避出来る場所を完全に塞がれてしまう。

咄嗟に手ブレーキを引き、ハンドルを切った。

急な制動に、彼女の乗った車は悲鳴を上げながら、タイヤから白煙をもうもうと巻き上げて後部<sup>リア</sup>を流し、助手席側の側面をトレーラーに向けて接触した。加速していた車体はそれでも逃げ場を失ってトレーラーの下部に潜り込み、迫って来た後輪に巻き込まれて大破する

\* \* \*

照明を絞ったフロアでは、生演奏による緩やかな曲が流れ、ホルの中央で十数組の盛装した男女が優雅にソシアルを踊っている。

岬はゲストの一人である婦人からの指名を受けて、已む無くホールに引き摺り出され、パートナー役を引き受けていた。

「？」

流れるようなステップが止まり、婦人が訝って岬を見上げる。

岬はすまなそうな顔を婦人に遣すと、黙ったまま婦人に着信点滅で反応している携帯を取り出して見せた。

婦人がこくりと頷いて承諾するのを確認すると、岬は婦人から視線を逸らせ、目配せで交代の合図を送った。すると、すぐに壁際で待機していたホストの一人が岬と入れ替わりで婦人の手を取る。

「失礼」

「早く帰って来てね」

名残惜しそうに婦人が岬に小さく手を振った。

岬はフロアを後にしながら、『勘弁して』と心の中で呟いた。彼女には先の尖った爪先やヒールで、何度も足を踏まれている。

ホールのドアを閉め、岬は着信履歴を辿った。

「高城か？」

「はい」

相手は上司の芹澤だった。

「R 六十五で事故があった。すぐに救急医大病院に急行しろ。そこからだとなんかに時間は掛からないだろう？ 俺も今向かっている」

「芹澤さん？ 俺、今『勤務中』ですよ？」

こちらの立場を全く考慮してくれない、相変わらずな上司からの指示に流石に頭に來た岬は、素っ気無く言い返した。

「お前が今どういう職務に就いているかは承知している」

「だったら……」

「其処のクラブのホステスに『イヴ』とかいう女は居るか？」

「ええ。でも今は外出中……」

芹澤の様子を携帯越しに訝っていた岬は、はっとして我に返った。ただならない不吉な予感が岬を襲う。

「事故つてまさか……」

\* \* \*

救急病院の処置室は騒然としていた。

院内に響く岬の靴音が、多くのザワザワとした雑音に吞まれて掻き消される。

通路の左右には、多くの負傷者達に埋められて混乱していた。頭から血を流して呻いている者や、親と逸れて泣き叫ぶ子供。シヨックで呆然としている者……彼等の間を、何人もの白衣を着た医師や

看護師達が慌しく飛び回り、さながら野戦病院の有りようだった。怪我をしている彼等の殆どは皆軽傷で、既に大半が応急処置を施されている。

事故なのだろうか？ 岬は足早に先を急ぎながら、重篤な患者が見過ごされてはいないかと彼等に気を配って、視線を奔らせた為に自然と足が鈍る。

「おう高城！ 此処だ」

芹澤が岬に気付いて大きく腕を振る。

「芹澤さん、これは一体？」

軽く息を乱して、岬は芹澤の許に駆け寄った。

「報告した事故とは別物だ」

そう否定した芹澤の険しい表情に、岬は緊張して身構えた。

「今から三十分前に、R 六十五で事故が発生した。青信号で交差点に進入したトレーラーの側面下部に、赤信号で進入して来た乗用車が潜り込んで大破。現場は見通しの良い交差点。視界を遮られるような物は一切確認されていない……此処までは単なる交通事故だ。これで済むのなら俺でも態々勤務中のお前を呼び付けるようなマネはせん」

一気に捲し立てると、芹澤は大きく息を吸い込んで呼吸を整えた。

「夜間とはいえ、あの交差点付近は人の往来が多い。偶然居合わせた何人かの目撃で、車を運転していたのは『イヴ』と呼ばれる『ラジエンドラ』のホステスだと判明した。良いか？ 肝心なのは此処からだ」

芹澤は岬に勿体を付けた。

「運転していた彼女は駆け付けた救急隊によって此処に運ばれた。だが、その数分後に彼女の姿が院内で消えた」

「はあ？ 仰っている事がよく……」

「まあ、話は最後まで聴け。俺だってよく判らんのだから……彼女を運んだ救急隊員の話では、事故直後から既に意識不明だったそうだ。怪我也酷くて、とても一人で病院を抜け出せるような状態で

は無かつたらしい。乗っていた車両が原型を留めちやいなかったぞうだ。ここまで言えば、お前なら彼女の状態がある程度想像が付くのではないのか？……失踪は誰かの手引きで拉致された可能性が高い。丁度運悪く十五分程後に近くで大型バスの事故があつてな、この通りの有ようだ。で、この混乱に乗じて彼女を連れ出した可能性が高い。今は随分とマシになっているが、俺が来た時なんかもつと凄かつたぞ」

芹澤は通路にまで溢れ返っている怪我人に向かって顎を杓つた。

「バスの事故は仕組まれたと？」

「或いはな。この混乱に乗じて連れ出すのなら、造作も無いだろうからな」

芹澤は肯定も否定もしない。偶然とも思えるが、確かに混乱に紛れての人攫いが目的であれば、考えられなくは無線だ。

「……」

岬は通路を埋めた負傷者達に再び視線を戻した。

「彼女と面識のあるお前には気の毒だが……この界限には臓器目的の人買ひも横行している」

まるで彼女が被害者になつてしまったような口振りだ。芹澤から言い表しようの無い不安に煽られてしまったのだが、岬は両の拳をぐつと強く握り締める事で落ち着こうと努力した。

「失礼します」

岬は芹澤に踵を返して、彼女が運ばれて行つた処置室の自動ドアを開けた。

「お、おい！ 其処はお前等が入れる処じゃ……」

『無いぞ』と言おうとして、芹澤はその言葉を飲み込んだ。部長から、岬が正規（FCI）の職務上、医師の資格を所有しているのだと聞かされていたからだ。

処置室には引つ切り無しに怪我人や病人が運び込まれ、絶えず泣き声や呻き声が漏れている。パニックに陥っている者も少なくない。



「君！ 部外者は退出して貰おう！」

傷口を縫合処置していた医師が、手を止めて岬を呼び止めた。彼のすぐ隣のベッドには心肺停止（C P A）で除細動器（A E D）に掛けられていた患者が居る。

岬は手を伸ばすと除細動器のレベルを基準値よりも高く設定した。「何をする！」

鋭く言った医師の眼の前に、岬は黙ってF C Iの身分証を医師に一閃させる。

「宜しいでしょうか？」

岬は拒否させない強い視線で彼等を説き伏せた。

医師達は岬の呈示した身分証を眼にすると、お互いに視線を合わせて頷き合う。

「ご協力を願います。数十分前、此処に事故で運ばれた二十代の女性が居た筈だ。」

「あ？ …… ああ」

彼等以外の看護師達とも顔を見合わせる。

「確かに此処に運ばれて来た。だが、もう手遅れだった。どんなに処置をしたとしても彼女はバイオノイドになるより他に手段は無いと我々は判断した」

「それで彼女を炭素冷凍に掛けて処置を一時擱いていた。この状況を見れば解るだろうが、彼女が運び込まれた直後に事故があった。

処置の優先順位はマニュアル通りだ。理解して貰えると思うのだが？」

もう一人の医師が、ドアの外に居る負傷者に向って視線を送り、後を続けた。

冷凍処置後であれば、自力での脱出は不可能だ。此処に居る誰かが搬送の手引きをしたのか、それとも医師を含む全員か…… それとも全員が部外者なのか……？

「彼女は何処に？」

カプセル状の処置用ベッドがずらりと並んでいる。その間を岬は

通つて中の患者を一人一人チェックした。

「出口に一番近いそのベッドだ」

彼女が居なくなつたので、既にそのベッドには後続の患者が収まっている。医療用ベッドの位置を考慮すれば、混乱に乗じて外部からでも侵入は可能だ。

「此処のセキュリティを拝見させて貰いますよ？」

「ああ。其処を出て左にあるブースで見られる。今、手が離せんから後二十分程時間をくれないか？」

「同席は結構です……それとも何か他に疚しい事でも？」

岬の探るような厳しい視線が医師達に向けられる。

「い、いや別に……」

入つて来た時もそうだったが、医師達の様子が妙だ。岬は医師の申し出を辞退して処置室から出て来た。

「高城」

「芹澤さん？」

二人の捜査員から状況説明を受けていた芹澤は、岬を見るなり呼び止めた。気分でも優れないのか顔色が少し悪い。

「顔色が良くないですね。少し横になつた方が……」

「顔が悪いのは生まれつきだ。おう、こつち来てコレをしてみる」

芹澤は岬の言つた言葉を聴き間違えて機嫌を損ねる。

「そんな事、言つてませんよ？」

相変わらずな芹澤の短絡的思考に岬は呆れながら、データを受け取る。

芹澤から手渡されたヘッドセット型のレコーダには、防犯目的で作動していたコンビニのカメラが偶然捉えた事故の映像を、詳しく画像処理分析したデータが読み込まれていた。

## 第6話 囚われの身

「レイナ……」

「誰？」

少し掠れた中性的な声彼女を呼んでいる。

レイナはその声に応えるように、ゆっくりと瞼を開いた。朦朧としていた意識が覚醒して、明るい栗色の瞳が光を取り戻し、徐々に生気を増して来る

気が付けば、何度体験しても馴染む事の無い生体蘇生水溶液の中だった。生臭い血の匂いと、鉄分を含んだ金属イオンの苦々しい味が、彼女のあらゆる感覚を刺激して気分を悪くしている。虚ろな視界に長い髪が映り、呼吸可能な蘇生液の中で揺ら々と漂っている。時折ゴボゴボという低い水音と軽い金属音が振動音となって直接身体の深部に響いて来た。自分が浮遊しているような感覚に、既にどちらが上で、どちらが下なのかさえ認識が曖昧になっていた。

「……」

レイナは物憂げに自分の右腕を見詰めた。

細くて白い腕の至る所には、薄いピンク色になった新しい皮膚細胞が形成されている。片腕だけでもかなりの傷跡だ。恐らく事故で負った傷は全身に及んでいるのだろう。身体に刻まれた多くの傷痕が、彼女が引き起こした事故の大きさを物語っていた。

もしかしたら、自分は既に死んでいて、記憶だけが残留思念として留まり、現世に取り残されているのかも知れない　そんな錯覚に陥ってしまう。

『どうしてイヴ達あの三人だけを特別扱いするの？』

他のホステスが、レイナ達の事でオーナーに直接不満をぶつけて詰め寄っていたのを、レイナは偶然見てしまった。それはレイナが

ジェフの妻であり、ジェフがオーナーに対して絶対的な発言力を持つていた事が深く関係していたからではあったのだが、彼女達三人が持っている美しい容姿にも理由が在った。

チカと小夜子そしてレイナの三人は、ジェフが用意した『薬』を売却する目的でこのクラブへ遣つて来た。店に遣つて来る『上物の客達』の中から特定の人物を物色し、ジェフが指定した相手と取引をするのがレイナ達に課せられた本当の仕事だった。ボックス席での『売却の為の接客』であれば、何もフロアに赴いて気に入らない客に愛嬌を振り撒く必要など無い。そのため、傍目からは接客しているようには見えないレイナ達が店のホステス達よりも遙かに優遇されているようにしか思われていなかった。これでは店で働く彼女達が良い顔をする筈はない。そして、同じホステスでありながら、レイナ達三人は常に他のホステス達からの嫉妬を買ひ、彼女達の嫌がらせは日を増す毎にエスカレートして行つたのだ。

彼女の車のブレーキに細工を仕掛けたのは誰なのか？  
心当たりは幾らでもあるし、誰が遣つても不思議ではない。彼女は特別な存在になりたいなどと口にした覚えも無ければ、他のホステスから酷い厭味を言われたり、眼に余るような厭がらせをされても、報復など考えた事さえ無いのだ。

自分の存在を拒否して抗議する彼女達の姿に、レイナは居た堪れなくなつてその場から逃げ出していた。

虚ろになつたレイナの記憶が途切れがちになる

『どうだ？』

『ああ、こりやあもう駄目だな』

『もう駄目だな』

『駄目だ……』

頭の中でレスキュー隊員達の声がする。彼等の事務的な遣り取りにエコーが掛かり、何度も繰り返して響いて来る。

(そう、もう……私は駄目なのね……)

レイナは救急隊員の言葉を、素直に受け容れられる気がしていた。何故か今のレイナは『生』への執着や未練等全く無かったのだ。

岬を殺害しようとして逆に毒を飲まされた時は、本当に心の底から死にたく無いと願った。助かりたい一心で、岬に命乞いまでしたと言っただけ。

なのに今は違っていた。

あの時の自分は何処へ行ってしまったのだろうか。どうしてこんなにも自分の気持が変わってしまったのだろうか……

誰かの靴音が近付いて来て、自分の前で停まった。ゆっくりと面を上げた虚ろなレイナの瞳に、白衣姿の男が映る。男は穏やかに表情を和ませて、中に居るレイナを水槽ごと愛おしそうに見詰めると円筒形の水槽に片手を着いて話し掛けた。

「やっと気が付いたのかい？」

「ジエフ……」

ジエフの手が置かれた水槽から、彼の声が体感振動音として鮮明に聞こえて来る。

「中々眼を覚まさないから心配したよ」

ジエフが蘇生液を排出するレバーを引くと、ガクンと言う大きな音と振動が伝わり、足元のメッシュ状の排水口から、蘇生液が勢い良く吸い込まれて行く。それまで水溶液によって支えられていたレイナの身体は、長い間の無重力状態から開放され、自らの体重を感じ取って水槽の底に両手を突いて崩折れる。そして肺の中に満たされていた蘇生液を咳き込みながら吐き戻した。

水槽は蘇生液を排出し終わると、温かいスプレー状の洗浄水を彼女に吹き付け、滑らかな白い肌から蘇生液を拭い去った。

一通りの工程を終えた円筒形の水槽は、天井部に迫り上がって格納される。

「随分無茶な運転をしていたんだね」

ジェフが純白のバスタオルをレイナ目掛けて放った。

タオルはレイナの濡れた頭にふわりと掛かり、彼女はタオルを手にして胸を隠すよう宛がうと、横座りのままでジェフを見上げた。

優しい眼差しが眼鏡の奥からレイナを包み込む。

「冷静な君が……一時の感情に振り回されるだなんて」

ジェフは眼鏡を外すと片膝を着き、彼女の頤を引いた。

「……」

やや乱暴気味に顎を掴まれて、レイナははっとして身を強張らせる。

「駄目だよ？ 僕に抵抗は無意味だ」

ジェフはレイナの表情を読み取って余裕で笑ったが、その瞳には早くも狂気の兆しが見え隠れしていた。もう片方の手でカード型の黒い制御装置のスイッチを入れる。

「う……」

微かな高周波の不快音がレイナを包んだ。彼女が軽く顔を顰めて息を詰め、両手で頭を抱えて首を振る仕草をする。

ジェフはそんなレイナの様子を冷淡に観察しながら、制御装置からの信号レベルを親指でゆっくりと押し上げて行った。

「あ、ああっ……」

ジェフの手にした制御装置からの不快感は、目覚めたばかりのレイナの脳を直接刺激した。鋭いナイフで頭の中をキリキリと抉られているような強い痛みが奔り、細い眉を寄せて顔を顰める。半開きの容の良い唇からは、苦しさにくぐもった声が漏れ、呼吸が大きく乱れる。

彼女に抵抗の意思が認められないと確認すると、ジェフはレイナの身体をその場で乱暴に引き寄せて押し倒した。

苦しみながら、レイナは『また』なのかと思った。

ジェフはレイナに触れる時、必ずこの制御装置を起動させて近寄って来る。それが何の為なのかは判らないが、耳障りな音で聴覚を麻痺させられ、体調が思わしく無い時には頭痛と吐き気を催した。

見知らぬ男に触れられるよりも、彼の腕に抱かれる事の方が不快感と苦痛を味わわなければならず、虐待されているとしか思えなくて悲しくなる。

口では『愛しているよ』と甘い言葉を囁きながら、言葉とは全く逆の態度を常に取り取るジェフ。夫だとは言え、レイナにはそれが厭で堪らなかった。

ジェフは本能の儘にレイナを求めるのだが、彼女の身体は応えない。

「如何したんだ？」

「……」

ジェフはまるで自分が感情の無い人形を抱いているような錯覚を起こして機嫌を損ねた。

虚ろな瞳のレイナは上の空だ。まるで厭な時間が早く過ぎて終わってくれば良いと耐え忍んでいるようにも見える。

「レイナ？」

「何でも……ないわ」

彼女は上体を起こして、彼からの視線を避けるように顔を背けた。彼女の視線の先には、小さい緑のランプが灯ったままの制御装置がテーブルの上に放置されている。

「そんな事はないだろう？ だったら何故君が泣いているんだ？」

ジェフは腹立たしそうに興奮して声を荒らげた。

彼の怒りを感じ取ったレイナは、息を飲んでジェフを見上げる。

彼はレイナと視線を合わせてハッと我に返った様子を浮かべた途端、何かを隠し立てするように、取り繕った表情を湛えて微笑む。

「……」

レイナはそつと自分の頬に触れてみた。蘇生液ではない別の何かが自分の頬を濡らしている。

「君に何があっても、これがあれば総て僕にはお見通しだけれどね」  
ジェフは優しくレイナの首筋に貼り付いた長い亜麻色の髪を撫で

付けた。レイナはそつと瞳を閉じてジェフに身を任せる。

彼女の首にはプラチナの細いチョーカーがあった。精巧な透かし細工が施され、中央には小さな赤い宝石が輝いている。

「あー！」

突然レイナが短く叫んだ。

「やはり僕には、到底君を許すなんて事……出来そうも無いよ」

それまで優しくかったジェフの表情が一変した。穏やかだった眼鏡の奥の瞳に、なりを潜めていた『狂気』が本性を現す。力任せに掴んだその手は、チョーカーごと彼女の首を乱暴に締め付ける。

「く……何の……事？」

「惚けたつて無駄さ！ 君がああ『男』を仕留め損なっていた事は判っているんだ。この僕に黙って隠し遂せるとでも思っていたのか？」

「あの男？ ……岬の事なの？」

「そうだ。奴の事だ！ 君はその後も奴を手を掛けるチャンスは何度だつて在った……なのに、なのに君は出来なかった。何故だ？

……僕の、この僕の言う事が聴けないのか？」

ジェフの指先に力が籠る。

「止め……て！」

「答える！」

「か……それは、私を殺さなかった。貴方の言っていた人とは……違うわー！」

レイナは岬を庇い、瞳に一杯涙を溜めてジェフを見返した。けれど彼女の脳裏には、地下駐車場での出来事が鮮明に蘇って来る。再び胸が締め付けられ、言い表しようの無い感情の波が押し寄せて来る。

自分に手を差し伸べて近寄って来た岬に戸惑い、素直に接する事が出来ずにつれない態度を取ってしまったから岬に裏切られてしまったのだとも思った。岬なら……もしかしたら籠の鳥である自分を助け出してくれたかも知れなかったのに。



そんな儚い希望でも、岬だったからこそ持てた気がしていた。それなのに臆病な自分が邪魔をして、彼を遠去けてしまうよう仕向けてしまったのだ。

「何？ 何て……何て眼で僕を見るんだ！」

今まで自分に見せた事も無いレイナの表情にジェフは驚いた。そして一層険しい表情になる。

「あの人は……違うわ」

そう想いたかった。

「黙れ！」

ジェフはレイナの首を絞めたまま、彼女を黙らそうと平手で左右の頬を何度も殴る。

「『あの人』だって？ 君はあの男を……あの男を好きになってしまったのか？ 愛してしまったのか？ ……駄目だ！ 君が愛して良いのはこの僕だ！ 僕が君を助けたんだ。僕なら君を何度だって蘇らせて遣る事が出来る。いいかい？ 君には僕しか居ないんだ！ 許さない。許さないぞレイナ！」

ジェフは頬を強張らせ、怒りを露わにして怒鳴った。

レイナは首を絞められて息が苦しくなり、今にも意識が遠退きそうだ。それでも朦朧とした意識の中で、彼女は自分が岬の事を愛しているのかと問い掛けた。けれども、岬の事が気になっているのは確かだが、彼を本当に愛してしまったのかどうかは判らない。

「君は僕のものだ！ この僕に従え！ 僕にだけ従えば良いんだ！」

ジェフの指先に一層力が籠り、レイナが堪らずに悲鳴を上げる。

「くくく……綺麗だよ」

涙に濡れる彼女の瞳には、眼を細めて自分が苦しむ表情を眺め、恍惚とした表情を湛えている彼の異常な姿が映っていた。

「苦しいかい？ そうだ……もつと苦しめ」

彼の狂気に満ちた荒い息遣いが彼女の頬に当たる。

「厭！ 止め……て！」

「何度でも殺して遣る！ だが、殺されても君は僕の手の中で蘇る

んだ。いつだつて僕が救つて生き還らせて遣る事が出来る。不老不死さえも思いの儘だ。奴にはそれが出来ない！ この僕にしか出来ないんだ！ 判ったかレイナ！」

苦しむレイナの耳元で怒鳴ると、ジエフは狂気に歪んだ笑みを浮かべた。

「厭ああ！」

レイナの裸身に赤味が差した。そして皮膚のあちこちに薄い模様が浮き上がる。鼓動が速くなり、全身にアドレナリンが湧き上がった。耳障りで不規則な呼吸音が次第に大きくなる。瞳の虹彩は真っ赤に染まり、左右が迫出して縦に細長いスリット状になった。

それはまるで獣の瞳だ。

「……行つておいで」

銀縁の眼鏡が怪しく光った。

ジエフはテーブルに置いていた制御装置を再び手にすると、スイッチを切り替えた。レイナが身に着けていた首のチョーカーが指示を受けて小さな宝石部分が赤く光り、ゆっくりと点滅を繰り返す。

\* \* \*

「よお、高城」

開店前のクラブでフロアの清掃をしていた岬に、珍しい客が遣つて来た。

「芹澤さん？」

まだ開いていない店に遣つて来た芹澤を見て、岬はモップを動かしていた手を止めた。

芹澤は岬が担当している所轄での任務に直接は関与していない。察する所、様子窺いの序に飲みにも来たのだろうか？ 岬は芹澤をせっつかちな人だなと思い、呆れてしまった。

岬のそんな様子を察して、芹澤は情けない顔をした。

「お前に用があつて来たんだ。店に用は無い。なあ、そんな面する<sup>ツラ</sup>

なよ」

「はあ……」

芹澤から心の内を読まれて訂正されてしまった。勘違いをしたのは自分の方だったのかと、岬は肩を竦める。

芹澤はクラブがあるビルの屋上へと岬を呼び出していた。

屋上……と言ってもヘリポート完備の高層ビルの屋上だ。地上七十階建のビルだが、周辺にはそれ以上のビルが数え切れないほど乱立しており、遠方への見通しを阻んでいる。それでも僅かな隙間から洩れ出る、巨大に膨れ上がった真っ赤な夕陽が、昼間熱されて陽炎が立ち昇るビルの谷間にゆっくりと溶け込み、長い影を落としていた。

「此処ならそう人も来ないだろう」

岬はビルの屋上でも全く平気なのだが、芹澤が高所恐怖症なのだとい前耳にしていた事を思い出した。自分のリスクを冒してまで教えて『人払い』を遣った芹澤を、岬は訝って見詰める。

岬は芹澤の真意が読み取れず、彼が被るであろう恐怖症のリスクを医師の立場から心配したが、芹澤は自分からこの場所を選んで岬を誘ったのだ。取り敢えず本人が承知の上での行動ならば、他人が懸念するほどでも無いのだろうと割り切って納得する事にした。

ならば、そのリスクに見合う話とは何なのだろうか？

ややあつて、岬は芹澤に対して迷惑そうに口を開いた。

「困りますよ。その格好でいきなり……」

くたびれたトレンチコートの下にはくたびれたスーツ。今も昔も刑事の定番アイテムだと言わんばかりの風体だ。

「ははは、いやあすまん、すまん。長い間この仕事やっていると、TPOなんざ気にならなくなっちゃってますなあ」

陽気に笑い飛ばした芹澤を見て、岬は自分の目を疑った。

芹澤が桐嶋署の上司として赴任してからのというもの、口を開けば罵詈雑言しか出さなかった芹澤が笑っているのだ。却って薄気味悪

さを覚えた岬は、胡散臭そうに眼を細めて眉を寄せた。

芹澤はそんな岬の顔を見上げて口を尖らせると、悪戯っぽく睨む。「おお、何だよ？ 俺が笑っちゃあいけないのか？」

「い、いえ、そんな……」

何を言い出すのかと思えば、自分に絡みにわざわざ遣って来たのだろうか？ 正直、そんな事は数日置きに報告に足を運んでいる桐嶋署で遣ってくれと言いたかった。芹澤との話の内容よりも、今はこうして芹澤と会っている事でさえ、クラブの連中から既に怪しまれているのかも知れないのだ。疑われればクラブの内情を探るどころか、自分や自分に関してしまった人物の命さえ危険に晒されてしまう。芹澤だとして狙われれば同じだ……そう思うと岬は気が気でなかった。

迷惑そうな顔をする岬に気付いた芹澤は、大きな咳払いをするといつもの機嫌が悪そうな顔に戻り、岬にくるりと背を向けた。

眼下に拡がる黄昏の景色が、視界に嫌が応でも飛び込んで来る。

芹澤は吸い込まれそうな高さに恐怖を覚え、冷や汗を掻いて足を竦ませた。急いで微妙に震える両手を伸ばし、手摺を堅く握り締める。

「そのう……何だ。悪いとは思ったんだが……香川から聞いた。お前、一年前の事件で彼女を亡くしたんだってな？ ……桐嶋署の女性捜査主任でお前の上司……か」

「何が言いたいんです？」

ムツとなつて芹澤に食って掛かった。芹澤に玲奈の事を話した香川にも頭に来るが、何よりも、細心の注意が要求される潜入捜査時に、迂闊に接触して来た芹澤の無神経さに腹が立つ。自分の上司であれば、そんな事がご法度であるのは基本中の基本ではないか。

しかも話の内容がこれだ。

「芹澤さん、時間が……」

時間が無いからとでも言い、早々に引き揚げて貰おうと思ったのだが、芹澤は岬に向かって片手を軽く上げ、話の本題はこれからだと

ばかりに岬の言葉を遮った。

「その彼女と生き写しらしいな？ 『イヴ』って言う、居なくなつたクラブの嬢ちゃん。部署の手配リストに彼女の名前があった。あの事故は嬢ちゃんが警察にマークされていると勘付いて、組織の者が手を廻したと考えるのが自然だ。こうなる前にお前が任意で連れて来ていれば防げた事故じゃなかったのか？ お前が一番保護出来る確立が高いポジションに居た筈だ。だが、お前はそうしなかった……何故だ？ 死んだ女の面影を何処かで追っていたからか？」

「……」

芹澤の後姿から岬は顔を背け、居心地の悪い空気が辺りを包んだ。

「『聞きたくない』の意思表示……か？」

答えようとしないう様子から、芹澤は憶測で岬の胸の内を察した。

レイナが攫われてしまった後、警察は彼女の捜索に何人もの警官を投入したのだが、彼女の行方は依然として掴めてはいなかった。その指揮を執っていたのは、他ならぬ芹澤だったのだ。

「で、だ。現場検証の結果が出てな、実は様子見序に知らせに来た。嬢ちゃんの車には寸前までブレーキ痕が無かったそうだ」

「え？」

岬は面を上げて芹澤の後姿を見詰めた。

「車に細工がしてあった。ブレーキを踏んだが手応えが無かったから慌ててサイドを引いたんだろうな。だが、制限速度を既に超過していた彼女の車両は停まらなかった」

「誰が……誰がそんな事を……？」

声が震えた。組織絡みだけでは無い。クラブ内でのレイナは、他のホステス達とは待遇が全く違っていたし、彼女を妬んでのホステス達の嫌がらせは岬も知っている。

レイナを快く思っていない彼女達は、ドレスの裾を踏んで転ばそうとしたり、酔った客を睨けたり、ダンスの基本ステップさえ知らずに踊れないのを承知していながら、恥をかかせようと仕向けたり……彼女達からすれば、総てが『故意では無い』と言い逃れ出来る程

度の……しかし明らかに計算された嫌がらせであった。

岬はレイナの身に危険が及ばない限り黙って見過ごしていた。極力レイナに関りを持たないよう配慮していた心算だったが、気が付けば化粧室のドア越しに彼女が啜り泣いているのを沈痛な面持ちで度々聴いていたのだ。直接手を差し伸べて助けて遣れないもどかしさと歯痒さに、何度心の中で彼女に詫びた事だろうか。

「嬢ちゃんには、本当に申し訳ないと思っている。が、彼女の死を無駄には……」

「まだ死んだと決まっていなんでしょう？」

岬はカツとなって芹澤の言葉を遮った。

岬の所見が間違っていないければ、レイナはまだ生きている筈だ。

彼女の身体はあちこちが事故で押し潰されていた。出血が夥しく損傷が激しかったが、頭部への損傷は殆んど無く、その上致命傷になりそうな傷も医師の腕次第によっては助ける事が可能だ。尤も、運ばれたE・Rの医師達の腕では、それも期待出来無かつただろうが……

「……そうだったな」

岬の意外な面を見た芹澤は、一種の頼もしさを覚えて口元を緩めた。

「あの病院のE・Rな……臓器売買の件で、看護師も含めて全員がクロだったぞ」

「そうですか」

芹澤の目からは、岬が動揺すら見せずに至って平然としているように見えた。

「何だ？ ちつとも驚かねえな……今、連中を裏で引いている奴等を吐かせている。偶然だったが俺達にとっては大きな収穫だ」

芹澤はとっておきだと思っていたネタをあつさり肯定されて仏頂面になる。

「路上での拉致も勿論ありますが、個体数をこなすのは困難です。なら、病院が協力すれば容易に臓器は手に入る。実際の所、病院に

は病気で運ばれる者だけじゃないですからね。ついさつきまで健康者だった者が不慮の怪我や事故でって言うのもある。人工器官に入れ替えてバイオノイド化すれば、当然摘出した元の臓器は不要になりますからね」

「病院に倫理はねえのかよ？ 俺だっていつ事故るとも限らないって」のに」

芹澤は岬の説明にがっくりと肩を落とした。

「最初から臓器の横流し目的では無かったと思いますよ？ ただ、今では本当に不要になった臓器だけの取引とも思えません……」

「オイシイ味を占めちまえば、健康な臓器も必要であれば序に盗むつてののか？ 野郎…… E・R だけならまだしも、病院ごと噛んでいやがったら、タダじゃおかねえ！」

芹澤は不快感を露にする。

「で……だ。ついさつき嬢ちゃんの搜索依頼を要求していたクラブのオーナーから、依頼取り下げの連絡があつた」

「え？」

「俺だつて嬢ちゃんの事は心配だ。だが、搜索願が取り消された以上、此方では如何する事も出来ん」

「……」

「まあ、これ以上捜しても無駄だと先方も諦めたんだろうよ。署長からは引き続き搜索を続行する旨の指示があつたんだがな、その直後に上からの横ヤリが入つた。結局は署長も指示に従うしかなくてな。全く…… 一人が行方不明になつて…… 何てこつた。俺には上層部の考えている事は判らん」

芹澤はやり場の無い怒りを吐き棄てるように言い放つ。

「横ヤリって…… FCI からの？」

「ああ。以後の搜索はこの課だつたか忘れたが、そこが引き継ぐ事になつたそつだ。FCIの事なら、お前にも何か関係があるのかも知れんな」

そつ言つと芹澤は煙草を銜えて火を点けた。

強いビル風に吹かれながら苦勞して火を点した煙草の先端が、今度は赤々と勢いを付けて激しく燃え始める。風に煽られての事だったが、芹澤は慌てて煙草を放り投げ、醜態を部下である岬に見られてしまったと意識して赤くなった。

岬はそんな芹澤を見なかつた振りをする。

「……そうですか」

「何か聞いているか？」

芹澤は岬の顔を覗き込む。

「いえ、FCIといつても、所属する課で違って来ますから」

「そうか……確かお前は九課……だったな？」

「ええ」

芹澤の問い掛けに、岬は軽く顎を引いた。

高層ビルの谷間に沈んで行く大きな赤い夕日を浴びながら、岬は赤く染まつた空を見上げた。

彼女の死を確認出来ない以上、レイナが死んでしまったとは思えなかつたし、何よりも、岬の中では依然としてレイナを失ってしまったと言う感じがしない。

『任意で連れて来れば防げた事故』

芹澤の言葉が、岬の胸の真ん中を射抜いていた。だが、それよりも事故の本当の原因は、他ならぬ自分にあつたような気がしてならない。

岬はチカと唇を重ねていたにも関わらず、ずっとレイナを視線で追い掛けていた。勿論捜査でレイナが重要参考人として挙がっている以上、逃亡や不審な動向を見逃さない為の監視任務ではあつたのだが……

そして岬個人の問題として、レイナが『玲奈』の記憶を所有しているのか、それとも所有していないのかを見極めたい気持ちなど、無かつた……と言えば嘘になる。



結果、レイナは運転操作を誤って事故を起こした。彼女が冷静であったのならば、細工が為されているのを早期のブレーキ操作時に気付き、直ぐに運転を止めるなり、適切な判断が下せていた筈だ。だが、事故があった現場からクラブまでの距離は十数キロも離れていた。憶測の域を出ないが、彼女には岬に対して何らかの心理的な動揺があったと見ていいのでは無いか。

これ以上に無い十分過ぎる手応えに、岬はレイナに対して罪悪感と共に恐れにも似た感情を抱いてしまった。

無事で居てくれ……

岬はレイナの安否を気遣い、焦燥感に駆られながら心の中で祈った。この数日間、有力な手懸かりさえ掴め無い。時間が、気が遠くなりそうな程長く感じられて何とも遣り切れない気持ちで一杯になつてしまう。

「手間ア取らせたな。メールつてもあつたが、俺はああいふ機器が苦手だね。文字だけじゃ俺の……そのう、気持ちまで伝えられ無いと思うし、携帯にしても何だかな……俺はお前等みたいにデジタルじゃ無い。アナログの古い人間だからな」

芹澤は照れたように苦笑いした。  
「いえ、芹澤さんこそ態々足を運んで下さって……」

岬は表情を和らげた。芹澤の不器用な好意が岬をそうさせたのだ。が、反面、未だにこういつた事は署で遣つてくれと心の中で願って止まない。思い立ったら即実行タイプの芹澤に、自重しろと言いつけるほどの説得力は持ち合わせてはいなかったし、芹澤は今までそれで通っていたのだ。敢えて今更指摘して機嫌を損ねてしまうのもどうかと思つた。

「ははっ、警察官としてのお前は俺の部下だが、FCIのお前は俺よりも遙かに格が上で違うんだよな？俺の息子よりもまだ若いっつてのによ」

「そんな。部下として見てください」

岬は改まってしまった芹澤を気遣った。普段が普段だけに今日の芹澤は異常だ。

「ああ……そうだったな」

芹澤は、夕陽に照らされながら黙って自分を見詰めている岬を眩しそうに見返した。

## 第7話 もう一つの顔

FCI 連邦中央統括機構。

連邦の捜査局関連を文字通り掌握し、統括する機関だ。業務は各捜査機関への情報公開と操作。各国の諜報エージェントへの支援。必要とあれば彼等と同様に内偵もするが、この場合はより公正な立場を維持する目的のために、独立の捜査が原則として要求される。スタンダードエージェントと何ら変わりはないが、主に彼等のバックアップである為にリスクは彼等よりも極めて大きい。捜査内容次第では、時として地元警察や軍を敵に廻してしまう事さえある。

第一課から第九課が現時点で設立されており、それぞれ各方面での専門分野に分かれている。岬の所属している第九課は四年前に新たに設立された。それまでの課と少し性質が異なり、前述した業務は勿論ではあるが、主にエージェントや対象者の救助・救急医療を目的としている為、医師免許取得が必須条件になる。

医師免許を所持する限られた超エリート……と言いたい所ではあるが、芹澤には未だに岬がその『超エリート』の一人なのだとはとても思えない。一体、自分達とこの岬とでは、どこがどう違っているのだろうかと首を傾げてしまうほどだ。

「どうかしましたか？」

岬は黙り込んでしまった芹澤の様子を訝り、その視線に気付いた芹澤は、徐に岬から視線を逸らせてしまった。

「高城、その……一つ、訊いても良いか？ 答えたくないのならそれでも良い」

「？」

「お前が先日の打ち合わせ中に退出した後、お前はFCIの者だと部長に聞かされたよ。本当なら、俺はお前から一番最初に聴いておかなければならなかった事だ」

そう言うと、芹澤は一呼吸おいた。

「此処に赴任して間が無かった頃の俺は、新しい職場に馴染もうと熱くなつて……その勢いでずつと突っ走って来ちまつた。お前の声に耳を貸せなくなつた俺が出来上がつちまつていたんだ」

芹澤はすまなそうに頭垂れた。

「芹澤さ……」

「訊いてくれ」

芹澤は片手を軽く上げて岬の言葉を遮つた。しかし、それはいつもの芹澤が岬に遣つていたものとは明らかに違っている。

「あれから俺は自分なりにお前の事を考えていた。FCI自体はそう新しい機関じゃないが、俺が知っているFCIの連中は元謀報部からの隠居組みだ。お前の居る九課は数年前に設立されたばかりだと聞くから、少し他の課とは性質が違うのかも知れん。だが……こう言つちやあ何だが、お前等みたいないな経験の浅い者が、現役バリバリ連中の支援をすること自体おかしくないか？」

「経験の浅い……ですか」

岬は芹澤の言葉を噛締めるように復唱すると、穏やかに表情を弛めた。芹澤はそれが自分に対する答えなのだと悟ってしまった。

「ととつ、別に答えなくても構わないんだ」

芹澤は慌てて付け加えた。その慌てた表情が妙に可愛いオヤジに見える。

「芹澤さんって良い人ですね？」

岬はにっこりと笑顔を作つた。

「はああ？ 今頃気が付いたのか？」

思いも寄らなかつた岬からの褒め言葉に、芹澤は頭を掻き、赤くなつてへへつと笑つた。

「けど、コレは俺だけの問題ではないので……」

岬は少し困つた表情で首を傾げた。

「お？ おお、そうか？ そうだろうな。すまんかった。守秘義務だよな？ やつぱり聞くのじゃ無かつたな」

芹澤は片手で軽く自分の後頭部を叩く。

「も、もう、いいぞ。ほ、ほれ、戻ってくれ。俺も帰るわ」

普段のらしくない言動に限界が来たのか、芹澤は居心地が悪そうに照れた。

「芹澤さん、車ですか？」

「車は家内が乗って行ったから、タクシーで来た」

「送りますよ」

芹澤の所帯じみた様子を垣間見て、岬は芹澤に親近感を覚えた。

実際、岬の家での権限を持っているのは一回りも歳の離れた妹の環だ。

「悪いな。仕事始まつちまうぞ？」

「今日は遅番にして貰いました。心配しないで下さい」

「お前、すっかり馴染んでいるじゃないか」

芹澤は少し意地悪そうに岬を値踏みして笑った。

「ええ。鼻肩の客も増えましたよ。二日前にはクルーザーも貰いました」

平然とそう言って左腕を軽く上げ、客から貰った腕時計をこれ見よがしに見せた。普段見慣れない高価な腕時計に、芹澤はあんどりと口を開ける。

「世間様じゃあ、不況だの物価がどうのと言っているが『その業界』じゃ不況云々とは縁が無いみたいだな？ 潤っている所には潤っているもんだ」

芹澤は感心したのか呆れ返ってしまったのか判断し兼ねる表情で、無意識に首を横に振った。

「大丈夫ですよ。客からのプレゼントですが、任務が終わればクラブに渡します」

「な、勿体ないじゃないか。貰っておけばいいじゃ……」

「俺にも趣味つてあるんですよ。でも幾ら好みだからと言っても、人の想いが籠りすぎているものはチョツと……」

良くも悪くも、岬は法規に則ったお堅い人種なのだたと芹澤は思った。自分が岬の立場であれば、貰った物でも気に入らなければ、売却する方法もあるだろうにと考えてしまう。

「まあ、ある意味客を騙している？ 良心が許せんか？」

「そんな処です。けど、受け取らないのもマズイし、貰った以上は暫らく使わないと」

「お前も律儀だなあ。本業換えれば？ そのまま食って行けそうだぞ？」

「それは無いでしょ？」

岬は芹澤の無責任な言葉に肩を竦めた。

車のエンジンを掛けると、ほぼ同じタイミングで芹澤の携帯が鳴った。

「はい……うん、う………何い？」

芹澤の声の調子が跳ね上がる。ハンドルを握っている岬にも、芹澤の緊張感が伝わった。

「で、被害は？ ……うん………よし判った。すぐ行く」

慌てて携帯を切り、血相を変えて岬へと振り向いた。

「すまんが、急いで署に連れて行ってくれ」

「どうしたんです？」

「たつた今、署の聴取室に盗難車が突っ込んで爆発した。取調べ中だった例のE・Rの連中とその場に居合わせていた署員数名が巻き込まれたそうさ。テロの可能性もある」

「急ぎましょう」

岬は事の重大さを覚り、シフトレバーをオートからマニュアルに切り替えてアクセルを踏み込んだ。

\* \* \*

高速道路は片側三車線の対面式。広い道路の中央は、上りと下りの両車線を等間隔に並んでいるポールで区切られている。岬はクラ

ブのあつた中心市街地から、やや郊外寄りの桐嶋署に向けて急いでいた。そして何度目かの追い越しを掛けていた時、岬の視界に反対車線を急ぐ白地に蒼いラインの中型バイクが飛び込んだ。

ハンドルを握った手が震えた。

ほんの一瞬ではあつたが、白い肌に、なびく長い亜麻色の髪。乗っていた女性の顔はフルフェイスのメットで判断し兼ねたが、黒い革ツナギを着て浮き出た流れる曲線は、レイナのそれとよく似ている。

何より、岬の直感が彼女であると断定していた。

「掴まつていて下さい！」

咄嗟にアクセルとブレーキを同時に踏み込み、手ブレーキと微妙なハンドリング操作で後部を滑らせた。車体を九十度ターンさせると、中央を分離している等間隔のポールとの隙間に紙一重で滑り込ませて反対側車線に侵入する。助手席に座っていた芹澤は、頭をドアガラスに打つけて鈍い音を立てた。

「あいつ……たたた……おい、高城！　どう言う事だ？」

頭を抱えながら芹澤が唸った。

「署と方向が逆だぞ？」

「一寸、付き合ってください！」

岬はそう言うのとアクセルを強く踏み込んだ。

「お前！　署よりも大事な事なのかうあ？」

急激な加速に芹澤が悲鳴を上げて目を廻す。

ナンバーと二輪の形状は既に擦れ違っていた時点で覚えている。

何台も車を追い越したが、流石に車とバイクでは分が悪い。追い越しを掛けられて挑発したと勘違いした車が、岬の車を負い掛けて来る。気配を察した先行車までもが追い越しをさせまいと妨害し始めた。

岬は絶妙のアクセルワークとブレーキで速度の緩急をつけ、時にはサイドミラーを折り畳み、寸での接触を紙一重でかわして行く。

「うわわ……おい、止せ！ 当たる！」  
度重なるニアミスに危険を感じ、堪り兼ねた芹澤が顔を覆って何  
度も悲鳴を上げた。

「おい、この先に橋が！」

ナビを覗いた芹澤が情けない声で叫んだ。

遠くで小さく霞んで見えていた橋脚の上部が、目前に迫って来て  
いる。橋脚の道路部分は一部が狭くなっており、車線も二車線にな  
っている。先行車に遅い車がいるらしく、高速道路でありながら車  
の流れが制限速度よりも緩慢で、全体に渋滞気味だ。先を急ぐ岬に  
とっては厄介な状態だった。

「パ、回転灯は？」

「持っていますよ。私用車なのに」

流石にこの状況ではバイクを追跡するどころでは無い。已む無く  
岬はコンソールのスイッチに触れた。フロントウィンドにナビの画  
面が映り、音声のみの表示に切り替わる。

「シユライバー」

岬はナビに向かって支援 A・I を呼んだ。

「ハイ！」

一定調子の機械音声が返事をした。

「俺の位置を把握しているか？」

「勿論！」

「今から十秒後に前方付近の走行車両にジャミングを掛ける」

「了解。かうんと・だうん！」

「お、おい！ 電道法違反だぞ？」

聞いていた芹澤が慌てた。

現在では殆どの車両には、搭乗者が行き先を伝えるだけで目的地  
へ安全に運んでくれるナビゲーシヨン A・I が搭載されており、運  
転手は必要ないとされている。



岬の指示は、道路交通法に基づいての路面状況を管理している拠点センターにアクセスしているA・Iを、特定の区間で一時的に切断する行為だ。当然、アクセスを切られたA・Iはマニュアル通りに車両を路肩に停めて機能を停止する。これは緊急車両が非常時の場合にのみ限定して強制行使する手段だ。通常での権限行使には警察と言えど上司の許可が必要になる。

「ほんの一時道を開けて貰うだけです」

「だっ、だけですっつたって……」

「じゃみんぐ、すたーと！」

焦る芹澤を無視して、シユライバーは岬の指示を優先した。

さして高速走行していなかった道路だ。瞬く間に前方を走行していた車両が減速して路肩に寄り、次々に停止した。強制的に停車して行く車両に乗っている人達が、不安そうに外を眺めたり、お互いに顔を見合わせたりしているのが見える。

ナビゲーションA・Iを使用していないドライバー達も、周囲の異変に気付いて岬の車に車線を譲り大人しくなった。

「前方クリア。確保シマシタ」

「よし。十秒後に再起動」

「了解」

岬はシフトを一旦下げて再度加速を試みた。

「知らないからな。後で交通課から文句を言われてもよ」

「ええ、其の時は芹澤さん、お願いしますよ」

岬は運転に集中して正面を向いたまま、表情を崩さずに真顔で応えた。

「ッ鹿野郎！ こういう時だけの俺かよっ？」

他人事のように言い放った岬の言葉に、芹澤はふて腐れる。

『何てエ奴だ』と芹澤は思った。

車幅の感覚と言い、相手車両のタイミングを素早く捉えて追い越す感覚と言い……とにかく『上手い』のだ。相手のドライバーに急ブレーキを掛けさせること無く、自然に流れるように追い越してい

る岬の運転技術に芹澤は舌を巻いた。普段のほんとしてしている岬を眼にしている芹澤だけに、今の岬が全くの別人だとしか思えない。

車内中央コンソールに一体型で埋め込まれているナビの画面は、先行する一台のバイクを捉えていた。二輪にはナビゲーシヨンA・Iは搭載されてはいない為、ジャミングを掛けても何ら影響は無い。自力で追詰めるより他に手は無いだ。

「誰を追っている？」

「重要参考人です。それ以上は……」

「そうか……そっちの管轄か。なら、仕方ないな」

芹澤は諦めてナビの画面を見詰めた。

「追い掛けているのはアレか？ これならもう時期御対面出来るな」  
カーブの多い道路での目視は確認が困難だったが、それらしいバイクが小さく見え隠れし始めた。

「あッ！」

不意に岬が叫んだ途端、車が大きく右に傾いで制御出来なくなつた。

後方から黒いバイクがかなりのスピードで接近し、白煙を引いて失速する岬の車両の横スレスレを通過する。岬はそのバイクのナンバーを一瞬で読み取つた。

岬は接触時のダメージが少ない中央分離帯のポールにわざと前部分<sup>ズ</sup>を向けた。

ポールに車体が接触し、次々とポールが接地部分から折れ曲がつて薙ぎ払われる。車体に響く断続的な強い振動に、芹澤がまたしても情けない悲鳴を上げた。

辛うじて車両の二次被害は免れたが、そのまま中央分離帯に乗り上げて停止する。岬は自分の車を狙つたのが間違はなく追い越しを掛けて来たバイクだと判断して、消えて行くバイクの後姿<sup>テール</sup>を睨み付ける。

「な、何だ？ バーストしたのか？」

停まった車の中で、安堵した芹澤が窓を開けて顔を出し、キヨロキヨロと辺りを見廻す。

「違います。バーストしたのは撃たれたからです」

「う、撃たれたあ？ 俺には判らなかつたぞ？」

芹澤の表情が強張った。

岬は車から降りて後輪の状態を見に行った。そして追跡を断念せざるを得なくなった状態だと判断を下して、悔しそうに剥き出しになったホイールを蹴る。

芹澤は黙ってそんな岬を見詰めていた。車外にいる岬が芹澤の知っている今までの岬ではない事を悟る。

（所轄では危険行為や禁じ手つてのが嚴重に監視されているが、それさえ厭わずなんだな。毒を以って毒を制す……か）

芹澤はFCIの基本概念を垣間見た気がしてならなかつた。

\* \* \*

二人が署に到着したのはそれから二十分後の事だつた。桐嶋署付近の路上は既に立ち入り禁止のテープで仕切られ封鎖されている。要所々に警官が配置され、その外側はマスコミや野次馬達で溢れ返っていた。上空では何機ものヘリがサーチライトを灯して騒音をまき散らしながら低空飛行を繰り返す。

パトカーと救急車が入り乱れ、赤色回転灯が賑やかに日没後の桐嶋署周囲を照らし出していた。事件のあつた一階こそ警察署ではあるが、建物館内には連邦機関が組み込まれている為に物々しい警戒だ。

大勢の警官達に交じって、九課の救助用ロボットであるシュライバーが二機投入されていた。

全長約二メートル、幅約八十センチ。平たい卵形のずんぐりとしたボディに昆虫に模した節足が六本ある。それらの先端には皆同様に鋭い二股の鍵爪が有り、爪を収納すれば反対から移動に便利な小

型のタイヤが出て来る仕組みだ。頭部には短いアンテナがあり、正面にはボディの半分以上ある巨大な大顎を持っていた。その姿は巨大なクワガタ虫だ。実際、他部署では『クワガタ』の呼称で通っている。先程、岬が車内でジャミングを掛けるよう指示をしたA・Iの本体だ。

「状況は？」

車を降りてドアを閉めながら、芹澤が近くにいた警官に尋ねる。

「はっ！ 署内の聴取室に無人の盗難車両が突入。犯人は未だに不明です。目撃者が確認されておりません。死者多数……」

「無人？」

報告をした警官に、芹澤は鸚鵡返しに確認していた時だった。

「おい、待てよ！ 死者多数ってどう言う事だ？ 第一報にそんな報告は無かったぞ」

岬は運転席の窓から身を乗り出し、車の傍を通り過ぎようとした警官を呼び止めた。車両が燃上した事は聞いていたが、署内部には火災防止システムが完備されているので火災による二次災害の可能性は低い。死者が出るような状態ではなかった筈だ。

「ですから、崩壊した瓦礫に……」

「瓦礫？」

岬と芹澤は同時に復唱し、偶然のタイミングに驚いて顔を見合わせた。どうやら芹澤も岬と同じ事を考えていたようだ。それならば説明する手間も省ける。

二人は視線を追突現場に向けた。確かに多くの瓦礫が山になってはいるが、それだけで多くの死亡者が出たとは考えられ難い。

各階天井には強化ネットが使用素材に挟む形で張り巡らされており、多少の崩壊では上部の瓦礫を階下に落下させない設計になっている。万が一、倒壊した最悪の状況でも生存者が居られるように補強された安全スペースも確保されている。事実、床に落ちている瓦礫の殆どが壁面のものであった。一部が崩壊した天井部からは露出

した強化ネットが上階の瓦礫を受け止めている。

岬と芹澤は、追突して大破した車両がシュライバー二機の大顎に引き出されているのを見た。燃料に引火した為タンクの周囲は損傷が激しく、車体フレームまで真つ黒に溶けて鉛細工のように捻じ曲がっている。周囲には金属が燃えた独特の異臭が充満していた。

車はかなりのスピードが出ていたらしく、聴取室を突き抜けて奥の第三セクションにある拘置所の方まで侵入していた。E・R関係者が拘束されていた場所は目と鼻の先だ。

恐らくは口封じ。

二人の視線が合う。

「後からの追加訂正報告か。それはまあ譲るとしても……だ。無人の車両がこんなに激しく追突出来るか？ 外部の監視モニタじゃあ、直前の車両からスタントマンは飛び出して来なかったそうじゃないか。まあ、遠隔操作リモートしていれば別だが、今の所その手の機器は見付かってはいない。テロの可能性も勿論棄て切れんが……高城、お前ならどう見る？」

「ちよつと診させて下さい」

岬は車を降りて、青いシートで覆われて運び出される死亡者に近寄った。担架ストレッチャーを担いでいる者の承諾を得て、掛けられていたシートを捲ると、既に事切れた血塗れの上半身が現れる。

血で汚れた被害者の顔に見覚えがあった。E・Rで会った医師の一人だ。最初は車に撥ねられたのかと思ったのだが、状態に違和感を覚えた岬は、彼が負った致命傷を特定しようとシート全部剥ぎ取った。ざつと診て、瓦礫で付いた傷でも無いと判断する。そして医師の顎を掴むと、顔の向きを変えた。

死因は頸動脈及び頸椎の損傷と窒息。明らかに見た目でも判るような二箇所二箇所の刺し傷があり、反対の相方になる二箇所二箇所の刺し傷が認められた。

「ごくりと岬の喉が鳴る。  
「これは……」

獣の……咬み痕！

医師の首筋には、四箇所に亘って鋭い釘状のものが深々と打ち込まれた痕が残っていた。全員を調べたが、半数の死因はほぼ同じ。残りは鋭利な刃物で頸動脈を断ち切られている。

手馴れたものだと思った。仮にも死亡者の中には現役の警官も居たのだ。恐らくは刃物を得手とする人物か？

岬はその所見で、ある程度の人物像を割り出していた。

「どうだ？ 何か判ったか？」

「ええ、そつちはどうでしたか？」

芹澤は中の様子を見に行き、瓦礫に足を取られながら覚束ない足取りで戻って来る。

「また振り出しに戻っちまった。取調べに携わった一課の連中が三人。E・Rの人間は看護師を含む九人全員が死亡だ」

「関った者全員ですか？」

「ああそうだ」

遣り切れないと言った表情で芹澤は肩を竦め、首を振る。

「芹澤さん……」

岬は気を落ち着かせようと煙草を取り出した。心なしか指先が震えている。

「何だ？」

芹澤の返事を待つてから火を点けると、肺の奥深くにまで届くように大きく吸い込んだ。

「確か、広域で捜査していた大型獣……あれ、進展ありました？」

一呼吸擱いてから切り出した。大型獣だと疑われている事件が立て続けに起きてはいるが、岬は被害者の直接確認はこれが初めてだ

ただけに、俄かには信じられなかった。しかも、目撃証言さえ存在しない事実があるのだ。これをどう説明すればいいのだろうか？  
眼に見えない大型の獣がこの世に存在しているとでも？

「いや……面目ないがさっぱりだ。あれからまた三件被害者が出た内、二件は臓器の密売人絡みで、もう一件は麻薬組織の者だ。ま、被害者が罪も無い民間人じゃなくて良かったって処だな。組織内部で飼っている大型獣による猟奇的な惨殺の見方が強い。丁度内部統制が効かなくなって、見せしめ目的の殺害つても『在り』だしな。大型獣ならば目撃者の一人や二人出て来ても良さそうなものだが、どれも事件後の足取りが全く掴めん。これは内部で動いている証拠だろ？」

芹澤は岬が差し出した箱から煙草を一本受け取った。

「そのファイル、見せて貰えますか？」

ライターの火を点す芹澤の手が止まる。

「まさか？」

芹澤の視線に岬は黙って頷いた。

\* \* \*

「無人の盗難車の件ですが、多分……これは光学シールドを使用したものでしょうね」

「光学シールドお？ ああ、ひょっとしてソイツは軍の特殊部隊が使用してる……何でも目視確認が困難になるって言うジャミング・シールドの事か？」

聞き慣れない言葉に芹澤が眉を顰める。

「ええ。詳しくは話せませんが、一般に使用されている人工知能機器に限定効果があるジャミング・シールドと違って、光学シールドは人工知能機器にも生身の人間の目にも有効です」

尤も、光学シールドだけでは使用者の立てる物音や気配までは隠せない短所がある。

「しかし、軍の物を使用すればすぐにアシが付く筈だろ？　そこから攻めて行くか？」

「それは待つてください」

岬は、腰を浮かせて逸る芹澤を押し留めた。

「多分、発生制御装置の機種ナンバーから調べても無駄ですよ。開発技術部辺りから調べた方が良いでしょう。けど、これは任せて貰えませんか？」

岬は芹澤達警察の介入を断った。

「馬鹿言え。今更此処まで来て……」

芹澤は岬の忠告を無視しようとした。その言葉に被せるように岬が切り出す。

「光学シールド自体、機密事項に該当します。お願いですから」

穏やかな表情をした岬の瞳の中に映る芹澤の表情が強張った。芹澤は引き際を感じ取り、右手をぐっと握り締めた。

「そ、そうか……そうだな。軍の機密とあっちゃあな……」

芹澤は二、三度軽く頷くと、視線を逸らせて素直に岬の言葉に従った。ゆっくりと自らを納得させるように深呼吸を一つする。軍関係が絡めば素直に従うより他に手は無い。

「此処までか……」

諦めた芹澤は、肩を落として誰にともなく呟いた。

面倒な事を放置出来る安易な気持ちと、捜査のヤマを持って行かれる不愉快さ。そして深入りすれば喻え警察関係者であろうと徒では済まされないであろう無念さ。それらの感情が一緒になって複雑に絡み合う。

「何面白そうなコト話しているのかなあ？」

岬は声のする背後に首を仰げに反らせた。

「んあ？　ジン、来たの？」

「来て悪かったかよ？　人が折角画像処理した映像を見せて遣ろうと思ったのに。どうしよっかな」



ジンは意地悪そうに言い、持っていた映像チップをひらひらと見せびらかす。

「さっさと遣せ」

岬は腕を伸ばしたが、ジンは素早くその手をかわした。

「人に頼み事するには、それなりの礼儀ってーのがあるんじゃないか？」「見せて下さいお願いします。これで良いか？」

ジンがふふんと得意気に笑い、岬はムツとなった。そして機械が喋るような一本調子で早口に捲し立てる。

「せっかく気を利かして持って来たつてのに。心が籠ってねーよな」「ジンが情けない顔をした。その隙に岬の手が映像チップを掠め取り、直ちに室内に設置されているプロジェクトにセットされる。

「車両が追突した直後の映像だ」

映像を見ながら、ジンが解説する。車が追突して来た瞬間からの画像で、取調べ中だったE・Rの医師と刑事がデスクごと跳ねられ、他にもその場に居合わせた数人が巻き込まれた。難を逃れた者は驚いて退室する。その直後、画像が一転した。

画面には熱を感知してオレンジ色の微妙な色違い（グラデーショナル）で表された人型と、四肢を持つ獣の型をしたモノが車から飛出て来た所が映し出されていた。

「これだ」

ジンは手にしていたポインタで、動く二つの物体を指すが、その直後に映像が消えた。

「は？ これで終わり？」

岬と芹澤は拍子抜けした。

「仕方がないだろ？ 壁を突き破ってカメラごと壊してくれたんだから。一瞬でも映っていたんだから贅沢言つなよ。これで犯行には旧式光学シールドが使用されていた事が立証されたんだからな」

「まあな」

腕組みをしたまま岬が相槌を打つ。

「現行使用の非感熱光学シールドの開発一步前。L 七三〇……だな。確かこれ廃棄処分になっていたタイプじゃないか？」

意味ありげに岬はジンを見上げた。

「ああ。開発部からの横流しか、或いは盗難か……ま、いずれにせよこれは俺達の仕事だ。手は廻した。警部、この件に関しては後程報告が届くよう計らいます」

芹澤はジンの言葉に力強く頷いた。

「犯行は単独……と言いたい処だが、あの病院のE・Rが臓器売買に参与していた事を考慮すれば、組織的だな」

ジンの言葉に、今度は岬が頷いた。

「この大型獣は別にして、感熱した人物のシルエットから過去犯罪歴のあつた者を割り出して見たが……情報不足だ」

「で？ 何人引つ掛つた？」

岬はにやにやしながら意地悪そうにジンを見上げる。

「多過ぎて……検索不能」

「ふ……だよな？」

岬はジンの言葉を鼻で笑った。

「何だよ。その言い方は？」

岬の態度に今度はジンが不機嫌になった。

「情報不足にフィルタ掛けたってまともな数値は取れねえつての。

何にでも数値に頼ってデータ取りたがるな。お前の悪い癖だ。焦らずにもつと限定して絞り込まないとピンボケのままだろ？ そう言うのを時間の無駄って言うんだぜ？」

「お、俺だって無理だろうとは思っていたさ。もしかしたらと思って検索しただけだって。幾らお前が先輩だからって、まる一年も干されていた奴の言う言葉かよ？」

ジンは脹れてそっぽを向いた。

「せえな。こつちだつてム力つくんだよ。その言い方」

岬もジンの言葉にカチンと来る。年齢こそ同じだが、ジンは岬の後から九課に遣つて来た後輩だ。同じ医師ではあるがジンは薬品関

連の研究員だった為、デスクワークが主体だ。同じ九課だとは言っても、身体を張って救助任務を行う岬とは別畑だ。タダでさえ謎だらけの今回の件だ。苛々しているのに、これ以上の追い討ちは願わなかった。

「高城。無駄とも思える作業も、時として後で必要になったりするものだ。そういつた積み重ねが犯人逮捕に繋がる事もある。ましてや彼はお前の相方だろう？ 彼の努力をそう無碍にするものじゃないぞ？」

黙って聞いていた芹澤が口を挟むが、二人共芹澤の言葉を聴いてはいない。

「いちいち勿体ぶって経過報告なんかする必要なんか無いだろ？」

岬は猶もジンに咬み付いた。

「お前、何イラついてるんだ？」

「はああ？ 俺の何処がイラついてんだよ？」

「してるじゃないか！ 今っ！」

「はいっ！ それまで！」

今にも掴み掛りそうになった二人に、芹澤の大声が飛んだ。まるで試合での審判の乗りだ。

「お前等、本当にFCIなのか？ ああ？」

「そうですっ！」

岬とジンの声がハモった。

この二人は仲が悪そうだなと思っていた芹澤だったが、この息を合わせたような反応に吹き出しそうになる。

乱暴にドアを開け、肩を怒らせたジンが先に飛び出した。

「待てよ！」

慌てて岬が後を追い掛け、ジンの肩を捉まえる。

「ンだよ、放せよ！」

ジンは岬の手を乱暴に振り解いた。

「怒るなよ」

既に岬はいつもの冷静さを取り戻していた。

「誰が怒っているって？ 俺は今、忙しいんだよ」

口では否定したが、ジンの怒りはまだ治まっていないのが見えただ。

「悪かった」

「べ、別にお前から謝って貰ったって……」

ジンは所在無さそうに岬から眼を逸らせると、居心地が悪そうにふて腐れる。

「容疑者だが、刃物を得手にする人物に絞ってくれ」

「あ？」

「組織関係者は勿論、現役、退役の軍関係の者も。当然FCI内部もだ」

「え、FCIって……お前、何を言っている？」

岬の言葉にジンは眼を見張って息を飲んだ。

「聞えなかったのか？ FCIも対象だ。当然、俺も疑って貰っても良い。ジン、確かお前も得意だったよな？」

きっぱりと断言した岬とは対照的に、ジンは何処か落ち着かない様子だ。

「どうした？」

岬は訝って軽く首を傾げる。

「テロリストの線はどうなっている？」

ジンは再び視線を逸らせ、唸るように呟いた。

「目的がE・R関係者の殺害なら、その線は余計だ。切り捨てた方が良い」

「そうか……ああ、そうだな」

少し間があって、ジンは軽く二、三度顎を引くと、その場を離れる。

ジンの妙な素振りを、岬は黙って窺っていた。

## 第8話 夜の訪問者

「じゃあ、また明日ね」

「うん。バイバイ。お疲れー」

「じゃあねえ！ お疲れー」

時刻は夜の八時を過ぎていた。友達と別れた環は、ほどなくして自分よりも少し前を歩いている背の高いジャージ姿の男が眼に止まった。

紺色を基調とした男のジャージは、肩から腕、脇から下のパンツまでの両サイドに赤と白の鮮やかな切り替えラインが施されている有名スポーツメーカーのデザイン。足元は同じメーカーの白いジョギングシューズだが、踵をだらしなく踏み潰して履いていた。右手には、食材が一杯入った白っぽいエコ袋を持って居る。

環はそのエコ袋から今にも転げ落ちそうになっている食パンが、自分の家で毎朝食べているメーカーと同じものだと思い付いてクスリと笑った。

環は男と同じ方向に歩きながら、男を観察していた。エコ袋のせいではないと思うのだが、やや前屈みで猫背気味にした歩き方。そして見覚えのあるジャージ姿に、環は男が自分の兄では無いのかと思ったのだ。兄だと思うのならば早く声を掛ければ良いようなものだが、以前、同じ状況で他人に声を掛けてしまい、大恥を掻いた経験があつたせいで環は用心深くなっていた。

男は普通に歩いているようだが、環とは歩く速度も違えば歩幅も全く違っている。付いて行く環は、自然と小走り状態になる。

男が信号待ちで止まった。何気なく左を向いた男の横顔を見て、環はやっと確信が持てた。

「やっぱり、お兄ー！」

環の張り上げた声に反応して、男は振り返った。

環は、嬉しそうに息を弾ませて小走りで岬の許へと駆け寄る。

「遅いって。デートの帰りか？」

「なワケないって。この格好で判んない？」

環は部内で揃えた白い上下のジャージ姿で真っ平らな胸を張る。

「部活？」

「うん。来月に交流試合があるの」

「ふうん」

二人は並んで歩き出した。今度は岬が環の歩幅と速度に合わせてやる。

岬は自分の後を付けていたのが環なのだと既に気付いていた。以前、迂闊に声を掛けて失敗をした体験談を環から聴かされていたので、気付かない振りをして逆に環の様子を窺っていたのだ。なかなか声を掛けて来なかった環の用心深さを眼にしてしまい、岬はふと表情を崩した。

「お兄こそジムの帰り？」

「ああ。此処のところ、行って無かったからな」

そう言って笑うと、環に視線を落とす。

「悪いな。ずっと一人だったろ？」

「ううん。お父さんの所に行ってたよ」

二人の父親は桐嶋署署長の高城雅哉である。自宅は岬のマンションの丁度一階真下だ。

「あ……そ」

意に反した環の明るい返事を耳にして、岬は放置していた環への後ろめたい気持ちが一気に晴れた。却って環を心配していた自分が損をしていたような気になった。どうりで自分が帰宅しても、台所が綺麗だった筈だなと納得する。

「でも、今日お兄が帰って来るんだったら、環戻るうー」

「え？」

「だってお父さんのご飯って、買って来たお惣菜ばっかで美味しくないもの。お父さんの方が決まった時刻に帰って来てくれるけど、

「やっぱり飯はお兄じゃないとねー」

「って、メシでついて来るのかよ?」

「当然でしょ?」

「あのなあ……」

つんと澄まして言い切った環に、岬は言い返す気力さえ失くして呆れてしまった。

\* \* \*

「お兄、あれ……」

先に異変に気付いたのは環だった。二人でマンションに戻ると、環が自宅に点いている筈の無い灯りが点っている事に気付いて指を差す。

「出掛ける時に、電気消し忘れたの?」

「いや。昨日は泊まりで帰ってない」

「じゃあ、あの灯りは何? 昨日もこの時間に帰って来たけど、お兄の所真つ暗だったよ? ま、まさか泥棒?」

環は両の握った手を口元に持って行き、大袈裟に怯えた。

「泥棒が堂々と灯りを点けて侵入ねえ……どうかな?」

岬は面倒臭そうにソツポを向いて首筋を掻く。

「な、何他人事みたいに言ってるの? 自分の家でしょ? け、警察に連絡しなきゃ」

慌てて近くの駐在所に行こうとした環の襟足を、岬は無造作にひよいと掴んだ。

「きゃっ?」

環はまるで子猫か子犬のように手足を縮めて動けなくなる。

「お前は親父オヤジの所に帰れ」

「だあって! 泥棒……痛たっ!」

岬は環の額を指で弾く。

「刑事が警察呼んでどうするよ。ほら、これ持って」

「で、でも、でもっ……わ？」

岬は有無を言わず買物袋を環に渡した。鞆の重さに食材が追加され、環は両腕で、落ちそうになった荷物を必死になって押さえ付ける。

「後で取りに行くから」

そう言い残すと、岬は環を残して足早に去って行った。

「お……お兄、ち、ちよっとお！ 待あってえ！ 重あーい！」

\* \* \*

泥棒にしては間抜けだなと思った。岬の自宅マンションには金目の物等何にも無い。苦労して侵入したたろう奴をとっ捕まえて『ご苦労さん』とでも言いたい気分だ。

ドアの防犯錠に掌を翳したが、セキュリティは岬だと認識するものの、既に鍵は解除されたまま放置されている。セキュリティを突破して侵入した割には、潜入時の時間稼ぎになる鍵の必要性を理解していない素人のような手口が腑に落ちない。

奥のリビングで気配がするが、気配はどうやら一人だけのようだ。コソ泥なら何とかなると高を括っていた。しかし、リビングに近付いた岬は、部屋にはそぐわない異臭に気付いて眉を顰めた。室内には岬の煙草消臭用の芳香剤が置いてあるが、それさえ消し尽くせない程の異臭がドアの外にまで漏れている。

それが血の匂いであることに直ぐ勘付いた。

通常では在り得ない血の匂いと、ドア越しに感じられる無防備な相手の気配があまりにも懸け離れて矛盾している。ドアを開けようとした岬に一瞬迷いが生じたが、ここは退くよりも攻めるべきだと判断した。

岬は全神経を尖らせ、用心しながら……しかし態度には出さずにいつもの様子で部屋に入った。



「あれ？ 電気、消し忘れたのか……な？」

わざとらしく呟きながら部屋に入った岬の視線が、中央で釘付けになった。部屋の中央に置いていたガラステーブルの横でエプロン姿の女性が佇み、ドアを開けた岬に気付いて振り返った。

「お、お帰り……なさい」

遠慮がちに呟いたその声の主に、岬は自分の目を疑った。

腰まで流れるストレートの亜麻色の髪。少し上気してピンク色に染まった頬。そして彼女は恥じらいながら伏せていた顔を上げると、はにかみながらも真っ直ぐに岬を捉えて見上げて来た。

岬は信じられないという眼で彼女を見詰める。

「れ、玲……奈……」

息が詰まった。一瞬、錯覚を起して混乱する。

彼女は、食い入るように自分を見詰める岬の視線を避けるようにして俯いた。恥じらいが一層彼女の頬を赤く染めた。

「そ、そんなに……見ないで」

「どうやって此处に？」

岬はレイナが意図も簡単に侵入出来た事を不思議に思ったのだが、それは未だに自宅のセキュリティ更新を掛けて、『玲奈』を認識させていたデータを削除していなかったからだと遅ればせながら気が付いた。彼女がセキュリティ解除方法に精通しているか、若しくはレイナが『玲奈』の身体であると仮定すれば、『玲奈』のデータが存在している岬のマンションに侵入する事ぐらい造作も無い事ではないか。

「幽霊かと思った」

大きく息を吐き、岬は首を傾げて片手で頭を抱えると自嘲気味に笑った。気の利いた一言でも彼女と交わせればいいのだが、残念ながら今はショックが大き過ぎて望み薄だ。

「幽……霊？」

レイナは岬の言いように軽く拒絶反応を示して細い眉を寄せる。

「助かったんだな」

「知っていたの？ 事故の事」

「ああ……」

レイナが無事と確認出来て一旦は安堵した岬だったが、代わって今度は必要以上に気を廻していた事で、逆に腹立たしく思えて来た。しかも勝手に部屋へ上がり込んでいるのだ。

「此処に何をしに来たんだ？」

「あ、あの……怒って……いる？」

「当然だろう？ なに勝手に人の家に……」

レイナは口籠り、縋るような視線で岬を見詰めた。何かを伝えようとして言い出せずに躊躇っているような素振りだった。そんな煮え切らないレイナの態度に苛立ち、彼女を見詰める岬の表情が険しくなる。

「帰ってくれ！」

つかつかとレイナに歩み寄り、右の二の腕を掴んで軽く引いた。思っていたよりも細くて冷たいレイナの腕の感触に、岬は一瞬怯んだ。

「ま、待って、話を……話を聞いて欲しいの」

「話？ 君と話す事なんか何も無い」

自分の家に無断で侵入して来て、この上どんな無理難題を吹っ掛けようと言っのだろうか？

それまでの態度から、レイナは迷った拳句に岬を頼って遣って来たのだろう……とは思う。いや、そう思って遣りたかったのだが、岬にも『許容範囲』というものがある。

入籍こそしてはいなかったが、この部屋は自分の女であり上司であった『玲奈』と一年前まで一緒に暮らして居た場所だ。

外見は誰が見ても『玲奈』だが、中身は『玲奈』そのものではない。だからと言って此処に遣って来たレイナを別の女性として扱い、区別が出来るほど器用でも無ければ自信も持てなかった。

正直、この場からレイナが一秒でも早く立ち去って欲しいと願ってしまった。彼女の頼み事等冷静に聞いてなど居られるような穏や

かな心理状態ではなかったし、仮に聞けたとしても、今後の任務に何らかの支障を来たして、まともに続けられなくなるだろうと言う予感さえしていた。冷たいようではあるが、何も聞かずに此処は速やかに引き取って欲しいと願ってしまう。

「不法侵入で捕まりたくないければ……」

そこまで言うと、今度は岬が言葉を詰まらせた。思わず掴んでいた彼女の右腕をぱつと離す。

「なっ、なんて格好だよっ！」

岬は真つ赤になってレイナから顔を背けた。

彼女は膝上まである白いニーソックスに、白いフリルの付いた膝丈メイド用エプロンしか他に何も身に纏っていないかったからだ。

「あ、あの、こ、これは……その本に……」

レイナは赤面してはにかみながら小声で答える。

「本？ その本？ って、ええっ？」

レイナの視線の先を辿ると、ガラステーブルの上に一冊の雑誌が置いてあった。表紙には彼女と同じ姿でポーズをとっているグラビアアイドルが写っている。それは先日同僚の香川が置き忘れて行った男性雑誌だった。

どうやらレイナは岬の気を惹こうとして真似をしたらしい。岬はチラリと横目でレイナの姿を盗み見て肩を落とした。

これが『レイナ』の遣り方か？ 自分の相談を聞いて貰う為のサービスだとしても言うのだろうか？ 男の情欲の部分を知っているレイナだからの行動だろうが、それにまんまと嵌められそうになり、厭な気分になってしまった。意識するまいとして冷静を装おうとすればするほど逆効果になる。却ってレイナのセクシーな肢体を意識してしまい、余計に自分がどうかなってしまいそうだ。

心臓が激しく鼓動する。必死になって自制心を呼び起こそうとするのだが、思うようにはいかない。

已む無く岬は黙ってレイナに背を向けると、足早に別室へと消えて行った。

ドアを閉めると、そのまま背中からドアに凭れ掛かる。上気した顔を左手で拭くと、酸欠を起こしたように口を開けて全身で大きく呼吸して、乱れた息を整えようと眼を閉じた。

このままレイナの罫に嵌るのも悪くはないと思い始めている自分が情けない。何より状況を手放しで喜べられるほど、岬の立場が単純では無かったからだ。

クラブ内でのレイナを遠くから『監視』と言う名目で見詰めていたしかし、任務とは言えそれだけで心の奥深くに閉まっておいた、亡くなった筈の『玲奈』が厭が応にも蘇って来る……ある意味、それは岬にとって残酷でしかない。

なのに『彼女』は目の前で『他人の妻』として現れた。やっとの思いで癒え掛けた傷痕を、鋭利な刃物で抉られているのと同じだ。冷静で居られる方がどうかしている。

逢って間が無かった頃、レイナは岬に興味が無い素振りを見せていた。興味が無いのであれば、何故こうして目の前に姿を現してくれるのか？ 何故、こும்彼女と関らなければならぬのか……？

岬は無力感を覚えて空を仰いだ。

一人取り残されてしまったレイナは、岬が消えた部屋のドアを見詰めて呆然と立ち尽くしていた。

ドアから視線を逸らせると、先程の雑誌に移す。やはり自分には似合わない格好だったのだろうか？ それとも岬の趣味を読み違えて、岬の機嫌を損ねてしまったのだろうか？ 心細さを感じながら、レイナは岬が消えて行ったドアを切なそうにじっと見詰めた。

唐突にドアが開き、中から岬が女性の衣服を腕に掛けて戻って来た。

「これに着替えて、さっさと出てってくれ」

岬はレイナと視線を合わせないようにして素っ気無く言い放つと、親指を立てて自分がたった今出て来た部屋を指した。その部屋で持

つて来た着替えを身に着けると言っているのだ。

「厭」

岬の剣幕に飲まれそうになるが、レイナは辛うじて踏み止まる。

「聞えなかったのか？ 俺は出て行けと言っているんだ。グズグズしているよ……」

「していると、どうするのよ？」

レイナは岬を挑発するように睨み付ける。

売り言葉に買い言葉ではあるが、岬はレイナの思いも依らなかつた反抗的な態度にカツとなった。

『玲奈』が亡くなった後も岬は二人で過ごしたこのマンションから離れようとはしなかった。

最初のうちは彼女の死がまだ受け入れられず、悪夢だと思いつむ事で現実からの逃避を繰り返していた。酒に溺れ、薬物にも手を出した岬だったが、玲奈への想いが逆にギリギリの処で荒んだ岬を踏み留めていた。

マンションを手放して他へ越す事も考えてみてはどうかと同僚達から勧められたのだが、まだ岬には『玲奈』との想いに区切りを付けるまでには至っておらず、決心して離れる勇氣さえ持ち合わせてはいなかった。

『お前が彼女を忘れられないでいるのは判る。忘れなくていい。いや、絶対に忘れるな……だがな？ お前にはまだこれからがある。』

気の毒だが、自宅（じたく）を離れてみてはどうだ？ いつまでも自分から彼女に束縛されようとするなよ』

つい先日、岬の自宅を訪ねて来た同僚の香川から言われた言葉だった。香川は『玲奈』の最期を岬と看取っており、その後の岬の荒んだ生活も総て知っていた。岬を見兼ねての友人としての助言ではあったが、岬は寂しそうに笑って頷くより他に術は無かった。

そんな『玲奈』との場であった自宅に、『玲奈』と全く同じ姿を持つレイナが侵入して来た。レイナの行為は、本人が事情を知らな

かったとは言え、土足で岬の心に踏み込んで来たのに等しい。

「俺は帰れと言ってるんだ！」

「何するの！ きゃっ？」

岬の手が再びレイナの腕を強く掴み、抵抗しようとした拍子にレイナの膝ががくりと折れた。

「危ない！」

咄嗟に抱きかかえようとしたが、精神的ショックからか岬まで足を元をふらつかせてしまった。傍目からは丁度岬が押し倒した格好に見える。

片腕を岬に押え付けられたまま、レイナは怯えて身体を強張らせ、息を飲んで岬を見上げた。振り乱された長い亜麻色の髪が床一面に広がり、まるで絨緞に織り込まれてしまった女神のように見えて、岬の胸がドキリと大きく脈打つ。

「け、怪我は無いか？ あ、あのっ……」

そこまで言い掛けた岬の言葉を、鋭い悲鳴が遮った。

はっとして顔を上げ、声の方を振り向く。

「いやああ！ お兄！ 何してんのよおお！」

「た、環？」

\* \* \*

「ふうー」

環は空になったマグカップをカウンターのテーブルに置くと、大きく息を吐いた。仄かにココアの甘い残り香が、辺りに漂う。

「落ち着いたか？」

すぐ隣に座っていた岬が、大きな手を環の頭にふわりと載せた。

「うん。でも、驚いたあ。お兄が女の人襲っているんだもん」

「ひでー誤解だ」

岬は顔を顰めて視線を逸らすと、心外だと言わんばかりにぼそり

と呟いた。

「だあつてえー、お兄だもん」

環から、しれっとして言い返された岬はムツとなった。

「言うか普通？ 兄貴に向かつて」

「うん」

環の即答に、岬の片方の眉がピクリと反応した。

「にーちゃん、仮にも刑事さんなんですが？」

「それがなにか？」

「く……」

「どしたのお？」

素っ気なく言い放たれて、言い返す言葉さえ見付からない。

「も、いい。勝手にしろ」

納得出来ない言葉ではあったが、別に悪気があつての返事では……ないらしい。いや、無邪気だからこそ始末に終えないのだ。普段自分は妹からそう思われていたのだと知って、岬は余計に落ち込んだ。

「それよかさあ、ねーねーお兄、今の人、玲奈さんでしょ？ 玲奈

さんだよな？ ね、いつ帰って来たの？」

先程答えた岬への素直な感想など別問題だと言わんばかり。環は急にニコニコして猫撫で声で岬に言い寄って来た。掌を返したような環の態度に岬は気後れしてしまう。

相手が妹だからと言っても、ひと回り離れたイマドキの女子中学生だ。話の切り替えや気分転換の速さは、岬よりも遙かに上だ。

「『いつ帰って』って……何言つてんだ？ 彼女が玲奈じゃないって事ぐらい、環だつて判っているよな？」

環は一年前に玲奈の葬儀に出席している。けれど、未だに彼女の死を受け入れられないのか、それともわざと演じているのかは判らないが、時々環は玲奈が旅行か出張にでも行っているような話し方をするのだ。

彼女の『死』を理解して納得するのに岬は何ヶ月も費やした。玲

奈の事を姉以上の身近な存在として見ていた思春期のデリケートな環ならば、事実と向き合うのは尚の事無理なのかも知れない……そう思うと岬は堪らなかつた。

「だって、あの人、玲奈さんでしょ？」

「環」

岬はやんわりと環を諭す。

「あ、そっかあ。お金、もの凄く掛かるけど、バイオノイド手術って方法もあるよね」

「止める環……くどいようだが、玲奈は……彼女はもう居ないんだ」

岬は環の言葉に被せるように少しきつく言った。否定された環の表情が瞬時に強張る。

「そっ……そっくだよね？」

止めた呼吸を解放するように、ゆっくりと環の肩が下がって脱力する。それでも泣き出さなくなったのは、環が成長しているのだと言う『証』なのかも知れない。若しくは月日の時間の流れが、環の心を癒していたか……そのどちらかなのだろう。

気味悪い空気を振り払うように、岬はカウンターの椅子から立ち上がると、対面式のキッチンに回り込み、環の持って来た食材を冷蔵庫に振り分け始めた。

「で、でもね？ 世の中にはそっくりな人が三人以上居るって言うじゃない？」

慌てて環は自分の言葉を補足するよう付け足した。立ち直りが早いのが環の良い所だなど、岬は苦笑する。

「まーだ言つたら。親父に似て頑固だからな……」

「ええ、誰かさんと同じですから」

「……」

まさか言い返して来るとは思わなかつた環に怯んでしまった。尤も、岬に言えた義理では無い。母親は違つが同じ父親を持つ兄妹なのだから。

「そっくり……ねえ。じゃ、環みたいなのも三人以上居るってこと



か？」

岬は買って来た一株のキャベツから数枚を剥がして水洗いをしながら、にやにやと笑った。

「みたいなのは何よ。みたいなのは……でもねえ、うん、どうだろう？」

環はカウンターに顎を載せると、両腕を前に突き出して大きく伸びをする。

「おい」

「うん？」

「ちったあ、飯作るの手伝えよ？」

声を掛けると、きょとんとした返事が返って来た。必要以上にリラックスしている環を岬は嗜める。頼りにしてくれるのは嬉しいが、全面的に頼られてしまうのはキツイ。そろそろ環も簡単な食事くらい出来るようになってもいい頃だ。

「え、だあってえ、環、忙しいもん。宿題あるしい」

環はわざとらしくカウンターテーブルに教科書とノートを広げる。

「此処で出すな。自分の部屋で遣れよ。机があるだろう？」

「嫌。此処がいいの。解らなかつたらセンス居るし」

環はそう言ってニコニコ笑いながら岬を指差す。

「俺？」

つられて自分を指差した。悪い気はしなかったが、何となく環に良いように丸め込まれた気がして、兄としては微妙だ。

「うん」

「どうしてこう……俺の周りには自己主張の激しい女しか居ねえんだ？」

岬はウンザリといった表情でゆっくりと首を横に振った。すかさず環がノートから顔を上げずに『聞えてるし』と突っ込みを入れる。

暫らくすると、辺りには何かを油で揚げている音と、香ばしい匂いが漂って来た。ペンを奔らせていた環のお腹が、自己主張をして

かわいらしく鳴る。

「ん、ね、今日は何？」

待ち切れなくなつて、環はカウンターから対面式キッチンへと身乗り出した。父親が買つて来るスーパ―の惣菜に飽きていたところだ。期待していた久し振りの兄の手料理に、環は瞳を輝かせて嬉しそうに笑つた。

「環の味噌カツ」

「えーっ。環い？」

環は必環以上のリアクションだった。

「つて、どうして環なのよ。失礼ね……そつ、そりゃあ……さ、最近急に一キロ増えちゃったけど、環はまだ標準以下なんだもんねえー。んな事言つてるから涼子さんに振られちゃ……きゃん？」

いきなり岬からカウンター越しに頭を鷲掴みにされて、環は首を竦めた。

「俺は涼子とは付き合つてい・な・い！ つつて、何回も言わせるな」

事実、涼子が一方的に押し掛けていただけだ。涼子には申し訳なかったが、大抵の家事はこなすことが出来る岬にとって、特別に女性の手は必要ない。

「そつムキになる所が怪しいなあ。お兄がそう思っているだけで、涼子さんはマジだったのかもよ？」

「信用無いな？」

「ねえ、キスした？」

「馬あーっ鹿」

溜め息混じりに呟いた。涼子に対して特別な感情を持っている訳では無かったが、かと言って煩わしいとか鬱陶しいとまでは思つた事は無い。

「良いのか？ 俺が他の誰かと本当に付き合つても」

慣れた手付きでキャベツの千切りをしながら意地悪そうに環を見下ろすと、環のテキストを書き写していたペンがピタリと止まった。

「べっ……べえつつに？」

「へえー？ 良いんだ」

動揺を隠し切れずに生返事をした環を、岬は面白がって揶揄った。妹とは言え、実に判り易い単純なヤツだが、環くらいの単純さが今の自分には不足しているのかも知れないなと思ひ、岬は環に気取られないように声を押し殺し、肩を揺らして笑った。

「う、煩いなあ。環は宿題中なのっ。邪魔しないでよあ」

岬が笑ったのに気が付いたのか、環はノートから顔を上げると、ムツとなって口を尖らせた。

「言い出したのは環だろ？」

「ん、もお、しつつこいなあ。お兄は早く晩御飯作るの！」

「はいはい」

「返事は一回なの！」

岬から適当にあしらわれたとでも思ったのだろうか？ 環が機嫌を損ねて膨れっ面になった。

ドアの開く音が聞えて、反射的に岬と環は音のする方へと振り向いた。

岬はレイナを『玲奈』が生前使っていたクローゼットへ案内していた。亡くなつた今でも彼女の物が処分出来ずにそのままになっていた場所だ。レイナはそこで岬から手渡されていた、淡いブルーのダンガリーシャツとジーンズに着替えていた。

ゆつたりと襟を寬げて、ラフに着こなしてみせたレイナの姿に、二人は一瞬言葉を失った。

「わあ、やっぱり玲奈さん！ お兄、玲奈さんだよう」

「あ……ああ」

彼女に見惚れて声が掠れた。クラブのドレスかスーツ姿を見慣れてしまった岬にとっては、今まで想像出来なかつた姿だ。こちらのラフな格好の方が、却って新鮮に見える。普通なら、盛装したドレスかスーツ姿に感動するのではないのだろうか？

岬はこの状況に面喰ってしまった。  
「すごい。やっぱ、良く出来てるー」

どうやら環は、レイナが完全にバイオノイドか何かだと思い込んでいるようだ。岬自身でさえ玲奈が本当に戻って来たのかと錯覚してしまっただから、中学生の環がそう思っても仕方が無い。

彼女の姿を前にして、岬の心は激しく動揺した。他人の空似だと思いたかったのだが、そうは言っても彼女を構成している身体は間違いなく『玲奈』なのだ。

『別の人格を持った、もう一人の玲奈』……物理的蘇生技術が如何に発達したとは言え、施術された本人はもとより、本人を取囲む周囲の精神面でのフォーローは未だ未開発の発展途上だ。

玲奈を蘇生した人物……容疑者であるジェフ・ランディアの目的は、一体何であるのだろうか？

岬の脳裏に焼き付いている、息を引き取った直後の玲奈の姿が呼び起こされる。

既に脳死状態であった彼女が意識的に動かした訳ではなく、単なる筋肉の硬直だと判ってはいたが、玲奈の両手は岬の腕に縋り付くように動いたように見えた。

ただ抱き締めるより他に手の施しようが無かった岬には、それが恐怖に慄き、怯えた『玲奈』の心が叫んでの拳動であったような気がしてならなかった。非理論的な事を事実として捉えるのは、医師にとってあるまじき行為であり、岬自身あつてはならない事だと承知している。だからと言って、喻え本人が望んでの『死』では無かったとしても、一個人の身勝手な目的や感情で蘇生処置を施され、記憶の一部を削り取られてまで再びこの世に戻りたいと、果たして『玲奈』は望んだだろうか？

仕組まれ、意にそぐわぬ使命を負わされたレイナ……

もし、『玲奈』の心と記憶が残っていたのなら『玲奈』はそれでも構わないと承諾しただろうか？ それに、亡くなった玲奈を悼み、心を引き裂かれる想いを味わって、ようやくそれを事実として受け容れた岬達周囲の者の感情はどうなるのだ？

けれど……

岬は眩しそくに眼を細めてレイナの姿を見詰めた。

レイナは今、此処に居る。

手を伸ばそうとすれば、温かい『血』の通った彼女に自分のこの手が届くのだ。『存在』と言う尊い価値より他に勝るものなど皆無…… 喩え……

喩えそれが登録上、抹消デリートされている人間であったとしても。

「出来ている？」

環の言葉に、レイナは二人を交互に見詰めて不思議そうに小首を傾げた。長い亜麻色の髪が肩に掛かり、さらりと流れる。

「あ……い、いや、な、何でも……無い」

岬は自分がレイナに見惚れていたのを隠す為に、わざと顰めっ面をして見せた。

「……」

レイナは岬の気難しそうな表情を見るなり、一瞬だけもの言いたげな切ない表情を浮べたのだが、思い直してくると二人に背を向ける。

「何処へ行く？」

レイナの背に、岬は思わず声を掛けて引き止めてしまった。

「出て行け……帰れ……言ったでしょ？」

「あ、あれはその……」

「お兄、そんなコト言ったの？ ひつどーい！」  
岬が言いよんどんでいると、環からあからさまに非難を浴びせられてしまった。そして環に睨まれて気不味そうに視線を逸らせてしま  
う。

レイナの白い手が、そつとドアのノブに掛かった。

「ま、待てよ」

岬は慌ててレイナを引き止める。

「そつ、その……メシ、まだなんだろ？」

レイナは黙って軽く顎を引いた。

「食って行けよ。口に合うかどうかは保障しないけど」

決して環が非難したからと言う訳ではない。二人きりであれば口に出すのも憚られる言葉だったが、今は環も傍に居る。たったそれだけの事なのに、岬は随分と気持ちが軽くなった。

\* \* \*

リビングでは、環がレイナと意気投合して盛り上がっているらしい。時折、環の弾んだ明るい声が聞えて来る。

ベランダに出た岬は、複雑な表情で煙草に火を点けた。そして一息吐くと、頭上で一面に拡がる星空を見上げながら、過去を振り返るように静かに眼を閉じた。

食事中、岬はレイナに一瞥も投掛ける事はなかった。環がレイナを独り占めしていたせいもあつたが、自分が彼女の存在を意識してしまつてからというもの、まともにレイナを見詰める事が出来なくなつていたからだ。

『情で返り討ちに遭った奴はゴマンと居る』そう言ったジンの言葉を思い出す。そして、自分もその内の一人になるのだろうかと思ひ、気が重くなつてしまった。

不安を振り払うように、煙草の煙を溜息と共に吐き棄てる。

「ねーえ、お兄もこっちに来なよ？」

ベランダに通じている窓から、環がひよこつと顔を覗かせた。部屋奥にはまだ食べ終えていないレイナが、慣れない箸に苦労している最中だ。生前の玲奈も箸が苦手だった。こうして見ていると、仕草まで全く同じだ。

言葉を交わさなければ、彼女が生前の『玲奈』だと言っても誰も信じて疑わないだろう。そして、彼女をこのまま『玲奈』として匿い、自分の許に居させる事も容易いのでは……と、邪まな考えさえをも抱いてしまう。

「ん……良いよ、俺は……」

フェンスに凭れ掛かると、煙を環の方に向けないようにして顔を背けた。こんな所で無駄に時間を費やしてしまい、素直に環達の会話に参加する事が出来ない自分が情け無いが、今はまだ自分には無理だなと思ってしまう。

環は、にこにこしながらベランダに出て来た。そして岬の横に並ぶと、フェンスに凭れて眼前に広がる市街の夜景を眺める。

「あんだあ？ やけに嬉しそうじゃないか」

携帯用の灰皿に、まだ半分しか吸っていない煙草をそつと片付けた。

「うん」

環はご機嫌だ。

「玲奈さん、記憶が殆ど無くって、環達の事を覚えていないんだって。チョツと悲しいけど……でも、以前の玲奈さんそっくりだよ。やっぱ、良く出来てる。お兄が玲奈さん造るのを頼んだんでしょ？ 環をびっくりさせようと思って」

「いや……」

岬は否定しかけた言葉を飲み込んだ。

玲奈の死亡した状態を知らない環だからこそ言える言葉だ。頭部を撃ち抜かれた彼女は、通常手段での移植手術によるバイオノイドでも、電子制御のダミーである人造人間のサイバノイドにも換装出

来る状態ではなかった。今の形成技術を以てしても可能性は限りなくゼロに近い。レイナが此処に居られるのは、違法措置の蘇生技術があつてこそその存在なのだ。

「え？」

「い、いや。何でも無い」

岬の言葉に反応しかけた環をうやむやにはぐらかしたが、環は軽く小首を傾げただけだった。

「本当、びっくりしちやつたあ」

環はレイナがバイオノイドだと信じて疑つてはいないようだ。バイオノイドは本人の体組織の殆どを培養して使用する為、移植された部分にはやがて血管が通つて来る。人工的に創り出されたサイバノイドと違つて、外見上は生身の人間と殆ど区別が付かなくなるのだ。怪我をすれば血も出るし、勿論病気も患う。

多くのバイオノイドを検証して来た岬だからこそ、レイナがバイオノイドでは無いと判断出来るのだが、身近にそういった者がいない環にとっては、区別する事さえ不可能だろう。

岬は半ば呆れて環を見下ろした。

今更ではあるが、自分の妹だとは言え、つくづく環は人の話を聴かない奴だなと思つた。そう言えば、環とよく似た人物が居たな？と、芹澤を思い出す。今頃は芹澤が大きなクシャミをしていることだろう。

「はい、お兄は左利きだから、右手出してえー？」

「あん？」

岬は環の言われた通りに右手を出した。

「これ……環がさつき作つたの。旧世紀にも流行っていたらしいけど。今ね、環の学校で、これが自然に解けたら願いが叶うって言われて、作るの流行っているんだあー」

環は岬の右手に組み紐を結んだ。

「玲奈さんにはピンク色を作つてあげたの。でね、これはその色違いでお揃いな。お兄は綺麗なブルーだよ」



環から邪心の無いクリクリとした大きな眼で顔を覗き込まれてしまい、岬は落ち着きを失くして戸惑った。

環とは腹違いの兄妹ではあるが、二人は余り似てはいないし、一周りも歳が離れている。妹だとは言え、保護者側に立つ岬にとって、兄と呼んで慕ってくれる環の存在でどれだけ心強く支えられている事か。素直にレイナと自分の心配をしてくれる環の心遣いが嬉しくて、擦ったかった。

「どつりでいつもより食うのが遅いと思ったら……これを作っていたのか」

今更、彼女は『玲奈』では無いのだと言っても、きっと信じては貰えない気がする。

尤も『違法処置の蘇生術式』の存在自体、一般人である環に知られてはならない極秘情報である。それでも言えたと仮定しても、環にどう説明すれば理解して貰えるのだろうか？ 事実、岬でさえ心の整理が着かず混乱しているのだから。

「玲奈さん、早く記憶が戻るといいね？」

「あ？ ああ……そうだな」

岬は曖昧に返事を濁した。真実を伝えて、今の環の笑顔を奪う気にもなれないし、そのうち環も気が付く時が来るだろうと思ったからだ。

「環」

「何いー？」

暢気な返事が返って来た。

「その……彼女と話があるから」

「うん。判ってるよ。けど、駄目だなあ〜『彼女』だなんて、余所々しいぞ」

環は偉そうに腰に左手を当てて仁王立ちすると、右手の人差し指を立てて、チツチと指を振って見せた。

## 第9話 淡い幻影

「真つ直ぐ親父の所へ帰れよ？」

「ほーい。つても、すぐ下の階じゃん。ん、じゃあねえ、姉さん」

環は機嫌よく返事をして鞆を手にすると、笑顔でレイナに手を振った。

「アイツ……」

バタバタと慌しく玄関を出て行った環の行儀の悪さに岬は軽く顔を顰めたが、その眼はどこか嬉しそうだ。環の屈託の無い笑顔を見るのは、本当に久し振りだったからだ。

「姉……さん？」

部屋を出て行った環の後姿を見送たレイナは、環の言葉に呆然とした。

『姉さん』と環から呼ばれて、不思議と否定する気も厭な気分にもならなかった。それよりも、何かとても大切な事を思い出せそうな気がしてもどかしくなる。

「気にするな。環の勘違いだ」

岬はトレーに食器を載せて片付けながら、背中でレイナの困惑している様子を察して釘を刺すように言い放った。

レイナは、意地悪く聞えた岬の言葉に振り向いたのだが、岬は既にテーブルから離れてしまった後だった。

「で？ 聴こうか？ 『用件』とやらを」

片付けが終わわり、レイナが座っているソファと反対側のソファに身体を沈めると、岬は煙草に火を点けた。

最初は彼女の言う事など、絶対に聞く耳を持つものかと思っていた岬だったのだが、行き掛かり上とは言え、帰ろうとしていたレイナを自分が引き留めてしまったのだ。それは詰まり、岬の方からレイナの話の聞いて遣ろうと言った意味合いに他ならない。

二人の間を白い煙が漂い、軽くレイナが咳き込んだ。呼吸器官が弱いのは生前の玲奈と同じだ。

「環ちゃんが居る時はあぁやって外で吸っているのに、私には遠慮無いのね？」

「当たり前だ。俺が招いた客じゃ無い」

ムツとして言い返した。

突き放すような言い方をした自分の言葉の冷たさに、岬自身が驚いてしまう。

もう一度逢いたいと願っても叶わない望みが、今この場で叶えられていると言うのに、今の岬には少しも嬉しい事だとは思えなかった。

捜査上、容疑者として浮上しているレイナが自分の視界に入る度に、胸が苦しくなって堪らなかった。普段から仕事とプライベートを切り離す癖を持っていた岬だからこそ、今までレイナと接する事が可能だったのだ。『任務』だと思えば、湧き上がって止まない個人的な感情でさえどうにか割り切る事が可能だった。

だがその線引きの維持も、彼女がここに遣って来た事で岬の心の中にある均衡が崩れてしまった。目の前に居るレイナに対して、八つ当たりのような感情さえ芽生えて苛立ってしまう。

レイナは岬の苛立ちを感じて俯いた。

「そうね。招かねざる者ですものね？ でも……その前に、貴方にお礼が言いたくて」

「礼？」

「この前、助けて連れ出して貰ったの……まだお礼を言っていないかったわ」

レイナは訝る岬の表情に気圧されながら、おずおずと頭を下げた。

\* \* \*

『こんな所まで誰も来やしないさあ、なあ？』

「や……止めてください！ ひ、人を呼びますよ？」

クラブ内で泥酔した男は、誰も居ないVIPルームへ無理矢理レイナを押し込めようと、彼女を壁際に追い立てて身体を密着させて来た。酒臭い男の息と体臭に、思わず吐き気をもよおす。

「知っているんだぜえ？ アンタがココで、殺された上客を相手にしていたのをよお」

「な……ですって？」

男の言葉にレイナは驚いて男を見上げた。眼鏡を掛けた三十代後半の冴えない泥酔男は、レイナと視線を合わせてヘラヘラと笑った。「おかしいと思わないか？ アンタと寝た男は必ず死んでるんだ。

しかも今噂になってる大型の獣に襲われてな。俺もココの取材に来て居なかつたら気付いたりなんかするもんかよ。これ結構面白いネタになんじゃねーのか？」

「一体なんのこと？ つあ！」

男の片手が、大きく開いたドレスの胸の谷間に滑り込み、レイナの身体が意志とは関係なく大きく跳ねた。

「ああ！ 止めて！」

レイナは必死になって男の手から逃れようともがいた。揉み合いになった拍子にドレスを肩口から引き裂かれ、足取りを乱して左右のハイヒールが脱落する。必死になって抵抗するが、所詮腕力では敵わない。

「幾らでこのネタ買ってくれますう？ 現金じゃなくても、他にアンタなら払えるモノがあるよなあー？ ええ？」

「い……厭あ！」

レイナは激しく首を振って逃げ出そうとするが、既に身体は壁に貼り付けられて逃げ出す術がない。助けを呼ぼうにもVIPルーム付近では、一般はおろかスタッフ関係者ですら迂闊に近寄れない場所だ。恐らく声を限りに叫んでも誰も気付いては貰えないだろう。

レイナの身体に絡み付くように男の手が伸びて来る。

悲しい絶望感がレイナを襲った。

『お客さん？ 通路ではご遠慮願えませんか？』

『ああ？ なんだあ？』

長い髪を振り乱して涙を浮かべたレイナの瞳に、ホストである岬の姿が映っていた。

突然背後から掛けられた声に、彼女を襲っていた男がピタリと動きを止めた。そしてゆっくりと声の方を振り返り、胡散臭そうに睨み付ける。

『ははは……誰かと思えば店のヤツか……おいお前！ 暫らく此処に人が来ないよう、見張ってる！』

タキシード姿の岬を見るなり、男は顎を仰け反らせてせせら笑った。そして自分のベルトに片手を伸ばし、音を立てて緩め始める。

『なにポーっと思ってるんだよ？ 見世物じゃねーぞ？ 客の言う事が聞けないってーのかよ？ ええ？ おい！』

返事どころか無表情で人形のように立ち尽くす岬を気味悪く思った男は、動かしていた手を止めた。そして早口で捲し立ると懐から数枚の紙幣を取り出し、ひらひらと振って見せびらかす。

紙幣を眼に留めた岬は愛想笑いを浮かべると、客の言い分に折れて金を受け取るうという素振りでも男の前に歩み寄った。

レイナは岬の意識が自分に全く向けられてはいない事に気付いてぞつとする。このままでは岬は男から金を受け取り、自分はこの男に買い取られて弄ばれてしまうのだと思った。

『い……や、来ないで』

レイナは、歩み寄る岬に涙ながらに訴えて、小刻みに首を振った。岬を薬殺しようとして以降、ずっと岬の事を避け続けていたレイナにとっては、岬も他の男達と大差は無い存在だ。殺そうと殺意を抱いた岬に対して救いを求めても、この男の腕から助けて貰えるなどと言う虫のいい話が今更通用するとは思えない。そして岬が男から金を受け取った瞬間、自分はこの男の慰み物になってしまうのだと思った。

今まで誰からも助けて貰えはしなかった。猛り狂った男達は、そ

の滾る欲望の総てを白いレイナの肢体に注ぎ終えるまで放してはくれない。気が狂いそうなほど長くて辛い時間がまた遣って来るのかと諦めに似た恐怖を感じ、声を押し殺して噉り泣く。

男の目の前で岬が歩を止めた。

『どう言う意味でしょうか？』

『はあ？ 決まってらあ！ チップを遣るって言ってるんだよ！』

『困りましたね』

『俺がこの女を載っている間、お前に見張りをさせて遣ろうって…』

…』

そこまでだった。

急に口を閉ざした男の鳩尾には、岬の拳が深々と埋められていた。男は白目を剥いて口から泡を吹き、糸の切れた操り人形のようにどさりとその場に崩折れる。

『ざけんな』

墮とした男を岬は冷ややかに見下ろすと、鋭く舌打ちをして乱暴に吐き棄てた。

レイナは何が起こったのか理解出来ず、一瞬で墮とされた男と岬を信じられないとも言つように交互に見詰めて立ち尽くす。

『そのドアを開けて貰えないか？』

『は？ はい……』

岬の声に我に返ると、レイナは慌てて傍のルームキーに暗証番号を入力した。そして二人で伸びた男を引き摺って、部屋の中に閉じ込める。

『これでよし』

そう言って一息吐くと、岬は笑顔を浮かべて振り返った。

『……』

レイナはどうすればいいのか判らず、岬に見詰められて俯いてしまった。

あのまま岬が金を受け取り、自分は売られてしまうのだと信じて疑わなかった。自分が岬に対して酷い思い込みをしていたのではな

いかと思い、そんな自分が恥ずかしく思えたからだ。

『あの……さ、時間あるかな？』

『え？』

『ああ、無くてもいいや。ちょっと付き合って？』

岬はレイナの手を捕った。

やや強引ではあったが、あのまま酔った男に強請られるより、岬に従う方が遙かにマシだと彼女は思った。何より、岬は自分を助けてくれたのだ。

レイナは岬に導かれるまま、彼の車に乗せられて夜のクラブを後にした。

『遣っちゃまったな』

『え？』

『職場放棄。戻るタイミングをミスったらヤバイだろ？』

『そう言う岬だったのだが、困った素振りさえ全く窺え無い。』

『何処へ連れて行くの？』

『見せたいものがあるんだ』

そう言っつて岬がレイナを連れて来た場所は、中心街から離れた小高い山の展望台だった。

色とりどりの煌びやかなネオンが瞬き、幾つものライトに照らされた高層ビルが林立して夜の街を真昼のように変えている。さながら巨大な光の要塞のようだった。

『……きれい』

展望台の柵に両手を掛け、身を乗り出したレイナの唇が解けて、思わず言葉が漏れた。しかし、あの美しいと思った光の中で今まで自分は何をしていたのか……そう思うとレイナの胸は苦しくなる。

一方岬は、独りで胸の内に何かを抱え込んでいるのか、見事な夜景を眼の前にしても、細い柳眉を寄せて辛そうな表情を浮かべている彼女の横顔を見て心を痛めた。

外に連れ出せば幾分かは彼女の気持ちも晴れるだろうと思っつて遣

った事なのだが、岬の意に反して、彼女はいつも以上に何かに怯えているように見えた。彼女の笑顔が見たいばかりに連れ出してしまったのが却って逆効果ではなかったのかと気に病んでしまう。

『君は……笑ったりしないんだな？ それともこんな場所は好きじやなかった？』

『え？』

『何か怯えて思い詰めたような眼をしている』

自分の執った行動が間違いで無かったのだと思いたくて、そして彼女の気持ちを知りたくて、思わずそんな不躰な言葉が口を突いてしまった。

『そう？ ……こんなに綺麗な場所があるなんて知らなかったわ。でも……でもどうして？』

そよぐ風に長い髪を弄ばれながら、レイナは徐に顔を上げて岬を見詰める。思いも寄らない一言に、射抜かれてしまったのだろうか？ 彼女の眼には今にも毀れ落ちそうな涙が揺らめいていた。

『その……詰まり、笑顔を見た事が無いから』

『笑わないといけないかしら？』

『いや……』

彼女の眼から毀れ落ちる涙を眼にしてしまった岬は、聞くべき場所とタイミングをミスったなと後悔し、言葉に詰まってしまった。

肌寒い夜風に、先ほどの客から引き裂かれた細い肩が晒されていると気付いた岬は、黙って自分の上着を彼女の肩に羽織らせる。

レイナは一瞬身を硬くして身構えたのだが、岬からは何の危害も受けないと知って安堵したのか、黙って岬の厚意を受け容れた。

体格差が在り過ぎる岬の上着を着たレイナを見て、思わず吹き出しそうになった岬だったが、この時でさえ、彼女は微笑どころかクスリとも笑ったりはしなかった。

『踊るのは苦手？』

場の空気が一層気味なくなるのを避けたかった岬は、彼女が掴んでいた手摺から、やや強引に白いその手を掬い取った。



他のホステスからの紹介を受けても、レイナは客から何度もダンスの誘いを断っていた。時には断った客から心無い罵声を浴びせられていたのを岬は知っている。

『踊らないのじゃないわ。踊れないの……』

『おいで』

岬はレイナの手を軽く引き寄せ、彼女は驚いて岬を見上げた。

『大丈夫。左手は俺の肩……そう、肘と胸を張って？』

『止して。私は踊れないって言って……あ？』

尻込みするレイナの右手を絡めて身体を引き寄せると、岬は彼女の言葉を聞き流した。

周囲には人気が無く、寂れた展望台の仄かな外灯と月明かりに照らされ、美しい街の夜景を背景にして、レイナは岬のリードにいつの間にか惹き込まれて行った

\* \* \*

「その件はもう気にしないでくれ。で？ 此処に来たのは？」

岬はレイナを急かした。話を切り出せずにいるレイナに痺れを切らせているのが見え々の態度だ。そんな状況で話を切り出せば、岬を猶怒らせてしまいそうな気がして、レイナは言い出せずに口籠る。

息苦しい時間が続いた後、やがてレイナが思い切ったように顔を上げた。

「また今度に……」

「次は無いぞ？」

言い掛けたレイナの言葉を、岬はきっぱりと遮った。

「周りがどれだけ君に対して甘いかは、君を見ていれば判る。けど、俺まで一緒にしないでくれ。話す気が無くなったのならさっさと帰ってくれ。もう二度と此処へは来るな」

びっくりとレイナの肩が上がった。切れ長の眼が一層大きく見開か

れ、その怯えた瞳には、厳しい表情を浮べた岬が映っている。

「環から聞いた。君は昔の記憶を失っているそうじゃないか。大方、初対面だと思っていた俺が君を知っていた事を不思議に思っ、此処まで来たのじゃないのか？」

レイナは押し黙ると、ゆっくりと頂垂れる。

「凶星か。馬鹿々しい。過去の記憶なんか在った所で誰だっ、忘れるものさ。覚えていなくても良いし、却って思い出さない方が良い事だっ、ある。そんな過去の記憶に束縛されるよりも、今の自分をもっと大切にしろよ」

まるで岬が自分自身に対して言い聞かせているようにも取れる言葉だった。そんな岬をレイナは悲しそうな眼で見上げた。

目の前に居るこの男が、あの時助けて強引に自分を外へと連れ出してくれた人物と同じだとは思えなかった。岬に優しくされ、甘えてしまった自分がいけなかったのだろうか？ そう思うと尚更相談したい話のきっかけが掴めない。

重苦しい空気が室内を満たした。

「話はそれだけか？ ……送って行こう」

手早く煙草を灰皿で揉消すと、岬はソファから立ち上がってレイナに背を向けた。

「！」

いきなり背後から細い腕が伸びて、背中に女性特有の柔らかで温かい感触が伝わった。

「な、何……を？」

岬の胸の鼓動が速くなる。

「知っているのなら教えて？ 私の事を！」

「ばっ、馬鹿言っ、なよ？ 君はあの時『レイナ』だと自分で言ったじゃないか」

「違う！ そうじゃないの……いえ、それもあるのだけれど……私、時々記憶が飛ぶの。まるで薬を遣っている時みたいに。気が付けば

いつも……いつも血の匂いがするの。私の身体から。どうして？  
ねえ、貴方なら何か知っていない？ 医者なのでしょう？ 私の事を知っているのでしょうか？」

レイナの身体が震えている。岬は不安に押し潰されそうになって怯えているレイナの胸の内を察した。彼女が時折覚醒剤らしい薬を使用している事も既に承知している。ならば薬に拠る副作用なのではないかと思った。

「ト……トリップだろう？ 薬をしている時の。常用していれば薬を使用していなくても何かのきっかけて記憶が飛んだりする。ましてや君はあのミューズ製薬の蘇生液常用者だ。麻薬を併用していれば副作用で更に症状は酷くなる。血の匂いも症状の一つじゃないのか？」

「違うわ。薬は……していないとは言い切れないけれど……でも、本当に……本当に血の匂いが残っているの。昨日は匂いだけじゃなかった。気が付けば私、全身が血で真っ赤だった。怖くて……怖くて何度もシャワーで流したわ。けど、何度流しても血の匂いが消えない。消えないのよ！」

岬を背後から抱き締めるレイナの両腕に力が籠る。

岬は、レイナがこの部屋を訪れた時、きつい血の匂いがしていらいたのを思い出した。

「昨日？ 全身が血で真っ赤……って……」

岬は呻るように呟いた。

「自分の血じゃないわ。私は何処も怪我をしていないもの！ 別の人の……誰かの血なのよ！」

「昨日……血が……って、どういう事だ？」

岬は背後からレイナに抱き締められたまま、動けなくなってしまった。

その日は桐嶋署に盗難車両が突入し、多数の死亡者を出した事件があった日だ。

「助けて……助けて！ 私、血の匂いが……血の味が堪らなく甘く

感じるの……おかしいでしょう？　おかしいわよね？　普通じゃないのよ？　わ、私……私、自分が何だか別の生き物になってしまっ  
そうで怖い。怖いの！」

背後から縋り付くように抱き付いているレイナの腕を解こうとしていた岬の動きが止まった。予想さえしなかった彼女の言葉に、驚きと緊張で呼吸が停まる。

違法行為に及んだとは言え、ジエフは『玲奈』の蘇生に成功した。温もりを持って岬を抱き締めている『玲奈』の身体を『レイナ』として生き返らせたのだ。黄泉から現世へと彼女を導き、連れ戻せたのはジエフだ。岬では無い。

そして、岬にはそれを真似する事さえ敵わないのだ。

喩えジエフ以上に『玲奈』を愛していたのだとしても。

「き、君の……君の彼に訊けば済む事だろう？　外科の俺には専門外だ。訊ねる相手を間違えている。それに……」

そこまで言うと、岬は力無く項垂れて視線を落とした。竦められていた岬の肩が、ゆっくりと脱力して行く。

「それに、君にはジエフが居るじゃないか。こんな俺でなくても……アイツの方が俺よりももっと……もっと優秀だ」

悔しいが、それは紛れも無い事実だ。

「そんな事訊けない。訊ける筈が無いわ。あの人では駄目……駄目なのよ！」

レイナは岬を抱き締めたまま、頻りに首を振る。

「あいつには訊けなくても、俺には訊けるのか？」

岬はレイナの腕をそつと解き、ゆっくりと彼女に向き直った。そして片手で彼女の首を撫でるようにして顔を反らせる。岬から触れられたレイナはビクリと肩を跳ね上げると、眼を細める。

「ええ……そ、そうよ」

レイナの声が震えた。

岬の掌に、レイナは軽く眼を閉じて甘えるように頬を軽く預けて来た。岬がその手を滑らせて頤を引くと、レイナはされるままに上を向き、岬の首に腕を絡めて来る。

岬の眼には、首のチョーカーに嵌められている赤い宝石が、レイナの心を映しているように怪しい光を帯びて輝いているのが映っている。

レイナは岬の首に絡めている右手で、左の袖口から細いアイスピックをそつと取り出すと、岬に気付かれないように逆手で握った。鋭い切っ先を岬の延髄に向けて、正確に狙っている。レイナは総てを委ねたように見せ掛けて岬を安心させ、隙を突いて息の根を止めようとしているのだ。

けれど岬の視界には、先程から窓ガラスに自分とレイナの姿が映っていた。今、彼女が自分に対して何をしようとしているのかが丸見えだ。

『何故?』と言う疑問はこの際岬の頭には浮かばなかった。自分に手を下そうとしている彼女の姿で、答えは十分導き出されている。一度レイナは岬に薬を飲まそうとして失敗しているのだ。岬とレイナが出会った事を、あのジェフが勘付かない筈は無い。こうして強硬手段に出るのが遅いくらいに思えたが、直接自分からは手を下さず、敢えてレイナを送り込むよう仕向けたジェフの狡猾さが腹立たしい。

願わくはこのままレイナを攫い、『玲奈』の記憶が戻ってくればと、儚い望みを抱きもした。

しかし……

「都合の好い話だ」

彼女は『レイナ』なのだ。岬の『玲奈』とは違う。『玲奈』であれば勝手に人の家に入り込んだり、色気を漂わせて油断させ、こうして命を狙ったりなどしない。

我儘で、狡猾で計算高くて……

精神面で、生前の玲奈には全く見られなかった事だ。生真面目で

常に直球勝負しか仕掛けられなかった素直な『玲奈』とはまるで違う。

それでも不思議だった。今、岬の命を狙っているレイナが、生前の『玲奈』よりも現実的に思っているからだ。しかも自分の目の前に居るレイナは『玲奈』の身体でもある。

自分の知らない『彼女』が居る……岬は躊躇いながら、彼女の肩をそっと引き寄せた。

「！」

一瞬、レイナの『気』が乱れた。

「気付いて……いるのでしょうか？」

「なにが？」

今にも泣き出しそうな顔をするレイナに対し、岬は至って静かに答えた。

「どうして気付かない振りをするの？」

「さあ……どうしてかな？」

意味深なレイナの問い掛けに、岬は穏やかに笑って腕の中の彼女を見詰める。

「……さき」

レイナの息が大きく乱れ、声が掠れた。

アイスピックを持つ手が震え、明るい栗色の瞳が大きく潤んだかと思うと、大粒の涙がはらはらと零れる。

明らかに岬はレイナの殺意を察知している。なのに取り押さえようと、逃げ出そうともしない。それどころか、レイナの畏れに自分から敢えて嵌るうとしているようにしか思えないのだ。

「綺麗な石だ」

その言葉にレイナはドキリとして思わず手にしたアイスピックを落しそうになった。

岬はレイナの一瞬の変化を見逃さなかったが、猶も平然として続けた。

「彼からのプレゼント？」

「え……ええ」

それはレイナを繋ぎ止める鎖と同じであった。レイナ自身、チヨーカーはネックレスとは違い、まるで動物の首輪のように見えて好きではない。

「聖女の血と呼ばれているレディ・ブラッドだろ？　これ程鮮やかなカラーは珍しいな」

「よ、良く、知っているのね。この石がレディ・ブラッドだと言い当てたのは貴方が初めてよ？　皆ルビーか何かだと間違えるのに」「そりやどうも。もの凄く稀少だと聞いていたから興味があつてね。それ、いつも肌身離さず着けているんだな。ちよつと見せてくれないか？」

岬はチヨーカーに手を伸ばそうとした。

「あ……ま、待って？　これは……」

まるで何もかもが岬にはお見通しなのかと思えるくらいだった。

レイナは素早くアイスピックを袖に戻すと、たった今自分が何を遣ろうとしていたのかと我に帰り、事の重大さに怯えて身震いする。

レイナは岬に絡めていた両腕を解き、自分の胸元に引き付けて身体を引こうとするのだが、背に岬が手を廻している為に離れられない。それでも岬の胸に手を押し当てて、少しでも身体を離そうと、僅かな力で抵抗した。

「外せない。外れないの」

俯いて、ゆっくりと首を横に振る。

「何故？」

「た、大切な……物だから」

「そうか。悪かったな」

岬は腕を緩めて、彼女を解放した。チヨーカーに触れようとした刹那、彼女から殺気が一瞬で消えた。そして、あの怯えよう。チヨーカーが彼女への単なる装飾品ではなく、監視機能も併用しているのだと確信を持った。何の為の監視であるのかは、彼女の身体に残っている疵痕を見ればある程度の想像はつく。疵は恐らく、

彼女が幾度と無くジェフから逃れようと試みて受けたものなのだろう。

「岬……わ、私……」

それ以上、レイナは何も言い出せなくなってしまうた。思い詰めたような硬い表情で彼女は岬を見詰めるだけだ。

「俺に……俺にどうしろと？」

物言わぬレイナに大きく心を掻き乱される。縋り付くような視線が、岬に自分を助けて欲しいと訴え掛けているように思えてならない。

唐突に岬の携帯が鳴った。呼び出し音だけで相手がジンだと判った。余りにもタイミングが良過ぎて、何処かで自分が監視されているように思えてならない。岬はそれが気に入らなくて、たちまち不機嫌になった。こうなると返事さえ億劫になって、呼び出しに応じようという気にもなくなる。

岬は携帯を取り出すと、応対せずに着信を切る。

「クラブまで送るよ」

岬はレイナの返事を待たず、一方的にそう言った。

\* \* \*

岬が潜入捜査を始めて半月以上経過していたが、ラジエンドラでは依然として組織が動く気配は無かった。どうやらFCIが、単なる捨て駒だと思っていた売人のラルを検挙した事が仇になってしまつたらしく、連中が捜査に勘付き、麻薬や臓器の売買取引が場所を変えて行われ始めたと言う不名誉な事実が発覚したからだ。

FCIは一旦ラジエンドラから手を引くよう岬に指示を下していた。

「じゃ、元気で」



岬は運転席から作り笑いをして見せる。

「本当に、もう？」

「ああ。君とは……これでお別れだ」

岬は未だにレイナに後ろ髪を惹かれている自分に気付き、彼女から視線を逸らせた。

レイナに夫が居ても、それが何だと言うのだろうか。夫の指示で、持てない殺意を無理矢理抱えて仕方なく岬を訪ねて来たのだろうか、その一方で、彼女に救い出して欲しいと思う気持ちが在ったのは間違いない。彼女が心を開こうとしているのに、自分は一体何を躊躇う必要があるのかと。

しかし、それは岬個人の問題だ。レイナが捜査上の容疑者である以上、私情を交える訳にはいかない。

「これから、どうするの？」

「その気があれば救急センターでも何処へでも行くさ。何も君が俺なんかの心配をする必要なんて無……い」

レイナの顔を見上げた岬は、彼女の今にも泣き出しそうな表情に、ぐっと胸を掴まれた気分になって言葉に詰まってしまい、それ以上言い出せなくなってしまうた。

岬は堪らなくなつてレイナから視線を逸らす。思わずハンドルを握った左手に力が籠る。このまま視線を合わせ続ければ離れられなくなりそうで、自分自身が怖くなっている。

「チ力達に宜しく」

岬は取って付けたようにそう言うと、軽く左手を挙げた。

発進のウインカーを出してアクセルを踏むと、車は難なく他の車の流れに合流して走り出し、ドアミラーに映った自分を見送るレイナの姿が、見る々小さくなって行った。

本当にこれで良かったのだろうか……？

何度も自問してみるのだが、納得出来ない別れだった。恐らく、次に彼女と出会うのは、彼女を逮捕する側としての自分なのだろう。

岬はジンに携帯で邪魔をされてから、ずっと応答していなかった事を思い出した。慌ててカーナビに携帯を繋いで掛け直す。

「今頃出て来やがって！ 一体何をしていたんだ！ 馬鹿野郎！」  
ナビに映ったジンは色をなして噛付いた。

「小言は後にしろ。で？ 何だつて？」

岬は敢えて落ち着き払って言った。慣れた手付きで煙草を銜える。ジンは岬の態度が気に食わないと言った表情を浮べて眉間に皺を寄せた。

「詳細は不明だ。来訪している外相の暗殺目的か、組織間の小競り合いか……数分前、ラジエンドラ館内で銃撃戦と思われる発砲があったと通報が入った。事前に臓器売買の取引があると聞いて、芹澤警部達が現場で張り込みしていた」

「何っ？」

思わずブレーキを踏み込んだ。タイヤが悲鳴を上げて車体が軋む。後続車が、急に減速した岬の車へ間に合わずに追突し、同様に次々と玉突き事故が起こった。彼方此方で怒声とクラクションが入り乱れる。

「つてえ……」

頸椎を片手で押えて呻きながら、岬は起動したエアバッグを掻き分けた。後ろから何台も追突されて、岬の車は歩道脇に設置されていた信号機の支柱にぶつかり停止している。車体の後部は勿論だが、フロント側エンジン部も一目で判るくらいに潰れてもう遣い物にはならない。

「！」

突然巨大な爆発音と地鳴りが炸裂し、空気が震えた。

整然と立ち並ぶ街並みを映していたドアミラーの片隅に、突如として地上一階辺りから巨大な噴煙が立ち昇る。位置から見ても、間違いなくクラブの在る場所だ。

再び、身体の奥から全身を揺るがすほどの爆発音が二度、鳴り響

いた。

「レイナ！」

たった今、岬はそのクラブの前で彼女を送り届けた処だったのだ。

## 第10話 暗躍

爆発はラジエンドラの一階フロアホール内で起こり、多数の負傷者を出していた。爆風はフロア全体を吹き飛ばし、暗闇に赤々と照らし出される炎が僅かな出口を求めて、窓や排気筒から十数メートル以上の火柱を立ち昇らせる。

情報では館内に月面コロニーの外相がVIPとして来る予定だったが、幸運にも到着が遅れていた為、危うく難を逃れていたらしい。岬は逸早く駆け付けた消防と合流して、行方不明者の捜索に当たっていた。まだ熱反応が高く二次爆発の危険性も否めない為、消防から耐火スーツを借りて瓦礫と化したクラブ館内を捜索する。

岬は爆発に巻き込まれて身体の一部が消し飛んでしまった無惨な彼等の姿に眼を逸らせた。所轄の何人かは既に発見され、急速炭素冷凍処置を施されていた。その中に、香川達同僚の無惨な姿を見つけたのだ。

事件や事故に巻き込まれた者から、バイオノイドやサイバノイドといった高度な処置が優先的に与えられている。しかし、身体的に補完が可能であっても、事故の精神的ショックから立ち直れない症例<sup>ケース</sup>が殆どだ。

この為彼等を引き受ける警察医療局では、事故のトラウマ対策として患者の記憶を一部削除するシステムが導入されている。だが、未だにマニュアルは不完全であり、記憶操作をして性格が変わったり、奇行を繰り返したりする症例が後を絶たない。香川達が岬達を覚えたまままで病院を退院出来る可能性は低い上、職場復帰はまず不可能だろう。

「岬！」

香川の朗らかな声が聞こえた気がした。

玲奈を失い、塞込んでいた岬をずっと気に掛けてくれていた彼だ。

つい先日も岬のマンションに遊びに来て、わざとエロ本を置いて行った茶目っ気のある奴だった。その彼が今は変わり果てた姿になっている。

握った拳が小刻みに震えた。爆発は、顔見知りになったクラブ内のスタッフ、密売組織、警察をも無差別に巻き込んでいた。

けれどもレイナの姿は何処にも見当たらない。知らなかったとは言え、自分がこの場所に彼女を送ってしまったのは紛れも無い事実だ。あのタイミングから推察すれば、彼女が爆発に巻き込まれた可能性は極めて高い。

岬は焦った。

目の前の瓦礫から微かな気配がした。耐火スーツの側頭部に触れて、透視フィルタを掛けると、瓦礫の向こうに人が倒れているシルエットが浮かび上がる。

岬は勘を頼りに瓦礫を除けて行くのだが、大きな鋼材に行く手を阻まれてこれ以上先に進む事が出来ない。外気の酸素残存量をチェックすると、防護服のシールドを外して声を掛けようとするが、凄まじい熱気と煙に咳き込んでしまう。

「く……おい！ 聞えるか？」

何とか声を張り上げた。煙で眼を遣られて涙が止まらない。

呼び掛けに、微かに反応があった。

生きている！

生存者の存在が、諦め掛けた岬に一縷の望みを灯した。職務上の使命感も相俟って、何とんでもこの生存者を助け出さなくてはと夢中になって鋼材を動かそうとするのだが、鋼材はびくりとも動かない。

焦りの色が滲んだ時、タイミング良く岬の携帯が鳴った。

「高城！ 今、そのビルの上空だ。シュライバーを降ろすぞ！」  
ノイズ交じりの音声が聞える。

「了解。テッド、早く遣せ！ 生存者を発見したが柱が邪魔だ！」

「よつしゃ！」

FCIの専用輸送ヘリ、エア・ブレイズから『クワガタ』三機が投下された。医療器具を内蔵している救助用A・Eロボットのシュライバーだ。三機のシュライバーは、背中のフレイムカバーを翹のように左右に拡げて風を掴み、パラシュート代わりにして落下速度を調節しながら地上へと舞い降りて来た。

シュライバーは頭部にあるレーザーで巨大な鋼材を切断すると、持ち前の大顎を使って難なく生存者を救出する。

瓦礫に埋もれていたのは上司の芹澤だった。岬は自分が被っていた耐火スーツのメットを乱暴に剥ぎ取り芹澤に被せると、自分は携帯用循環呼吸機器のオーバを銜えた。メットの横に付いている幾つかのスイッチを入れて、芹澤への酸素濃度を微調整する。

周囲の熱りが岬を容赦無く襲う。焼け焦げた金属の独特な臭いに閉口した。

芹澤は幸いにも大型の鋼材が爆風を遮ってくれた為、症状は香川達よりも遙かに軽かった。頭部の軽い打撲と左足の損傷以外に目立った大きな外傷は無い。しかし、左足の膝から下が潰されており、足首から先が無かった。

岬は素早く芹澤の圧迫止血の処置をする。

三機派遣されたシュライバーの一機を残して、岬は二機を他の負傷者の捜索に当たらせるよう指示を出した。残った一機は消火剤を散布すると同時に周囲の熱気を下げる為に腹部のエアコンを始動させる。そして一機の大顎の内側に内蔵されているC・Tで芹澤の身体をスキヤニングして、負傷の程度を頭部の小型モニタに映し出させた。

岬は芹澤の体内にまだ埋もれている破片類をチェックする。

「た……高城か？」

周囲の熱気が収まって来ると、芹澤は意識を回復した。

「じつとしていて下さい。今、応援が来ますから」

岬はシュライバーの医療用キットから応急処置の準備をする。

「すまん。ザマ……ねえな。嵌められた。う……奴等、目の前で仲間割れしやがって……こうなる事を予測して……俺達も巻き込みやがった……」

虚勢を張ろうとしたのだろうが、岬が傷口周辺に触れた途端、煤けた顔が激痛に歪んだ。

「ほ、他の連中は？」

芹澤は我に返り、血塗れの手で岬の腕を掴んだ。処置をしていた岬の動きが一瞬止まる。

「傍に香川とジャックが居たんだ。他にも……あいつらは？」

「芹澤さん……」

「教えてくれ！」

芹澤は岬の胸倉を乱暴に掴んだ。その手にぐつと力が籠る。

「命に……別状ありません……じっとして下さい」

岬は眼を伏せて静かに言った。限定した岬の一言で全てを覚った芹澤の手が、力無く岬の胸元から滑り落ちる。

「俺があいつらを……」

芹澤はがっくりと肩を落とした。誰にともなく呟いて、そつと両手で顔を覆う。

「生存者か？」

間もなく背後で声が掛けられた。岬の連絡で駆け付けた救急隊員達だ。

「彼のカルテだ。至急、手術の手配を頼む」

岬はシュライバーからコピーした医療用データファイルを、隊員の一人に手渡した。

「了解した。君も早く此処から退出しろ。概ねフロアにいたと思われる全ての救出が終わった。捜索は警察へ移行する」

「被害者達の身元は？」

「ほぼ特定済だ。見るか？」

救急隊員はそう言って顎を杓った。

\* \* \*

岬は救助車両内部に設置されたモニタを食い入るように見入った。映し出される被害者のリストに何度も眼を通す。しかし、レイナやチ力達の名前は何処にも見当たらないし、身元不明者でそれらしい該当者は見付からなかった。

「どうだ？ 役に立ったか？」

オレンジ色のツナギを着た救急隊員が背後から声を掛けて来たが、先程岬と言葉を交わした人物では無かった。

「何の真似だ？」

岬は呻るように言ってゆっくりと両手を挙げた。

男が放つ殺気を察しても振り向かず、相手に背を向けたままそつと席から立ち上がる。救急隊員があるう事が銃口を岬に向けているのだ。

「いやあー、今時のA・Iってのは人間様が仕事をしなくても良く働くじゃねえか。あつという間にリストを作っちまう。大したもんよ」

男はそう言ってへへへと笑った。

岬は別の物音に気が逸れた。車両の外で誰かが揉み合って争っているのだ。

「まさか……」

脳裏に先程運ばれた芹澤の顔が浮かび、厭な予感がする。

「あう！」

短い悲鳴と、何かを殴るような鈍い音がした。突き飛ばされた男が無様に車両のドアに縋り付き、殴られた男と視線が合ってしまう。

「せ、芹澤さん？」

「高城……すまん」

「ほらほら、何処に逃げてんだよ？」



別の男が芹澤を追って来た。救急隊員に扮した男は芹澤を簡単に捕まえると、岬の目の前に乱暴に投げ飛ばして足蹴にする。

薬が効いているものの、暴行を受けて再び傷口が開く。その状態を眼にした芹澤は顔を歪め、声を押し殺して呻いた。

「止める！」

「おーっと、そこまでだ」

動こうとした途端、背後の男が岬を牽制した。

岬は背後から近寄って来た男へ、振り向きざま素早くローキックの回し蹴りを放ち、男の右膝の後ろを外側から内側へと抜くように薙ぎ払った。

不意を喰らった男は両脚を上げて派手に引つ繰り返り、拳銃が手から離れ落ちる。

すかさず岬は落ちた拳銃を蹴った。銃は独楽のように回転しながらシートと床の狭い隙間に潜り込む。

「貴様あ！」

芹澤の背を踏み付けていた救急隊員の男が銃を抜いて岬に向けた背広の裾に滑らせた岬の左手が背後に廻る。男にはそれが拳銃を抜く仕草に見えた。勝ち目が無いと覚ったのか、慌てて岬に向けていた銃口を芹澤に戻す。

「くっ！」

岬の呼吸が止まる。芹澤を盾に取られては万事休すだ。

「あいつ……ててて……畜生！」

蹴り倒された男が、右の膝を擦りながら立ち上がる。

岬は異ように大きく腫上がった鼻をした男に見覚えがあった。臓器密売人のラルだ。潰れたラルの鼻は、以前岬が遣ったものだった。しかもラルは岬が捕らえており、今でも拘置所にいる筈なのだ。釈放の報告は受けてはいない。そのラルがこうして救急隊員の中に紛れ込み、岬に向かって銃口を向けている。

岬は署内部で手を廻してラルを釈放した内通者の存在を疑い、今後の捜査を懸念した。

「そうだ。いいか？ う、動くなよ？」

芹澤に銃口を向けた男が、岬の気迫に圧倒されまいとして引き攣った笑みを浮かべる。

全神経を研ぎ澄ましながら、再び岬は両手をゆっくりと挙げて頭の後ろで組んだ。

「うわ？」

突然、芹澤は岬に気を取られている男の脚に必死に縋り付いた。

男は不意を喰らってバランスを崩し、芹澤諸共倒れ込む。

「た、高城……俺に構わずに逃げろ！」

すぐさま起き上がった男に、呻きながら芹澤は柔道の技を掛けようとして掛け損ない、男に振り払われてしまった。芹澤は尚も必死になって男の左足に追い縋る。

「黙れ！」

片足の自由が利かない男は銃把で芹澤の頭を殴り、もう片方の右大腿部を撃ち抜いた。しかし、芹澤は既に鎮痛剤を岬に投与されている。

「くっ！ け、警察を……舐めるなあ！」

痛覚を絶たれている芹澤は、凄惨な形相で男に襲い掛かった。

「うわああ！」

「何だコイツ！」

怯んだ男が銃口を芹澤に向けようとする。

「止める！ 芹澤さんっ！」

男が引き金を引くよりも先に岬が動いた。岬の拳が芹澤の鳩尾にヒットする。芹澤は信じられないと言う表情で眼を剥き、渾身の力で岬に追い縋る。

「ああ？ た……か」

「すみません……」

岬は沈痛な面持ちで芹澤に囁いた。

芹澤はあっという間に墮とされる。意識を失い、力無くずるずると

岬の足元に崩折れた。

上司に手を上げたのは芹澤の身の安全確保の為だ。これ以上芹澤が抵抗して連中を煽り、危害を加えられるのを黙って見過ごす訳にはいかない。

「は、ははっ……馬鹿かお前は？ 状況が判っているのか？ 自分だけなら逃げ出して助かったかも知れないのによ。自分が大事じゃないのか？ ええおい？」

男は口から白い泡を吹きながら、勝ち誇ったように銃口を岬に向けてと空いた片方の手で、蹲って気を失っている芹澤の懐から電磁手錠を取り出した。

「そらよ」

男がラルに電磁手錠を放って遣す。そして再び意識を失った芹澤に銃口を向けた。

「この野郎！ 梃子摺らせやがって！」

「止めろっ！」

岬が凄まじい気迫を放って男を睨み付けた。拳銃を向けられていると言うのに、岬は少しも怯んだりしていない。それどころか、もしこの場で倒れている芹澤に止めを刺したりすれば、『氣』が昂っている今の岬に、何が起ころのか判らない得体の知れない恐怖さえ感じられる。

「ま、待て」

岬の気迫に飲まれたラルは、慌てて相棒を止めた。

「こ、殺すなよ？ そいつあこの野郎を打ちのめすまでは生かせておけ」

虚勢を張ったラルの気味悪い高笑いが響く。

\* \* \*

「痛……」

意識が戻ったレイナは、ゆっくりと瞼を開いた。右の額が熱く疼

いている。他にも身体中の至る所が悲鳴を上げていた。無理に身体を動かそうとすれば、激痛が奔って思うように動けない。

岬と別れてクラブの中に入った直後、レイナは爆風に煽られたのだが、それから先の記憶が無かった。

耳を澄ませば、近くで規則的な波の音が聞えている。室内独特の閉塞感が感じられる事から、港のどこかのドックだろうと思われた。硬くてひんやりとしたコンクリートの感触が、彼女のシャツを通してじわりと肌に伝わって来る。

レイナはいつの間にか、自分が誰かにクラブから運び出されていた事を知った。

…… 生きている……

レイナはぼんやりと霞む眼の前で、ゆっくりと自分の左手を払ってみた。あの爆風に翻弄されていながら、どうやら奇跡的に掠り傷程度で済んだようだ。

けれど、彼女の心は空っぽだった。助かった嬉しさよりも、まだ生きていると言う事実の方が虚しく、辛いと感じていたからだ。

「な、何よ！ は、話が違うじゃない！」

不意に女の怯えた叫び声が聞こえた。切羽詰ったような口調から察すると、誰かと言い争っているようだ。

「黙れ！ 勝手な事をして……この僕までが疑われたじゃないか！」  
争う二人の声に、レイナは聞き覚えがあつた。ホステス仲間のチカと、自分の夫であるジェフの声だ。彼等の他にも五、六人が居るようだが、その中に小夜子も居る気配がしている。

「何を言ってるのよ！ 今更裏切る心算？ アンタがいつまでもグズタしているからいけないのよ！ ヤバくなりそうだと自分だけはさっさと逃げ出して後片付けはアタシ達？ ズルイわ！」

チカが金切り声で罵った。

「もう止せ！ 警察が動いている！ 騒ぎで俺達のルートを狙っている組織の奴等も動き出しているんだ」

「今更喧嘩するな！ 沖に船を手配している。事情は此処を出てから聴けばいい」

先を急ごうとする数人の声が止めに入ったが、二人は一向に引かなかった。

「堪え性の無い子供のお守りは御免だ！」

「それ、どういう意味よ？ 一体、誰の事言っているのよ？」

「誰の事だあ？ もう一度言ってみる！」

噛み付いたチカに、ジェフが声を荒らげる。

「組織の連中に見付かって、連れて行かれるよりはマシでしょ？」

「な……んだと？」

ジェフがチカに掴み掛かって揉み合いになった。何人が二人を止めようとして靴音が入り乱れる。

「ジェフ……二人共、止めて……」

レイナは横に伏せた身体を屈めて丸くなり、固く眼を閉じて両耳を塞いだ。

ジェフがチカや他の何人もの女性と関係を持っているのは知っていた。証拠を握った訳ではなかったが、彼の腕からは常にレイナではない他の女性の匂いがしていたからだ。

ジェフは、レイナがその事に気付いていないとでも思っていたのだろうか？ 尤もレイナ自身、ジェフが他の女性と甘い一時を過ごしていたとしても、特別彼を軽蔑したり非難したりする気にはなれなかった。全く気にならないと言えば嘘になるが、ジェフから夫だと名乗られても、何度甘い言葉を掛けられても……彼の腕に抱かれている時でさえ、何故かレイナの心は彼に傾こうとはしなかった。彼女はジェフに興味を持つ事が出来なかったのだ。

ジェフは眉目秀麗の脳外科医。『天才』の名を欲しい俥にしている彼に、言い寄って来る女性は数知れない。そんなジェフの妻である事に、レイナは不満を持っているのだ。慕っているチカや他の女

性達からすれば、なんと不可解で贅沢な言い様だろうか。

それでも……とレイナは想う。

『妻』とは名ばかりで、ジエフにとってはレイナもその他大勢の中の一人であるような気がしてならなかった。ジエフは記憶を失っていたレイナを救ってくれた。そしてレイナの存在を認めてくれた男だった。自分が何処の誰かも判らずに不安で心細かったレイナにとって、彼に縋るしか他に選択の余地は与えられていなかったただけなのだ。喩え、生理的に『苦手だ』と言う嫌悪感を持っていた男だったとしても。

『レイナ、レイナ……君だけだよ……』

今でもジエフの甘い囁きが耳に残る。何度齒の浮くような言葉を与えられても、レイナの心へは届かなかった。寧ろ、その言葉がどれだけレイナを傷付けた事か……抱かれる度に、他の女性の香を残すジエフの言葉が重荷になる。

「嘔吐き」

固く閉じた瞼から、光の筋が溢れた。

『お生憎様。彼はアタシのものよ』

「チカ……」

惨めな気持ちに打ち拉がれたレイナの脳裏には、チカが自分の姿を見下ろして嘲り、声高に笑っている姿が浮かんでいた。チカは計算高い女だ。どんな事があっても常に主導権を握っており、優先順位が与えられていたために、レイナと小夜子は逆らえない。ジエフさえチカには一目置いていたほどだ。彼女の小悪魔的な行動が、幾度となくレイナを苛立たせていた。最近では猶の事であった。

そして岬も……

岬の事を想った途端、レイナは胸がきつく締め付けられたような気がして切なくなった。

ジエフと同じ医師でありながら、至れり尽くせりのスマートなジエフとは外見も中身も全く違っている。見るからに粗野で身勝手な

振る舞いを平気で遣ってしまいそんな印象を受けるのだが、岬は見た目とは違っていた。

ただあの時の夜、酔った客に絡まれていた時に自分を助けてくれた岬だけは、何故だかいつもの岬だとは思えなかった。心の隙に付け込まれ、絡まれてしまったレイナを助けてくれたにも拘わらず、岬は何故かレイナに対して怒っているように思えたからだ。

『君は……笑ったりしないんだな？』

『え？』

『何かに怯えて思い詰めたような眼をしている』

あの後、岬からやや強引にクラブから連れ出され、人気の無い展望台から見事な夜景を見せて貰った時に、岬が溜息混じりに呟いた意味深な一言が彼女の脳裏に蘇る。

『笑ったりしないんだな……』

その言葉がレイナの心を深く傷付けてしまった。ジェフから籠の鳥にされ、逃げ出す事さえ叶わない運命の呪縛に雁字搦めに縛られてしまい、笑顔を作る事が出来なくなっていた。笑う術を忘れてしまっただけなのに。

あの時、何故岬がそんな事を口にしたのかは判らない。けれどレイナは胸に大きな風穴を空けられた気がして、ただただ悲しくなった。

岬には、そんな自分の心の内を気取られまいとして気丈に無表情を装っていたのだが、ダンスのステップを教えられて居る時に、不意に涙が止め処なく頬を伝ってしまった。

岬はレイナの涙に気付き、黙って彼女を引き寄せて抱き締めた。お互いが何一つ言葉を交わさなかったけれど、岬の温かい胸に抱き締められた時、レイナは岬の心に一瞬触れてしまったような気がして戸惑った。言い寄って来る男は幾らでも居る。しかし、岬は他の男達とは違う印象を受ける。岬が自分を見詰めるその瞳の奥に、安

堵出来る温もりを仄かに感じてしまったからだ。

数日後、吹き抜けの二階フロアの階段近くで、他のホステスに足を掛けられてバランスを崩した事があった。あの時、岬は傍に居て腕を引いて助けてくれた。あのまま倒れていれば階段から転落して階下にあつたガラスのオブジェに頭から突っ込んでいたかも知れない。

偶然だと思つたが、実はその後も何度か岬に危うい所を助けられていた。けれど、岬に連れ出されたあの一件の後だったので、レイナ自身が岬を避けていた事もあり、何度も助けられたにも関わらず素直に礼の一つさえ満足に言い出せなかつた。岬もそんなレイナの事を承知しているのか、視線さえ合わさずにその場を立ち去つてしまふ。助けたのは偶然だとも言うように。

無愛想だけれど、気が付けば常に何処かで見守つて居てくれる気がしていたが、視線が合えば必ず顔を背けられ、自分が岬を嫌つていゝのではなくて岬の方から嫌われているのではと疑つた事もある。なのに、それでもレイナは保護されているような居心地の良さを感じていた。自分が気負う事無く自然体で居られそんな不思議な安らぎを持てたからだ。

しかし、今の岬にはチカが居る。レイナの脳裏には、クラブの地下駐車場での不快な出来事が鮮明に蘇り、胸に狂おしい程の何かが入み上げて来た。

レイナは岬と出会つてから、いつの間にかチカに対して嫉妬のようなものを芽生えさせている自分に気付いてしまった。彼の存在はレイナにとってその他大勢の男達の一人でなければならぬ。なのに気が付けば何故か視線が彼を探し、追い求めてしまふ。

チカにとつてもレイナのそんな様子が気に入らないであろう事は火を見るよりも明らかだつた。

『イヴはこれからお客の相手でしょう？ ホストの彼を見ていちゃ駄目よ？』



レイナの視線に気付いた小夜子が、レイナに苦言を呈した事があった。三人の中で最年少ではあるが、持ち前のカリスマ性でチカはいつの間にか二人に指示を出す立場になっていた。

そのチカのお気に入りである岬を想う事で、レイナの立場は益々三人の中で浮いてしまい、チカにとって目障りな邪魔者として見られてしまう。今まで以上の酷い目に遭わされてしまうかも知れない。けれど、それでも構わないと思った。

岬の本心が聴きたい……チカの事をどう想っているのだろうか？自分は岬にどう想われているのだろうか？

ジェフから再び『岬を殺せ』と言われた時、レイナは彼に逆らった。何度殴られても指示に従おうとはしなかったが、それでも岬に逢いたいと思う気持ちが先走ってしまった。出来る事なら、岬に危険を知らせて此処から自分を連れ出して欲しかった。

しかし、岬はクラブでの態度とは違っていた。『契約上』での単なる同僚……その程度でしか岬は自分の事を思っていなかったのだと知り、レイナは絶望した。

ジェフに従い、いつその手で岬を殺めてしまい、自分の中に居座ってしまった岬を消そうとしたのだが……そうする事は叶わなかった。

あの時、自分が狙われているのだと岬は判っていた。気付いていたにも関わらず、全くの無防備な姿を曝け出していた岬に、レイナは畏怖の念さえ覚えた。そして、自分の遣ろうとしている卑劣な手段に嫌悪してしまった。彼に近付けば近付くほど自分が愚かだと言う事を否応なく思い知らされてしまう。なのに何故こんなにも彼の事が気になってしまうのだろうか？

だが、そんな苦しい想いも消えてしまうだろう。もうじき自分達は此処を離れてしまうのだ。それなのに、二度と岬に逢えなくなるのかと思うと、レイナの胸は心とは裏腹に張り裂けそうになり、眼頭が熱くなった。

銃声が響き、ドアが乱暴に蹴破られる。

「逃げる！」

悲鳴に紛れて誰かの叫び声があったが、間に合わない。武装した五人がレイナ達の居るフロアに、わらわらと雪崩れ込んだ。

「ま、待ってくれ！ 僕は違う！」

入って来た黒尽くめの連中にジェフは両手を挙げ、一際大きな声で叫んだ。

「僕はいつ等とは無関係だ！ 聞いてくれ！」

一瞬、今まで一緒に居た連中が、ジェフの執った言動に息を呑んだ。

「ジェフ？」

チカが鋭く言った。

「何を言ってるのよ！ アンタいつから……」

「こ、こいつ等に脅されているだけだ！ 助けてくれ！ 頼む！ 僕を信じてくれ！」

「ジェフ？」

「助けてくれ！ ぼ、僕はバイオ・ケミカル研究員のジェフ。ジェフ・ランディアだ。き、聞いたことは無いか？」

「裏切り者！」

ジェフは咎めるチカ達を無視して、大声で必死に彼等へ訴えた。

「……」

指揮者らしい男が傍にいた男に何やら耳打ちする。

「良いだろう。来い」

「あ、ああ……助かったよ」

傍に居た一人が銃を引いて合図を遣すと、ジェフはそそくさと男達の後に付いて行った。

「残りの者は始末しろ」

冷酷に指示を出した男が顎を杓った。息を詰めて彼等を見据えて

いたチ力達が、ジェフに呪いの言葉を投掛け、絶望の悲鳴を上げた。  
「へええ、いい女が居るじゃないか」

「殺すなんて勿体無い」

男達はチカと小夜子を値踏みするように視姦した。チ力達の顔が引き攣り、悲鳴が上がる。

「先に男共を始末しろ」

機銃が一齐に火を噴いた。悲鳴と夥しい血飛沫が飛び散る。目の前で容赦無く射殺され、薙ぎ払われる仲間の姿に、彼女達の悲鳴が響く。

「お？ 此処にも居るぞ」

一人が倒れているレイナに気付いて手を伸ばしたが、恐怖に包まれたレイナは逃げ出す事さえ儘ならない。

「い、嫌。助けて……誰か、誰か……」

\* \* \*

「よく見ている。あれが僕の創った最高傑作さ」

レイナを映し出しているセキュリティカメラの映像を指差して、ジェフは得意げに口元を綻ばせた。映像には、男に襲われているレイナの姿が映っている。岬から貰った玲奈のシャツが跡形も無く引裂かれ、白い素肌が露になる。

「嫌っ！ 止めてえ！」

レイナは恐怖に怯えながら、長い亜麻色の髪を振り乱して必死に抗う。命乞いをして彼等に寝返ったジェフは、仲間どころか妻であるレイナさえ棄てた。総ての希望を失ったと覚ったレイナは、深い悲しみに突き落とされた。

意識が薄らぎ、呼吸が不規則になる。全身にアドレナリンが湧き出ているのか、皮膚全体が痺れて心臓の鼓動が極限まで早まり、白い肌に鮮やかなオレンジ色の痣のようなものが浮き上がった。

レイナは喘ぐように肩で大きく息をする。

『ああ！』

興奮してレイナを襲っていた男の動きが止まった。

グルグルと地の底から湧き出すような恐ろしい唸り声が響いてくる。女の喉が音を立てて鳴っているのだ。それは獣が威嚇する時に発する呻り声だ。

『痛！』

掴んでいた彼女の手首が何の抵抗も無くするりと抜けた。瞬間、刺すような鋭い痛みが奔り、男は慌てて手を引っ込める。見ると掌がスッパリと深く切り裂かれていた。

男は悲鳴を上げ、出血する手首を押さええて暴れ出す。

『こ、この女、ナイフなんか持っていないのに、い、一体どうやって……』

苦痛に顔を歪めながら言い掛けた男は、その言葉を呑み込んだ。

今の今まで女だと思つて組み敷いていたモノが、いつの間にか人間ではない白い獣に変貌している。

『う、うわわっ……』

声にならない。男は慌てて獣から飛び退いて腰を抜かした。

白い獣は全身の体毛を逆立てて低く唸りながら、硬直して竦んだ男を睨め上げた。長い尻尾で床をピシリ！ピシリ！と打ち付ける。

それは大型猫科の肉食獣。しかも全身が真っ白な獣だった。四肢の先が僅かに薄く豹の特徴である模様様が浮き出ている事から、獣が豹であることが判る。アルビノ種の為、覚醒剤のブラッディ・アイを使用したような真紅の鋭い眼が爛々と男を見据え、鋭い牙を持った口が、耳元まで大きく裂ける。

「おお！」

モニタを見ていた連中が、一様に驚愕の声を漏らした。

「気の毒だが、あそこに居る仲間は諦めた方が良い」

ジエフは彼等の驚く様を見て有頂天になる。

「それは、どういう意味だ？」

「別に……」

「我々は、まだ貴様を認めた訳ではない。図に乗るな」

言葉を濁したジェフに向かって、すぐ横に居た男が凄んで見せる。

「出来ないんだ」

「？」

「彼女は変身してしまうと、自分をコントロール出来ない」

ジェフは芝居めいた口調で言ったが、彼等にジェフの小細工は効かなかった。

「その為の『手段』とやらを貴様は持っている筈だ」

肩に掛けていたマシンガンの銃口をジェフに向けて恫喝すると、男はにやりと笑った。

一瞬、ジェフが顔を引き攣らせて息を飲む。喩え本当に彼女への対策手段が無かったとしても、彼等に信じて貰えそうに無い。

「鋭いな」

此処は一先ず連中の要求をおとなく飲むしか、自分が助かる道は無さそうだ。

ジェフは唇を噛むと、仕方無く懐から薄いカード型のコントローラーを取り出した。

「貸せっ！」

男が乱暴に引っ手繰り、滅茶苦茶にスイッチを押す。

「ああ！ 勝手に触るな！」

奪われたコントローラーを取り戻そうと手を伸ばした。

「大切に扱ってくれ。設定が狂うと……」

「貴様のご都合の良い設定にだろう？ 貴様、自分が今どんな立場に立っているのか判っておらんようだな？」

指揮者は鼻で笑って見下した。

侮辱されたと覚ったジェフは、両肩を怒らせて拳を力一杯握り締める。

「レイナは最高傑作だ。僕が造ったんだ……彼女は僕のものだ。お

前達には彼女のすばらしさは判らないんだ」

「ほざけ！」

銃口をジェフに向けて居た男が、素早く銃把で彼の頭部を殴った。

モニタには、レイナ達を襲った連中が、白豹に変身してしまった彼女を撃ち殺そうと狂ったように銃を乱射する姿が映っていた。けれど白豹は銃口の向きや、引金に掛けた指の筋肉の動きを素早く読み取って、雨のように降頻る銃弾を難なくかわしている。それどころか、彼等同士で互いに相撃ちをさせるように、わざと彼等の目の前を掠めて駆け抜けた。

血飛沫と悲鳴。そして狂ったような雄叫びが上がったかと思うと、唐突にモニタの電源が切れた。どうやら彼等が室内にあった制御盤を撃ち抜いてしまったらしい。電源が切れた事でドアが自動的に施錠され、室内は完全に暗闇に閉ざされた密室になった。生き残っていた者の助けを乞う悲鳴が虚しく響く。

## 第11話 喪失（ロスト）！

連中の居る場所へ単身飛び込もうとしている岬は、緊張して手に汗を握っていた。慎重に歩を進めながら、時折後ろに付いて拳銃を握っている男達二人へ、肩越しから刺すような鋭い視線を向ける。

もとより銃弾は岬が事前に取り上げており、彼等が握っている拳銃には実弾が無い。

「妙なマネはするなよ？ 少しでもすれば……判っているよな？」

「はっ……はい」

岬から凄まれた男達は萎縮して震え上がった。二人共人相が変わるほど顔が腫上がり、歩行も何処かぎこちない。

「ほら、さつさと来いよ。俺が捕虜に見えないだろ？」

遅れる二人に顎を杓つて促した。岬の両手には芹澤から奪い取った電磁手錠が掛けられている。

「はいい」

情けない声で返事をしたラルの右頬は、殴られて酷く腫れて喋り難そうだ。

連行されている筈の岬が全くの無傷で、彼を従えているラル達が瀕死状態なのはとても奇妙な光景だった。

岬は、二人の惨状を見て手加減をしておくのだったなと後悔するが、ラル達二人以外に取替えが利かない。

「ジン、俺を確認しているか？」

岬は襟に取り付けている小型通信機にそつと囁いた。

「ちゃんと捕捉しているぞ。その先のドアの向こう……左右に二人。室内には計八人。うん？ い、いや待て、デカブツのサイバノイドが一体居る。気を付ける。奥の地下にも何人が居るな。だが、人数が特定出来ない。」

「サイバノイドが居るのか？」

「ああ、ゴツイのが一体だけだな。なぐんかヤバそうだぞ。ラス

テラル社製のSD 五三〇。スペックはギノー社のVU ビオ四〇四と大差は無いが、強化タイプだ。経歴データからヤツの改造記録は三年前で終わっているが、上書き改ざんしている形跡がある。用心しろ」

「厄介だな……了解」

会話を終えた岬はラル達に向き直った。二人は岬からまた暴力を振るわれるのではない、顔を引き攣らせてビクついた。

「な、な、何でしょう?」

岬はにやりと不敵に笑い、左の親指を立てて自分の頬を指した。  
「俺を殴れ」

\* \* \*

「おらおらア、さつさと入れやあ!」

威勢よく吠えたラルから、岬は背中を突き飛ばされた。勢い余って室内に転がり込んだ岬を追い掛けて、ラルが脇腹を蹴り上げる。

「はあう!」

仲間達に会えて、水を得た魚のようになったラルは、今までのお返しとばかり何度も岬の腹を蹴り上げた。

「観念しやがれ! ……つて、ええっ?」

調子に乗っていたラル達二人の表情が凍り付いた。室内に入った途端、岬だけではなく、ラル達にも一斉に銃口が向けられていたからだ。

「……?」

凍り付くラル達を岬は不審に思って訝った。呻きながら痛む脇腹を抱えて蹲るが、それでも素早く辺りの様子を窺い、警戒を怠らない。

「な、何であんた達が?」

息を飲んだラルの視線が宙を彷徨った。

「ばれてんだよ。お前等の事がな? 泳がしておけば調子に乗りや



がって」

サングラスの男が口を割った。その傍らに見覚えのある男が涼しげな顔をして立っている。岬は息を詰め、そつと状況を静観した。

「あ、あんたあ……そうか、そういうハラだったのか？ 俺達を唆せて裏切ったんだな！」

ラル達二人はジェフの姿を見るなり、二、三步後退りした。

「裏切っただなんて。そんな人聞きの悪い言い方は止してくれないか？」

ジェフは顔色一つ変えずに平然として、右手中指で眼鏡のブリツジ部を軽く押し上げた。

「あわわ……」

先にラルが堪らなくなつて逃げ出そうと背を向た。途端に銃弾が容赦無くラルの身体を撃ち抜き、続いて彼と一緒だった男の身体もボロ雑巾のように貫いた。悲鳴に混じつて、血飛沫が勢い良く音を立てて噴き上がる。

仲間割れ？

その光景を直視しながら岬は眉を顰めて訝った。

「誰を連れて来たのかは知らんが……災難だったな？」

男の野太い声がして、物陰に潜んでいた岬にも銃口が突き付けられる。

「その鼠も出て来い！」

岬は電磁手錠を掛けられたままの両手を彼等に見えるよう先に拳げ、ゆっくりと立ち上がった。

「お、お前は？」

立ち上がった岬の姿を見るなり、緊張して額に汗を光らせているジェフの喉が鳴った。

「久しぶり。ドクター。お元気でしたか？」

岬は壁に凭れ掛かり、意味深に眼を細めて、ゆっくりとジェフを見返した。口では彼に対して敬意を払っているような言い方だった

が、その眼は彼をドクターだとは認めてはおらず、寧ろ哀れみを含んだ眼差しだ。

「貴様あッ！」

ジエフは大きく目を剥き、頬を痙攣させて凄まじい怒りを露わにする。

「知っているのか？」

「し、知っているも何も……コイツは桐嶋署の刑事だ！」

途端に岬を捉えていた銃口が一斉に火を噴いた。

岬は反射的に身を翻して机の陰に隠れる。着弾した銃弾の幾つかが壁やパソコンの硬い金属部分に跳ね返され、兆弾となって火花を散らす。

辺りには硝煙独特の臭いがたち込め、銃を掃射した連中の足元には空の葉莢が幾つも転がった。

「除きやがれ！」

銃で岬を狙っていた男達を乱暴に押し退けて、サイバノイドの大男が前面へ割り込んだ。

「っと、出て来る。お約束かよ？」

物陰に隠れて様子を窺っていた岬が軽口を叩く。けれどその表情に余裕など微塵も無かった。現われたサイバノイドの気配を感じて、更に状況が悪くなったと覚ると、一頻り厭な顔をする。

ジンの言っていた『違法改造』野郎の仕様を確認するべく、そつと机の隙間から奴の姿を覗き見た。

男の顔半分は、模造皮膚が剥がれて金属が剥き出しの状態だ。右腕の肘から先は巨大な蟹のような鋏が付いており、左肩には右とのバランスを保つ為か、小型ランチャーが不気味な砲筒を覗かせていた。ごつい胴体ボディはそれだけで装甲板の仕ようだと判るが、左右から袈裟掛けに予備弾装と小型爆弾を提げている。

「アリアかよ？ あんなの」

戦車並みの仕様に、岬の表情が強張った。

とても太刀打ち出来る次元の問題では無い。手元にあるのはラル

から奪い取っていた一丁の自動小銃だ。岬はその拳銃を取り出し、頼り無さそうに視線を落とした。これがあのバケモノに効くとは到底思えない。

「おおお！」

男はもの凄い勢いで蟹爪の腕を振り回して突進する。その勢いで楯にしている机ごと押し潰されては堪らない。岬は物陰から飛び出した。

連続して振り降ろされる蟹爪を、冷静に動きを見切って何度もかわす。

岬の身代わりに、背後にあつたパソコン機器が机ごと簡単に潰される。

身体を投げ出し、滞空時に関節を狙って引き金を引くが、やはり男は見た目通り強化模造皮膚で覆われていた。銃弾は皮膚にめり込むのだが、貫通には至らずまるで歯が立たない。

岬が攻撃をかわす度に、標的を失って勢い余った男の腕が、金属製の机や椅子を張りぼての玩具のように意図も簡単に薙ぎ払う。一度でもその腕に接触すれば、生身の岬の身体など一瞬にして砕け散ってしまつたろう。

岬は何度も追詰められながら、辛うじて難を逃れていた。

「！」

一瞬の隙を突いて、岬は男の眼球を狙った。悲鳴を上げて男が大きく仰け反り、疑似血液が音を立てて噴き出した。同時に岬にも隙が出来る。

目の前で火花が散った。仲間の一斉掃射が岬を襲つたのだ。

ギリギリでかわして机の陰へと身を隠したが、足元を何本もの配線コードが掬った。バランスを崩して転倒し、配線は岬の両足に複雑に絡まって自由を奪う。

身動き出来ない！

男達の銃口が一斉に岬に向けられた。

「よくも……」

右の眼窩から疑似体液を撒き散らせながら、男は岬の正面に立ち塞がった。もう一発お見舞いしないとヤツの脳核までは届かないよ  
うだ。

岬は肘を突いて上体を起こし、サイバノイドの男を睨上げながら、再び銃口を男の右眼に向けて構えた。

周囲の連中の銃口に、岬は全く意に介してはいなかった。殺す心算であれば、もう手を下している筈だ。連中は、岬がこのサイバノイドに罠に殺しにされるのを期待して待っているのだ。

「両の手足を拘束されているのにこの期に及んで……良い度胸だな？ 命乞い一つしないとは……今時珍しく骨のあるヤツだ」

男の口元が歪み、左目が細くなった。岬を見下ろすその眼に情け容赦は微塵も感じられない。

岬は奥歯を強く噛み締めて、猶も男を睨上げる。極度の緊張状態に、一筋の汗が岬の顎を伝って滴り落ちた。

辺りに緊迫した空気が張り詰め、誰かの喉がごくりと音をたてる。「皆、銃を退け。手出しは無用だ」

男は余裕で首を廻らし、岬に向き直ると勝ち誇ったように胸を張った。

「俺と刺し違える心算か？ 残念だったな。ソイツじゃ俺は仕留められねえよ。」

そう言って負傷した右眼を手で隠すと、左肩にある小型ランチャーで動けなくなった岬を狙った。肩に載せている砲塔が不気味に唸りながら角度を落とし、岬を捉える。

「罠に殺して遣ろうと思ったが、その度胸に免じて跡形も無く綺麗に吹飛ばして遣る！」

「それを遣るのか？ 此処に居並ぶ連中もタダじゃ済まないぞ？」

岬は視線を逸らせて、男の背後で静観している連中に視線を奔らせた。小型とは言え、男の装備しているランチャーの威力は絶大だ。岬はおろか、辺り一面が一瞬にして消し飛ばす程の効果を持って居る。居合わせた者全員が岬以上に自らの危険を感じ、緊張が奔った。

「ま、待て！ 待つてくれ！」

「あん？」

指揮者が慌てて男の動きを制した。

「こ、此処でそれを遣えば、我々まで危険だ。お前も無事では済まないぞ？」

「そ、そうだ」

人垣に紛れてジェフの声がした。張りのある凜としたジェフの声に、一同は何事かと彼を振り返った。

「いい方法がある。それよりも……」

「それよりも……？」

ジェフは、沈黙してしまつたモニタの方に視線を向けた。指揮者の男は訝つたが、じきにそれが何を意味しているのかを察した。

「ほほう。余興には面白いかも知れんな？」

捕虜となつた岬の目の前で、ラルと相方の男の遺体が地下の暗室へと投げ込まれた。その暗室からは、何か得体の知れない強い気配が漂っている。

程無くして獣の低い唸り声と、彼等の骨が無惨に碎かれる嫌な音が聞えて来た。

「こいつはもしかして……」

銃口に囲まれて、一緒に暗室を覗き込んでいた岬の喉が鳴った。

暗闇でその姿は確認出来ないが、気配からして大型の肉食獣に間違い無い。警察が血眼になって捜していた大型獣が、こんな所に潜んで居たのだ。

「高城」

ジェフは岬を呼んだ。

岬は鬱陶しそうに振り返ってジェフを睨む。その気迫に飲まれてジェフは一瞬気後れしてしまつた。

「レ……レイナは僕の女だ。彼女にはもう二度と近付くな」

「……」

「尤も、これでもう二度とレイナには逢えないだろうけどな？」

勝ち誇ったように吐き棄てると、眼鏡のフレームを軽く指で押し上げた。ジェフの整った顔立ちが、岬を見下して醜悪になる。

「下のドアは壊れていて此処からしか出入り出来ない。行き掛かりで連れて来られたとはいえ、お前も運が悪かったな。あばよ」

指揮者の男はそう言って銃把で岬の後頭部を殴った。

銃把が直撃する寸前、相手に気取られないように岬は軽く首を引き、頭部へのダメージを軽減させる。直撃は免れたものの、殴られたダメージはある。

岬は歩を乱してよろめくと、そのまま足を踏み外して一気に落ちた。

落下しながら岬は器用に電磁手錠を外し、着地の衝撃に身構える。先程投げ落とされたラル達の死体の着地音で、ある程度の高さは予測済みだ。

着地の瞬間に受身をして二、三度激しく転がった。ラル達の生暖かい血溜まりが岬を汚し、ぬかるんだように足元を滑らせる。

岬の落下に驚いて、暗闇に潜んでいた獣が物陰で身を潜める気配がした。

「？」

右手の指先が冷たい金属に触れた。腕を伸ばしてそれを掴む。岬には、それがマシンガンだと直ぐに判った。殆ど目視が効かない状態で弾倉を手探りし、素早く残弾の有無を確認する。冷たい感触が指先に伝わり、それがまだ使用可能である事を察した岬は、素早く安全装置を解除して、気配のする方へ銃口を向けた。

低く唸る獣の気配が近寄って来る。

唸り声のする方向へと銃を腰だめにして構えた。引き金に掛けた指先が緊張して震え、汗が珠のように噴出して心拍数が上昇する。

岬を落した後、直ちにドアは閉められた。中から白豹と激しく揉み合う音がする。

「レイナに食われて死ぬんだ。君だって本望だろう？ 僕からのせめてもの情けだよ」

そう呟くと、ジェフは岬が落されたドアの向こうの暗闇に軽く興奮して耳を敬てる。

『レイナ』として彼女を手にした今でさえ、彼女の心は閉ざされたままだった。記憶操作を行ったにも拘わらず、レイナは自分に全く心を動かそうとはしてはくれなかったのだ。

彼女の心が欲しくて、高価な貴金属やドレスを買い与え、贅沢な暮らしを約束した。けれども、やはり彼女の心は硬く閉ざされたままだった。

自分に心を開かないレイナに業を煮やしたジェフは、自分の研究資金調達の手伝いをさせるべく、彼女にホステスとしての仕事を与えた。そして彼女が逃げ出さぬよう目付け役として、チカと小夜子を付き添わせたのだ。

時には彼女を薬で惑わし、時には惨たらしく暴力で以って屈服させようとしたが、レイナは決して自分を愛そうとはしてくれなかった。

どうすればレイナが心を開き、自分を愛してくれるのだろうかと思いついていた時に、彼女の前に『あの男』 高城岬が現れた。まるで、これは運命なのだと言わんばかりに二人は引き寄せられ、めぐり逢ってしまったのだ。

予想外だったシナリオにジェフは心を掻き乱され、炎のように嫉妬した。嫌がるレイナを刺客として岬に向かわせたのだったが、計略は尽く失敗に終わり、レイナの気持ちが一層岬に傾き、引き寄せられてしまう結果を招いてしまったのだが……

それもこれで終わりだと思った。

岬が死ねば邪魔者は消える。正気に返ったレイナに総てを話し、自分に靡かなかった彼女の心をスタスタに引き裂いて遣るのも一興だとさえ思った。それでレイナが自らの命を絶ったとしても、自分にはレイナを蘇生出来る術を手に行っている。何度自分の手から逃げ

出そうとしても、決して死なせたりはしないと云つ、驕り高ぶつた妄想に取り憑かれていたのだ。

「警察が嗅ぎ付けたらしい。引き揚げだ」

仲間からの通信連絡を受けて、指揮官が背を向けると、一同に撤収の指示が下された。

「え？ で、でも……まだ奴は生きて……」

ジエフは口籠った。肝心の岬はまだ生きているのだ。暗闇で目視出来なくても、レイナに襲われて食い殺される奴の断末魔の悲鳴を聞くまでは と、心中穏やかでは居られなかった。

「どの道奴も終わりだ。それに、あの豹は我々の手には負えん」

ジエフは尚も閉ざされたドアを見詰めていた。レイナを従わせる為のコントローラーは既に彼等の手によって廃棄されている。流石にあれが無いと、迂闊に彼女へ近寄れなければ、彼女を猛り狂わせて岬を襲わせる事も出来ない。

ジエフは未練がましい眼で、コントローラーを見詰め、悔しそうに歯軋りした。これさえあれば、意図も簡単に岬を葬る事が出来るのに……と。

「付いて来ないのか？ それとも貴様も今の奴と同じ目に遭わせて遣ろうか？」

「まさか」

苛立つた連中から脅され、ジエフは笑顔を引き攣らせながら、ドアに背を向けて彼等に従った。

『レイナ、レイナ……必ず迎えに来るよ』そう心に誓って。

\* \* \*

「ヤバイぞ！」

ジンは慌ててヘッドセットを乱暴に外して放り投げると、シートの背凭れに掛けていた背広を引っ手繰り肩に掛けた。早足に地下の



駐車場に向かいながら携帯を握る。

「テッド！ 岬を見失った！ 位置は特定出来ている。至急シュライバー二機を積んで現地向かってくれ。俺もこれから向かう」  
「了解」

慌しく車のドアを閉めると、ジンはエンジンを噴かした。

岬が囮捜査を提案して来た時から厭な予感が続いていた。連中の中に厄介な違法改造のサイバノイドが居た事も予測外で災いしている。

ジンは違法改造の改竄履歴を洗い出して、岬に正確な情報として伝えるべきだったのだ。相手の性能を正確に把握した上で状況を分析し、頃合を見計らって撤収すれば問題は何も起こらなかった。正直、サポートする側のジンの腕が未熟であった事は否めない事実ではあったのだが、本人はまだ自分のしでかしたミスに全く気付いてはいない。

ジンは単純に、岬の復帰はまだ無理だったのだと思ったのだ。

「情に絆ほたされて死んだヤツはゴマンと居る……」剥きになって岬に噛み付いた自分の言葉が脳裏に浮かぶ。

「馬っ鹿野郎！」

短く舌打ちをすると、ジンは派手に車のタイヤを鳴らして、アクセルを踏み込んだ。

\* \* \*

近寄って来る獣の気配が、岬の放った威嚇射撃で一瞬引いた。遠巻きにして低く唸りながら、獣はどうやら岬の出方を窺っているようだ。

何処かで感じたことのあるその気配を岬は訝り、握り締めていた銃を床へ静かに置いた。この暗闇で、暗視スコップ無しでの狙撃は不可能だ。そして人間と反射速度が全く違う獣には、接近戦しか無いと踏んでいた。

接近戦と言っても、無防備で対抗するわけではない。FCI開発技術部の粋を集結した、インターセプタの処置を岬が受けているからこそその選択肢である。

インターセプタとは、対サイバノイド（人造人間）戦用に開発された白兵戦用迎撃シールド。つまり、人間誰しもが所有している『気』を最大限に増幅させて、サイコエネルギーシールドとして使用者本人を保護する為の防具である。

FCIでは、連邦軍が開発した軽装備のインターセプタを改良して、使用者本人の『気』に呼応可能なマイクロチップを独自に開発していた。このマイクロチップを脳内に埋め込み使用する。ヘッドセットや末端補助具等の装備も全く不要だが、使用者の精神状態に直接呼応する為に、雑念や迷いがあれば起動しない場合があり、自在に扱うにはかなりの集中力と熟練が要される。その為、インターセプタの処置を受けている者は、岬やジン達を含めた九課の人間と他の部署の極僅かな者達だけだ。

獣が跳んだ。

岬は『気』を集中させ、インターセプタを起動しようとした。インターセプタが起動すれば黄緑色の光に包まれる筈なのだが、岬の身体には全く変化が見られない。

起動しないインターセプタに岬は焦った。

目の前に獣の白い牙が迫る。

「うわ！」

岬は素早く右手で自分の喉元を庇うが、獣は岬がガードした右手首に容赦無くがっぷりと食らい付いた。めりめりと骨が砕かれる鈍い音が聞こえ、強力な顎の力によって鋭い牙が腕の深部に食い込んで行く厭な感覚を覚えた。

けれど岬は噛み付かれた右手を引こうとはしなかった。寧ろ反対に左手を添えると咬まれた自分の右腕を獣の口の奥に向かって強く

押し付ける。

獣は驚いて岬から離れようと腹を出し、転がって手足をばたつかせた。獣の鋭い爪が容赦無く岬の身体を引裂く。

岬は獣の上に押し掛かって動きを封じ込めると、眼にも止まらぬ速さでスラックスの腰の部分に隠し持っていたサバイバルナイフを鞘走らせ、蒼白く光る刃を上向きにして逆手に握った。

一撃で仕留めなければ、猶予は無い。

暗がりですべて視覚に頼れない中、暴れている獣の急所を狙うのは困難だ。それでも一撃で急所を突いて仕留めようと、腕を引いた時だった。

『ヤメロ!』

頭の中で自分の声が大きく響いた。一瞬の迷いが生じて動きが鈍ったその隙に、獣は岬の腕から逃げ出してしまふ。

「な、何だ？ 今のは？」

確かに自分の声だった。それは今まで体験した事が無い不思議な幻聴。まるで自分の中に、もう一人の岬が居るようだ。

此处で獣を仕留めなければ、インターセプタが起動しない岬に命の保障は無い。それなのに『その声』は獣の喉を掻き切ろうとしていた岬を止めたのだ。

獣は上体を低くして恐ろしい威嚇の声を上げ、唸りながら遠巻きに此方を窺っている。

「うつつ！」

一時の『間』が生じて集中力を欠いてしまった岬に、猛烈な激痛が脳天まで駆け上がる。深く身体を折り曲げ、右腕を庇うようにして身体全体で抱え込んだ。鋭い牙が穿った痕からは、止め処なく暖かい血が滴り落ちる。苦痛に顔を顰めながら、大きく肩で息を吐いて必死に痛みを逃そうとした。激痛に耐え、獣の動きを警戒しながらシャツの裾を噛んで細く引裂き、包帯代わりに素早く傷口を覆って止血する。

血の匂いを嗅ぎ取って昂ったのか、獣の唸り声が一際大きくなる。

意識が飛びそうになるのを堪えて何度も頭を振って必死に眼を見開く。負傷して窮地に追い遣られた状況に、遠退く自分の意識との闘いも加算されてしまった。更に、暗がり眼が慣れて来ると、逆に獣の発する気配が掻き消されてしまい読み取り辛くなって来る。

正面五、六メートル先のデスクの上で、仁王立ちになっている獣の白い姿が浮かび上がった。

岬は訝って目を細める。見た事の無い体色だが、頭部や尾の先、四肢には特徴のある黒い豹紋が浮き出ている。その姿は紛れも無く『豹』だ。白い豹は身体を伏せて長い尾を優雅に振りながら、真紅に染まった眼で爛々と此方を見据えている。それはまるで雪のように白い豹だった。

自分が窮地に追い遣られてしまったと言つのに、人間には到底真似する事が出来ない獣が放つ独特な鋭い殺気と、何者をも寄せ付けない凜とした気高さに心を奪われて、呆然と立ち尽くした。

「！」

右腕の激痛が唯一岬を現実に戻してくれた。止血をしていた筈のだが、別の傷付いていた血管が裂けてしまったようだ。岬の手首を覆ったシャツの切れ端が多量に血を含んでじつとりと重くなり、床にぼたり……ぼたり……と滴り始める。もう一度止血を為直したいが、今のこの間合いからでは、豹から視線を逸らせるのは自殺行為だ。

「俺が弱るのを待ち受けているのか？」

岬は鼻で笑った。

「獣の癖に人間並みの知能だな？」

『人間並み』 そう言うてはつとした。自分は何を追っているのだろうか。

一瞬、レイナの横顔が脳裏を掠めた。

時折見せる彼女の一寸した隙の無い表情が、俄かに気になり始める。まさか……とは思うが、疑い始めると限が無い。岬はそれらを雑念として振り払おうと首を横に振った。

暫らくの間お互いに動こうとはしなかったが、遂に待ちくたびれて痺れを切らせてしまったのか、豹が先に立ち上がった。しなやかな身体に渾身の力を溜めて低く身構えると、岬に狙いを定めて一気に襲い掛かった。

岬は再び『気』を集中させてみるが、やはりインターセプタは起動しない。

舌打ちをしてナイフを握り直す。

今までこれ以上の危険に何度も晒された事はあったが、インターセプタがエラーを起こした事など一度たりとも無かった事だ。これでは自分は無防備なまま、いずれは豹の餌食ではないか。

「畜生！ こんな時に限って！」

意を結してもう一度右腕を前に差し出した。案の定、血の臭いに誘われたのか同じ箇所につぶりと食らい付いて来た。

唸り声を上げて咬み付き、同時に頭を激しく左右に振ったせいで、今度は岬の方がバランスを崩してそのまま豹に押し倒される。

「うわああっ！」

激痛が脳天まで駆け上がり、思わず悲鳴が漏れた。そのまま右手を食い干切られて持つて行かれても不思議ではない。必死で痛みを堪えながら、空いている利き手でナイフを逆手に持ち換えると、豹の首に大きく腕を廻して喉元を締め付けるように押さえ込んだ。

豹は唸り声を上げて猛り狂い、咬み付いた『獲物』を離そうとはしない。鋭い四肢の爪は容赦無く岬の身体を引裂いた。

血飛沫が宙に舞う。

暴れる豹に手を焼きながら、それでも岬は必死になって豹の頸動脈を探り当て、青白く光るナイフの刃を宛がった。

そのまま一気に腕を引くのは簡単だった。しかし、またしても岬はその刃で豹の喉を切り裂く事を躊躇ってしまったのだ。

指先が金属の細い鎖に触れ、何事かと思った岬は眼を凝らして豹の首を見詰めた。

「これ……は？」

精巧なブラチナの飾り細工に紅いレディ・ブラッド……暗い室内でも極僅かに漏れ出でる光を集約させて、それは獣と同じように毅然とした光を放っていた。

息を飲んだ岬の脳裏に、忘れようとしても忘れられない『彼女の横顔が浮かぶ。』

「……」

岬の手からナイフがするりと滑り落ち、乾いた金属音が辺りに鳴り響く。

「レイナ？ ……レイナなのか？」

溜め息混じりに言葉が漏れた。

岬の問い掛けに、豹の動きがぴたりと止まる。

それまで恐ろしい唸り声を上げていた豹の喉が急に静かになり、岬の頬に掛っていた荒い息もなりを潜めた。

「ど……して……どうして君なんだ？ どうして君が？」

出逢った時から、何故かレイナが捜していた人獣であることを心の何処かで予感していた。レイナには並みの人間には到底持てる筈の無い『気配を消す』術を心得ていたからだ。それだけでは無い。そもそも死亡していた人物が記憶を失くして現れる事自体、不可解で怪し過ぎるではないか。

『玲奈』の身体は、通常の処置では絶対に蘇生は不可能だった。

人獣の研究がどのレベルまで進歩しているのか岬には判らなかったが、過去の人獣達には、驚異的な身体能力と徒ならぬ強い生命力を保持していた事が報告されている。

盗まれた人獣の体細胞組織や違法の生体特殊技術等の高度な技術の総てが集結された事によって、再びこの世に『レイナ』が戻って来たのではないのか？

此処で豹の息の根を止めて遣る事は可能だった。だが、岬にはそれが出来なかった。勝敗の行方は、この豹がレイナのチョーカーを保持していたと知る以前から、岬は既に負けていたのだ。ナイフを手

放し、落としてしまった時点で、岬の命は豹であるレイナに託されてしまった。

「捕まえなきゃならない相手に……馬鹿だ。俺は……」  
溜息混じりに呟き、胸の奥が熱くなった。信じたくない事実を知ってしまい、岬は無性に虚しくなる。

彼女が本来の記憶を取り戻して、もう一度一緒に遣り直せればと微かな望みを抱いていた。彼女が普通の人間であったのなら、その夢も可能だったのかも知れない。

しかし、レイナは既にFCIと警察の双方で追われている。彼女には近付くべきではないのだと言う事くらい、既に判り切っていた筈だ。

不意に岬の腕から力が抜けた。豹の首に廻っていた腕が解けて冷たい床に力無く落ち、左手で防御していた岬の喉元が全くの無防備になって豹の眼の前に晒される。

「……殺れよ」  
咬み付かれた右手を震わせながら、岬は豹に向かって静かに言った。

自分にレイナは殺せない。

豹が低く唸りながら真紅の眼で岬を見下ろすが、既にその眼光に岬への殺気は消失していた。見ようによっては、獣が岬の心の内を推し量っているようにも見える。

豹は岬の行動を訝り、そして銜えていた右手をそつと離れた。

「？」

不意に豹が岬の負傷した右手を舐めた。血の滴っている腕を旨そうに舐めているのでは無い。それは動物が示す、いたわ労りの行動だ。

覚悟を決めていた岬は、驚いて眼を見開き豹を見上げた。

「解かる……のか？ 俺が」

名前を呼んだ途端に急に大人しくなった。一体、どうなっているのだろうか？ 豹に掛けられていた呪縛が、彼女の名前がキーワードになって解かれたとも言っのだろうか？

豹が顔を寄せ、呆然としている岬の頬を舐めた。その頬にも豹に搔かれた傷が残っている。雑食性の犬とは違い、肉食の猫科の舌は骨から肉を削ぎ摂る為に表面がヤスリのようにざらついている。

「痛たたつ……お、おい、止せよ」

岬の表情が僅かに和らいだ。

「これでよし」

岬は再び右手の止血処置を済ませると、傍に行儀良く座っている白豹に視線を落した。

「早く此処から脱出しないと……どうも奴等は撤収しているみたいだな。気配がなくなっている。奴等がそのまま俺達を閉じ込めただけで見逃してくれるとは思えないが……それにジンがもう動いている筈だ。俺は構わないが、君は何処かに消えた方がいい」

豹に向って岬は穏やかに話し掛けると、自分が突き落とされた天井部を見上げた。優に、マンションの三階以上に匹敵する高さだ。天井のドアは閉じられていたが、微かな光が矩形状に漏れ出ている。それ程嚴重な鍵がさされているようには見えなかった。

「鍵が掛かっているだろうが……君なら大丈夫だろう」

岬は立ち上がり、丁度ドアの真下に歩み寄ると、豹にくるりと背を向けた。脚を肩幅に開き、腰を軽く落す。

「俺を踏み台にしろ。手を貸す。思いつ切り俺を蹴って跳び上がれ」

白豹は両耳を後ろに寝かせて後退りした。まるで嫌だと言っているように見える仕草だ。

「愚図々している場合じゃないぞ。さ、来い！」

「……」

「レイナ！ 早く！」

白豹は身体を揺らして岬の足元に擦り寄った。ゴロゴロと喉を鳴らす。その仕草はまるで大きな白猫だ。

「い、いや、そうじゃなくて……」

岬は困って頭を掻いた。



「自由になるんだ。此処を出てあるべき処に帰れ……さ、早く行くんだ」

白豹の喉をひとしきり撫でてやると、岬は毅然とした態度を採った。猶も岬に擦り寄り寄ろうとして来る豹を、力任せに押し戻す。

建物の上空でヘリが旋回している音が聞えて来た。時間的にもジーン達がエア・ブレイズで駆け付けたと見てまず間違いないだろう。

「時間が無い。逃げる！ 見付かれば君は殺される！」

真剣な岬の心を読み取ってくれたのか、白豹は助走をつけると岬を踏み台にして見事に跳躍した。岬もタイミングを合わせて豹の身体を押し上げてやる。

一気に天井部の扉を突き破った。壊されたドアが岬のすぐ傍に落下するが、岬は一向に気に止めない。

「逃げる……レイナ」

岬は豹が消えて行った矩形状の光を見上げたまま、力無く両膝を突いた。突っ伏した状態で倒れ込むと、身体を捻って大の字に仰向けになる。極度の緊張から解放され、気が抜けてほっとした。彼女が脱出した今、岬は猛烈な激痛をも打ち消せるほどの安堵感と疲労感を覚えた。

意識が遠ざかり、そのまま目の前が真っ暗になる

\* \* \*

外は静かに霧状の雨が降っている。

岬はF C Iの処置室で、信じられない程の飛び上がる痛みを目を覚ました。

「おはよう。やあーっと気が付いたか？ 君はまる一日眠っていたんだぞ？ しかし、君でもヘマを遣らかす時があるんだな？ チョッと安心したよ」

傷口の消毒をしながら、看護師のエドゥリンが笑いながら声を掛

けた。

「エドウ……っだああツツ！ 痛つてええー！」

痛みが脳天まで駆け上がる。怪我をした時点よりも時間が経過した後の方が一層痛む理不尽さに岬は顔を歪め、左手で右手を庇って蹲まった。

「うん？ ああ、この薬はチヨツと沁みるからなあー。はい、手え退けて？」

エドウリンは岬の左手が邪魔だとばかりに押し退けると、猶もたつぷりと綿花に薬を滲み込ませて傷口を容赦なく撫で回した。

「くくく……沁みないの……無い？」

涙眼になりながら、岬は左手で右肘を押え付けて呻いた。出来る事ならこの情容赦の無いエドウリンの処置からサツサと逃げ出したいくらいだ。

「無い。子供みたいな事を言うなよ。この傷は巷で噂の大型獣に襲われたものだな？ 安心しろ。処置が早かったから感染の心配は無い。けど、君も相変わらず無茶をするなあ。その傷、二度も咬み付かれた形跡がある。一歩間違えれば手首ごと持って行かれてもおかしくは無かったぞ？」

「ああ」

岬は判っているとばかり、エドウリンの言葉に頷いた。敢えて手首を失うのを覚悟して、利き手でない右手を出したのだ。

エドウリンが傍に置いていた機材のスイッチを切った。インターセプタの処置を受けている者が、無意識にそれを起動させない為の抑制装置だ。治療中に、該当者である岬がインターセプタを起動させて、暴れ出したら堪ったものでは無い。

「終わったぞ。明日も消毒に此処へ来い。いいな？」

エドウリンが処置を終えて手を止めたのを確認した岬は、ほんの僅かに苦痛が軽減されてほっと胸を撫で下ろす。

「ああ、自分で処置出来なかつたらまた来る」

そう言うと、岬はベッドの縁に腰掛けて自分の姿を見回した。

豹に襲われたと言うのに、傷は思っていたよりも軽症だ。深手らしい深手は見当たらない。不思議に思つて辺りを所在無く見回していた岬の視線が、ハンガーに掛けられている自分の上着で止まった。上着は無惨にもズタズタに引裂かれており、その形状を殆んど留めてはいなかった。岬はハンガーからそれを筆り取ると、丸めてダストボックスに放り投げる。

「判っているだろうが、それを着ていたからこの程度の怪我で済んだんだぞ？」

エドウリンが顔を顰めた。

「着ていなかっただりしてみろ？ 今頃食われて棺桶か、良くってバイオノイド決定だな」

「ああ……これからは装甲服アイマースーツでも着ておくよ」

軽口を叩くが、冗談でも笑えなかった。言葉とは裏腹に、今の岬はこの上なく落ち込んでいる。レイナの正体を知つてしまい、そして彼女の存在が余りにも現実と懸け離れていて、遠いと感じてしまつたからだつた。

恐らく、彼女が大型獣の事件を引き起こしていた張本人だろう。彼女を捕らえるか、葬りでもしない限り犠牲者の数は増えて行く。喩え犠牲者達が犯罪者ばかりであつたとしても、殺人は殺人だ。しかし、今ならこの事実を知っているのは岬だけなのだ。

岬は処置室のベッドから降りた。思ったよりも消耗が激しいのか眩暈を起こしてふらついてしまう。

「おっと……大丈夫か？」

見兼ねてエドウリンが岬を支えた。

「あ、ああ……その……栄養剤か何かあるか？」

「アリステア製薬のなるぞー？」

エドウリンが待つていましたとばかりに嬉しそうに顔を綻ばせた。

「はああ？ アリステア製薬うう？」

岬は顔を顰める。

「また正規契約会社じゃないのを仕入れたな？ お前、何度嚴重注意を受けても懲りない奴だな……今度は一体幾ら積まれたんだよ？」  
エドウリンは全く悪びれた様子も無く、自分の口元に人差し指を持って行った。

「しいー。へへっ、医局長には内緒だ」

岬は呆れて首を横に振る。

「あと、症例が十程集まればいいのだが……」

平気で言つてのけるエドウリンに岬は猶も呆れた。

「断る。お前の実験台モルモットにはなりたかねーからな」

「そうかあー？ そりゃ残念」

岬の言葉にエドウリンはケロリとして肩を竦めた。

「何言つてる。程々にしておけよ。じゃ、な」

「ああ、そうだ、お前のインターセプタ……」

岬が軽く一睨みして踵を返すと、その背中へ向かってエドウリンが思い出したように声を掛ける。

「うん？」

「ルシアン技師からの伝言だ『近いうちに診断に來い』つてよ」

「解かった」

岬は片手を上げると、覚束ない足取りで処置室を後にした。

## 第12話 戻れない過去

帰宅した時は、既に日付が変わっていたが、岬の身を案じた妹の環と父親の雅哉は、まだ休まずに起きて待っていた。

玄関のドアを開けると、同じ職場に居るにも拘わらず滅多に自分と顔を突き合わさない父親の姿を見た岬は、一瞬怯んだ。

「何だ？ 二人共揃って。まだ起きてい……」

「『何だ？』じゃあないよう！ ジンさんから連絡があつて……つもおお！ 心配したんだからねえっ！ お兄の馬鹿ッ！」

暢気に構えていた岬の言葉を、環の怒った声が遮った。環は真っ赤になつて口元を引き攣らせ、眼に一杯涙を溜めている。

「つて、俺は別に心配してくれつて……言つてないぞ？」

喉元まで出掛つた言葉を岬はぐつと飲み下した。

自分の身を案じて待つてくれて居たのは判るが、正直、今はそつとしておいて欲しい気持ちの方が強い。待つてくれていた二人の険しい表情から察すると、ジンは岬が単独で潜入捜査を行った事を伝えてしまつたようだ。

余計な事を……と思う。ジンの生真面目過ぎるあの性格を、どうにかして貰えないものだろうか。ジンの事が鬱陶しくなり、少々苛立つてしまつた。そして、目の前で自分の身を案じて心配している二人の姿を見ているうちに、段々と居心地が悪くなつて来る。

岬はジンのお節介の意図が読めて来た。ジンは、岬に対して『無茶をするな』と暗黙の警告を遣つたのだ。個人的に直接注意した所で、岬が素直に聴き入れる筈は無いと踏んだジンは、岬の家族である父親の雅哉と妹の環の存在を逆手に取つたのだ。

不機嫌になつた岬は、黙っている雅哉と視線が合い、雅哉は軽く目配せを遣して来た。

それは雅哉が岬へ遣した『話がある』と言うサインだ。普段顔を合せる機会が無い雅哉から、珍しい事もあるものだなと思つて訝っ

た。しかもその目配せは、同時に『環に席をを外させる』とも伝えられている。

余程の事だなと察した岬は、ジンへの苛立ちも忘れてすぐに雅哉の指示に従った。

「わ、悪かったよ。心配掛けて……その、署長に報告があるから、環は先にオヤジン家戻ってもう寝ろ」

「『署長』って、お父さんじゃないの？」

環は、自分達の父親に他人行儀に振舞っている岬を見て不思議がった。

「仕事上での話なら、この場合オヤジじゃ無い。上司なんだよ。いい加減お前も頭を切り替える」

そう言うと、岬は指先で環の額をピン！ と弾いた。

「痛ったあーいっ！ お兄っ！」

環は恨めしげに額を押えて睨み付けた。健康色に日焼けした環の額に、岬から弾かれた痕が薄っすらと赤く付いている。

「ほら。俺も早く報告して休みたいんだ」

岬は肩から吊るしている右手を指差して、わざと困った表情を浮べた。環はそんな岬に対して、猶も口を尖らせて不満あげな顔をするのだが、雅哉と視線が合った途端、急に素直に引き下がった。

「解かった。じゃあ、おやすみ」

環は静かにドアを閉めて、岬の部屋を出て行った。

「何なんだよ？ アイツ、俺が何を言っても訊きやしないのに」

環の態度の変わりように納得がいかず、今度は岬が口を尖らせた。

雅哉は二人を見比べ、口元を僅かに綻ばせて苦笑する。

「さて……と。経過を聴かせて貰おうか？」

雅哉は徐にソファに身体を預けて脚を組むと、膝の上で両手を浅く絡めて寛いだ。

「勿論、報告せずにお前の胸の内に留めて措こうとしている事も全てだ」

表情は穏やかなのだが、雅哉の岬を見る眼は鋭い。余裕の貫禄さえ窺えて、まるで取調室の現役刑事を彷彿とさせてくれる。

「嫌だと言ったら？」

仁王立ちに立っている岬の表情が硬くなり、刺すようなキツイ視線を雅哉に送り返した。素の目付きが悪いのが一層悪くなる。

雅哉は大きく肩で息を吐き、遣れ々といった表情で首を横に振った。実の息子に凄まれても怖くは無いが、此処で自分が引き退らなければ、事情を話す処か単なる親子喧嘩で済まされてしまいそうなよう相だ。

「まあ、座れ。私もお前に話さねばならん事がある。今回の件さえ無ければ、私が自分の墓まで持って行こうとしていた事だ」

「何だよ？ 急に改まって」

「今度はお前が自分の墓に持って行け」

「だから、なにを？」

促されて反対側のソファに座り、岬も脚を組む。どうやら一応は聞く耳を持って居るらしい。

「お前の……母親の事だ」

途端に岬の顔色が変わった。

「は、今更何を言い出すかと思えば……良いよもう！ 俺を身籠った時にグレネイチャに襲われてだか不倫してだか知らないが……こんな眼をして産まれて来た俺に絶望して自殺したんだろう！ それだけのことじゃないか！ 俺のせいなんだろう？」

岬はカツと頭に血が昇った。

グレネイチャ

宇宙世紀の初頭に一部のセレブ達の間で流行した、人工的に掛け合わせて創られた奴隷難民達の事だ。

彼等に人権は認められてはいなかったが、人間により近い存在であったが為に『人であること』への権利を求めて幾度と無く人間に武力抗争を挑んだ。彼等は時として宗教や政治に利用され、弾圧され、殺戮された。

やがて人としての権利を認められたものの、彼等の持つ美しい銀の髪と蒼い眼。そして赤銅色の肌は優性遺伝の為、彼等との間に産まれた子供は必ずその特徴を受け継いでいた。美しいと持て囃されていた反面、彼等が『奴隷』であると言う史実から、忌み嫌われる事となる。何世代経った今でも野蛮な種族だと誤解され、他人から時折理不尽な思いをさせられている。

赤銅色の肌は持っていなかったが、日焼けしたような浅黒い肌に蒼い瞳を持っていた岬は、物心付いた頃から常に他人……特に大人達から『グレネイチャ』だの『雑種』だのと言われて後ろ指を差されて来た。肌の色は自分ではそれ程気にはならなかったが、瞳の色はカラーコンタクトを使用していなければ、人前へは出られない程の強いコンプレックスを持っている。

雅哉は静かに岬を見詰め、岬は雅哉の穏やかな視線を避けるようにして顔を背けた。

「くだらん……誰がそんな事を言った？」  
「子供の頃から周りの皆がそう言っていた。俺の眼の色はグレネイチャが持っているものだ……」

俯いた岬は、左手で自分の顔を片方覆った。雅哉の話題で忘れかけていた事を蒸し返されてしまった。自分の眼にひと際強くコンプレックスを抱いていた。在りのままの自分が受け容れられずにいた頃の、昔の厭な自分が再び現れそうになる。

「そうか」  
雅哉は小さく呟いた。まるで岬に同情しているような言い方だ。  
「そんな言い方は止めてくれよ。それだけの事じゃないか。それだけの……」

投遣りに言い放ったが、終わりの方は尻すぼみだった。岬自身気付かないうちに縋るような視線で雅哉を見詰めている。

自分は本当に『グレネイチャ』なのだろうか？ 今まで怖くて雅哉に訊ねることが出来なかった。それは雅哉本人の口から肯定されたくは無かったからだ。



一言雅哉が肯定さえしてくれば、岬は今まで他人から受けた中傷を覆し、総ての事から救われるのだと真剣に思った。

「今回の件、三島の報告から何も聞かされてはいないのか？」  
期待していた雅哉から、見事に肩透かしを喰らった岬は慄然とする。

「過去二十数年前にもこんな事件が……？」  
言い掛けた岬は、はっとした。

幾らFCI部長の三島と桐嶋署の雅哉が個人的に親しくても、外部の者である雅哉が何故その事を知っているのか？

それは雅哉が当事者だからではないのか？

岬の様子を察して、雅哉はそつと眼を伏せた。

「私は……最後まで護つては遣れなかった……お前には同じ道を選んで欲しくは無い。いいな？」

「どういう意味だよ？」

岬の身体が戦慄いた。

「それだけだ」

雅哉は岬の問い掛けを無視して腰を上げる。

「待てよ！ どういう意味だつて！ それに報告は……」  
つられて岬も立ち上がる。

「もう良い。報告なら三島とジンから訊いている。お前の事だ。初めから素直に在りのままを報告する心算は無かつただらう？」

「……」

見透かされてしまい、ぐうの音も出ない。岬にとって、雅哉は父親である事を差し引いても鬼門である。話を有耶無耶にする事が出来ない唯一の人物だ。こうして同席しているだけでも息苦しくなってしまう。

だから普段は余程の事が無い限り、極力会わないようにしている。本当なら、同じマンションで暮すと言う事だけでも願い下げなのだが、雅哉は署長と言う権限を行使して岬を自由にさせる事は無い。

いい年をして、雅哉は子離れが出来ていないのか……？ とも考

えられるのだが、普段の雅哉を見ると、岬に執心していたり、口喧しく指図する訳でも無いので、どうやらその選択は違っているように思える。

恐らくは息子である岬の監視。だが、何故そんな事をする必要があるのだろうか？

「凶星か」

ムツとなって口を噤んでしまった岬の前に、雅哉は余裕で口元を綻ばせた。

「イチイチ煩いんだよオヤジは」

「そうか？」

凄んで突っ掛かる岬を、雅哉は軽く受け流す。

「一つ訊かせてくれよ。拘留中のラルをどうして釈放した？」

「ラル？ …… ああ、お前が連れて来た臓器密売人か？」

「ああ」

岬は雅哉に視線を逸らさずに頷いた。

「妙な事を訊くな？ あの男はFCIが連れて行った。何でも重要

参考人だと言って」

「え？」

「確か、三課の者だったな？ 前にお前が所属していたらどう？」

「三課？」

薬物関連を専門とする三課は岬が以前所属しており、現在も岬の上司である田幡課長が在籍して居る部門だ。

「また、あの女……」

岬は言いようの無い強い憤りに襲われた。彼女が関った事件には、やたらと黒い噂が後を絶たない。

「此方はFCIの内部事情までは与り知らぬ事だ。何があったのかを訊ねるのは、相手を間違えているぞ？ まあ、良い。此処に来たのは、私なりにお前に一言伝えたかっただけだ。『同じ過ちを繰り返すな』とな」

「……………」

そして無然として突っ立っている岬の傍を通り過ぎる時、雅哉は岬に追い討ちを掛けるように耳元で言い放った。

「お前の母親は……優衣は自殺なぞしてはおらん……私が……私が殺した」

「なん……だつて？」

一瞬、自分の耳を疑った。

「い、今……今、何て言った？」

「彼女を殺したのは私だ」

雅哉は岬の目を真っ直ぐに見て、きつぱりと言い切る。

「何だとオ？」

岬の何かが切れた。思考よりも先に、素早く左手が雅哉の胸倉を乱暴に掴み上げる。

「自分の女を……母さんを殺した？ 仮にも警官が……それで……」

それでもアンタは今の地位にのうのうと甘んじて居られるのかよ？」

「言い訳はせん。お前がわしを軽蔑しようが、見下そうが、どう見ても構わん。」

岬の気迫には一向に臆さない雅哉の態度に煽られてカッと頭に血が昇り、胸倉を掴み上げていた岬の利き手にぐっと力が籠る。

「言い訳さえ出来ないのかッ！」

「今更言つてどうなる？ お前に言い訳をしても、彼女は……優衣はもう二度と戻っては来んのだ」

雅哉は岬から胸倉を乱暴に掴み上げられたまま、溜め息混じりに呟いた。澄んだ雅哉の栗色の瞳が、真っ直ぐに岬を見上げる。

当時警察官だった雅哉が、実は人殺しの犯罪者だったと言つのだろうか？ そんな馬鹿な事が在って良いものか！

岬の顔が引き攣る。

「馬ッ鹿野郎！」

岬は固定していた右手を乱暴に外し、雅哉を殴った。手加減する為に咄嗟に右手が出てしまったのだ。

雅哉は岬の拳を避けようとせず、まともに食らってよめいた。背中から壁にぶつかり、そのまま壁伝いに座り込んでしまう。

「く……傷の痛みよりも心の傷の方が痛い……か？」

「ああ！ その通りだよ。クソ親父！ ……痛っ！」

岬は雅哉に食って掛かると、次の瞬間には顔を顰めて右手を庇った。傷口が再び開き、見る見るうちに血が包帯の表面まで滲み出して来る。

思わず身体を屈めて跪いた。鎮痛剤を投与されてはいるが、思っていたよりも余り効果が無かったようだ。包帯に滲んだ血は包帯全体に広がり、猶も拳の先から滴って岬のシャツとスラックスを朱に染め、フローリングの床を汚した。

「此処で……今更此処で事情を説明しても、お前に何が解ると言うのだ？ 頭に血が昇っている奴とまともに話をする心算は無い」

雅哉は毅然とした態度を崩さず、何事も無かったように口元の血を片手で拭くと、岬を残して部屋から出て行った。

岬は苛々しながら乱暴に窓を開け、ベランダに出た。霧状の雨はまだ降り続いていたが、とにかく雅哉が居た空気の悪い部屋には、一秒として居たく無かったし、自分の頭を冷やす為でもあった。

『同じ過ちを繰り返すな』 雅哉の言った言葉が頭に焼き付いて離れない。

あれはどういう意味なのだろうか？ あの言い方はまるで……まるで雅哉が愛した人が 自分の母親が、おぞましい人獣だったとでも言っているようではないか。

岬は顔を引き攣らせながら、痛む右手を拡げて胸の前まで持ち上げると、真っ赤に染まった血染めの包帯に視線を落した。

確かに、物心付いていた頃から人並み外れた反射神経を持っていると言っ自覚はあった。しかし、それは単に運動神経と集中力に恵まれていただけの事だと思っていた。

まさか二十年以上も前にあった人獣事件と自分との接点があった

とは、未だに信じられない。

その事件は、ここよりもずっと北端の地方都市であった事件だったと記録に残っていた。なら、此処まで逃げて来たのだろうか？

岬を身籠った母親　優衣と一緒に？

優衣が岬の容姿に、浅黒い肌を持ったグレネイチヤの面影を見い出して、自らの命を絶つたのだと聞いたのは、雅哉からでは無い。子どもの頃、大人の身勝手な噂話を岬が偶然聞いてしまっただけなのだ。今まで自分の存在のせいだと罪の意識を感じていた岬の心は幾分か晴れたが、新たな事実を雅哉本人から聞かされて、一層憂鬱になってしまった。

岬が今回の件に関与するのに異論を唱えていたのは、何もジンだけではない。玲奈を知っている九課の全員が多少なりと反対していた。しかし、三島は敢えて岬を選び、父親である雅哉もそれに賛同していたのだ。

「何故だ？」

三島達の真意が見い出せない。自分の上司であるFCIの三島は、この真相を知っていたのだろうか？

虚ろな視線が宙を彷徨った。

「あの人が知らない筈は……無いな」

曇って星が見えない夜空をぼんやりと見上げた。霧状に降頻る柔らかな雨が、岬の身体を包み込む。

岬は胸のポケットから煙草を取り出して銜えた。重苦しい暗雲に、つい自分の気持ちを重ね合わせてしまい暗くなる。眼を閉じると一昨日の事が、まるでたった今あった出来事のように鮮明に蘇ってきた。

レイナは無事に逃げ出せたのだろうか？

駆け付けたジン達からは、白い豹を目撃したとの報告は無かった。

きつと彼女はジェフの居る所へ行ってしまったのだろう。

ジェフの許へ……

俄かに岬はジェフに対して嫉妬を覚えた。玲奈の生前、彼女に鬱陶しいくらいのレストランカー行為を繰り返していた男だったのだが、いざ逆の立場に立たされてしまった今となっては、ジェフの羨望の気持ちも何となくではあるが、判るような気がして遣り切れなくなってしまう。

「ん？」

煙草を一本吸い終えて、やっと落ち着きを取り戻せた岬は、ふとすぐ傍で何者かの気配を感じた。それはたった今まで無かったものだが、殺気は全く感じられず、寧ろ岬を慕っているような穏やかな気配だ。

まさか……？

岬は恐る々右後方を振り向いた。その視線の先には、白い豹がベランダの隅で、小首を傾げて此方を見ている姿があった。

二本目を吸おうとしていた岬の手から、思わずぼろりと煙草が落ちる。

「な、な……何で此処に居るんだよッ！」

思わず叫んでしまい、慌てて片手で口を押える。時間的にマンシヨンでの大声は厳禁だし、一階下には口喧しい環がまだ起きて居る筈だ。もうじき雅哉も戻っている頃だろう。

「お兄いゝうるさいい。どうしたのお？ 大声出してえー」

下の階から半分寝惚けた環の声がした。

「なっ、何でも無い。け、携帯だ。ま、まだ起きているのか？ さっさと寝ろ」

咄嗟に取り繕ったのだが、部屋には岬独りだけだ。わざわざ雨の降っている外に出て携帯を掛ける理由が無い。岬は環に答えて『しまった』と後悔したのだが、どうやら環は岬の矛盾している答えに気付いてはいないようで、彼女は『ふうん』と相槌を打っただけだった。それよりも、岬から子供扱いされた事の方が納得出来なかつた。

たらしい。

「もー。環は小学生じゃないんだからねっ？　いつまでもコドモ扱いしないでよ……あ？　お父さんが帰って来た。お帰りー」

雅哉が戻ったようだ。環は雅哉を迎えようと玄関へと急いだのだろう。パタパタと小走りするスリッパの音が遠去る。

数秒後、戻った父親の様子に気付いて慌てた環は、声にならない悲鳴を上げて、再びベランダを指して駆け戻って来た。

「お、お兄！　お父さん殴ったの？」

環の問い掛けに、岬は鬱陶しそうに『ああ』と短く肯定する。

「ひ、ひどいよ！　どうしてそんな事するのよ！」

事情の判らない環が岬を責めた。後半は涙声だ。

「判った、判った。判りました。話中だからあっちに行ってる」

「お兄の馬鹿あッ！」

涙声で怒鳴った環が、窓を力任せにぴしゃりと閉めた。

これは当分環から嫌われるなど岬は思った。そして深い溜息を吐いて肩を落とすと、気を取り直して白豹に向き直る。

「説明してくれよ……って言っても喋れない……か」

白豹は喉の奥をゴロゴロと鳴らし、上目遣いで媚びて来た。犬猫の動物は平気だが、流石に豹となると無意識に身構えてしまう。

「何故ジエフの所に戻らない？　言った筈だ。在るべき処に帰れと。此処は君が来るべき所じゃ無い」

小声で怒鳴ったが、効果は全く無かった。寧ろ白豹は前脚を交差させて優雅に身体を倒して寝そべり腹を見せる。岬にはそれがリラックスのサインに見て取れた。

「お、俺なんかの処に来る事は無い。帰れ！」

自然と声の上擦って大きくなった。岬はそう言い放つと部屋に戻って窓の鍵を掛けてしまった。背中越しに、窓に素早く遮光フィルムを掛けたのだが、擦りガラス状になった窓の片隅に、白い影が映っている。

まさか、人の姿に戻れなくなったのだろうか、急に不安になっ

た。ジェフではなく、自分の許を訪ねて来たレイナを内心嬉しく思った反面、彼女に近付くのは駄目だと二の足を踏むもう一人の自分が現れて、心の中で鬨ぎ合う。

\* \* \*

現場検証で、岬は当事者として惨事の起こった港のガレージに呼ばれていた。

二日以上経っていても夥しい血痕は干上がらず、コンクリートの至る所に穿たれた銃弾の跡が生々しく残されている。

亡くなった被害者の状況が判るように、床には白いチョークで幾つもの人型が描かれていた。

「チカ……」

岬はその中の、ひと際小柄な人型の跡を黙って見下ろした。彼女の首には獣に咬み付かれた傷痕が残り、骨を折られて絶命していた。あの状況下では白豹のレイナが手を下したとしか考えられない。

美人で小生意気だが、男に対しては少し頼りない風を装う事が出来る強かな女だった。特別スタイルが良いわけでは無かったが、相手に自分を魅力的だと思わせる才能には恵まれていた。翳が付き纏うレイナとは違い、生きる事に貪欲で自分に素直な女だった。事実、チカから強引にキスを強要されたが、レイナがその場に居合わせていたにも関わらず、悪い気はしなかったのだから。

「……さき、岬？ おい？」

「ん？ あ、ああ……」

ジンに何度か呼ばれて我に返った。間の抜けた岬の返事に、ジンが眉を寄せて顔を顰める。

「大丈夫か？」

「何が？」

「そこに居た被害者<sup>ガイシヤ</sup>、お前の顔見知りだったよな？」



ジンは多量の血糊が付いた床に描かれた、チカの人型に視線を落とした。岬の偽装呼び出しを快く承知して、身元引き受けに桐嶋署まで足を運んで来た事がまだ記憶に新しい。

「知っている奴が殺された現場には何度か出くわしたが、慣れるものじゃねーよな」

「……」

岬は押し黙ったまま頷く。

「ジン！ これ」

鑑識のジュディがビニール袋に入ったカード型のコントローラーを振って、ジンを呼んだ。

「ああ、今行く。おい岬？ お前も来い」

「ちよっ？ おい！」

ジンから腕を強引に引かれ、二、三步つんのめってバランスを崩しそうになる。

「止せよ。俺はまだこっちの検証が終わってない」

岬は迷惑そうにジンの腕を振り払おうとするが、ジンはそれ以上の力で岬の腕を引っ張った。

「そのまんまだと、お前どうにかなっちまいそんな顔をしているぞ」

「お……大きなお世話だ！」

岬はジンに言い当てられて半ば不愉快になりながら、彼に引き摺られるようにしてその場を後にする。

「どうした？ 何か見付けたのか？」

「はい」

ジュディは手にしていたカード型コントローラーをジンに渡す。

初めから壊れていたのか、それとも壊されたのか……コントローラーは無惨に真ん中から二つに折られていた。

見てくれは何の変哲も無い、何処にでもありそうなコントローラーだが……？

「放せつてば！」

岬はジンの腕を乱暴に振り解き、乱れた襟元を正す。

「何かの……制御装置？」

ジンは岬を無視して、受け取ったコントローラーを珍しそうに見廻した。

「ええ。この上の階のダストボックスの中にあっただの。ガレージの所有者に訊いても知らないそうだし……で、照合してみたら手配中の何人かの指紋が検出されたわ。その中から捜査リストにあったジエフ・ランディアの指紋を検出したの」

にっこりと笑ったジューデイは片手で頬に掛かった長い前髪を耳に掛け、細い銀縁のメガネをくいっと指先で押し上げる。

「お手柄じゃないか。機能は完全に停止しているのか？」

「さあ？ これだけ壊れているんですもの。そうじゃないの？」

ジューデイはジンの言葉に微笑みながら、小首を傾げて肩を竦めた。ジンは躊躇する事無く袋の上からスイッチをランダムに押ししてみた。

一呼吸間があつて、コントローラーは赤い点滅を開始した。起動ランプが何度目かで緑色に変化する。

「へえ？ スゲー。まだ生きている」

廃棄されているにも関わらず反応したコントローラーに感心すると、物珍しそうに猶も興味本位でスイッチを押してみる。

「はうつ？」

ジンの手元を見詰めていた岬に、突然大きな耳鳴りと突き刺すような激しい頭痛が襲った。

「岬？」

ジンをはじめその場に居合わせた者全員が、何事かと驚いて顔を上げ、苦しんでいる岬に眼を留める。

「うあああー！」

「おいっ！ 岬？ どうしたっ！」

堪え切れない痛み、岬は頭を抱え込んで倒れた。身体を丸めて狂ったように激しく頭を打ち振り暴れ出す。

慌てるジンの声とジューデイの悲鳴が聞え、岬の目の前が真っ暗に

なる

\* \* \*

「……さき……岬……」

誰かが自分を呼んでいた。

岬はゆっくりと瞼を開く。頭の中に靄が掛かったようにぼんやりとしているが、天井が高い位置にある事から、自分が床に仰向けに寝そべっているのは理解出来る。

「此処……は？」

やっと眼が覚めた。同時に起き上がるうとするのだが、上半身の自由が利かない。

「気が付いたか？」

頭の上で声がした。

岬は呻きながらゆっくりと上体を起こす。後ろ手に電磁手錠を掛けられた上、嚴重にロープで縛り上げられていた。首にもロープが通してある見た事も無い凝った縛られ方に、岬は変に意識して赤面する。

「ああ……み、妙な縛り方しやがって。何だよコレは？ S Mじゃねえぞ」

岬は声の主を睨み付けた。

「妙な縛り方じゃない。ちゃんとした罪人の縛り方だ」

先程の声の主がすぐ傍に屈み込んで囁いた。

「ざ、罪人？ また妙な旧世紀の時代劇とやらに感化されたな？

このヲタク野郎」

「おうよ。それだけ嚴重に縛り上げれば身動き出来ないだろ？ 何でも罪を犯した咎人にやった旧世紀の拘束術だ」

「あつっ！ 痛ってええー！ 怪我人に随分なコトするじゃないか」  
右手を不用意に動かしてしまい、強烈な痛みが脳天に駆け上がった。負傷している右手までも包帯の上から容赦無く拘束されている。

「随分なコトって……それはこっちの台詞だ！ 痛てて……」  
ジンの声が急に弱気になった。どうやら何処か怪我をしているようだ。

岬は訝りながら、立ち上がったジンを眼で追い、そして辺りを見回した。

何人もの顔見知り達がそれぞれに顔や手足を腫らし、応急処置を受けていた。目の前に居るジンの口元が紫色に腫上がっている。彼が皆の中でも最も汚れの度合いが酷く、いつも粹に着こなしているブランドスーツが埃と機械油で汚れていた。

嫌な予感が岬を襲った。自分の意識が飛んでいる間に、なにが起こったのは判断出来る。

「ジン？ それに皆？ 何があっただ？」

「何があっただあ？ それはコッチが訊きたいね？」

状況が把握出来ず、辺りを見廻す岬にジンが喰って掛かった。しかし、岬が惚けて冗談を言っているようにも見えない。

「お前、覚えていないのか？」

「何を？」

岬はその場で胡坐を掻いた。

「何を……って……」

ジンは呆れ、一瞬口を閉ざしてしまった。

「こ、これは皆、お前が遣ったんだぞ？」

顎を杓って岬を促した。

「ジョイスは鎖骨の骨折、門田は左肩脱臼だ！ ……他に何人も怪我をした。俺だって危うく門田が庇ってくれなかったら……全く。一撃必殺とはよく言っただぜ。生身の人間とは言え、素人なんかじゃない。皆腕に覚えのある者ばかりなのに、お前は簡単に相手の動きを封じ込めやがった……」

ジンの喉が鳴る。

「はあ？」

岬はジンの言っている意味が理解出来ずに首を傾げた。

「『はあ？』 じゃねーよ！ お前、ふざけるなよ！ これだけ皆に怪我させておいて」

息巻いて怒鳴りたてるジンの肩が激しく上下する。

どうやら岬は意識不明のままインターセプタを発動させ、誰彼見境無く襲い掛かってしまったらしい。インターセプタは、対サイバノイド用に開発された白兵戦迎撃シールドだ。生半可な銃撃では掠り傷さえ負わせられない。言い換えれば、インターセプタを起動させて生身の人間を相手にすれば、意図も簡単に殺人が可能なのだ。岬が殺人者にならずに済んだのは、岬と同じくインターセプタの処置を受けていたジン達数人が、暴れる岬から生身の彼等を庇い、辛うじて取り押さえたからだった。

「こいつ……」

ジンはじつと岬を窺い、そして机上で無惨に粉々になったコントローラーに視線を遣った。暴れる岬を押え付けながら、直感的に因果関係を見抜いて苦し紛れに壊した物だ。本当にそれが岬を狂わせたのかは未だに信じ難く定かでは無い。

「マジで……覚えていないのか？」

念の為、もう一度だけ確認する。

「ああ。何があったのか教えてくれ」

次第に岬の頭の中がハッキリして来る。

「いきなり頭を抱えて蹲ったと思ったら、急に暴れだしたんだ」

「俺が？」

岬は記憶の糸を手繰るように、虚ろな眼をして遠くを見る。

「ああ。お前一人を押さえ込むのに大の男が三人掛りだ。特にお前の場合には命懸けだ」

通常なら、インターセプタの処置をしている者が異常を来たしたり、敵対する側に寝返り裏切った場合、上司の承認を得る事無く各自の判断での殺害を許されている。勿論、岬と同じく処置を受けているジンにとっても、立場は岬と同様だ。

事実、岬をもう諦めると言った声も上がっていた。

「あの時……急に立って居られないくらいの酷い頭痛がして、目の前が真つ暗になったんだ」

岬は気を失う前の事を思い出していた。

「そうだ。あの時、ジンがコントローラーを触っていて……」

「壊れていると思っていたのにスイッチが入った」

岬の台詞をジンが続けた。それから後の事は岬自身の意識が飛んでしまい、全く身に覚えの無い事だ。

「おかしくなったのは俺だけか？」

岬は真つ先にインターセプタ増幅チップの異常を疑った。

「ああ、他には誰も居なかった。お前だけだ。一体、どうしたんだ？ 今日ほどお前を怖いと思った事は無かったぞ？ お前が敵に廻るのだけは願い下げだ」

正気を失った岬とインターセプタでまともに対峙するとは思ってもよらなかつた。ジンは暑さと息苦しさに片手でネクタイを引いて弛める。極度の緊張で汗だくだ。

岬は左手で額を覆った。

「俺だけが反応したのか？」

増幅チップのエラーか、或いは特別な『血』を持つ者だけに？

岬は机上の壊れたコントローラーをじつと見詰めた。もしかするとレイナをコントロールするのに使われていた物ではないのかと思つた。そして、この装置が壊れた為に、彼女が元の人間に戻れなくなっているのかも知れないと。

レイナはあれからずっと岬の部屋のベランダに居続けていた。もう数日が過ぎようとしているのに、遮光フィルタを掛けたガラス越しの白い影は微動だにしていない。

岬は意地になって彼女を拒んでいる自分自身に罪悪感を抱いていた。あの様子では帰る気配も無いし、食事さえ全く摂ってはいないだろう。畏だとしても、自分を頼って来ていると言うのに、自分は何んて酷い仕打ちを彼女にしまったのだろうか。

そして、もう一つ気懸かりな事があつた。岬は腑に落ちない疑問

を抱いて、負傷して運ばれて行く仲間達を見遣った。

「ジン」

「うん？」

「何故俺を殺さなかった？ 通常なら……」

「簡単に言うな！」

ジンは岬の言葉を遮った。

「ふんっ……ただだ」

口を尖らせてぼそりと呟く。

「あ？」

「聞えなかったのかよ？ 何度も言わせるな。俺には出来なかっただけだっつってんだ。出来るかよ！ そんな事！」

苛立ち紛れに口走った。

インターセプタの処置を受けた者は、同時に素手で簡単に殺人実行が可能だと言う不名誉なリスクを負う事になる。在ってはならぬ許されない行為だ。その回避として、仲間同士での監視下でその力の行使を嚴重に管理されている。二人一組になって行動するのはその為だ。もし、インターセプタに異常が発生し、今回の岬のように周囲の者の生命を脅かすと判断された場合、パートナーの手で殺されても文句は言えない。事実、岬を取り押さえている間『諦める』と言う声が出て居たが、ジンはそれを許さなかった。

「ジン」

「あんだよ？」

ジンはまだ何か文句があるのかと言わんばかりに喰って掛かった。

「助かった。借りが出来たな」

「き、気持ち悪いコト言うなよ」

構えていたのに素直に岬から謝られて調子を狂わせたジンは、居心地が悪くなり、逆に素っ気なく言葉をはぐらかす。

岬はそんなジンに表情を緩めると、視線をテーブルに戻した。その視線の先には壊されたコントローラーがある。

「ジン」

携帯で遣り取りしていたアッシュがジンを呼んだ。右目の周りが紫色に腫上がっている。彼も岬に危害を加えられた一人だ。アッシュは寄って来たジンに手短に耳打ちした。

戻って来たジンはゆっくりと首を横に振った。

「お前に出頭要請だよ」

ジンは屈み込むと、岬の顔を間近で覗き込んだ。

「な、何だよ？ 俺、そんなシユミ無いぞ？」

岬が少し顔を赤らめて思わず顎を仰け反らせる。どうやら岬の瞳には、先程の『狂気』は既に微塵も残ってはいないようだ。

「馬鹿。そんなんじゃねえよ。ほら、手エ出せ」

正気に戻った岬を確認すると、ジンは軽口を叩いて岬の背後に廻って縛っていたロープを解いてやる。

「痛ててっ！」

右手の傷口が再び開いて以前よりも悪化していた。右手は当分満足に遣えそうにはないだろう。岬は顔を顰めて手首に付いたロープの痕を頻りに撫でる。

「誰からの要請？」

「上のお偉いさん等しか居ねえだろ？」

ジンは肩を聳やかして、知らねえぞという素振りを見せた。

「早っ！ 今の件で？」

岬は驚いてジンを見上げた。

「いんや、それとは別件。まあこの件は追加のオマケで御達しが来るだろうがな。お前、ひよっとして自分のその手に咬み付いた奴を、ずっと匿っていたのか？」

「な？ 匿う？」

心外だった。勝手にベランダに居座ったのは彼女の方だ。

「惚けても無駄だぞ。大型獣の捜査にGPSからの情報も逐次入ってくる。連絡を請けて七課が駆け付けたが、現場に到着した頃には見失っていた。けど、またすぐに見つけ出すさ。FCIを舐めるな



よ？」

気を失ったまま病院に運ばれた際、既に岬には犯人への逃亡ほう助の嫌疑が掛けられていたらしい。時間的に考慮しても、逃げ出したレイナはあの後真っ直ぐに岬の所へ身を寄せていた事になる。父親との争いで頭に血が昇っていた岬は、そこで待っていた彼女に気付くのが遅れたただけだ。

「別に……舐めてなんかないし」

岬はボソツと呟いた。『匿う』と、どうしてそういう方へ流れて行くのか岬は納得出来なかった。ジェフ達の片棒を担がされたように気に入らない。

けれど、岬の所から姿を消したレイナは、今度こそジェフの所に戻って行ったのだろうか？

彼女が既にマンションから姿を消したとの報告を聞き、レイナが無事であった事に安堵したと同時に、岬は言い表しようの無い後悔の念と焦燥感に取り憑かれていた。

### 第13話 揺れる想い

岬が自宅に戻ると、ジンの言っていた通り白豹の姿はベランダの何処にも見当たらなかった。

『厄介払いが出来た。そう思えば良い』と、岬は何度も自分に言い聞かせた。

灯りも点けず、独りで薄暗いリビングのソファに胡坐を掻き、口ツクグラスを一気に呷る。そして再び、数時間前まで彼女の居たベランダの片隅に視線を遣すのだが、何度見ても逃げ出した白豹が戻って来る気配は無かった。

変身が解けないのであれば、簡単に情報が入って来るだろうと思われていたのだが、白豹の目撃情報も、あの日以来ぶつとりと途絶えてしまった。依然として白豹の行方が判らないまま悪戯に一週間が過ぎ、捜査を続けているF C I側からは焦りの色を禁じ得なくなっていた。

出来る事ならば、今すぐにでもレイナを捜しに行きたかったのだが、今の岬はF C Iの上司連中から疑惑の眼を向けられている。迂闊に身動きする事は出来なかった。

ならばいっそ、このまま何処か 自分達F C Iや警察の手の届かない遠くへ逃げて行ってくれば良いと思った。そうすれば彼女を辛い眼に遭わせる事も無ければ、自分にもきつと穏やかな日々が戻って来るだろうと。

けれど、無理に自分を抑え付け、納得しようとするほど、逆に居ても経つても居られなくなり、彼女への想いが募って辛くなる。

空になったグラスを傾けると、一点の曇りの無い透明な氷の塊がグラスの中で澄んだ音を立てた。岬はボトルを手にすると、角が丸くなってしまった氷の上に琥珀色のウイスキーを注ぐ。

少し酔いが回っているのか、手元が狂ってグラスの表面一杯に注

いでしまった。慌てる程では無かったが、自分の失敗に気付いて氷の浮いている琥珀色の液体を覗き込み、グラスに口を付けようとしてハツとする。

そこに映っていたのは、今にも泣き出しそうな不甲斐ない顔をした自分の顔だった。

「玲奈、これで……良かったんだよな？」

心の中で自分の『玲奈』に問い掛けるのだが、それでも猶、岬の心は揺れていた。

レイナが自分の事を意識している事はとうに気付いていた。しかし、それは『玲奈』の記憶が戻ったからでは無い事も。

「止まった過去よりも、目の前の現実……か。全く……俺も情けないよな」

溜め息混じりに呟いた。

玲奈を失ってからこの一年、片時も彼女の事を忘れた日は無かった心算だった。あの時、何故力尽くでも彼女を引き留められなかったのか……自分の不甲斐無さは十分過ぎるくらい承知している。後悔しても済んでしまった事ではあるが、彼女を愛していたからこそ、玲奈の意志に重きを置いてしまったのも事実だ。

それほど深く彼女の存在が焼き付いていた。なのに今ではその玲奈の記憶が薄れかけているのだ。いや、寧ろ玲奈の記憶を消そうとしているもう一人の自分が居て、日を増す毎にそれを強く感じずには居られなくなっている。

だがしかし、今更玲奈の身体を取り戻しても、彼女は 岬の知っっている『玲奈』はもう居ない。何処にも。

眼を閉じて思い出す玲奈は、いつも優しく笑っていた。なのに、彼女の身体を持って現れた『レイナ』は、全く笑わない女だった。いつも何かに怯え、哀しそうな眼をしていた。何とかして遣りたい気持ち先走り、任務中であるにも関らず外へとレイナを連れ出してしまったが、却って彼女を傷付けると言う悲しい結果を招いてしまった。

「嫌われるのは簡単だが、想いを伝えるのは難しい……か」  
岬は静かに眼を閉じた。玲奈が嫌っていた酒も煙草も止めていた筈なのに、いつの間にか求めるようになってしまった。

\* \* \*

真夜中、サイドテーブルに置いていた岬の携帯が鳴った。寝惚けながら手探りで携帯を探していて、ベッドから転げ落ちそうになる。「はい？」

「高城、こんな夜分にすまん」

呼び出しは、負傷した芹澤に代わった檜山からだった。

「被害者は大学生二名。隣の署管轄内に在住している。帰宅途中に大型獣に襲われたらしい。これまでは薬物・臓器取引に関与していた者達だけだったが……今回、彼等は全くの無関係。遂に民間人に被害が及んだ……我々の力量不足だ」

檜山は沈痛な面持ちでブルーシートに覆われた遺体から眼を逸らせた。周囲のビルの壁や道路には、夥しい量の赤黒い血肉の塊が飛び散っている。現場の事後処理を任されていた新人警官の数名が、余りの惨状に気分を悪くして路肩で吐き戻していた。

岬は血染めの道路に描かれた人形の白線を凝視した。数日前、岬も危うく彼等と同じ眼に遭う処だったのだ。純白の強靱な身体と燃えるような真紅の瞳に圧倒され、一時は死さえも覚悟した。あの時の戦慄が今でも鮮明に蘇る。

「また……また人を襲うのか？ ……レイナ？」

思わずうわ言のように、誰にもなく問い掛ける。

あの時、本気で白豹を……いや、レイナを助けて逃がして遣りたかと思つた。それがFCIの任務不履行に該当し、尚且つ裏切り行為になると承知していても、正気に戻って自分を気遣ってくれた彼女を救いたいと願ってしまったのだ。

けれど、自分が彼女を助けた事によって起きた見返りが、この殺人なのだろうか？ 自分は取り返しのつかない過ちを犯してしまっただのではないだろうか。

「……ウ？ ……ジヨウ？ ……おい、高城？」

思い詰めた表情を浮べている岬に、見兼ねて檜山が声を掛けるが、岬には全く聞えていなかった。

「所詮、獣は獣なのか？」

飢えと、追われていると言う恐怖が、彼女を再び野獣へと戻してしまっただろうか？ そして、レイナはもう二度と元の人間の姿には戻れないのだろうか？

「高城ッ！」

何度呼んでも気付かない岬に檜山が痺れを切らし、遂に大声を張り上げて一喝した。

「え？ あ……は、はい」

「大丈夫か？ おい」

檜山が眼を細めて岬の蒼ざめた顔を覗き込む。

「え？ ええ……チョツと考え事を……」

檜山の探るような視線をかわして、岬の視線が所在なく泳ぐ。

「芹澤さんの件もあるし、お前自身が襲われたのだから、色々と思う処があるのだろうか、これだけは言っておく。いいか？ 間違ってもお前一人で解決しようとするなよ？」

「檜山さ……」

「仇なんて取ろうと考えるな」

檜山は強い眼力でもって説き伏せようと、人差し指を立てて岬に釘を刺した。

「今のお前はそんな面構えをしている。一度奴と対峙してそんな怪我をしているんだ。だがな、相手は人間じゃ無い」

「……」

「『けど』も『でも』も無しだ。口答えは許さん！」

言い淀む岬に、普段温和な檜山が珍しく声を荒らげた。パウハラ

だと言いたい処だったが、岬はぐつと言葉を飲み下す。

「いいか？ 感情論でどうこう言っているんじゃない。お前が危険なんだ。解るな？」

「解りません」

ムツとして言い返した。

檜山はわざと威圧的な態度に出たのだが、今の岬には却って逆効果だったようだ。檜山はそんな岬の様子を冷静に窺い、眉を顰めた。「そうか？ なら、已むを得ん。お前はたった今この捜査から離れて貰う」

「な……何言ってるんですか？ 檜山さん？」

「俺は署長とも話していたんだ。結局、最後まで署長は首を縦には振ってくれなかったが、今のお前の態度で俺の迷っていた気持ちにカタが付いたよ」

「何がですか？」

「お前を捜査から外す」

檜山は強く言い切った。

「そんな……」

「俺だつてお前の立場なら多分同じだ。相手が人間なら少しは考えて遣れる余裕を持つちゃあいたが、今回の相手は獣だ。恐怖や憎悪、そんな一瞬の気の迷いが命取りになる。気の毒だが少し頭を冷やせ。今のお前にはそんな時間が必要だ」

一方的な檜山の言葉に、岬はふいとそっぽを向いた。捜している獣の正体を知っているだけに、尚更素直に従えない。

「ほら、拳銃と手錠を遣せ」

「……」

檜山は岬に片手を差し出し、催促して見せる。

岬は言われた通りに、拳銃と手錠を渋々差し出した。

「これでお前がこの件から手を引くとは俺には思えん。こちら側の捜査からお前を外したとしても、何ら抑止になると思っていない。F C I の捜査がこの件にどれだけ関与しているのか、俺には判らんが

……悪く思わんでくれ」

「……」

檜山から心苦しそうにそう言われたのだが、納得出来ないまま、岬は檜山の言葉に顎を引くより他に手は無かった。

\* \* \*

消沈した岬は、桐嶋署へ先に引き揚げていた。

「お帰り。お早いお着きじゃったのう」

署内の片隅で一人ぼつんと詰め将棋をしていた小島老人が、岬をちらりと一瞥するなり口を開いた。

「じいちゃん？ こんな時間にどうして？」

まだ夜明け前だと言うのに、小島はいつもの場所に居た。

「わしか？ わしゃあ、単なる留守番じゃよ」

小島はさらりと言ったのけたのだが、署内は当直の者が慌しく外部との連絡を取り合い、情報が行き交って昼間と何ら変わり無い様子だ。非常勤である小島が『留守番』と称して夜中に居ること自体、有り得なかつた。

「ジン達もバイオ・ケミカルの方に行っておるからのお。あちらもいよいよ大詰めってとこじゃな。皆、出払っておるで、わしゃあその応援よ」

「バイオ・ケミカルに？」

岬はその報告をジンから一切受けてはいない。自分はF C Iからも外されたのだろうかと妙な疎外感を覚えて、がっかりと肩を落とした。

「留守番じゃ無くて、オヤジか三島さんから俺の監視を任せられただけだろう？ どうせ」

岬は大きく溜め息を吐くと、片手で前髪を掻揚げながら苛々して言い放った。

「いんや？ こんなひ弱な老いばれにお前のお守りなんぞが出来る

かい？ 雅哉や三島はわしにそんな酷な事を頼みはせんよ……ほお、その顔は『捜査から外されました』って顔をしとるぞ？」

小島は意地悪そうに笑って見せると、ズバリと言い当てた。岬はそんな子どもっぽい小島に毒気を抜かれた気がして、思わず頬を緩める。

「どうじゃ？ 当たったか？ うん？」

「……うん」

「大方、檜山がそうしたんじゃろう？」

小島の読みに、岬は黙って素直に頷いた。

「まあ、しょうが無いのお。檜山も微妙な役職じゃからのう。芹澤達の件で相当堪えとる上に、今のお前の様子ではな。慎重に慎重を重ねるようになっても仕方あるまいて……そうじゃ、岬？ 暇なら熱いお茶を一杯淹れてはくれんかの？」

小島はそう言つと、傍に置いてあつた週刊誌を手を取って据わり直す。

岬は軽く頷くと、小島の傍に置いてあつた茶筒に手を伸ばす。普段から家事を遣っている岬にとって、緑茶を淹れる事など造作も無い手早く急須と湯飲みを食器棚から取り出すと、ポットの湯を再沸騰にセツトした。

「あ、そうだ、じいちゃん。訊きたい事が……？」

振り向いて言い掛けた岬の視線が、小島の手元で止まる。

「ふふん、やあーつと気が付きおつたか？ お前が檜山から干された理由の一つは、これじゃよ」

固まつたように身動き出来なくなった岬の目の前で、小島は手にしていた週刊誌を軽く振る。そこには爆破されたクラブ『ラジエンドラ』が表紙を飾り、その原因が行過ぎた警察の囹捜査だと指摘した記事が掲載されていた。

「無理も無かるう？ 既にホステスの嬢ちゃんが一人行方不明になつていたからの。胡散臭いと嗅いで、どこそのハイエナが金脈を見付けたとしても不思議じゃない。わしゃあコイツはでっち上げの八



ツタリ記事だと思っておった。じゃが、この内容は本物じゃ。ずっと以前から張り付いておらねば判らん事まで調べられとるぞ？ 幸いお前の名は伏せられておるが、お前が潜入しておった事についても書かれとる。FCIでの潜入捜査じゃったが、現職の警官でもあるお前はどう足掻いても不利じゃな。此方（警察）からは、そんな事實は無いと弁明しておるが、世間様がその言い分をすんなりと受け容れてくれるとは思えんしなあ……それと、此処最近、巷で噂になつとる、獣に因る殺人事件も警察の責任だと大きく採り上げられとるぞ。報道規制が却って仇になったな？ 誰かが突破口を開けば、そこに在ること無いこと枝葉を付けて書き立ておるわい。ハイエナ共が皆そこに群がって来よる」

小島はそう言つと、乱暴に雑誌を机上に放り投げた。

「何処でそんな事が……」

そこまで言つて、ハタと思ひ当たる人物が居た。

玲奈の一周忌に当たるあの雨の日に、墓地でこの事件の情報を真つ先に岬へ提供したあの男 脳裏に一人の若いグレネイチャの男の顔が浮かんだ。彼は情報を提供しておきながら、それに踊らされる者達を撮影するのを生業としているフリーのカメラマンだ。

「此処まで調べ上げられとるとはな。お前の事をよく知っている者でなければ不可能じゃろ。心当たりは？」

「……いえ」

「そうか。此方からこの記事をモノにした奴を調べさせたのじゃが、上手いこと撒かれてしもうて、結局判らず終いじゃった」

返事を返すのに間があつた岬を小島は訝り、その異変を見落とさなかつたのだが、この場はひとまず惚けるのが良かろつと判断したらしい。

岬は小島から疑われていると薄々感じながらも、惚けた素振りをする小島に従つた。そして『そうでしょうね』と岬は心の中で相槌を打つ。アーヴィンはデータ上、四年前に既に死亡している事になっている。

小島が放った雑誌を手にした岬は、どういう心算なのだろうかと思っただ。

『僕は彼女のファンでしたから』　玲奈の墓前に花を手向けてそう言った彼の言葉が蘇る。これは、玲奈を忘れかけている岬に対する当て付けの心算なのだろうか？　それとも、これ以上『レイナ』には近付くなと言っ警告なのだろうか？

「ふん。この様子じゃと、心当たりが大有りじゃな」

呆然と立ち尽くす岬の表情を読み取って、小島は独り毒吐いた。しかし、心当たりが在ったとしても、岬にはその相手の事を喋ってくれそうな気配は微塵も無い。

恐らく、この件に関しては自分で対処する心算なのだろうと小島は岬の胸の内を読んだ。ならば御隠居である自分の出る幕では無い。「ま、時間が掛かっても、何とかこの状況を打開せんとならんぞ？」

「え、ええ」

岬は曖昧に返事を返した。

「お？　そうじゃ」

「？」

「何か忘れとったと思っただが……お前、わしに訊きたい事があったんじゃないのか？」

「もう、どうでも良くなったよ」

岬は投げ遣りに答えた。

「それで良いのか？」

「……」

「例えお前がわしに尋ねたとしても、すんなりと答えられるかも知れんし、答えられんかも知れん。訊いておいても損は無いと思うのじゃが？」

「じいちゃん」

「あん？」

小島のやけに長い眉毛が片方上がった。

「じいちゃんはオヤジ……いや、署長がまだ刑事だった頃から此処

に勤めていたんだよな？」

再沸騰したポットが、完了の可愛い音を奏でた。湯を急須に淹れる岬の手元から、ふんわりと白い蒸気が立ち昇る。

「ひよつとして……痛くて……あの件の事かあ？」

小島は将棋の碁盤から視線を外すと、所在無さそうに鼻毛を抜いた。

「う……うん」

岬は小島のデリカシーの無さに一瞬退いてしまったが、今なら小島の知っている事を訊き出せそうだと踏んで、自分用のコーヒーを淹れると小島の向かいに座った。

「そろそろ訊いて来る頃だろうとは思うとったわい。じゃがわしは詳しくは知らんぞ？」

「それでも良いんだ。ほんの少しでも良い。何か知らないか？」

「年寄りをそう急くない。思い出すのも一苦労じゃわい」

小島は岬に淹れて貰ったばかりの熱いお茶を啜った。

「ふう。やっぱしお茶は人から淹れて貰った方が旨いのお。おお、カヨさんから土産に貰った草加焼きの煎餅があるぞ。食うか？」

満足げに一息吐くと、小島は袋から煎餅を取り出した。慌しい周囲の喧騒に一際ガサガサという音が聞え、署内の何人かが手を止めて小島と岬に注目するが、小島は全くのお構い無しだ。

岬は周囲の者に気を遣いながら、一枚ずつパツクされている一つを貰った。

小島は容赦なくバリバリと音を立てて煎餅を頬張る。

「んじゃあ、行くか？」

「は？」

煎餅をまだ口に頬張ったまま、小島は岬に淹れて貰ったお茶を手にして席を立った。岬は直ぐに話してくれると思っていただけに、不意を喰らって拍子抜けする。

「ここで話せばみんなに丸聞こえじゃが……構わんのか？」

「おお、空いとるな？ 此処なら大丈夫じゃろう。入るぞ？」

小島は空いていた一室に向かい、躊躇せずにドアのノブを捻った。

「は、入る……って、こ、此処、取調室ですよ？」

「構わん。気にするな」

「きつ、気にするなっただって……」

後を付いて行く岬の方が気後れしてしまう。これではまるで自分が取調を受けるようで、好い気分にはなれない。

「さてな。お前が産まれる前の頃じゃから、二十五年もそこらも昔の事じゃ。わしももう歳じゃでなあ、ハッキリとは覚えとらんよ。お前の母親……確か、優衣さん……じゃったかな？ 綺麗な楚々とした美人じゃったわい」

小島は懐かしそうに遠い眼をしたかと思うと、その顔を急に緩ませてだらしのない表情を浮かべた。

「ああ言うのを大和撫子と言っんじゃ。わしがもうちつと若ければ……」

「それはいいから」

岬は赤面して、緩んだ表情の小島に本題に入るよう急がす。

「せっかちじゃのうお前は。ま、いい。当時は今と違って遣伝子操作の規制が緩くてな、幾らでも法の網を潜ってキメラだのエレメンタル（突然変異種）だのが現れておった。事の発端は皆強欲な人間のエゴから産まれたものなんじゃよ。その中に『フルトランサー』と呼ばれる、獣に変身する人獣がどこぞの研究所から脱走してな、夜毎世間を騒がせておった。まあ、これもキメラとかエレメンタルの類の一種じゃろうとわしは思うとるがな。今と同様に警察は警備を強化していた。雅哉はその頃に優衣と出会ったそうじゃ。獣に襲われて記憶喪失になった被害者の美女。まあ、わしが見惚れたくらいじゃからの。雅哉は彼女にゾッコンじゃったわい」

「じいちゃん、口の端からヨダレが出てるよ」

「お？ おおう、こりゃ失敬」

岬の指摘に慌てて口元を袖口でグイと拭う。限りなく緩む小島の妙に厭らしい表情に、岬は呆れて鼻息を荒くした。

「で？」

折り畳み式のパイプ椅子に腕組みをして踏ん返り返った岬は、尚も小島を促した。傍目から見れば、岬が小島を聴取しているように見える光景だ。

「ところが優衣は雅哉が搜索をしていた人獣の一人じゃったんじや。彼女はお前を身籠って間も無かった頃、買い物帰りの道で暴漢に襲われてな」

そこまで聞いた岬は、崩していた態度を正して座り直し、身を乗り出すように小島の話に聴き入った。

「それが変身する最初の引き金になったらしい。若年アルツハイマーを罹ったようになってな……いや、認知症になったというのじゃない。まあ、その症状によく似ておっいたらしいよ。お前も医者の手くれなら解るじやろう？ 記憶が日々飛んで行くんじや。嘘か本当かは、わしが確かめた訳じゃないから滅多な事は言えんがな。記憶が飛んでおる間は獣になっておったらしい。で、その間隔がどんどん短くなって行った。お前の父親はその事を逸早く知り、必死に彼女を庇うておったが、結局は……その後はお前が雅哉から直接聞いたじやろう？」

「俺に話したって事、聞いたんですか？ ……署長から」

「うむ」

小島は肩で大きく息を吐き、そして頂垂れるとも、俯くとも取れるように深く頭を下げた。

岬はレイナから記憶が度々飛んでいると訴えられていた事を思い出した。その時は薬によるトリップだろうと信じて疑わなかったのだが、小島から聞いた自分の母親と症状が酷似している。とんだ誤診だ。

岬は自分を嘲笑った。『助けて！』悲鳴に似たレイナの心からの訴えと、聞いた事の無い自分の母親の声が重なり、聞えて来たような気がして悪い胸騒ぎに襲われる。

「けど……けど、アイツは母さんを殺した」

「それは違う。殺したくて撃つたのでは無い。雅哉は襲われた仲間を助ける為に已む無く遣った事だ」

「仲間をつて……そんな……」

「脳死状態になったまま、優衣はお前を産んだ後すぐに息を引き取ったよ。荒れたな……雅哉は。神様もほんに罪な事をしなさるわい。わしは雅哉と玲奈を亡くしたお前とが二重にダブって堪らんよ。じやがわしよりもお前達当人の方が何倍も辛かるうて」

岬は静かに眼を伏せた。先日、雅哉からそれとなく聞き薄々は感じていたが、自分の出生の秘密を知ってしまい、愕然と肩を落とす。

「俺は……俺は人獣なんですか？」

声が震えた。父親である雅哉が、未だに岬を監視しているような素振りをしている訳が、今になってようやく理解出来た気がした。

「そりゃあ発症してみない事には判らん。じゃが、今の処はなんとも無かるう？ それに、わしやあお前をそんな眼で見た覚えは、一度たりとてありやあせんぞ」

「オヤジが俺から眼を離さないのはそのせいですか」

「さあてな。雅哉が何を考えとるのかはわしには判らん。じゃが憎くてお前を見ておったのではない事だけは確かじゃろう」

「嘘だ」

言い終わらない小島の言葉に被せ、否定した岬は小島からついと顔を背けた。

今まで、いつも雅哉からの視線を感じていた。言葉を交わさずとも、家庭でも職場でも、事ある度に。だが、それは親子であれば当然とも言える『監視』と言うよりは寧ろ『保護』の視線なのだと思っていた。

ところが、環が生まれた頃を境に、岬は自分が成長するに連れて、

父親である雅哉の視線から妙な空気を察し始めていたのだ。思えば、その時点で『保護』の視線は『監視』と言う名目の視線に摩り替ってしまったのかも知れない。けれど、岬が妙な違和感を持って、違和感の原因が判らなかつた。

自分が人獣ではないのかと疑問を持つに至つたのはつい最近の事だ。ならば雅哉に監視されていると思つていた自分は、思い違いでは無く、正に『監視』するための視線だったのだと。

「いつそのこと、俺なんか……俺なんか産まれて直ぐ、焼却炉にでも放り込めば良かったんだ」

「軽はずみにそんな事を口にするでない。お前が生まれるのを優衣はどれだけ待ち詫びておつた事か……お前は望まれてこの世に生を得たのじゃぞ？ 世間でどう言われようが、お前はお前だ。何も特別な『血』を持って生まれた事を悲観なぞするものじゃない。お前には、いずれその『血』を以つた意味が判る時が来るじやろつて」

小島は否定的になつた岬を諭して黙らせようとした。

「止して下さいよ……気休めなんか」

力無く言つた岬は、それ以上何も言えずに小島から視線を逸らせた。

自分が『人獣』の血を受け継ぐ者であつたとしても、同族のレイナをどうすることも出来ないのだろうか？ 雅哉と同様、変身してしまう彼女を手に掛けるしか他に手段は無いのか？ テーブルの下で握られた拳が血の気を失う。

岬は思い詰めた表情で、利き手の左手を凝視した。

自分は雅哉とは違ふと思いたい。けれど、民間人を襲つたのは間違ひなく彼女だろう。そして、彼女を逃がした自分には、もっと重い罪が押し掛かる。

岬は息苦しさを覚えて堪らなくなつた。

人の血の味を覚えて野生の本能に目覚めてしまえば、獣は幾度と無く同じ事を繰り返す。歯止めは効かない 昔、どこかで聞き齧つたそんなセオリーを思い出した。一刻も早く対策を執らなければ、

被害はもつと拡がるだろう。

そして岬は、彼女に対して『決着』と言う責任を自らが負わなければならぬのだと覚った。

\* \* \*

岬達が居る桐嶋署所轄管内は、昼夜を問わず引つ切り無しに出勤要請の依頼が入って来る。幾つもの連絡回線の中に紛れて、その通信は入って来た。

「はい、桐嶋署。はい……え？」

受けた署員が素早くヘッドセットを離した。傍に居る署員に目配せを遣して、逆探知をを指示すると、再びヘッドセットを取り上げ、マイクに向かって冷静に話し掛けた。

「落ち着いて。もう一度ゆっくりと話して」

只ならぬ署員達の雰囲気、取調室からタイミング良く出て来た岬と小島は、お互いに顔を見合わせた。

「どしたい？」

小島が訝って声を掛ける。連絡を受けた署員の顔色が真っ青だ。「それが、通報者が凄く興奮していて……例の獣に追い掛けられていると……」

傍で逆探の操作をしていたもう独りが手短に答えた。

「何じゃとお？ 檜山達はまだ戻つたらんのか？ 他の者は？」

「各国の要人警備に殆どが駆り出されていて……」

「む……ん。何とかならんのか？」

小島は腕時計に眼を遣って呻った。

「手配します！」

小島の声に、通信士が振り返って即答する。

岬は署内の通信装置に近付き、スイッチを管内のスピーカーに切り替えた。

「……けて！ 此処から逃げ出せないよ！ すぐ近くにいる！」



僕も、僕達もあの人みたいに殺されるんだ！ 早く……早く助けてよ！」

息を切らせている少年の声は、不安と恐怖に慄いて今にも泣き出しそうだ。彼の傍で誰かの嘸り泣きが聞えている。

「君達は今、何処に居るのか判るかね？」

署員がマイクに向かって呼び掛けた。

「判らない……め、メチャクチャに走って……けど、けど、お、追い掛けて来るんだ！ もうこれ以上走れないよ！」

少年の切羽詰った金切り声に、岬達の表情が強張り、緊張が奔った。

「君、落ち着いて。場所が判らないのなら、何か目印になるものは無いか？」

署員が少年に冷静に呼び掛ける。

「状況をもっと詳しく教えてくれ」

岬の呼び掛けに、傍で助手をしていた署員が振り返った。

「例の大型獣に襲われた被害者を発見して、通報して来た第一発見者の少年達です。発見時にまだ大型獣が付近に居たようで、後を付けられているのを気付かずに配達をしていたそうです。数分前、その大型獣が何かと激しく争ったらしく、そこで初めて自分達が付けられていたのだと気付いて……」

「配達ウ？」

小島の片方の眉が上がった。

「ええ、牛乳配達です。最近じゃ自然派趣向が見直されていて、時間と手間暇を掛けたものが一寸したブームになっているんですよ」

岬は窓の外に眼を遣った。まだ室内の方が明るい、鏡と同じ状態になっている明り取り専用の窓から、微かに東の空が白み掛けて来ているのが判断出来る。

「気付くのが遅れて、結果追い込まれたと言うのか？ 規制で夜間は外出禁止だと、あれほど此方から呼び掛けておつたに……この非

常時に自分の命より小遣い稼ぎの方が大事なのか？ 馬鹿者めがぁ」

小島が顔を顰めて唸った。

「携帯のGPSから、少年達の位置を割り出しました。都内の繁華街……裏の小路ですね。あそこはやたら入り組んでいる上に道幅が狭くて車両での進入が……」

署員が3Dで表された管内の地図に黄色のマークを点灯させる。

「所轄内じゃないか」

岬は椅子の背凭れに掛けていた背広を手に取り、正面出口へ向おうとした。

「待て！」

小島は岬を呼び止める。

「お前一人で行くのか？ 応援はどうする。スグには遣せんぞ？ 今、署員の手配をしとるからもう少し待って一緒に……」

「待ってなんか居られませんよ。一刻も早く彼等を助け出すのが先です。バイクならそう時間は掛からない」

そうは言ったものの、包帯でぐるぐる巻きにされている自分の右手に視線を落とした。疼く痛みになんか顔を顰めながら二、三度軽く右手を握ってみる。手首を固定さえすれば、多少の痛みはあるものの靱帯までは逝ってはいない。握力自体には問題が無さそうだ。

岬は部署内の簡易救急箱からテーピングを取り出すと、巻かれていた包帯をずらすと解いた。傷口にはガーゼが貼り付けられているが、その周りの肌には内出血で真っ黒な痣が拡がり、手首は普段の倍以上に腫れ上がっている。

「うわ……痛そう……」

「岬さん、それ、どうしたんです？」

岬の手首を見た署員数人が顔を歪め、彼の傷から視線を逸らせた。岬は彼等に大丈夫だとばかり苦笑して見せるのだが、テーピングでの固定処置で激痛に見舞われてしまい、ハッタリの努力は敢え無く掻き消されてしまう。

「くっ！」

顔を顰め、息を吐いて痛みを逃しながら、岬は素早くテーピングで右の手首を固定する。その様子を、小島は眉を顰めて見守った。「本当に行くのか？」

問い質す小島の声は低く沈んでいる。普段の陽気さは微塵も無く、いつも以上に真剣な顔つきだ。

「ええ」

「拳銃は？ 丸腰でどうする」

「俺にはインターセプタが……」

「それは無理じゃろう？ ジンから不具合の通知を受けとるぞ？」

岬の言葉を小島は無下に遮った。

「……」

岬は言葉に詰まり、お節いな相棒を思い浮かべて舌打ちする。

「私情が入り過ぎとるぞ。もっと冷静になれ」

「俺はいつだって冷静ですよ」

言い当てられてしまい、岬はムツとなった。

「丸腰で向かおうとするその何処が冷静じゃあ。未熟者めが。その手首、もう一度咬まれたら二度と使い物にはならんぞ？ 判つとるのか？」

「……」

言い返す言葉も無い。

小島は徐に懐から自分の銃を取り出した。

隠居だと思っていた小島が手にした回転式弾倉リボルバーの拳銃に、その場に居た署員達が驚いて眼を見張る。

「暫らく使つておらんんだから、コイツも言う事を聴いてくれるかどうかだか……ほれ、持って行け」

小島は自分の愛用していた拳銃をひょいと投げて遣し、岬は難なく左手でキャッチした。

ズシリとした確かな銃身の重さが岬の手に伝わる。それは過去、幾度もの修羅場から小島を護ってくれた拳銃の『重さ』でもある。

「わしの長年の相棒じゃあ。大切に扱ってくれよ？ じゃが、必ず

お前自身がわしに返しに来るんじゃないぞ？ 無傷でな」

小島はそう言つと器用にウイंकを遣したが、重い言葉を混ぜ返すような小島の茶目っ気に、岬を含めその場に居合わせた者達は退いた。

「じいちゃん……」

岬は受け取つた小島の銃に視線を落した。

旧式タイプではあるが手入れは十分行き届いている。岬はまだもう一丁、予備の拳銃を所持していた。けれど、敢えて小島の銃を借りることにする。

必ず返す約束付で。

「行つて来い。檜山達には至急お前の後を追うよう取り計らうておく。じゃが、出来ればその銃が使われる事の無いよう、わしは祈つとるぞ」

そう言つと、岬に向かつて小島は右の親指を立てて見せた。

「じいちゃん……ありがとう」

岬は小島に軽く顎を引いた。

\* \* \*

「ま、まだ警察は助けに来てくれないのか？」

暗闇の中で警察に連絡を取つた少年達二人は、恐怖に怯えて震えながら、警察が来てくれるのを待つ事にした。

彼等が居る所は、普通車両がやっと通る事が出来る道幅の路地裏から、更にずっと奥に進んだ光の殆ど届かない袋小路だった。

「警察よりか、機動隊か動物園に連絡した方が良かったんじゃないのか？」

「今更遅せえよ！ 第一、機動隊や動物園に俺達が直接連絡して来てくれるか？ 大体、あの時に直ぐ連絡して帰つた方が……」

「お前だつてあと少しだから……言つたじゃないか！」

「なにをお！」

不安と恐怖の現実から逃避したくて、二人が掴み合いになりそうになった時、五、六メートル程離れて置いてあった大型のゴミ箱の陰から、動物特有の荒々しい息遣いが聞えた。

「！」

少年達が息を詰めて跳び上がる。二人共、悲鳴が声にならない。低い獣の唸り声が二人の恐怖を煽りでもしているように、不気味に路地裏に響いた。

間も無くして、遠くから大型バイクのエンジン音が近付き、高層ビルに囲まれた明け方の路地に反響した。

「こつちだ！ 援護するから一気に走って来い！」

男が叫ぶ。

ハツとして少年達はお互いの顔を見合わせると、我先に声の方へと駆け出した。岬は彼等の進行方向途中の陰にある気配に逸早く勘付くと、小島から借りた銃を構える。

「え？ お兄さん警察？」

駆けて来た少年達が、銃を構えている背広姿の岬に気付いて駆け寄った。

「正確には刑事さん。ほら、もうすぐ警察のおじさん達が来るから、その角を曲がった近くに店を開けている花屋がある。保護して貰え」  
岬は銃を構え、視線を逸らさないまま少年達に答えた。

好都合に店が開いていたのは、仕入れた花を店内に搬入していたからだ。

「……」

少年達に返事は無い。

「必ず行けよ？ 保護して貰わないと、お兄さんが仕留め損なったら、また追いつけられるぞ？」

少年達が再び走り出す。

「おら、返事は？」

彼等が自分の指示を無視して、闇雲に逃げ出しそうな素振りがあ

るのを察した岬は、声を張り上げた。

「はい」

「ああ？ 聞こえねえーぞ！ コラア！」

岬はわざと乱暴に凄んでみせる。

「はいっつ！」

効果覲面だ。少年達は岬の指示通り、花屋に保護を求めたようだ。彼等が行った後、俄かに表通りが騒がしくなる。

岬は銃を構えたまま素早くバイクから降りると、慎重に歩を進めて間合いを詰めた。

「うっ……はあ……」

荒々しい獣の息遣いが、急に別のモノに変わった。

岬は全神経を尖らせながら気配のする物影に近付き、状況の変化に訝って首を傾げた。

しかし、岬は尚も警戒を怠らなかった。銃口は逸らされる事無く気配を確実に捉えている。

「……て」

「え？」

微かに人の声が聞こえた。

「待っ……て」

息を潜めて耳を澄ませると、乱れた呼吸に交じって、喘ぐようなか細い女の音がする。

「レ……レイナ？ 君か？」

岬の迷いが、銃口を彼女の気配から逸らせてしまい、慌てて構え直す。

「撃たない……で」

「だ、駄目だ。君は……君は民間人を襲った……もう言い逃れは出来ない」

神経を張り詰め、集中しながら銃を構えて、徐々に彼女との距離を詰めて行く。

「……お願い」

「もう……もうこれ以上罪を重ねて人を殺めるのは止める」

「違う！ 違うわ！ ……聞いて。お願い！」

「誰がそんな手口に乗るものか！ いい加減にしろっ！」

レイナは苦しそうに必死で訴えるのだが、今の岬には彼女の声が届かない。

岬は乱暴にゴミ箱の一つを蹴り倒した。物陰に隠れていたレイナが、怯えて短く悲鳴を上げる。

障害物を除けられて拡がった視界に、背を向けているレイナの姿が映った。仄かな明かりに包まれて震えているレイナの肢体に、岬は今までには無かった違和感を覚えた。

血に塗れた肢体を包み隠すように、レイナの長い髪が美しい裸身に纏わり付いているのだが、その長い髪には以前のような色は無く、月の光に照らされて銀色に輝いていた。

「……さき……違……」

岬が自分に対して怒りを露わにしているのだと思ったレイナは、それでも振り向き力無く首を振って犯行を否定した。朦朧として意識が消えそうになっている虚ろな彼女の瞳に、拳銃を向けて厳しい表情をしている岬の顔が映し出される。

妖艶なレイナの姿に見惚れていた岬は、滴る鮮やかな紅い血の色と匂いに気付き、はっと息を飲んだ。

血は彼女自身のものだ。見ると身体には至る所に裂傷が奔っている。特に右上腕部内側からの傷が深く、庇っている左手から猶も血が溢れている。

瞬時にそれが動脈を損傷しているのだと判断した。そして彼女に何が起こったのかと訝り、眼を細める。

「私……じゃない」

「嘘だ！」

岬は心を鬼にして、自分に背を向けて座り込んでいる傷だらけのレイナに向かって、銃口を突き付けた。

「私じゃ……ないわ。信じて……」

傷を負ったレイナの呼吸は浅い。それが一刻をも争う緊急を要している傷である事くらい、外科医である岬には判っていた。けれど、彼女が負傷していても、再び人を襲ったと言う疑いは晴れない。彼女が罪も無い人間を襲い、殺戮してしまったのだと思い込み、裏切られたのだと思った岬は、銃口をレイナから逸らせる事が出来なかった。

「君はさっきの少年達に何をしようとした？　こんな袋小路に追詰めて、何をしようとしたんだ！」

「信じ……て……」

崩折れたレイナの意識が途切れた。

倒れ伏す彼女に、岬は震える手で握り締めた銃口を向けたまま、身動き一つ出来なかった。



## 第14話 身勝手な願い

どの位経ったのだろうか？ ソファで仮眠を取っていた岬は、自分の室内で何者かの気配を感じて目を覚ました。眼を覚ましたと言っても意識を取り戻しただけで、眼は閉じたままだ。身動き一つしてないので傍目からはずっと眠っているようにしか見えない。

窓ガラスには遮光フィルタを掛けている為、外からの光は殆んど入っては来ないが、それでも室内の小さな常備灯から漏れる微かな明かりを頼りに、何者かが足音を忍ばせて岬に近寄って来る微かな息遣いと気配が感じられた。

かなり熟練した者でなければ殆ど気取られない気配ではあるのだが、岬は息を押し殺して気配の行方を窺った。

真っ先に負傷したレイナなのかと思っただが、彼女はまだ鎮痛剤でぐっすりと眠っている筈だ。

気配は岬の目の前で停まり、その手が眠った振りをしている岬の首にそっと近付いて来る。

「！」

岬はぱつと跳ね起きて、その腕を素早く捕まえた。同時に、捕らえたその腕の細さと冷たさに驚く。

腕の主がはつと息を飲んで後退さった。一步引いた片足がテープルに当たり、ウイスキーのボトルが揺れて倒れそうになる。

岬の目の前で、銀色の長い髪がさらりと流れた。

「レ、レイナ？」

岬に片腕を捕まれ驚いていたレイナの両手には、広げた毛布が握られていた。眠っていた岬を起さないように、そっと近付いて掛けるようとしていたのだろう。

岬は彼女の常識から懸け離れた、余りにも早い代謝に面食らってしまった。

「も、もう起きた？ いや、それよりも傷が……痛むのか？」

岬は立ち竦んでいるレイナをソファから見上げ、彼女の身体を氣遣った。

咄嗟の出来事にレイナは驚いたまま表情を強張らせながら、黙って首を横に振る。

岬の視線が、チョーカーの無くなったレイナの胸元で止まった。見覚えのある玲奈の服を着ている。

「勝手に忍んで来て不法侵入もいいとこだ……頼むから、『彼女』の部屋を荒らすのは止めてくれないか？」

岬は溜め息混じりに呟いて顔を伏せた。彼女を見てみると『玲奈』がそこに居るようで妙に落ち着かなくなってしまう。

「『荒らす』だなんてそんな……私はただ……」

レイナは言葉に詰まった。獣の姿で逃げ出した彼女は衣類さえ儘ならない。勿論、盗もうと思っただけ着用しているのではない。岬もその事は十分承知している筈なのだが、彼女の服を無断で着用しているレイナの前に、どうしても冷静では居られなくなってしまう。

「ただ……？」

岬はレイナの言葉を促した。

「少しの間だけ、借りているだけよ」

「返せる当てでもあるのか？」

「そんな……」

事情を判っている癖に、岬が面白がって自分を困らせているようにしか思えなくて、レイナは黙り込んでしまった。

所詮、この男も単なる気紛れで自分を匿っただけなのかも知れない……自分はこの男の事を買い被り過ぎたのだろうか？ もしかしたら、ジェフが自分に遭わせた以上の事を平気でこの男が強要してくるかも知れない……そんな不安がレイナの胸に過る。

岬の澄んだ眼が、一瞬見せたレイナの戸惑いの表情を見逃さなかった。レイナにとって、そんな一分の隙さえも見せない岬から監視されているように思え、煩わしくて仕方ない。

「い、いつまで握っているの？ いい加減にその手を放して」

「あ？ ああ……」

岬が左手の握力を弱めると、レイナは力任せに岬の手を引き剥がした。

「目が覚めたのなら序だ。答えて貰おうか？」

岬は眠気覚ましに煙草を取り出して火を点ける。

「何を？」

「惚けるな。今更言い逃れ出来る状態だと思っっているのか？ 君は一般市民を手に掛けた。あの少年達も喰い殺そうと……」

「違う、違うわ！」

レイナは岬の言葉を遮り、首を横に振って強く否定した。

「……」

岬の手にした煙草から、青白い煙が真っ直ぐに棚引く。

「何処が違う？ 君は彼等を袋小路に追い込んで……」

岬は煙草を肺に深く吸い込むと、静かに話を切り出した。

「あの子達が勝手に道に迷ってしまったのよ？ それでも私のせいなの？」

言い掛けた岬の言葉に被せるように、レイナは鋭く言い返した。

「じゃあ、あの殺害の現場をどう説明してくれるんだ？」

無然としてレイナを見上げる。

「見付けたの」

「何を？」

「私と……同じ豹を」

レイナは一字一句を自分に言い聞かせるように言った。

彼女が言った、もう一頭が存在を手放しで肯定は出来なかったが、少なくともその言葉からはとても虚偽や妄想などは窺えない。

思わず岬は安堵の溜め息を漏らした。

「そ、その傷は……大型の犬にでも遣られたのかと思っっていたよ」

彼女の傷が大型の獣によって出来た傷なのだと言う事ぐらい、一目見た瞬間に気が付いていた。特に右上腕部内側の傷は、明らかに大型猫科による咬み傷だ。

事実、大型獣の捜査に多くの警察犬が投入されていたが、その傷口は警察犬のものとは明らかに咬み方が違っている。

豹になったレイナが同じ種類の大型猫科と争ったであろう事は、簡単に予想出来たのだ。だが、それを証明する事が出来ず、岬は事実を有耶無耶にしていたのを思い出した。

「随分ね。何て大雑把なの？」

レイナの艶やかな眼がキツと岬を見据えた。気の強い一面が顔を覗かせたのか、瞳には悔し涙を浮かべている。

「確かに。君のその傷は違う……イヌ科の咬み傷ならそうはならない」

レイナの右腕には、鋭い牙が深々と刺さった痕が痛々しく残っている。顎の力で噛み砕きダメージを与えるイヌ科の咬み傷とは異なっている。

レイナの涙を見てしまい、とにかく彼女を落ち着かせる事が先決だと思つた岬は、表情を和らげると肩を竦めて見せた。わざと彼女に余裕を見せる事で余計な心配を掛けないよう安心して貰おうと言う魂胆だったのだが、岬に対して不審感を抱いてしまったレイナには逆効果だったようだ。レイナは岬から揶揄われたのだと思ひ込み、一層不機嫌になってしまった。

「信じては貰えないの？」

「いや、信じているさ」

言葉では彼女に肯定してはみたものの、本心では俄かにレイナの言葉が信じられなかった。もし、レイナの証言が事実であつたのなら、そのもう一体は本物の豹か、或いは彼女と同じく大型猫科の人間だと言う事になる。

何れにしても、岬は事の厄介さを知り気が重くなった。自分のインターセプタが異常<sup>エラ</sup>を起こしていると判つた以上、咄嗟の時に使用出来ない可能性が十分あるのでは、満足な結果は得られないし、何より自分が危険に曝される。

「あの子達も狙われていたわ。私はそれを止めようとして……」

「逆に遣られたのか？」

レイナが大きく頷いた。

「信じて貰えなくてもいいわ……私はあの子達を逃がそうと誘導した心算だったの。でも、どんどん反対の方に行って……」

襲おうとしたのではなくて、襲われそうになっていた彼等に就いて、レイナは護っていたと言うのだ。

岬は黙ってレイナの姿に視線を這わせた。全身傷だらけ。致命傷にもなり兼ねない動脈損傷まで負ったレイナの姿から、一体、何処に疑う余地が残されていると言うのだろうか？

「傷を診せてくれないか？」

「……」

レイナは黙って岬が横になっているソファの傍で膝を折り、跪いた。

「顔に……」

「さ、触らないで！」

レイナは、頬に触れようとした岬の手を振り払う。

蒼白い肌をしたレイナの右頬には、赤い擦傷が奔っている。女性にとつて、身体は勿論ではあるが、顔に傷が付くのがどれだけ辛い事か。外科医である岬は多少なりと心得ている心算だ。

岬はレイナの身体を改めて見上げた。出会った時よりも頬は痩け、襟から覗いている鎖骨が深い谷間を刻むまでレイナの身体は異様に痩せ細っていた。少年達が見付けた被害者の遺体には、喰われて無くなっている内臓器官が多数あつたとの報告を受けている。今の彼女の状態では、とても人肉を喰らったとは思えない。

岬はレイナの右上腕部に巻かれた包帯に眼を遣った。白く細い腕が痛々しい。他にも咬み傷や裂傷は全身に及んでいる。通常なら失血死さえ在り得る外傷だったが、岬が応急処置を下すよりも早く、彼女の腕の傷はほぼ塞がっていた。

「仮にそうだとしても、君は俺を狙った。二度も殺り損なって今度は三度目の正直か？ あ、いや、変身した時にも殺されかけたから

四度目になるのかな？」

岬は他人事のように言って微笑する。

「知って……いたの？ でも、私がまた貴方を狙って来たとても？」  
形の良い柳眉が寄った。レイナの不安な気持ちに痛い程伝わって来る。彼女にはもうそんな心算は毛頭無い。それは岬も承知していた。

岬が黙ってレイナの煤けた白い髪の一房を手で掬い取ると、レイナは一瞬間を強張らせてその手を振り払おうとしたが、岬のもう片方の手に捉えられた。驚き、息を乱したレイナは、潤んだ瞳で岬を見詰め返す。

「すまない」

「どうしてそんな事を言うの？」

低い声で思わず呟いた岬に、レイナはその訳を問う。けれど、岬は答えられなかった。

どれだけ岬がレイナの事を想っても、彼女には夫であるジェフが居る。一時の感情に流されてしまい、あらぬ望みを抱かせて悪戯にレイナを傷付けたくは無いと思った。レイナはジェフの許へ帰る場所がある。だからこそ、あの時レイナを拒否したのだ。けれどその結果として、たった数日の間に、髪の色が抜け落ちるほど想像を絶する辛い想いをさせてしまったのかと思うと、岬は自分の執った行動を悔んで胸を痛めた。

岬が返事の代わりにそつと手を伸ばして、レイナの白い髪を何度も労わるように撫で付けると、レイナは髪越しに岬の手の温もりを感じ取り、静かに目を閉じた。

「あっ！」

不意に岬がレイナの腕を軽く引いた。レイナは力無く岬の腕にすんと収まり、咄嗟に身を硬くして身構える。

「何をす……んっ！」

最後まで言わせて貰えなかった。レイナの唇を岬が奪う。

きつくて辛い酒と煙草の味がした。レイナは元々酒も煙草も苦手である。けれども苦手な筈なのに、少しも厭だとは思えなかった。それは岬の広い腕の中が、温かくて心地良かったせいなのかも知れない。

「酔って……いるの？」

「駄目だ……すまない。俺、どうかしている」

岬はレイナの細い両肩を掴み、慌てて引き離れた。

「すまない……」

岬はレイナと眼を合わす事が出来なかった。一瞬でも『レイナ』を『玲奈』と重ね合わせた自分が許せない。喻え身体を共有しているとしても、彼女の身体は既にレイナのものだ。自分の身勝手に『レイナ』に『玲奈』を演じさせる訳には行かない。何より、彼女はもう自由なのだから。

そう判ってはいる心算なのだが……  
眼を堅く閉じて、岬は顔を伏せた。

『どうした？ お前の女だろう？ 中身が少々違っていても、身体は同じなんだ。何を躊躇う？』

頭の中でジンの声がした。岬は『レイナ』の身体が、『玲奈』のものであることが判明した日の事を思い出していた。

『少々って……乱暴な言い方だな？』

ジンの言葉に動揺した岬は、彼に心を読まれまいとして曖昧に笑った。

『笑ってごまかすな！ 自分の事だぞ？ そんな及び腰でどうするよ？ 他の男に攫われても良いのかよ？』

『それは……』

岬はジンの言葉に口籠った。

ジンには隠していた事だが、既に彼女はストーカーだったジェフの手に堕ちている。

『それとも、一度死んだ女の『死体』を抱くのは願いたい下げか？』

余りなジンの言いようにカツとなり、岬は乱暴にジンの胸倉を掴み上げて睨んだ。

『そんな言い方するな！』

『俺は事実を言ったただけだ。なら、さつさとモノにすれば良いじゃないか』

『……けど、彼女は……』

岬の言葉をジンは鼻で笑った。

『お前、いつからそんなになった？抱いてしまえばコッチのモンじゃねーのかよ？』

『そんな簡単な問題じゃ無い。彼女の場合は特別なんだ！お前に如何こう言われる筋合いは無い！』

『なっ！お、お前が悩んでいるみたいだから、俺は……』

『迷惑だ！お前に何が判るよ！』

珍しく剥きになった岬の剣幕にジンは驚いて退いた。普段の半ばお約束のような遣り取りとは明らかに違っている。

『岬、お前そんなにあの女が……』

『黙れっ！』

岬はぴしゃりと言い放った。

『はっ、逆ギレかよ？お人好しの上に更に何かが付きそうだぜ』  
ジンは捨て台詞を吐き捨てた。気不味い雰囲気か辺りを満たす。

でも……それでも彼女は玲奈では無い。岬が愛した『玲奈』とは違うのだ。『諦める』と言う自分と『諦めるな』と言う自分が鬨ぎ合い、この上無く不快で堪らなかった。

理屈では頭で理解している心算だったが、感情が……身体がどうしても付いて来ないのだ。

「どうして謝るの？」

レイナは伏せ目がちに視線を岬から逸らせたが、彼女の身体は岬



の腕から逃れようとはしなかった。

ゆっくりと岬を正面から見上げると、レイナの細い肩に掛かった長い銀の髪がさらりと流れる。

「私が貴方の知っている女性に似ているから？」

「！」

今度は岬が凍り付く。

「あの写真の女性に……」

レイナが眠っていた岬の部屋には、机の上で小さな写真立てが裏返しに倒されていた。

目が覚めてその事に気付いたレイナは、悪いと思いつつそれを手に取って見てしまったのだ。

そこには岬に寄り添う玲奈が写っていた。穏やかな光に包まれた彼女は、此方に向って優しく微笑んでいる。

「この人は……誰？」

自分と同じ顔を持った女性が、岬と一緒に写っている。その事実を知った瞬間、レイナは自分が高い崖から一気に突き落とされたような気分になってしまった。

今まで岬が優しくかった理由が、この一枚の写真に在ったのだと覺り、愕然とした。

岬の想っていた女が、自分では無かったのだと否が応でも認めなければならなくなった残酷な現実に気付いてしまったのだ。

暫くの間、レイナは頭の中が麻痺してしまい、考えを廻らせる事が出来なくなつた。まるで身体に大きな風穴を空けられてしまったような感覚さえある。

レイナは写真を手にしたまま力無くベッドの端に座り、ゆっくりと首を巡らせて窓に映っている自分の姿に視線を移した。

流れ落ちる長い髪は既に元の色を失ってはいたものの、明るい栗色の瞳に、白い肌。少し痩せてしまっているが、そこには写真と双子のような自分の姿が映っていた。

しかし、目の前の窓に映ったレイナには、彼女のような明るさも、ましてや自分の過去の記憶すら微塵も無いのだ。

『君は笑わないんだな』

いつだったか、岬が言った言葉が蘇る。

その時は、何故そんな不躰な事を口にするのだろうかと思っただけで腹立たしく思ったのだが、写真を目の前にした今のレイナには、岬の心が読み取れたような気がしてならなかった。

岬のあの優しさは、自分に向けられていたものではなく、自分の姿とそっくりのこの写真に写っている『彼女』へ向けられていたものなのだ。

けれど、腹立たしく思っていた岬の言葉に、どうして自分が不用意に泣き出してしまったのかは、未だに判らなかった。

魂が抜けてしまったような虚ろな瞳で、窓に映った自分の姿をぼんやりと見詰めているレイナの視線が違和感を覚えて静止した。

その細い首には、ジェフが付けたチョーカーは無かった。両手で首を何度も探って確かめてみるのだが、いつも感じていた厭な金属の感触が指先に無い。

岬が外したのだろうか？ 特殊な工具が無ければ、どんなにしても外せなかったものなのに。

ジェフから『高価な品だから』と言われ、大切に身に付けて決して外さないようにと言われていたものだった。けれども、高価な宝石類を買い与えては、レイナの心まで手入れたのだと勘違いして喜んでいるジェフの態度を眼にする度に、レイナはそれが厭で堪らなかった。

そして澄んだ輝きを放っている真紅の宝石 レディ・ブラッドには、何故だか人の欲望や邪念のような禍々しさをいつも感じていた。そんな宝石がどうしても好きにはなれず、何度も自分で外そうとしてはジェフに見付かり、その度に酷い暴行を受けていた。

けれど、ジェフからもう付き纏われる心配は無い。レイナはもう自由なのだ。

『でも……』とレイナは思う。

自分はこれからどうすれば良いのだろうか？ ジェフの籠の鳥となっていた頃から『自由』という言葉にずっと憧れていた。しかしその反面、『自由』を得た代償として孤独になってしまった自分が重く押し掛かる。

それでも、いつまでもこのままでは居られないと思った。『彼女』の存在を知った以上、自分が此処に居残りたければ、どうすれば良いのか？ その答えはただ一つしか無い。しかし、それでは何より自分が可哀想で惨めではないか。

「……」

ふと、誰かに呼ばれたような気がして、レイナは薄暗い室内を改めて見廻した。

室内に置かれているクローゼットやテーブル等、レイナにとっては既視感を抱くようなものばかりなのに、思い出せるような物は何も無い。けれど何故か懐かしいような……錯覚とも取れる不思議な感覚に見舞われる。

恐らく、以前岬の部屋に来てその時に感じた『雰囲気』を感覚的に捉えて覚えていたものだろうと思った。一度ならず、二度までも此処にレイナは来ているのだ。見覚えがあったとしても何ら不思議では無い。

錯覚だと認めたレイナは、軽い失望を覚えて肩を落とした。そして再び手にしていた写真の女性を見詰める。

岬に尋ねた訳でも無いのに、何故だかレイナにはその女性が岬の中に深く刻まれたまま、手の届かない遠くに行ってしまったのだと判った。

手にした写真立てに、不意に雫が零れ落ちる。

「泣いているの？ 私が？ この女性に？ それとも……私自身に？」

「レイナ、見たのか？ あの写真を」

「ええ」

岬が俯いたままそつと囁くと、レイナは溜息のような返事をして頷いた。

レイナに彼女の存在を知られたくは無かった筈だったが、岬は彼女の存在を証明していた写真をレイナの眼に触れぬよう隠し込んだりはしなかった。自室に置いていた写真立てを、単に伏せていただけだったのだ。

『玲奈の存在を知られたくは無い筈なのに、知らせたい……』この矛盾している行動の裏には、岬の賭けとも取れる身勝手な動機が在った。もしかすると『玲奈』の記憶が戻って来るかも知れないと甘い思惑を抱いたからだ。けれど同時にそれは『レイナ』に対して酷い仕打ちをしてしまう事に他ならないのは百も承知だった。

「き、君には……君には全く関係の無い女だ。気にするな」

「嘘」

努めて平静を装った岬だったが、この期に及んで言い逃れなど出来る状況ではない。恐らくレイナも判っている筈だ。なのに岬は強引に『他人の空似』だと片付けてしまおうと言うのだろうか？

「だったらどうして……どうして？」

レイナはそつと自分の唇に触れた。

「私は……私はあの女性の代わりなの？」

目頭が熱くなる。目の前に居る岬の顔がぼんやりとぼやけて、熱い涙が頬を濡らした。写真の女性と自分とを重ね合わせてしまうだなんて、何て失礼で酷い男なのだろうかと思う。この男は一体何処までずるい男なのだろうか……なのにレイナの心の奥深くでは今でも尚、岬の事を想い続けているのだと自覚せずには居られなかった。

「レイナ、違……」

岬は済まなそうな表情を浮べて、レイナから顔を逸らせる。けれど、言い掛けた言葉とは裏腹に、彼女の肩を力強く引き寄せて抱き締めてしまった。

「このまま……少しだけでいい。このままで居させてくれないか？」  
岬の吐息がレイナの首筋を擦り、レイナはゆっくりと瞳を閉じた。抱き締められた身体を通して、岬の吸っていたであろう煙草の匂いと、人が持つ仄かな温もりが伝わって来る。

「岬……」

ずっと血の臭いと酒や煙草の臭い、そしておぞましい獣のような雄の体臭しか知らなかった。勿論、岬も酒や煙草を嗜んでいるのに、何故か不快感は覚えない。

着痩せするタイプなのか、岬の胸板は思ったよりも厚く、鍛えられた無駄の無い身体つきだ。岬に出逢って抱き締められたのはこれが初めてでは無かったが、その感覚は遠い昔の誰かの記憶と似ているような気がしてならない。なのにレイナはその大切な人を思い出す事が出来なくて切なくなる。

レイナの鼓動が速くなり、全身が熱くなり始めた。

傍に居るだけで安心出来る心地好さが、肌の温もりを通して現実のものとして直接感じ取れる。

今まで、何人もの男達に同じように抱かれていた。触れられるその度に、自分が穢され何かを失って行く気がして、厭で堪らなかった。なのに、岬に抱き締められていると言うのに、レイナはその腕の中で不思議な安堵感を感じている。

温かくて気持ち良いとさえ思った。互いの体温を共有したレイナは、もう少しこのままで居たいと願った。しかし、脳裏に写真の女性が浮かび、再び現実に取り戻されてしまう。

自分はその女性の身代わりなのだと言う、確たる事実を突き付けられた瞬間に

「酷いわ」

レイナの白い腕が岬の背にそつと廻り、背中に廻されたレイナの腕の感触に、岬の背中がピクリと反応する。

「レイナ？」

「汚れた私ではいけない？」

レイナは岬の肩に頭を預け、ゆっくりと岬を見上げる。

「レ……イナ……」

物憂げな妖しい瞳に射抜かれて、頭の奥が痺れるように疼き、岬は心を奪われてしまった気がした。このまま彼女を手放したくないと言つ身勝手な強い想いが湧き起こり、レイナの身体を折れるほど強く抱き締めて、再び柔らかな唇を奪う。

岬の腕に強く抱かれながら、挑発して刹那的に岬の心を天秤に掛けて推し量ろうとしている悪女のようなもう一人のレイナが居た。今の自分は、チ力達と同じだと思った。傍に居れば居るほど、岬を自分のものにしたいたい気持ち益々強くなって来る。岬には自分と同じ姿をした女性が居たのを知っていながら、何というはしたない事を考えているのだろうか。レイナは自分自身に嫌悪するのだが、それでもレイナは岬から離れたくないと強く願った。

「シャワー借りても良い？」

「その前に、傷を診せてくれ」

岬は言うが早い、レイナの返事を待たずに右腕の包帯を手早く解いた。

思っていた通り、通常であれば致命傷だった筈の傷口は、既に完全に塞がっている。岬はレイナが通常よりも数倍の速さで治癒する能力を持っている事を改めて知った。

以前、レイナはジェフによってミューズ社の細胞蘇生液を常用されていた。あの薬は初期治療には驚異的な治癒能力を発揮するが、反面、使用頻度が高くなればそれに反比例して本人の自然治癒能力が衰えて行く代物で、事実上医療局からの不認可を受けた薬だった。恐らく、レイナが事故で行方不明になった時以降、その薬は彼女に投与されてはいないだろう。だとすれば、薬の効力が及ばなくな

っている今がレイナの本来持つている治癒能力なのだろう。

動物は自分のモノだと主張する為に、傷や臭いを付けたりするマ  
ーキング行動を採る。何度も頻繁に蘇生液を使用していたのは、レ  
イナの身体に残った傷を、逆に消さずに残していたかったからの  
かも知れない。そんなジェフこそ動物的なヤツだと岬は思った。

しかし、『玲奈』が生前、ジェフの事を徹底的に拒絶していたの  
を考慮すれば、ジェフの束縛したい男の気持ちか岬には解らなくも  
無い。だからと言って、自分の心の内だけに留めて居られずに現実  
の彼女に手を出す事が許されると思っていたのなら、それは大きな  
間違いだ。

『常に彼女を束縛していなければ気が済まない』 ジェフのそん  
な声が聞こえた気がして、岬は不快感に顔を顰めた。つくづくお前  
の遣りそうな事だなと、本人に嫌味の一つでも言いたくなってしま  
う。

「どうかしたの？」

「あ？ いや、何でも……」

『無い』と言おうとした時、唐突にレイナのお腹が可愛らしく自己  
主張した。

「……」

不意を衝かれ、お互いに見詰め合ったままで固まってしまう。

「い、厭っ！」

くすくす笑う岬に、レイナは真っ赤になって顔を背けた。

\* \* \*

サイドテーブルに置かれていた岬の携帯が鳴った。

岬は、傍らで軽い寝息を立てているレイナを起こさないように、腕  
を伸ばして着信音を素早く消した。

携帯から微かなノイズに交じって、慌ただし遣り取りをする檜  
山達の通信が聞えている。桐嶋署の捜査には外されたが、岬はレイ

ナと出会う確立が高い捜査班である檜山達の車両に、盗聴器を仕掛けていたのだ。但し、レイナは今此処に居る。どうやら檜山達が発見したのは、彼女が言っていたもう一頭の事らしい。

「出掛けるの？」

「あ？ ああ」

着替えていた岬は背後から声を掛けられて動揺した。

深い眠りに就いているものだと思っていたレイナがもう眼を醒ましている。通常の間人よりも鋭敏になっているレイナの『勘』の鋭さに、岬は怯んでしまった。

彼女は少し気怠そうな表情で、素肌にシーツを引き寄せて上体を起こす。乱れた髪が大理石のような白い肩に掛かって艶かしい。眠りを妨げられてさも迷惑だわと言わんばかりの態度が、普通の女性となんら変わらない。そして、その様子が却って岬を安堵させた。

「呼び出し？ 貴方こそ一体何者なの？」

レイナの明るい栗色の瞳が岬を疑り、探っている。

一時の感情に流されてしまったが、レイナは心の奥深くで、まだ岬の総てを受け容れてしまった心算ではなかった。ホストであったり、医者でもあると言った謎めいた岬の言葉が俄かに気になり始めたのだ。明け方に少年達を助け出そうとして、岬が口走った言葉が蘇って来る。

「そう……確か、『刑事』って。貴方があの子達にそう言っていたのが聞えたわ」

「……」

「ねえ」

岬は一瞬躊躇ったが、彼女をこれ以上騙す事は出来そうもないと諦めた。

「本当だよ。俺は桐嶋署の刑事だ」

「警……察？」

「ああ。クラブ内での薬物取引捜査関連で、俺はホストとして潜入



した。君は薬物取引に関与している重要参考人として、既に警察のリスト上位に名前が挙がっていたんだ。しかも広域捜査の対象となっている豹だと言う事も。俺はその事実を把握していたが……報告出来なかった。叶う事なら君が捜査に気付いて、何処かに消えてくればとさえ願った。だけど、君は逃げなかった。それどころか……」

「医師だつて言っていたのは嘘なの？」

「いや」

「嘘よ。だつて今刑事だつて言つたじゃない」

「本当だ」

岬は背広の内ポケットから、自分が外科医である事を証明するFIC I機関のIDカードを提示した。

「結果的に君を騙す事になってしまったが……俺はそんな心算は全く無かつた」

それどころか、レイナの身体の持ち主 『玲奈』の記憶が戻つてはくれないのだろうかと未だに願つて已まないもう一人の岬が居る。

けれど『玲奈』に戻つて欲しいと願つても、レイナは既に『玲奈』ではない。別の人格が形成されている『レイナ』だ。

『玲奈』の命を奪つた一発の銃弾が、彼女の記憶部まで消し去ってしまったのか、或いは人為的に削除されてしまったのか……岬には後者の人為的な操作が為されたように思えて仕方が無い。

レイナは岬の提示したIDカードを見詰めた。

「そう。疑つて……悪かつたわ。そうよね。でなければ介抱して貰えない。貴方に出会えなかつたら今頃私は……」

レイナは一番傷の酷い右腕に視線を落した。白い包帯は粗雑そうな岬の外見とは掛け離れた、丁寧な巻き方だ。

「君の言つた事が本当だつた。また犠牲者が出た」

「信じていなかったの？」

先を急ごうとする岬の背中を見ていたレイナの表情が硬くなり、

背中ではレイナの視線を感じていた岬の動きがぴたりと停まった。

いい加減な返事をして、不覚にもレイナを失望させてしまったと気付いて後ろめたくなった。

「……」

岬は彼女に視線を合わせる事無く顔を背ける。

「出て行けば良いのでしょうか？ 此処から。貴方もジェフと同じ。」

厄介事はもう沢山なのでしょう？」

レイナはそんな岬の様子から自分の引き際を感じ取り、投げ遣りにそう言っただけで涙ぐむ。

「いや、君は此処に居るんだ」

「え？ 今、何て？」

聞き間違いかと思った。自分の都合の善いように聞き違えたのかと。

「誰も傷付けたくは無い。此処に居ろ」

「居ても……いいの？」

縋るような直向きなレイナの瞳に、一瞬岬は強い罪悪感を覚えた。

「勘違いするな。俺は君を匿う心算で言っているのじゃない。頃合を見計らって、君を警察に引き渡す。此処に居るんだ」

「そんな……」

岬の心無い言葉に、レイナが息を飲む。岬の言葉は引き寄せておいて突き放す、酷い言い方だ。

「此処から逃げ出せば、今度は問答無用で射殺される。俺は……」

いや……此処で拘束されたとしても同じだろうと思った。レイナは何れ処分されるであろう予測は簡単に想像が付く。

そして二度も彼女の死を眼にしなければならぬのか？

岬は焦りにも似た不安を覚えた。何か他に助ける方法がある筈だ……時間さえあれば、何か他に手段が……しかし、解決の手懸かりを模索してみるのだが、自分一人の力では切り開く術がどうしても

見付からない。

躊躇いが岬の口を更に重くしていた。

レイナは『射殺』と言う岬の言葉に怯えて気が動転した。

「自分の保身の為に、私を捕まえるの？」

「それは違う！」

「何が……何が違うのよ！」

レイナはカツとなり、思わずサイドテーブルに置いてあった目覚まし時計を岬に向かって投げ付けた。

かわそうと思えば簡単にかわせる事が出来た筈だった。なのに岬はそれを避けようともしない。時計は岬の左顎を直撃して落下し、バラバラに分解して四方に散った。たちまち顎の部分が赤くなる。

レイナの驚いた表情が、重く沈んだ岬の瞳に映る。

「わ、私……」

時計を投げた手が震えた。レイナは岬の赤くなった顎と足元で壊れた時計を交互に見詰め、自分が遣ってしまった事の重大さに気付いて我に返る。

「……………」

「こ、来ないで！」

岬は黙ってレイナに近寄った。レイナは怯えた表情で首を大きく横に振り、拒否をして後退った。胸元へ引き上げたシーツを握る手に一層力が籠る。

ジェフの時のように殴られるのだと思い、堅く眼を閉じて身構えた。そして、変身が恐怖心から起因しているのだと知っているレイナは、自分がいつ獣に変身するかも知れないと言う恐怖に怯えた。

「厭！ 変身したくない！ あ！」

いきなりシーツごと上からふわりと抱き締められた。レイナの身体がびくりと震え、潤んだ瞳が大きく見開かれる。

「気が……済んだか？」

岬は眼を閉じて、優しくそっとレイナの耳元で囁いた。

「俺は君を護りたい……此処に居る。いいな？」

岬はもう一度念を押すようにそう言うと、部屋を出て行った。

「どういう……意味なの？」

レイナは暫らく、岬が消えて行ったドアを見詰め、やがて両手で自分の身体を確かめるようにしてそつと肩を抱いた。

「獣に変わらなかった……私……」

不思議だった。あのジェフでさえレイナの自由を束縛するコントローラーが無ければ、決して近付こうとさえしなかった。なのに岬は違っていた。

不安や恐怖に包まれて、いつ獣に変身するかも知れないと言う事を承知していながら、岬は全くの無防備の状態で自分に近付き、抱き締めたのだ。

覚醒剤や幻覚剤を投与され、幾度も意にそぐわない男達の相手をさせられた。そしてその度に記憶が飛び、再び意識が戻ると全身が血の臭いに包まれているという、おぞましい悪夢の繰り返しを何度も経験して来た。

岬と出逢い彼を襲うまで、変身したレイナは自分を取り戻す事が出来なかったのだ。

レイナは左手でそつと自分の右手を包み、頬を寄せた。眠りに就くその時まで、ずつと指を絡めて優しく握り締められていた手だ。

「岬……」

甘やかな唇が解けて、思わずその名が洩れた。

記憶を失う以前に、そんな名前と呼ばれていた人が自分の近くに居たような気がしてならない。その人は自分にとって、恐らく忘れてはいけないうちでも大切な人だったように思うのだが、思い出さなくてとは焦れば焦るほど、指の間から擦り抜けて毀れ落ちてしまう一握の砂のように曖昧な記憶の中に流されてしまい、微かに感じ取れていた温かくて懐かしいような思い出の手掛かりさえ消え失せて行ってしまふ。

何かを思い出しそうで、思い出せない　じりじりとしたもどかしい焦燥感に苛まれる。ジェフと一緒に居た時は、こんな想いを抱いたりなどしなかった。それまでは自分に近づく男達が何処で何をしていたようと全く気にはならなかったのに。

けれど『高城　岬』と名乗る男と出逢ってから違っていた。

失った記憶を呼び起こそうとした引き金が、まさか『嫉妬』と言う感情であったとは、レイナ自身思いも寄らなかつた事だ。自覚するに至ったのは、岬の部屋で彼女の写真を見てしまったせいなのだと気付いてからだつた。

見た目が何もかも似ている女性を、岬が意識しない筈など無い。しかも今まで自分を見詰めていた岬の眼は、自分を通り過ぎて『あの女』<sup>ひと</sup>を見ていたのだ。優しい人だと思えたのは、岬が自分と彼女とを重ね合わせて見ていたからなのだと知り、狂おしいほど切なくなつた。

『俺は君を護りたい』

たつた今、そう言つて出て行つた岬の言葉が脳裏を過る。

その言葉に嘘偽りは無いだろう。けれど岬は自分を引き渡すとも言つたのだ。その言葉の裏には、愛したいけど愛せない……そんな拒絶の答えがあるのではないか？

自分はある女性の身代わりでしか無いのだと判つて居ながら心を許した筈だ。なのにそれでも猶、岬の心が欲しいと願っている。醜く歪んだ自分の心が堪らなく厭になる。

これは何かの罰なのだろうか？

一人取り残された不安がレイナを一層悲しくさせ、大粒の真珠のような涙が溢れて頬を伝つた。

## 第15話 奇跡の行方

地下の駐車場に通じるエレベーターの扉が開いた。

「よ」

扉のすぐ傍で、壁に寄り掛かって携帯電話を掛けていた男から、不意に岬は呼び止められる。それが自分の相棒であるジンだと気付いた岬は、レイナを拘束しなかった後ろめたさから、戸惑いの表情を浮べた。

ジンは徐に通話を切ると、岬に向き直って大きな息を吐いた。

「まあ、そのう……なんだ。こうなるだろうなって事は、端っから判っていたけどな……そらよ、例のコントローラー」

ジンは半ば岬に同情するような視線を送り、黒いカード型のコントローラーを投げて遣した。それを岬は難なく片手で受け取る。

「もう?」

「ああ。ちよいとケビンを急かして遣ったんだ。奴には個人的に貸しがあるんでね。そいつは何でも人間の耳には聞えない周波数を出すらしいな。奴に言わせると、要するに『犬笛』ってヤツなんだそっうだ」

岬は手にした極薄のコントローラーに視線を落とし、ジンはそんな岬の表情を窺った。

「何も犬だけにしか効果が無い訳じゃ無い。他の生物にも該当するらしいが、極稀にこの周波数を感知出来る人間も居るんだそっうだとお前みたいにな」

ジンはそう言って岬に顎を杓った。

「……」

「全く。動物並みの運動神経に、耳まで持ってるのかよ? そう言やあ、今俺達が追っているのは何だったっけかなー?」

意味深な物言いを混ぜ返したジンの黒い瞳が岬を映し出す。

岬は、無表情のままジンに視線を返した。その表情が却ってジン

を威圧する。

「こっちは粗方片付いた。奴等、自警団まで繰り出しての大騒動だ。向うは壊滅。こっちも僅かだが被害が出た……で、結局は薬事法違反でバイオ・ケミカル製薬会社代表取締役社長のソノダと会長のバルツァーが逮捕。辞任を余儀無くされた。先月、解体後に社名変更をしたミューズ社と並んで、これで二大大手医療関連会社が潰された。今日の朝刊各社一面がこの件で持ちきりだ」

「そうか」

岬は素っ気なく返事をする、ジンに背を向けて自分のバイクに向かおうと歩き出した。自分の管轄外だと言わんばかりの態度に、ジンは苛立ちムツとなる。

「まだ終わっちゃいないぜ？」

「急いでいる。報告なら後だ」

岬はぴしゃりと断ったが、ジンはお構い無しに後を続けた。

「リストの上位に名前が上がっていたジェフ・ランディアは相変わらず行方不明だ。だが俺達が社内を捜査した時、気懸かりなラボを発見した」

『ジェフ』と言う言葉に脚を停めた岬に、ジンは岬の反応を探るような眼で見て、気に入らないとばかり鼻で笑った。

「ふん、ソイツの名前『だけ』には反応アリかよ？ ……ま、いや。連邦の冷凍保管庫から紛失していた、人獣の組織サンプル。その空容器が見付かった。現物は既に焼却処分していたようだが、ラボ内にあつたセキュリティに画像が残っていた。連中、その削除まで気が廻らなかつたのか、それとも所員の脅しか何かに使う目的で意図的に残していたのかは判らないが……映像での立証性は法律上認められてはいない。だが、真の証拠を引き出す為の足掛かりにはなるだろうよ」

「妙だな……気をつける。こちらを嵌める罠とは考えられないか？」

仮にもあのジェフが、そんな落度を晒すだろうか？ 余りにも胡散臭い。

「う……まあ確かに可能性は無いとは言えないが……」

ジンは岬に釘を刺されてうるたえる。

「お前も言ったたる？ 映像での立証性は認められないって」

「あーあ、やあーっば、こうなったら……お前が匿っている女に任意同行して貰うしか無いのかな？」

ジンは意味ありげに岬を上目遣いで窺いながら、両手を上に挙げて背伸びをする。

「拘束するのはいいが、彼女は何も知らない。手荒な事をする……」

「へーへ、そう言うと思ったよ。ま、安心しろ。お前がエレベーターに乗った直後にキリー達が入れ替わりで踏み込んだんだが、既にもぬけの殻だったとよ」

「居ない？」

岬はジンの言葉を聞き返す。

「ああ」

「此処に居ると言ったのに……」

遅かれ早かれ、ジン達が岬の所に来るであろう事は承知していた。レイナは勿論、他の者にも被害が及ばないよう、ベストな形で彼女を引き渡そうとしていたし、可能であれば、本人の自首という形に持って行くことさえ思っていた。

ジンはそんな岬の胸の内を読んでいたようだ。

「まあ、人はそう簡単に自分の思い通りにはならないって事さ。それと……」

「まだあるのか？」

「ああ。これが一番俺達にとって最重要項目だろうな」

「勿体を付けるな」

先を急ぐのに無理矢理引き留められて、岬は仏頂面になる。

「三島部長が先程自宅付近で襲撃された」

「何？」

岬の表情に緊張が奔った。



「銃弾は逸れて部長は無事だ。今は六課が護衛に就いている」

「六課が？ 自分の直属は九課なのに？」

「仕方無いだろう？ 俺達が今動けるか？」

「そりゃ、まあ……」

「で、これは部長からお前への伝言『此方は此方で何とか出来る。』

お前達は今の任務を全うしろ』だと」

「三島さんに会ったのか？」

ジンは首を横に振った。

「携帯で話したただけだ。映像見る限りじゃあ顔色こそ冴えないが、結構元気そうだったぞ？ 但し、部長職は一時解任された。身柄の安全を配慮しての上からの指示だ」

「怨恨の線？」

「らしい。部長も普段温厚そうだが、ああ見えて結構敵が多かったりするんだよな？ 暫らくは六課の護衛下での自宅待機だ」

その言葉に岬はホッと胸を撫で下ろす。

「安心するのはまだ早いぞ。部長不在の今、三課の田幡課長が代理に着任した。今のお前にはシュライバーを使用する権限が剥奪されている」

「田幡が？ 俺だけ？」

「そ」

「またかよ？ こんな時に……任務中だぞ？ それを……」

「さあね。俺に訊くなよ。お前も容疑者の隠匿、同僚への暴行……他にも挙げれば幾らでも出て来る。挙動不審の注意人物に見られても已むを得ないだろうが？」

ジンは自分には関係無いといった表情で肩を竦めた。

「どういう心算だ？ あの女……」

田幡のあまりな職権濫用に、岬はカツと頭に血が昇った。

岬は四年前まで田幡課長の部下だった。何事にも結果第一主義の彼女は、岬よりも七歳年上のキャリア組。職務上、人命重視で意見する岬に対して彼女の評価は特に厳しく、任務中であっても何かと

制限を掛けられていた。

「縊りにもよって、何であの女が代行する話になってんだよ？」

忽ち岬は不機嫌になった。彼女でなければならぬ受当な理由が見当たらず、納得出来ない。

「元上司に言うねえお前も。ま、色々と根回しがあつたらしいぜ。

一時的な代理人だ。上もその程度でしか考えてはいないようだな」

「はっ！ 三島さんが居なけりやこのザマか？ 大した事ねえなFCIも！」

淡々と語るジンに岬は業を煮やした。

岬の苛立ちなど素知らぬ振りを通そうとしたジンだが、滅多な事では怒らない岬だけに今の反応は意外だった。

「陸自が動き出した。コツチも黙って奴等の介入に指を啜えて見ている事は無いぞ？」

「何？」

ジンの言葉に、岬は訝ってジンを見詰めた。

「死んだ女が生き返ったんだ。その神秘とやらを暴きたくて、ウズウズしてるんじゃない？ あの女は、特殊で稀な『生きたサンプル』

そのものなんだよ」

だがしかし、それはFCIとしても同じだ。

「陸自に情報を公開した覚えは無い」

岬はジンに問い掛けるような視線を遣した。レイナの件は極秘であり、彼女が人獣であるのを知っているのは、限られた極僅かな人物だけだ。

「俺が知るかよ。まあ、蛇の道は蛇ってね」

「……」

岬は平然と白を切ったジンに対し、目を細めて疑いの眼差しを注いだ。自分も他部署から遣つて来たワケアリだが、ジンも理由はどうあれ同じ穴の貉。しかも自身の彼女が行方不明になってからというもの、不審な噂が後を絶たないと言う闇の部分も耳にしている。

ジンを確実に信頼出来るかと問われれば、答えは『否』だ。

「俺はお前のサポートを任されている。で、三島部長は依然指示の変更を執ってはいない。この意味が判るな？」

「ああ」

「お前は先に行け。間に合うかどうか判らないが、俺はシュライバーのコード解除をする」

「許可も無いのに勝手に……」

ジンは黙って顎を引いた。岬はジンの思惑に合点がいかない。

「この場合、お前は俺を拘束するべきじゃないのか？」

「筋ならな」

ジンはあつさり肯定する。

「けど……」

「おいおい『けど』は無しだろよ。お前がまた暴走でもしたら今度は誰が抑えられる？ 俺はもう二度とご免だからな」

ジンは軽く笑うと自分の右脇腹を指差した。自分のインターセプタを起動させて、尚且つの肋骨骨折だ。二本の内、一本は完全に折れている。薬で痛みを散らせてはいるが、もう岬とは二度と遣り合おうのは御免らしい。

「シュライバーに取り押さえ貰えってか？」

「ご明察っ」

ジンはそう言うのにやりと笑った。尤もその表情でジンが冗談を言っているのがモロ判りだ。

ジンが敢えてリスクを冒してまで岬に手を貸すと言っているのは、何か裏があるのではないか？ 岬はジンの事を素直には喜べなかった。寧ろ、自分を泳がせて何かを待っているようにも窺える。助けてくれたジンに対して申し訳ないが、どうしても彼を信じ切れず、猜疑心が頭を擡げて来る。仲間を疑うのは不本意ではあるが、綺麗事だけでは済まされないのだ。

「シュライバーのコード解除にどれくらい掛る？」

「田幡のディレクトリに侵入しないと無理だからなあ」

「急いでくれ。頼む」

岬は即答を迷うジンに短く言うと、乱暴にバイクに跨った。  
一際大きく空ぶかしをし、前輪をウイリーさせて急発進した岬の後姿を、ジンは黙って見送った。

\* \* \*

高層ビルに囲まれ、狭い区画から見上げた遙か上空からサーチライトを灯している偵察用ヘリがゆっくりと旋回した。

偵察ヘリのコクピット・モニタは、熱を感知する赤外線フィルタが施されており、モニタが映し出した地上映像は、二つの蠢いている熱源を捉えていた。

「ポイント三〇八。発見しました。繰り返す。こちらセレウス。ポイント三〇八にて目標二頭を発見」

偵察ヘリの一機が、レイナ達を発見した。ヘリの側面と底部には陸上防衛隊の所属ナンバーが記されている。

「了解。散開させた部隊を再編成後、直ちに急行する」

\* \* \*

豹のジェフを見失った檜山達は、捜査チームを分割して、各自の持ち場の警備に当たらせていた。そして檜山とロブ、南の三人は、偶然拾った通信の内容把握の為に路肩に車を停めていたのだ。

「ヤバイつすよ。檜山さん！」

眉間に皺を寄せながら通信を傍受していたロブが、乱暴にヘッドセットを剥ぎ取って檜山に声を掛けた。

「どした？」

半開きにしたパトカーのドア枠に片腕を乗せて、立つたまま夜風に当たりながら、ぼんやりと眠気覚ましの缶コーヒーを飲んでいた檜山は、気怠そうに腰を屈めて車内を覗き込んだ。

「これ、陸防のです。陸防が動き出しています」

「陸上防衛軍だとお？」

「ええ」

ロブの言葉に、夜通しの勤務で睡魔に襲われていた檜山は、一変で眼が覚める。

「我々警察だけでは事が収束に向かわんと言う事か？ …… 場所は判るか？」

「はい。GSPから割り出すと……ポイント三〇八。此処からだ二十キロちよいです。奴はかなり移動していたようですね。あと、もう一つ気懸かりな事が……」

「何だ？」

「そのう、通信からだ目標が二頭だと……」

「ああ？ 二頭？ …… 確かにそう言っているのか？」

「はい。我々が追っていた奴と、白い奴。その二頭が発見されたと言っています」

「白いヤツウ？ 増えているぞ。どうしてそうなっているんだ？」

「さあ。当初は一頭だと思っていましたでしたが、体色が違って居るんですから間違い無く二頭居るんですよ。それとも別の種類の大型獣か何かだとも考えられますね」

ロブは肩を竦めて首を傾げる。

「どうしますか？」

ロブの隣に座っていた南が不安そうな表情で檜山を見上げた時、可愛らしい着信音が鳴った。

「あ、署からの通信が入りました」

ロブがモニタのスイッチを切り替える。画面には、桐嶋署長である高城雅哉が眉間に皺を寄せ、神秘的な面持ちで映っていた。

「檜山係長、君達ももう既に知っているかも知れんが…… 陸防が介入して来た」

「ええ、そのようですね。署長これは一体、どう言う事ですか？」  
惘然とした檜山が、事の経緯を問い質す。

「陸防は目標を殲滅する心算だ。D 二十九を発令した」

「何ですって？」

「殲滅って……」

その場に居合わせた者全員が、陸防の執った作戦に対して息を飲んだ。

「捕獲とか、射殺するならまだしも……」

「どうして陸防が……一体、何処で漏洩が？」

檜山は呻くように呟いた。

「判らん。FCIがこの件に関与して、機密は護られていた筈なのだが……しかし陸防が動き出したのは事実だ」

「……」

檜山は黙って頷いた。暗に内通者の存在を確信する。

「陸防からこの件に関して手を引くよう要請があった。現場付近は既に戒厳令が布かれている。我々では太刀打ち出来ない……撤収だ」

「しかし、このままでは……」

岬の横顔が檜山の脳裏を掠めた。自分の権限で岬を捜査から外してしまったが、当の岬は本来FCIの人間だ。陸防が介入したとなると、情報不足で巻き添えになる可能性が高くなるのではないのだろうか？ 捜査から岬を外さずに傍に置いてさえいれば、その心配も薄れたのかも知れない。岬の身を案じたからこそ執った手段であったが、それが裏目に出てしまった今となっては、逆に悔やまれてならなかった。

「檜山、聞えなかったのか？」

署長の声で、檜山は我に返った。

「は？ あ……いえ。この事をFCIは？」

「既に承諾済みだ。問題無い」

「なら、いいんです。了解しました」

署長の言葉に安堵したものの、檜山は岬に対して、一抹の不安を覚える。

檜山が通信を切るのを確認すると、それを待っていたかのように

ロブが口を開いた。

「係長？」

「うん？」

「何処かで飼われていた豹が逃げ出しただけの事でしょう？ 危険な動物だとは言え、豹のたかが一頭や二頭を始末するのにどうして陸防が動いているんです？ 高城達のFCIだってそうだ。彼等が動いているって事自体不自然じゃないですか？ 俺達はつきりクラブでの臓器、薬物取引の件でFCIが動いているものだと思うって。なのに開けてみればFCIも豹を追い掛けているって話になってる。そりゃあ、被害者が続出はしていますが……」

ロブは仏頂面で檜山を問い詰めた。

「そうですね。私達だけ何だか蚊帳の外を歩かされているみたいだわ。何もかもが後手に廻っていて振り回されているって感じ……もしかしたら私達、彼等の囿にされているのかも知れないわ」

南も釈然としない不満をぶつける。

「高城の件もそうだ。マスコミにスッパ抜かれちまって、汚い事は皆警察の責任になっているじゃないですか。FCIとしての潜伏捜査だったのに。いつから俺達は陸防やFCIのパシリになって居るんですか？」

「お前達の言っている事は間違っちゃいない」

檜山は車中の二人にすまなそうに表情を崩した。

「だったら理由を教えて下さいよ！」

ロブは語気を強めて檜山に食って掛かり、檜山は車内の二人を交互に見詰めた。

「間違った事は言うてはいないが、正論だとは言っていない。判っているなら俺だって此処にはおらん。俺に訊くな」

\* \* \*

「この様子じゃと、だいぶ奴さん達混乱しとるようじゃのう？ ま

あ、ああ見えてアヤツ等も案外仕事熱心じゃからのおー」

小島は他人事のように一頻り肩を揺すって笑うと、署長の雅哉を見上げた。

「誰が陸防を？」

通信機に力無く手を置いたまま、雅哉は身動きひとつ出来ずに立ち竦んでしまった。

「このままじゃと、お前さんの時とまた同じ展開になりやあせんか？」

「……」

「確か、あの時も軍が動き出して……」

「小島さん！」

雅哉は語気を強めて小島を鋭く制した。しかし、小島は猶も口を閉ざさない。

「いいや！ わしは言わせて貰うぞ。お前は岬に、お前の時以上の目に遭わせるのか？ あいつは一度玲奈を亡くしておるんじゃ。わしゃあもうあいつの姿を見るのは堪らんぞ」

「解っています。しかし……」

「FCIの三島が居らんのでは如何にもならん……か。桐嶋署の署長としてではなく、高城雅哉としてでは？」

「小島さん、何を言っているんです？」

雅哉は表情を曇らせた。小島の真意が読み取れない。

「今、三島は部長の任を一時的にはあるが解かれておる」

「任を……ですか？」

「チヨツとあちらでの事情が拗れておつてな。じゃが、お前にとつては話し易かるうて。ほれ、アヤツと話してみい」

小島は徐に自分の携帯を差し出した。古めかしい骨董品のような携帯を受け取ると、雅哉は顔を顰めて意味深に小島と彼の携帯とを見比べる。

その携帯には、鋭い爪か牙のようなもので搔かれた、古い傷痕が深く遺されていた。



「優衣……」

雅哉は携帯に刻まれた古い傷に視線を落とし、遠い昔を思い出すように眼を細めてその名を呼んだ。

「まだ……これをお持ちなのですね？」

「外装のフレームのみじゃ。中身の機種は何度か取り替えておるわい。そいつは二度と……わしは二度と同じ事を繰り返さん為の戒めとして持つておるでな」

「小島さん……」

「その……すまん。思い出させてしまったな……」

雅哉の複雑な表情に、小島は行き掛かり上とは言え、彼に辛い記憶を呼び戻してしまった自分の失態を詫びた。

「……いえ」

雅哉は静かに顔を伏せる。

「なあ雅哉、無駄な努力なんぞわしはこの世に有りやあせんと思うぞ。何も総てを自分の重荷にして背負い込んでしまう事は無い。重荷に潰されて自滅するのは目に見えとる。自分でとことん遣れる処まで遣つて、それでも如何にも成らんのなら、他人様の手を借りて凌ぐ事もアリだとわしは思うがな。成功するかせんかは時の運次第じゃ。じゃが、時として自分の努力如何によつては『運』さえも呼び寄せて味方に付ける事が可能なんじゃ」

「それが九課を設立した理由ですか？」

「はてえ？ 何の事を言つておる？ 一体何処の九課じゃ？ わしやそんな事あ知らんぞ。最近、とんと物忘れが酷くてな」

小島は雅哉の前でもお構い無しに、伸びた鼻毛を抜いてそつぱを向いた。

\* \* \*

ビルの上空でホバリングしていたヘリの底部から、禍々しい砲塔が唸りながら迫出した。照準の微調整をするその先には、二頭の豹

が居る。

二頭の豹は凄まじい唸り声を上げて纏れ合った。鋭い牙と四肢の爪が、互いの身体を切り裂き、土煙がもう々と舞い上がり、血飛沫が飛ぶ。

「はっ、丁度良い。奴等仲間割れでもしているのか、喧嘩しているぞ?」

「このままナパーム弾でもブチ込んでやればいいんだ。何も地上部隊に手柄を譲らなくても……」

「貴様等無駄口を叩くな! そのナパーム弾を外して逃げられでもしたらどうする? それに、表向きにはD・二十九を発令しているが、本来はD・十三の『回収』が目的だ。殺してしまっても貴重なサンプル扱いだからな。じきに地上部隊が集結する。外すなよ!」

「了解」

砲撃手のスコープに二頭の豹が拡大投影して映し出される。左右に離れていたクロスポイントが一つに重なった。

「発射!」

へりの二つの砲塔から、立て続けに二回、太い四本の銃が発射された。

空を斬って飛んで来た銃は、二頭の豹を無残に串刺しにして地面に貼り付ける。一本は白い豹の背中から、二本はもう一頭の背中与腹部をそれぞれが貫通していた。残りの一本は目標を失って路面を貫く。

「っしやあ! 命中!」

モニタで確認した砲撃手が、得意げに両の拳を胸元に引き付けてガッツポーズを取る。

途端にへりの機体が激しく振動し、コンソールパネルがショートして火の手が上がった。

「どうしたっ?」

へりに搭乗していた上官が操縦士を振り返った。

「判りません。五時の方向からの狙撃……」

そこまでだった。上官の目の前で操縦士の首から上が一瞬にして消し飛び、コンソールが血に染まる。

炎に巻かれたヘリの機体は、瞬く間に巨大な火の玉となってコントロールを失い、煙と炎の帯を曳いて失速すると、次の瞬間には空中で爆発した。機体の破片が炎の尾を引きながら四方に飛散する。

爆風の強烈な衝撃波が付近のビルの隙間を潜り、煽りを喰らって吹飛ばされたビルのガラスの破片が、ダイヤモンドダストのように輝いた。

「セレウス！ どうした？ 応答しろ！」

「迫撃砲か？」

地上からヘリの惨状を目の当たりにした指揮官が声を荒らげる。

迫撃砲が発射された位置を特定するが、ビルに阻まれて此方からは死角だ。

部隊が火の玉と化して落下するセレウスに気を取られていた隙を衝いて、部隊とは逆方向から、一台のバイクが急速接近して来たのを数人が目撃した。

「目標に接近する二輪を捕捉！」

「何い？ 他には？」

「居ません。一人です」

指揮官は傍に居た隊員から赤外線スコープを引っ手繰るようにして奪い取る。

「何も……確認出来ないぞ」

「衝撃波！ 来ます！」

「全員！ 対ショック姿勢！」

慌てて指揮官は指示を出し、部隊は全員が素早く路上に平伏した次の瞬間、セレウスの衝撃波が、集結したばかりの隊員達を襲った。

爆発を繰り返しながら炎を噴いて崩れ落ちる落下地点には、未確認のバイクが通過すると予測された。喻えライダーがサイボーグであったとしても、あれだけの物量が落下して雨のように降って来る

のだ。無疵では居られないだろう。

墜落した偵察機<sup>セレス</sup>は、地上に激しく激突してもうもうと黒煙を巻き上げる。

「遣った……か？」

指揮官はバイクの人物が爆発に巻き込まれたと錯覚した。

「消えまし……いい、いえ、確認！ 光学シールドを展開した模様。非感熱タイプのL 八三〇」

隊員の一人が捲し立てる。

「八三〇シールド？ ……軍の者か？」

光学シールドの更なるバージョンである、非感熱光学シールドを使用出来るのは連邦軍でも極僅かな者だけだ。

「はっ！ 現時点では不明であります！」

「馬鹿者！ そんな事は判っておる！」

「はっ！」

「何をやる心算だ？」

指揮官は訝しみ、深く腕を組む。

「未確認者、目標に近接します」

未確認者の動向を、ヘッドセットで音を拾い出しながら窺っていた部隊の一人が報告する。

「目標は？」

「は……心音微弱ながら、二体とも生存を確認」

「至急、未確認者の照合を！」

「やっています！ ……？ 確認出来ません」

IFF（識別装置）のモニタにはエラーの赤い文字が激しく点滅している。

「ジャミング（妨害）されています。GPSからの通信不能。ダウンロード出来ません。リーダー機能完全に麻痺しています」

指揮官が軽く舌打ちした。

「たった独りですか？ 後方支援が就いているやも知れん。解析急げ

！ 警戒を怠るな！」

「はっ！」

「以後は目視での行動になるか……作戦本部からの指示に変更は？」

「ありません！」

「ようし……本作戰は予定通り実行する。照準合わせ！」

指揮官が右手を高く挙げた。片膝を着いてライフル銃を構えた隊員達が、遠巻きにレイナ達を捕捉する。

「てーっ！」

十数人が構えたライフル銃が、一斉に火を噴いた。

\* \* \*

岬はまともにヘリの爆発衝撃の煽りを喰らい、走行中のバイクから投げ出されていた。防御シールドのインターセプタを起動させて身体を丸め、受身の態勢で激しく地面に激突しながら二、三度転がる。

岬を放り投げたバイクは横転し、火花を撒き散らせて路上を滑走した。燃料タンクが破損して引火し、歩道に引っ掛けて爆発した。

「ツツ……」

気力で立ち上がった岬は、全力でレイナ達の許に駆け出した。走りながら、隊員達が上官の指示で一斉に銃を構えて狙撃体制に入ったのを確認する。

（間に合ってくれ！……頼むツ！）

祈る気持ちで、再び『気』を集中してインターセプタの起動を促した。

一瞬のうちに岬の身体は黄緑色の光に包まれ、インターセプタが起動する。しかし、隊員達が手にしている大型ライフルではインターセプタを以つても歯が立たないだろう。喻え自分の身体を盾にしたとしても、二人が助かる可能性は殆んど皆無だ。

それでも無茶は覚悟の上だった。

「止めるおおー！」

白豹であるレイナに縋って絶叫する岬の声が、銃声によって掻き消される。

隊員達が引き金を引くよりも早く、コンマ数秒ほどの僅かな差で上空から舞い降りて来た黒い昆虫形のロボットが、素早くその弾道を遮った。大きく広げられた黒い翅から激しく火花を散らして、陸防の銃弾全てを受け止める。

「！」

シュライバーが受け止めた一発が兆弾となって、岬のインターセプタを突き破り、右脇腹を貫いた。

ライフルの威力に押されてシュライバーは岬のすぐ目の前まで吹飛ばされてしまう。

現れたシュライバーは岬の専用機。どうやらジンがシュライバーのコード解除に成功したようだ。しかし、あとコンマ数秒シュライバーのバックアップが遅れていれば、岬の命は無かった筈だ。

特殊硬化ガラスコーティングされていた漆黒の翅には無数の弾痕が残り、罅割れて白い翅になっていた。ダメージを負ったシュライバーはギギギと一声鳴くと、脚を折って崩折れる。そして、左右の視覚センサーである眼の青いランプが消滅した。損傷を受けた内部機能復元の為に、一時的に外部電源を落したのだ。

「くー！」

岬は銃弾を受けた脇腹を押えながら、素早く手にした柄のスイッチチを入れた。不快な音がして、柄から一メートル程の棒状になった青白い光が現れる。岬はそれを袈裟懸けに薙ぎ払い、二頭の豹を串刺しにしている銚を短く切断した。そしてジンから受け取ったコントローラーのスイッチを入れる。

意識を失い銚に貫かれたまま、レイナの身体は人の姿に戻った。白い彼女の長髪が素肌ふわりと纏い付き、傷口から溢れ出す自らの血で瞬く間に紅く染まって行く。

もう一頭の豹は身体を串刺しにされていて意識を保ったまままだ

った。寧ろ、酷い仕打ちを受けて『人間』そのものを嫌い敵として見做している。真つ赤な血反吐を多量に吐き散らせながら必死にもがき、猶も猛然と岬を威嚇した。

岬はレイナと同じく串刺しになった金色の豹に視線を遣した。地面に貼り付けられても尚抗って、銛から逃れようとして狂ったように暴れ、血飛沫が岬の顔や手足に散る。

辺りに立ち込めた白煙が部隊の視界を遮った。

「目標捕捉出来ません」

徐々に白煙が薄くなり、部隊は銃弾で翅が白くなったシユライバ―が不自然な状態で機能停止しているのを発見した。その向こうで、狂ったように暴れている金色の豹と向かい合っている背の高い男の姿を認めて驚いた。

「あれは…… F C I の『クワガタ』だ。それがどうして此処に？」

一人が呻るように呟いた。

「 F C I ? F C I は既に我々にこの件を譲渡したのではなかったのか？」

「どう言う事だ？」

隊員それぞれがお互いを見合わせて首を傾げる。

「このままでは埒があかぬ。各自、目標に接近するぞ」

指揮官は部隊の移動を促した。

岬はレイナを地面に貼り付けている銛を握ると、渾身の力を込めて彼女の身体ごと地面から引き抜いた。力を籠めた事で銃弾を受けた岬の脇腹から多量の血が溢れ、右膝を紅黒く染めた。

一刻も早く、この禍々しい銛を彼女の身体から引き抜いて処置して遣りたいのだが、状態から判断してそのままにしておいた。迂闊に抜けば彼女の失血死は免れない。岬は震える手で自分の血で染まった背広を脱ぐと、レイナの身体に掛けて遣った。そして威嚇しているもう一頭の豹に向き直る。

豹は猛烈な痛みには堪え切れなくなり、苦痛の表情を浮べて顔を顰めた。かなりの出血量だ。傷が深いのに大暴れしたのが災いしていた。人間なら輸血なり対応出来るだろうが、豹となるとそれは難しい。どのみちこれだけ多量に出血しているのだ。失血死させるよりも自分の手で楽にさせてやれば良いのかも知れないとも岬は思った。陸防の攻撃を受け止めて機能停止したシュライバーの両目に、再起動の兆しが現れた。青い光が灯り、見るうちにその光が強くなる。

岬はシュライバーの再起動を確認すると、恐怖に怯えて威嚇する豹ににじり寄った。

「おとなしくしろ。今、お前のも抜いてやる」

岬は覚束ない足取りで近付くと、傷口を抑えて汚れてしまった利き手を伸ばした。

「近寄ルナ！」

はつとして、岬は手を引いた。

「な？……喋れるのか？」

豹は鋭く岬を睨み返した。金色の燃えるような瞳が躊躇する岬を見据え、その背後で気を失って倒れている白髪のレイナを捉える。

「れいな、一緒……来イ！」

豹は天を仰ぐと静かに眼を閉じた

岬はその言葉が何を意味するのかを瞬時に悟り、素早くレイナを自分の身体で庇って地面に伏せる。

\* \* \*

「こんな所に居たのかよ？ でもよくもまあ、その程度の怪我で済んだよな？」

警察病院の屋上でベンチに独り膝を抱えて座り込み、ぼんやりと空を仰いで喫煙している岬を見付けて、ジンは近付き声を掛けた。

岬の右手は再び肩から吊るされて固定されている。そして、顔や



腕に至る所にリバテープやガーゼが貼られていた。

「……」

岬は感情の読み取れない、呆けたような視線だけをジンに遣す。

「今更ながらお前の腕には感心したよ」

「何が？」

ほけつとして答えた。まるで他人事だ。

「何が……って、あの状況下で彼女を助け出したのが……さ。お前は負傷していたし、彼女も一時は心肺停止状態（CPA）だったと聞いた。けど、お前は本当に助け出した……怖くはなかったのか？ 自分が大切だと思っている者に対してメスを握るのを。失敗するかも知れないとは思わなかったのか？」

「あの場合、俺しか居なかった。彼女の状態を診てもう駄目だと諦めていた奴等に、お前なら任せられると思うか？」

「いや」

「替えの利かない、一つしかない命を託されるんだ。『出来ませんでした』は理由にならない。だから患者が彼女でなくなつて、俺はいつだって怖いよ」

岬はジンから視線を逸らせると、珍しく青空が覗いた空に向つて煙草の煙を吐き出した。

いつもの覇気の無い岬に見えるのだが、ジンは岬に妙な違和感を覚えて警戒する。

「それにしてもあの爆発でよく……助かったな？」

豹は覚悟を決めたのか、体内に潜ませていた小型の高性能爆弾で自爆。彼等を遠巻きにしていた陸防の部隊総てを巻き込んでいた。

「助かったのは、シュライバーが楯になったからだ。幾ら俺でもインターセプタだけじゃ助からなかった」

岬は胸のポケットから、シュライバーのメモリチップを取り出してジンに見せる。コイン程度の大きさのメモリチップは高熱で変形し、既に元の形状を留めてはいない。

支援 A・I のシュライバーは壊れれば何度でも製造される。岬が

手にしているメモリを共有する、寸分違わない同じシュライバーが製造されるのだが、岬を庇ったあの時のシュライバーとは違うのだ。指示する人物を認識し、いざとなれば自らの身を呈してでも護る。しかし、シュライバーには生物の持つ一切の感情等はプログラムされてはいない。寧ろ岬達の楯になったのは、シュライバーが『身代わり』として採った行動ではなく、岬達を襲った『爆発』という物理的な現象を回避する為に、機械的に行動した結果に過ぎない筈だ。だが、本当にそうだったのだろうか？

岬達の楯になり、炎に焼かれて機能を落すほんの少しの間、岬はシュライバーが力無くキキイと鳴いていたのを聴いていた。時折、鳴き声ともれる金属音がシュライバーから聞えていた。それはシステムの起動時や切り替え時によく発生していた機械的な発生音だ。自分の専用機を失う度に、感傷に浸っている場合では無い事も解っている心算だ。実際、岬が耳にしたのもシュライバーが鳴いていたというのは錯覚で、単なる機械音だと言われればそうだと取れる。

真剣な表情でメモリを見詰める岬に気後れしてしまったジンが、伝えるべき用事を思い出して我に返った。

「三島部長が入院した」

岬は素早くベンチから跳ね起きて腰を浮かせる。

「命に別状は？」

「無い。腹と脚を撃たれたが、意識はしっかりしている。つくづく悪運が強いつて言うかタフなオヤジだぜ」

「六課の護衛は？ 連中は一体何をしていたんだ？」

護衛が聞いて呆れる。岬はジンの報告に顔を顰めた。

「部長からの直接指示で六課の連中が引き揚げた処を狙い撃ちされた」

「どうしてそんな事を？ 狙撃してくれと言わんばかりじゃないか？」

岬は護衛していた全員を引き揚げさせた三島の本意が判らない。ジンも岬と同感のようだ。

「犯人のうち、一人は既に所轄が身柄を確保した。アーヴィン・オースティン。コイツは唯一、生身のグレネイチャだ。お前はヤツを知っているよな？」

岬の脳裏に、自分の潜入捜査を暴き立て、雑誌に記事を掲載したアーヴィンの生意気そうな顔が浮かんだ。彼は軍とは完全に縁を切ったものだと思っていたのだが……

「はあ？ 知らねーよ」

岬は惚けた。尤も、アーヴィンとは関わりになる心算は無いし、ジンから勘繰られるのも御免だ。

「ふんっ、惚けたって無駄だからな。バレてんだよ。お前が四年前にオースティンの件で噛んでいたのは」

「……」

岬はジンの言葉を無視してベンチに寝転がる。

『シカト』されたのだと思ったジンは、鼻息を荒くした。

「実行犯は、四年前に軍が極秘にその存在を隠蔽した連中だ。捜査線上に浮上しているサイバノイドを緊急手配している。奴等を違法に蘇生して、サイバノイド処置を行ったコロニー・エアのセンター医局長、山崎が主犯格として目下手配中だ。だが、事前に勘付いた山崎は過去のデータを持ち出し、持ち出しが不可能なデータは消去して行つた。自分のクローンを遣つて捜査を攪乱。現在奴は行方不明だ」

「で？ お前は行かなくても良いのか？」

視線を逸らせたまま、岬は意味深に問い掛けた。ジンは黙って視線を背ける。

「報告はそれだけか？」

岬は自分を見ていたジンの『気』が乱れたのを鋭く感じ取っていた。意識下でジンに対して警戒するが、表面上は無表情のまま何も気付いていない素振りです手にしていたメモリチップをポケットに戻

す。

少し離れた頭の上で、乾いた金属音が聞えた。岬はその音が銃の安全装置を外す音だと素早く察知した。

しかし、岬は再びベンチに座り直すと、ジンに背を向けたまま動かなくなる。その背後で、緊張したジンの手に拳銃が握り締められていた。息を詰めながらゆっくりと岬の後頭部へと照準を合わせる

「田幡に何を言われた？ 陸防を介入させて……事を大袈裟にしたのはお前の女の為か？」

岬は後ろを振り向きもせずジンに問い掛け、岬を捉えていた銃口が僅かに逸れた。まるでジンが何をしようとしているのか総てお見通しだと言わんばかりだ。

「気付いていたのか？」

ジンは醒めた眼で岬を見下ろし、呟いた。

「ああ。確か俺に『女で破滅する』とかって言ったのはお前だよな？」

「言うなッ！ お前は俺に答えていれば良いんだ！」

ジンは立続けに二発の銃弾を岬に向かって撃ったが、素早く岬のインターセプタが発動し、身体が黄緑色のフィールドに包まれた。銃弾は岬を捉える事無く在らぬ方へと軌道を取る。

銃声に驚いて、屋上で羽を休めていた鳥達が一斉に飛び立つ。

「……て」

ジンの手から拳銃が解けて滑り落ちた。

「どうして撃たない？ そんなインターセプタを遣わなくても、お前なら今のこの俺を撃てるだろう？ 俺が銃を握った時に勘付いていた筈だ。簡単だろう？」

感情が昂りジンの呼吸が乱れる。

「人に銃を向ける事がそんなに簡単なものか。何勘違いしている？ それに、俺を本気で殺る心算なら、お前はそんな口径の銃なんか使わない筈だ。陸防のへりはお前が遣ったのか？ 田幡の事も？」

居なくなつた『彼女』の情報と引き換え……違つか？」

大型獣の死と引き換えに陸防が壊滅した直後、三島部長の代理人として就任していた田幡課長は、自らの拳銃で頭部を撃ち死亡していた。彼女の死は既に自殺として内々に事が収められている。彼女がバイオ・ケミカル社と関係があつた事は極一部の者しか知らない。「ああそうさ。俺がこの手でな。彩香を……彩香を取り戻せるとあの女はそう言つたんだ！　なのに……裏切られたのはこの俺だ。当然だろう？　俺の言っている事が何処か間違っているか？」

「いや」

ジンは震える手を力一杯握り締め、岬は何事も無かつたように平然として答えた。

「何故だ？　お前にはあの女が護れて、俺にはそれが出来なかつた……これだけ捜しても何処にも居ない。彩香はもう……もう……」  
ジンはその場に力無く崩れて跪き、両手で顔を覆つて激しく嗚咽する。

「まだそう思うのは早過ぎる」

岬はジンから視線を外し、空を仰いだ。澄み切つた空が却つて岬の心を重くさせる。レイナは一命を取り留めはしたものの、彼女にどんな処分が下されるのか岬には概ね予想がついていたからだ。

「岬……今、此処で俺を殺してくれ……」

両手を突いて伏せたままジンは懇願した。

「何言つてる」

「俺は今、本気でお前を殺そうとした……頼む」

だがしかし、ジンのその口調からは殺意は全く窺えない。

「ジン！」

岬は起き上がると、跪いて項垂れたジンの胸倉を左の逆手で乱暴に掴み上げる。

「諦めるな！　まだ彼女が死んだという確証は何処にも無い！　お前はその弱味につけ込まれたただけだ！」

彩香は、艶やかな漆黒の髪と瞳を持った気の強い女性だ。

「……」

彩香の事を思った時、岬の心に何かが触れた。

レイナの何処か怯えている表情と、行方不明になっている彩香の表情が二重にダブって見えた。別に二人が外見上似ていると言う訳では無い。けれど、レイナの時折見せる一寸した仕草を垣間見る度に、岬はずっと誰かに雰囲気似ていると感じていたのだ。もしかすると、ジェフはレイナの補完に彩香のI・Dを利用したのではないのだろうか？ 機械のA・Iではなく、生身の人間のI・Dをより自然な人間としての状態として蘇生を選択したのではないだろうか？

蘇生技術が進歩しているとはいえ、一度死亡が確認された身体に人間の持つ複雑な感情や表現力を完璧に複製する事は難しいとされている。ましてや玲奈は頭部を損傷していた。他者からの補填無しに脳を再び蘇らせると言う技術は、如何にジェフが腕の良い脳外科医であつても極めて不可能だろう。

彼女が『笑わない』原因が、精神的なものでは無く、物理的な処置によって引き起こされたのだとすれば……？

岬は堅く絡まった糸の先端を見い出せた気がした。もしかすると、行方不明になっている彩香の件が解決出来そうな予感がしたのだ。

「来い！」

「う？ お、おい、何なんだよ！」

岬はジンの胸倉を掴んだまま、早足で歩き出した。

## 第16話 優しい反逆

ドアが開き、数人の気配が室内に入ってきた。レイナは意識を取り戻し、現実に取り戻される。

「先生？」

「ああ、気が付いたようだ」

『先生』と呼ばれた白衣の男が応える。

レイナはその低い男の声に聞き覚えがあった。

瞼を開くと、ぼんやりと目の前に白い天井が映った。霧が晴れて行くように、レイナの眼は徐々に視力を取り戻す。

此処は何処なのだろうか？ …… 見覚えの無い天井を見て、レイナは記憶の糸を弄った。そしてすぐ傍で覚えのある煙草の残り香が漂って来たのに気付いた。

意識を失って眼を覚ます度に、不安と恐怖に怯えていたレイナは『眼を覚ます』事が嫌いだ。眼を覚ませば『あの男』がずっと自分を見詰めていた。薬品と血の臭いに包まれて、不安に怯える自分の表情を満足そうに見詰める、ぞっとするようなジェフの冷たい視線が、いつもレイナに絡み付くように注がれていたからだ。

けれど今は違っていた。煙草の香り自体は苦手であったが、その香を漂わせている男が自分のすぐ傍に居ると判った途端、不安な気持ちには払拭されて少しばかりではあったが安らぎさえ感じている。

煙草の主が覗き込み、レイナの視界に入ってきた。日に焼けた浅黒い肌が、男の羽織っている白衣と妙に合わない。

「気が付いた？」

「み……さ……」

レイナの唇が解けて微かに動いた。

薬の為か全身の感覚がまるで無い。ぼんやりと見詰めたレイナの瞳に映った岬には、いつもの快活そうな笑顔は無かった。見れば岬の顔や腕、他にも至る所に傷が有り、リバテープやガーゼが貼り付

けられている。

「何が……あつたの？」

レイナは岬の姿を不思議そうに見詰めた。ショックに因る一時的な記憶の混乱が窺える。

「今、ガーゼを換えるから」

彼女の問い掛けには答えずに事務的にそう言つと、岬は付き添つていた看護師二人に向き直つた。

「悪いけど、サージカルテープとガーゼの予備を取つて来てくれな  
いか？ 持つて来たこれだけじゃ足りそうも無いから」

残り僅かになつていたテープの一巻きを手に取り看護師達に見せると、看護師二人は岬を残して退室した。

慣れた手付きでレイナの胸元を肌蹴ると、ガーゼを固定しているテープを剥がす。

銛は彼女の背中から胸部の肺と心臓の一部を損傷し、貫通していた。縫合されていた傷口には軟質のチューブが挿入されている。岬は術後の経過を確かめるように、埋め込まれているチューブに向かつて軽く肌を押しした。チューブから、血が混じつた半透明の体液が溢れる。感染等の心配は、今の所は無さうだ。

「う……」

薬によつて痛みは全く感じられなかったが、触診で押されているという感覚はある。レイナは不安と羞恥心に顔を顰め、全身を強張らせた。

岬は冷静に聴診器で心音の状態と呼吸音を確認する。

「異常呼吸音の症状も無い……経過は良好だ」

並みの人間ではこんなに早く回復は望めない。岬は半ば感心しながら鉗子でチューブを摘出して消毒し、ガーゼを取り替えた。テープも手持ちの分だけで事足りたようだ。

尤も、看護師達にテープを取りに行かせたのは口実だ。彼女達にレイナの異常な治癒能力を見せたくなかつたからに他ならない。



処置後、岬はベッドの傍に跪いた。怪我をしている右手でそつと彼女の手を掬うようにして握ると、レイナの手がぴくりと軽く反応する。

「もう、大丈夫だ」

穏やかな安堵の溜息を漏らした岬へ、レイナはゆっくりと顔を向けた。彼女自身、へりからの攻撃で銛が身体に貫通した瞬間からの一切の記憶が無い。

「ジエフ……フ……は？」

今度は岬の手が反応した。

「ジエフ？ あそこに居たのは君と一頭の豹だけ……」

岬はレイナの表情から、豹が人間の姿に戻れなくなったジエフだと気付いた。

「ジエフだったのか？ あの豹が？」

レイナは黙って顎を引いた。

助けようと手を出した岬に、あの豹は近寄るなと言った。レイナと一緒に来るようにとも……その時は豹が喋ったのか、獣人の血を持つ自分が豹の言葉を理解していたのかさえも不明だった。驚いた岬は獣が誰なのかを特定する冷静さを欠いていたようだ。

「……そうか」

岬は溜息のようにそう言い、眼を伏せてゆっくりと首を横に振ると、レイナが軽く息を乱した。握っていた手が弱々しく岬の手を握り返してくる。

岬はその手をもう片方の手でそつと包んだ。

「レイナ、黙って聞いてくれ」

眼を閉じると、祈るような面持ちで静かに彼女の耳元に囁いた。「君が通常の人間よりも、短時間で代謝や回復が出来る特殊能力を持っている事を知っているのは、多分俺だけだ。今は薬で感覚が麻痺しているだろうが、無理さえしなければ君はもう動く事が出来る……」

岬は言葉に詰まった。そして、何かを振り切るように首を横に振

ると、白衣の内側からケースに収めてあった注射器を取り出した。

「な、何をするの？」

レイナは岬が手にした注射器に怯えた。

「何って……」

思いもよらなかつたレイナの反応に、岬は口籠ってしまった。そして、出会った時に解毒剤を投与した注射器を見て、レイナが異常に怯えていたのを思い出した。ジエフ達医師からレイナが随分と酷い目に遭わされて来たであろう事が窺える。

「痛覚以外の感覚を取り戻す為の薬だ。別に君に危害を加えるような物じゃない」

点滴のチューブに薬を注入した後、レイナの腕から針を抜いた。内出血しないように厚めに折った不織布をテープで圧迫固定する。

「レイナ、君は此処から逃げ出すんだ」

「みさ……き？」

レイナの明るい栗色の瞳がくすんだ。

「既に此処もマークされている。けど、逃げ出すのは手薄になっている今しか無い。俺が引き留めておくから、君は逃げるんだ。誰も手の届かない何処か遠くへ……」

岬はドアの外の気配を窺いながら、隠し持っていた拳銃を背後からそつと取り出した。慣れた手つきで素早く弾倉を引き出し、装填されている弾を確認する。

「一緒に……って、貴方は言ってくれないの？」

岬は視線を逸らせて頂垂れた。じきにジン達が戻って来るのは判っていたが、ジンが加わらなくても勝算は全くの皆無だった。

「すまない」

就いて行って遣りたくても、状況がそれを許してはくれない。自分がレイナの盾になってジン達を退き留めなければ、此処からの脱出は不可能だと判っていた。

レイナを助けたいと願う気持ちは強くあるが、裏切って仲間に向かって引き金を引く気にはなれない。そして、彼等を撃つ事が出来

なければ、それが何を意味するのかと言う事くらい岬は十分理解し、承知している。

「駄目……よ」

レイナは力なく首を振り、そして細い腕を伸ばして銃を握っている岬の左手を優しく抑えた。

「此処に残っていれば、君はいずれ間違い無く殺される。それでもいいのか？」

焦る岬とは対照的に、レイナは何も言わずに穏やかに微笑んだ。その表情に、岬の視線が釘付けになる。

（玲奈！）

思わず声に出して叫びそうになった。出逢ってから、岬に一度も見せた事の無かったレイナの微笑。彼女の内面までもその総てが、否が応でも玲奈と二重写しに見えた。玲奈の『身体』が最期に岬の想いを聞き届けてくれたのだろうか？

（……もう……充分だよ。玲奈）

岬は『レイナ』の微笑みで優しく癒された気がした。そして、何が起ころうとも決して退く事の無い勇気を『玲奈』から力強く分け与えられた気がする。

岬の覚悟を覚ったレイナは、途端に表情を曇らせた。

「止めて！ 貴方が殺されるわ」

「俺は……俺は嫌だ！ 君を二度も失いたくは無い！」

岬は首を強く横に振った。それを見たレイナの瞳が一瞬大きく見開かれる。

「岬？」

岬が自分と写真の彼女とを重ね合わせているのだという事実を思い出して、切なくなった。岬が優しいのは、彼女と同じ姿だからであって、自分に向けられたものでは無いと思ったからだ。

嘘でも良いと身を委ねたのはレイナ自身だ。それでも心の何処かで自分に振り向いて欲しいと言う気持ちが無かった訳では無い。

「止めて……お願い」

「覚悟はもうとうに出来ているさ」

岬は表情を緩めて優しく笑ったが、直ぐに真顔に戻り、銃を手にして立ち上がった。

「駄目！」

素早くレイナが反応し、勢いで部屋を出て行こうとした岬の腕に、必死になって追い縋る。

「あっ！」

「！」

岬がベッドから堕ち掛けたレイナの身体を反射的に押し戻して、事無きを得た。

「動いてもいいと言ったが、無理に動けば傷口が開くぞ。こんな風に」

岬は包帯で巻かれた右手を軽く上げて見せた。しかし、その傷が誰によって出来たものかを思い出して、しまったと後悔する。

「あ、ああ、こ、これは俺が安静にしていなかったから……こんなった……」

後半はしどろもどろだ。

「ごめん。そんな心算じゃ……」

レイナは首を横に振った。

「いい。もう……いいの。お願いだから止めて」

「レイナ？」

岬は居た堪れない辛さに眼を細めた。彼女の存在が今にも消えてしまいそうで、とても儚く見えてしまう。

「私の……私の事は……忘れて」

岬が救いたいのはあの女性ひとだと思った。岬が救えなかったあの女性を、今の自分に重ね合わせている……それだけなのだ。

自分の身体を通して岬が見ているもう一人の『玲奈』。彼女の存在が重くレイナに心に押し掛かる。岬と共に在りたいと一瞬でも願った自分がとても惨めに思えた。自分は人獣 岬とは棲む世界が違っているのだ。叶えられない望みを抱き、それでも舞い上がって

しまった自分は何て愚かな事を考えてしまったのだろうか。

「レイナ？ 何を言い出す……」

「お願い。私を……忘れ……て」

無理に笑顔を見せようとしたレイナの頬に、不意に大粒の涙が零れた。濡れた明るい栗色の瞳に、戸惑いの表情を浮べた岬が映し出される。

「……」

レイナの涙を見てしまった岬は、力無く項垂れた。

あの豹と……ジエフと逃出す事は出来ても、逃げると言う自分の言葉は聞き容れられないと言うのだろうか？ 『俺では……俺では駄目なのか？』そう訴え掛ける心の声を、彼女から涙で以って拒絶された気がして虚しくなった。

銃を握った岬の腕が、ゆっくりと力無く降りる。

「やれやれ。お姫様に泣いて頼まれちゃあ、ナイトも形無しだな？」  
ドアが開き、見慣れた黒髪の男が現れた。

「ジン……」

ジンが遣って来る前にレイナを逃がそうと思ったのだが、間に合わなかった。岬は万事休すだと眼を閉じる。

「そのまま動くなよ？」

ジンは慎重に近付き、素早く岬の銃を取り上げて後ろ手に拘束する。岬は抵抗する事無くジンに素直に従った。

「お前には借りが出来たな」

「彼女（彩香）を見付けたのか？」

「ああ」

しかし、言葉とは裏腹にジンの表情は暗かった。

「I・Dのダビング装置の中に居た。生命維持装置と一緒に。お前が予測していた通りだったよ。酷いもんさ。あれじゃ俺に連絡のしようが無い。維持装置も予備電源に切り替わっていた。あともう少し遅かったら……」

ジンはそう言うと押し黙った。

通常、E・Dダビング装置は人工的に処置されている人造人間のサイバノイドに対してのみ仕ようされる専用更新機器であって、心身ともに健全な生身の人間を装置に掛ける事は違法行為であり、現在では全面禁止されている。

膨大な容量の個人データをデジタル化して読み取りコピーを興す際、人体に有害な電磁波が一気に読み取り側の身体に流れて危険な状態に陥る。体内機能を侵された部分から壊死を起こし、適切な処置を怠るとやがてオリジナルは死亡する。万が一、助かったとしても植物状態になった症例が多い。これらの原因を解明して装置の使用限定化を法律化し、厳重に管理設定されるまでの期間、事故が多発していた代物だった。

行方不明になっていた彩香は、生身の身体であったにも係わらずバイオ・ケミカルのラボでこの違法処置を施されていたのだ。

「彼女の意識障害は？」

「辛うじてレベル三。バイオノイド処置をすればそれも無くなる。

バイオノイドだと言う事以外は元の彩香だ……リハビリには少し時間掛かるがな」

「そうか……良かった」

岬はほつと胸を撫で下ろした。

「良かったなあ？ 事がそれだけで済んでいれば、俺だってそう思うしな」

「……」

「田幡はこの女を蘇生する為に彩香を遣ったんだ！ 在りもしない社外秘のデータを持ち逃げした犯人に仕立て上げて。あんまりじゃないか！ それで犯人扱いされた彩香は、俺以外の誰からも搜索して貰えなかったんだ。たった一人で半年以上もあんな所に……畜生！ それだけじゃ無い。他にも何十人ものE・Dデータがヤツのフ

アイルからわんさかと出て来た。少なくともこの女の中には二、三人以上のE・Dが入っている事になる」

ジンはそう言い、乱暴にレイナに向かって顎を杓った。

レイナは突然自分の事を引き合いに出されて驚き、表情を強張らせる。

「知っている」

岬は穏やかに肯定した。

「だろうな。けど、彼女の他に誰のE・Dが使用されたのかまでお前に判るか？」

「他国のエージェント」

「そこまで知っていやがって今までずっと黙っていたのか？ この女の頭の中には、俺達でも知らない、現在使用されている他国や連合国の国家機密情報や解除コード云々が、潜在的におまけとして具わっているんだぞ？ 既にコイツが気付いているのか、否かは判らないがな」

「ああ。けど、彼女はまだその事に……」

「この女がその気になれば、戦争も滅亡も思いのままだとは考えなかったのかよ？」

岬の答えを待たずに、ジンは一気に捲し立てる。

「蘇生？ パスワード？ 戦争って……一体何の事？」

思い掛けないジンの言葉に、レイナは答えを求めようと岬を見詰めたが、岬はレイナの視線から逃れるように顔を背けた。

「今の処は何も思い出せてはいないようだな。だが、いつ何がきっかけで思い出すかも知れない。FCI内部からさえ不穏分子での有様だ。田幡だけじゃない。踊らされた俺も俺だが、いずれこの女の頭の中を巡ってもうひと悶着ありそうな厭な予感がする……で？ これからお前はこの女をどうしようとしていたんだ？」

岬はジンの言葉に顔を伏せた。訊くまでもない状況に、ジンはふんと鼻を鳴らす。

「此処で俺に見逃してくれと言っても、そいつは無理な相談だからな？ それはそれ。これはこれだ」

後ろ手に廻された岬の両手に、電磁手錠が掛けられた。

「悪く思っちなよ。これが仕事なんでね」

「ああ……判っている」

「み、岬……」

自分を逃がそうとしていた岬が目の前で拘束された。レイナは不安に怯えながら岬を見守っていたが、ジンに連行されると知った瞬間、レイナはベッドから身を乗り出し、片腕を伸ばした。

「岬……ま、待って！」

「近寄るなッ！」

レイナの反応を警戒したジンは、岬から取り上げた拳銃を素早く岬の後頭部に強く押し当てた。鈍い音がして、岬が顔を顰めて痛がる。

「動くなよ？ お前が動けば、コイツがどうなるか解らないぞ。それに、今更逃げ出そうだったって無駄だから」

ジンは鋭い一瞥をレイナに送って釘を刺す。

「ジン、マジかよ？」

岬は呻った。

「悪いな。零距离ならお前のインターセプタも遣えない」

緊張したジンの表情から、それが唯の嚇しでは無いのは明らかだった。興奮気味のジンの態度に、気弱になったレイナが息を呑んで怯える。

「止せ！ 彼女を刺激するな！」

鋭い岬の一喝が飛んだ。レイナの変身は恐怖や憎悪と言った負の感情の昂りに起因している。ここでレイナを怯えさせて変身させるような事があつては絶対にならない。

「レイナッ！」

一際大きく張り上げた岬の声に、はっと我に返ったレイナが震えながら岬を振り仰ぐ。



「大丈夫……だから」

岬は虚勢を張って笑顔を作りレイナの視線に応えると、ジンに促されて病室を後にした。

\* \* \*

「オヤジは何て？」

留置所に居る岬へ、ジンが面会に遣って来た。面会は各監視室内に設置されているモニタでの遣り取りになっており、外界とは一切遮断されている。岬は簡易ベッドの上で壁に向い、胡坐を掻いて座っていた。

「三島さんの事か？」

「当たり前だ。他に誰が居るよ？」

呆れながら、ジンは手にしていたカードキーを取り出すと、岬の部屋のドアロックを解除した。

「出る。釈放だ」

そう言っつて顎を杓る。

「連絡、あれから在ったんだろ？」

岬の反応をジンは窺った。けれどその表情からは何も読み取れない。

「無かったのか？ ……つて、返事くらいしろよ」

岬が黙ってノロノロと重い腰をベッドから上げると、痺れを切らせたジンがぼやいた。

「いつそ、ずっと俺を閉じ込めていれば良かったんだ。そうすれば俺は諦められるのに」

弱音を吐いた岬は、虚ろな目でジンを見据えた。

岬が何を考えているのか、表情からも、眼差しからも何も読み取れない。全く得体の知れない雰囲気を感じ取り、ジンは思わず気後れしてしまった。そしてまた『あの時』と同じ眼をしているのかと懸念する。『玲奈』を失ってしまったあの時と同じに。

『彼女』は『レイナ』でもあり『玲奈』でもある。あらゆる違法処置に手を染めた他人から、一度失った身体を再び黄泉から現世へと引き戻され、蘇生された身体であると言えど、自我を持つ一人の間である事には違いない。

まして、彼女は岬の大切な女性だ。『玲奈』を亡くして間が無かった頃の岬をジンは知らないが、岬を知っている周りの者からどれだけ荒んでいたのかを聞いて在る程度は理解している心算だ。大切な人を奪われてしまうとと言う嫌な想いはジンも同様に味わっている。それこそ何度身を引き裂かれそうな想いを味わえば楽になつてくれるのだろうかと自分を呪い、あらゆるものに嫉妬した。それだけに今の岬が余りにも不憫に思えて辛くなってしまう。

だが、時間は容赦なく刻一刻と過ぎて行くのだ。

ジンは岬に、レイナとの最期の別れとして、一目逢わせて遣らうとしていた。

FCIでの決定は過去に一度たりとも覆った事はない。ジンが岬にして遣れる事と言えば、レイナと逢わせる僅かな時間を捻出して遣るくらいしか出来なかつたのだ。

「もう時期生身の彼女には会えなくなるんだぞ？ 上からの許可は貰っている。ほら、彼女に別れを言つて来い」

ジンに背中を乱暴にどやし付けられ、気の乗らない素振りをする岬は、勢いで二、三步前に詰んのめつた。

「彼女には最新鋭のサイバノイドが用意されている。ちゃ〜んとアツチの機能も搭載されてな。試せばいいじゃないか？」

「最新型のセクサロイド……か」

岬は頂垂れていた頭を上げると、今度は黙ってジンを真つ向から睨み付けた。その気迫にジンは一瞬怯んで息を飲む。

「そういう問題じゃない。レイナがサイバノイドに……彼女がそうしてくれとでも言つたのか？ 馬鹿な……彼女はそんな事なんか……俺だつてそんな事を望んでなんかいない！」

岬はジンの額に掌を宛がうと、気を込めて瞬発的に強く押した。  
「痛てっ！」

堪らずに声が漏れた。殴られた訳では無いのに脳に直接衝撃が伝わり、揺らされて一瞬くらりと眩暈を起こす。

「頼むから……放っておいてくれ」

力無く呟くと、岬は少し足元をふらつかせながらジンに対して背を向けた。

両手をポケットに突っ込み、レイナの居る方向とは全くの逆方向に、背中を丸めて歩き出す。

「あつ痛う〜いてて……！ そつちは違うだろ？ おい！ 何処に行ってる？ もう時間が無いんだぞ？」

押え付けられた頭に手を当てて、ジンは岬の後姿を見送った。そして深い溜め息を吐いて肩を落とす。

その背中はいつもより小さく見えた。岬の気持ちを察して遣れる分、ジンは掛けるべき言葉が無かったのだ。

違法行為であるにも拘わらず、レイナは彩香が酷い眼に遭わされた時と同様、I・Dダビング装置に掛けられる事になっていた。レイナのI・Dを人造の身体であるサイバノイドにダビングして定着させた後、彼女の生身の身体は全て焼却処分するという恐ろしい判断が下されていたのだ。それは、獣に変身してしまうレイナのDNAの一切を後世に遺さない為の配慮だった。表向きにはレイナは存在する事になるのだが、事実上はレイナを処刑するのと何ら変わりはない。

岬にとっては、彼女の記憶を電子化して遺す事に何の意味も持ち合わせてはいなかった。要は連邦側にとって、他国のエージェントのI・Dが使用されていた事実を見逃がせなかったただけだ。彼女がどれだけの国家機密を深層意識下に遺されているのか、その秘密を確認したいだけであり、その為に用意された特別な選択肢に他ならない。

勿論、レイナが望んでなくなってしまった身体では無い。彼女こそが

被害者なのだ。

「やはりのお……素直に向かわなんだか」

すぐ後ろで、聞き覚えのある老人の声がした。気配に驚き振り返ると、いつも桐嶋署の片隅にいる小島だった。

「小島さん？ うわ、酒臭え〜」

強烈なアルコールの臭いを撒き散らせる小島は、赤ら顔でフラフラと足元が覚束ない。立っているのがやっとといった感じだった。

この様子ならば、先ほどの岬との会話も聞かれなかった筈だろうが、いつからそこに居たのだろうか？

「まだ昼前ですよ？」

ジンは小島が苦手だった。仕事らしい仕事もせず、毎日桐嶋署の応接室で署員と詰将棋に明け暮れている、暇潰しの隠居老人だと思っていたからだ。

「いつ呑もうとわしの勝手じゃろうが。わしゃあ夜勤明けなんじゃ」

「はいはい。待ち切れなかったんですね？ ご自宅に帰って続きをどうぞ」

この爺さんが夜勤などを任されたりするものだろうか？ ジンは小島を疑いながら、鬱陶しそうに片手をひらひらさせた。強いアルコールの臭いが鼻について堪らない。

「岬の事じゃ、相変わらず自分の事となると極端に消極的になりおるわい」

「心配ですか？ ヤツの事が」

そう言った後小声で「自分の心配をしろってんだ。帰ろっつってるのに聞いてねーし」と呟いた。愛想笑いをしたものの、小島の対処に困り、片手で額の生え際を掻いて眉を顰める。

「わしがああ？ さあてな……ジン、ちょっとコツチャに来いや」

小島はそう言ってニヤリと笑い、ジンに手招きをする。

「タダ働きは御免ですよ？」

ジンは小島の胡散臭さを警戒しながら、彼の後をついて行く。

「お前は確か、遺伝子工学の出じゃったかなあ？」

「「かなあ？」じゃなくて、そうですけど？」

どうして自分がこんな酔っ払いの爺さんなんかとつるんでいなくてはいけないのだ？ 小島の言いように、ジンはムツとなって口を尖らせながらそう思った。

小島はジンの答えに満足そうに頷くと、全く行き先に対してフラフラしながら、しかも躊躇せずにとんどん署内の奥へと進んで行く。このまま進めば、そこは許可された者しか立ち寄れない連邦の機関だ。

「何処へ行くんです？ そっちはFCIですよ？ 小島さんが入るには許可が……」

ジンが止めるのを無視して、千鳥足の小島は認識画面に瘦せた節太の右手を翳した。瞬時にロックが解除されて分厚いドアが左右に開く。

「え？」

何故この老人にロック解除が出来るのか？ ジンは我が眼を疑い、啞然として小島の小さな背中を見詰めた。

只の所轄の爺さんではなかったのかと、俄かに猜疑心が頭を擡げる。

「うん？ どした？ ……お？」

後に続いて入って来ないジンに気付き、小島は覚束ない足取りで振り返った。その脚がふらりと纏れる。

「危ない！」

咄嗟に駆け寄り、小島の二の腕を引いた。バランスを崩した小島の小さな身体は、酔っ払い特有の身軽さで踊るようにくるりと一回転してぐにやりと座り込む。

ジンは大きく安堵の溜め息を漏らした。自分の目の前で転倒して怪我でもされては迷惑だ。

「もお、気を付けて下さいよ。危なっかしいなあ。それでなくても年なのに」

「お？ …… おお、すまん」

惚けた返事が返って来る。ジンは渋々屈み込んで背中を小島に向けた。そして小島を背負うと、ジンは不機嫌な顔で足早に歩き出す。「さ、俺が連れて行きます。で？ 何処に行けば良いんですか？」

「いやあくすまんのお。ラクチンじゃあ」  
楽になった小島は上機嫌で陽気に喋った。

ジンは酒の匂いに包まれた為か、くらりと軽い眩暈がした。飲酒していない自分までが匂いで酔ってしまいそうになる。

「地下十三階の第二ブロックじゃ。そこにあの嬢ちゃんが居るじゃろう？」

「は？」

ピタリとジンの足が止まり、頭の中で疑問符が乱舞する。そこには確かに小島が言う通り、拘束された後薬によって眠らされているレイナが居る場所だ。

「お前の腕を貸して貰いたいのじゃが…… ああ、言っておくがお前達が言う『許可』つちゆうモンを、わしゃあ取ってはおらんからな」  
「って…… 事は？」

「気にするな。わしゃ、所謂不法侵入ってヤツじゃな」

「ええ〜っ！」

小島は全く悪びれず、他人事のようにさらりと云ってのけた。それを聞いたジンの顔が忽ち蒼褪める。

「今更何を騒いでおるか。一緒にわしと入って来た時点で、お前も既に監視カメラに撮られとるから共犯じゃあ。まあ、人間諦めが肝心じゃな？」

「じよ、冗談じゃないですよ！ 何が共犯ですか！ 勘弁して下さいよー！」

慌てて背負っていた小島を振り落とそうとするが、小島は妖怪のようにしっかりとジンの背に掴まり、離れてはくれない。

「まあ、そう慌てるな。冗談じゃ、安心せい。部長の三島までは話が届いとるわい」

「部長の三島までは……って、小島さん？ 貴方は一体？」

振り落とそうとしていたジンの動きがぴたりと止まる。

「なんちゅう顔をするんじゃ。それが証拠にほれ、誰も警備員が出て来んじやろうが？ ああ、ほれ、早う先を急がんか」

「イテ！」

小島はジンの反応を愉しみながら、ジンの頭を軽く叩いた。

「話は戻るが、お前はクローン技術も一通り学んでおったな？」

「え？ ……ええ」

ジンは小島の言葉に後ろめたくなって、顔を伏せた。

「実際には？」

「ど、動物実験でなら……何度か」

ジンは嘘を言った。彼の脳裏には失敗して処分した被検体の異よ  
うな姿が蘇り、背筋に悪寒が奔った。慌ててそれ等を消そうと、ブ  
ルブルと首を振る。

「それだけか？ 本当に？」

小島はふふんと鼻を鳴らして、ジンの背中から彼の表情を窺おう  
と覗き込んで来る。

「……はい」

「そりゃ、心許無いのお」

沈んだ表情のジンとは反対に、小島の口調は彼の背中で鼻唄が出  
て来そうなくらい陽気だ。

「どういう意味です？」

絡んで来る小島へそう返答した直後、ジンは鋭く小島の危険な企  
みを見抜いて色を成した。

「な、何を考えているんですか！ 人獣を増やしてどうする心算で  
すか！」

「ほほう、こりゃあ説明する手間が省けたのお。どうじゃ？ お前  
さんでは出来やせんか？」

小島は、言い当てられたかと言わんばかりのしたり顔だ。

「あ、当たり前ですよ！ ……実際に、につ、人間を扱った事も

無いのに」

必死に平静を保とうとするのだが、ジンの声は上擦って掠れてしまった。

小島はジンの変わりようを見逃さず、薄気味悪くほくそ笑む。

「嘘を吐けい。惚けおつても無駄じゃあ」

「お、仰っている意味が……」

「お前がどういった理由でF C I（フシー）に来たかぐらい想像出来んわしじやと思うておるのか？ ええ？」

ジンは小島に言い当てられて顔を背ける。

「む、無理だ。出来っこ無い。胎児を今の彼女の年齢に急速成長させる事自体、不可能ですよ」

クローン処置で生まれた胎児の見掛けはゼロ歳児だが、既に細胞レベルでは成熟した成人の細胞年齢である。彼女の今の姿に加齢処置を施して急速成長させれば、クローンの細胞年齢は既に二倍に到達していることになる。

理論上では簡単なように思えるのだが、動物実験でさえこの成功例は無い。

但し　これも表向きには……である。

ジンは、何もかもお見通しの小島に慄き、小刻みに首を横に振った。

「心配せんでええ。それに、わしに隠し事は無用じゃよ」

せせら笑った小島とは対照的に、ジンの蒼褪めた表情が凍り付く。

「わしやあな、あの嬢ちゃんには生きていて欲しいんじゃないよ。でないと……」

そこまで言うと、小島は急に俯いて声を押し殺した。

「でないと、わしの気が治まらん。もはや連邦も警察も関係無い。

これは極めて個人的な頼みなんじゃ。ジン、わしに協力してはくれんかの？」



「そ、そんな事を言われても……」

\* \* \*

「着きましたよ?」

ジンは小島を通路に降ろした。

二人の目の前には、第二セクションと表示され、閉ざされているドアがある。

「うん? 何処じゃったかな……お?」

小島は自分の懐を弄った。

どうやらロック解除用のカードキーを捜しているらしい。その隙にジンは素早く小島の背後に廻り込み、銃口を向けた。

「どうしてアンタが知っているんだ? 此処の地下三階以下は所轄の上層部でも知らない筈だ」

小柄な老人に凄んで見せる。

「お前こそ何の真似じゃあ。わしゃ、此処に居る嬢ちゃんに用があるだけじゃと言っておろうが。危ないのお」

小島は節くれた枯れ枝のような指で、向けられた銃口をひよいと逸らせた。ジンが手にした物が、本物の拳銃だと小島は思わなかったのだらうか? 小島には恫喝さえ通用しないのだと覚って、ジンは焦った。

「う、嘘だ!」

「嘘なんぞ吐いておりゃせん。言っておくが、わしゃお前が思っている曲者とは違つぞ」

「え?」

特別な言い回しに氣勢を殺がれて銃を引く。

「そう言やあ、お前は旧世紀の時代劇……特に旧日本国マニアじゃったのう?」

「あ、は……はい」

不意を突かれて素直に答えた。

「差し詰めわしゃ、黄門ようかも知れんぞ？」

「黄門……って、あの旧日本国、エドの水戸藩主？」

ジンの瞳が輝いた。

「冗談じゃ。真に受けるでないわ。未熟者め」

そう言うと、小島は陽気にカカカと笑った。

ジンは手玉に取られた自分に嫌悪した。どつと気疲れが彼を襲う。

「て、手強い……岬は普段、この人の相手をしているのか？」

普段、小島との遣り取りをしていると言うだけで岬が物凄い人物に思えた。同時に小島の大らかさに触れて、彼に対する猜疑心が晴れて行く。此処へのセキュリティを難なく通過した事と言い、極秘事項を心得ている事と言い、小島はどう見ても桐嶋署では無くて連邦側（FCI）の隠居組らしい。

「さあて……と」

小島は再びカードを捜し始めた。

「俺のがありますよ？」

ジンは自分のカードを取り出した。そして手早くスキヤナに奔らせるが、ジンのカードではロック解除は為されなかった。

「うん？」

エラーメッセージの電子音を聞き、小島に緊張が奔った。

「おかしいな？」

ジンは手にしたカードに破損等異常が無い事を確認して、再度カードをスキヤナに読み取らせようと手を伸ばす。

「待て！」

真顔になった小島は、ジンの手を強く掴んで引き止めた。そして今度は自分のカードを懐から取り出して見せる。

「中からロックされておる……どうやら先客の鼠が来ておったか」

「えっ？ 『先客の……鼠』？」

普段のへらへらした小島の表情では無い。ジンは瞬時に事態の重さを覚った。

「人数は三、四人といった処か……おい、お前、独りで大丈夫か？」

「は？ 独り？」

ジンは眼を丸くして、小島に確認するように自分を指差した。

「わしゃあ見ての通りの戦力外じゃからなあ。お前が駄目じゃと言  
うのなら応援を呼んで遣っても良いのじゃが……」

「ん、な事していたら逃げられますよ！ お、俺だって三、四人く  
くらい……」

「ほおお。頼もしいな？」

突然の実戦を強いられて退き気味になっているジンを、小島は意  
地悪そうに見上げた。

「ちや、茶化さないで下さいよ。人がマジこいてる時に！」

ジンは冷静さを保とうと必死だが、如何せんこれが初めての  
実戦だった。押し寄せて来る責任感と極度の緊張感に息苦しくなり、無  
意識に片手を伸ばしてネクタイを緩める。

小島が自分のカードをスキャナの読み取り部に宛がい、タイミン  
グを見計らうようジンと視線を合わせた。

「わしのは強制解除用じゃ……開けるぞ。良いか？」

「いつでも！」

ジンは早口で応えて顎を引く。生唾を飲み、胸元で構えた拳銃を  
再び持ち直した。

ドアが開くとほぼ同時に、女性の絹を裂く悲鳴が上がった。

小島はドア陰に背を合わせ、身を潜めて瞬時に反応したのだが、  
悲鳴に驚いてしまったジンは、開いたドアの真ん中で仁王立ちに立  
ち竦んでしまった。

ドアの開いた音を聞き付けて、室内の薄暗い照明で蠢いていた数  
人の人影がこちらを振り返った。彼等に取り囲まれた中央で、拘束さ  
れていた筈のレイナの姿が淡い照明に浮かび上がる。

総ての機能を麻痺させる水溶液から、たった今彼等の手で引き摺  
り出されたばかりだった。彼女の身に纏った薄絹が透けて身体  
のラインに沿って張り付き、雫が彼女の周囲を濡らしている。レイナは

長い髪を無造作に掴み上げられ、両膝を着いて半身を宙吊りにされている状態だった。彼女の意識が朦朧としているのか、半開きの瞳に生氣は無く、左に浅く顔を落して人形のようにぐったりとしていてピクリとも動かない。

訝って彼女を凝視したジンは、異変に気付いてはつと息を飲んだ。レイナの項から、赤い滴の一筋が細い鎖骨を伝い白い胸の谷間へと流れ落ちていく。

彼女の髪を掴んでいた何者かの手が解け、レイナは糸の切れたマリオネットのようにその場でゆっくりと崩折れた。

ジンは大きく息を飲む。

目の前のレイナの姿と、脳裏に岬の沈んだ表情とが交錯した。状況から、既に手遅れだと判断して怯んだジンは、完全に無防備になる。

「何をしているッ！」

鋭い小島の一喝で我に返る。

「うっ、動く……あッ！」

銃を構えて警告するが、それよりも先に人影の方が動いていた。銃弾がジンを襲い、銃身に弾が命中して右手からもぎ取られた。銃を手にしていた右の人差し指が大きく反対方向に折れ曲がり、皮膚が裂ける。

銃弾は尚も休む事無くジンを狙い、数発がジンを掠めた。

慌ててインターセプタを起動させるが手遅れだった。右手の激痛が脳天まで駆け上がり、ジンは苦痛に呻いて大きく身体を『く』の字に折り曲げる。

「遅いつ！ 何を遣っておるかッ！」

小島は右手を庇って蹲ったジンの脇腹を蹴り、射程外の死角になるドア陰へと押し倒した。

蹴り倒されたジンは頭から無様に通路へ突っ込む。

間髪を入れずに銃弾が小島を狙ったが、素早くドア影に隠れた。

老人とは思えない程の敏捷性だ。

小島は自分の銃を握り、タイミングを計って応戦する。

場内のセキユリティが異常を感知して、ブザーがけたたましく鳴り始めた。

「しっかりせい！」

「ああ……痛っうっうっ！」

ジンは頭を振り、血塗れの右手を脇腹で押えて庇いながら、落とした銃を震える左手で辛うじて拾い上げた。

「！」

突然、室内から一陣の風のように、四肢を持った白い獣が飛び出した。

余りの素早さにジンも小島も身動き一つ出来ない。今襲われれば逃げられなかったが、幸運にも獣は二人を無視して逃走した。

「ジン！ 追えッ！ 先回りして第五、第六ブロックを閉鎖するんじゃない！」

「え？ はっ、はいっ！」

## 第17話 譲れない、護るべきもの

ジンは右手の猛烈な痛みには堪えながら、厭な予感を胸に小島の許へと急いだ。獣を見失った時、一度フロア内が大きく揺れて警報が館内に響き渡ったからだ。

地震かと思っていたジンの予想は簡単に覆された。既にエレベーターは火災発生のアナウンスをして全面使用不可になっており、ジンは非常階段で小島がまだ残って居るであろうフロアまで戻らなければならなかった。

突然、自分の体力と割に合わない労働を強いられて、ジンは肩で息を切らせて悪態を吐きながら、小島の居るフロアへやっとの思いで辿り着く。

レイナを拘束していたニブロックの一室内で爆発が起こったらしい。予期されない緊急事態に、けたたましく警報ブザーが鳴り響き、集まって来たスタッフでフロア全体が騒然としていた。一部は炎に包まれて焼け爛れ、熱気と有害ガスの発生で思うように視界が確保出来ない。フロア内に居合わせていた者が避難行動を起こし、アシスタントロボットや多少の火気に耐えうるサイバノイドは、居残って消火活動を始めていた。

「小島さん！」

慌しく行き交う人の間を掻い潜り、ジンは右腕で鼻を覆い咳き込みながら、残して行った小島の小柄な姿を必死で捜した。各セクションで室外換気扇がフル稼働しているが、多量の煙で換気が間に合わない状態だ。

「こつちじゃ！」

レイナの居た部屋から少し離れた所で、右肩を負傷した小島が応急処置を受けている姿がジンの視界に飛び込んだ。

「無事でしたか！」

「なあーに、これしきの事でクタバリはせんぞい」

小島は軽口を叩くと、引き攀けたようにひやつひやと笑った。

暢気な声を耳にしてホッと胸を撫で下ろしたが、治療の為に上半身を脱いでいた小島の小さな身体を眼にした途端、ジンは思わず息を飲む。

顔や手に火傷を負ってしまったらしく、しわがれた薄い皮膚が赤くなっていたのだが、元から酔って赤ら顔になっていたので、見た目にはさしてあまり変わらない。それよりもジンが驚いたのは、曝け出されていた小柄な小島の上半身には、鉤のような物で付けられた古い傷痕が無数にあつた事だった。傷痕は小島の生命を脅かしただろうと思われるほど酷く、醜く、小柄な身体に幾つも深々と刻まれている。

自分の古傷を見てジンが退いているのだと覚った小島は、そそくさとシャツを羽織り、素知らぬ風をして傷痕を隠した。

「なんじゃい？ 逃がしてしもうたのか？」

小島はいつもの調子に戻っていた。いや、いつも通りに戻って誤魔化すしか他に方法が無かったのだ。致命傷ではないのかと思われ、酷い傷痕を眼にすれば、誰もがその理由を問い質したくなってしまうだろう。

「すみません……」

ジンは肩を落として頂垂れたが、それでも尚、小島が急いで隠した傷痕を物言いたそうな眼で追ってしまった。

「小島さん怪我……」

「うん？ ああ、これか？ 爆風でちよいとな。まあ大した事は無い。後から来る筋肉痛の方がわしゃあ恐怖じゃわい」

そう冗談混じりに混ぜ返して老人は笑った。ジンの言葉は小島の古傷を問うたものだったが、小島は敢えてその事には触れてくれないとばかり完全無視を決め付ける。

「……」

誰にでも他人から触れられたく無い事の一つや二つはあるものだ。

小島にとって、その一つが、昔の古傷なのだろうとジンは察した。

「ほれ、お前も早く処置をして貰え。利き手がそれではな」

自分の不甲斐無さに頂垂れて謝るジんにそう言つと、小島は自分の処置をしてくれた看護師に、彼を看るようにと促して顎を杓つた。「本当に何て言つたら良いのか……ああッ！ ったゝっ！」

ジンは獣を取り逃がした責任と、小島のプライバシーに踏み込もうとした自分の迂闊な言動を恥じて沈痛な面持ちで肩を落としてしまったが、看護師が右手に触れた途端に顔を引き攣らせ、情無い悲鳴を上げて悶絶した。処置前の麻痺スプレーを丹念に吹き付けられるが、スプレーの噴出する空気圧さえ止めて欲しいくらいだ。

「済んでしまつた事は仕方あるまい。それよりもコレに見覚えは有りやあせんか？」

小島はビニール袋に入った壊れた拳銃を、涙眼になつて顔を歪めているジンの前に突き出した。

「痛うつ……そ、それは？」

ジンの眼が一瞬大きく見開かれる。

「ふん……そうじゃ。田幡が率いておる三課の連中の物じゃ。偶然わし等が現れて、逃げられないと覺つての事が……馬鹿どもめが自決しおつた。じゃが……田幡は確か自殺していたのでは無かつたのかな？」

小島は意味深にジンを見上げて、その心の奥深くを探り出しているようだった。ジンの心臓がドキリと厭な音を立て、冷や汗が顎を伝う。

「やれやれ。薬物の三課……か。またややこしくなつて来おつたわい。ま、精々お前等も寝首を掻かれんよう、背中に気を付けることな」

小島はそう言つて重い腰を上げると、立ち竦むジンの左腕をぽんと叩いて立ち去つた。

\* \* \*



辺りが白み始めた頃　岬は、独り自宅のベランダで一夜を過ごしていた。

昨日釈放されてからと言うもの、岬は何も手に付かない状態だった。休もうとして横になっても眠る事が出来ず、とてつもなく長い夜を過ごしていたのだ。

あの時……玲奈が亡くなったあの日の夜も、同じだったような気がする。総ての思考が停止してしまい、岬の心は空っぽだった。まるで『意志』の無い人形のように、ぼうつとして、ただ何も無い一点をいつまでも飽きる事無く見詰めていた。

レイナの為を思って仲間を裏切ろうと覚悟していた岬は、ジンに抛って捕らえられが、実行までには至らず『未遂』として扱われた。勿論、これはジンの温情あつての取り計らいだ。

彼女を逃がし、助けようとしていたのに、岬の方が逆にレイナの言葉によって救われてしまったのだ。けれど、だからと言って彼女の処置が軽減され、取り下げられる筈も無い。

ジンに連行されてレイナと別れる間際、岬は彼女に自分の本当の想いを告げる事が出来なかった。それは、岬の中で未だに『レイナ』を通して『玲奈』を見い出そうとして、混乱している救せない自分が居る事も、言えなかった原因の一つだった。が、それ以上にレイナに寄り添うジェフの影を、彼が死んだ今でも意識せずには居られなかった。変わり果てた姿になった豹のジェフに、レイナが岬の許から逃げ出して行ってしまったと言う揺ぎ無い事実が、岬の胸から消せないでいたからだ。

そして……『私の事は、忘れて……』と、涙ながらにレイナが口にしたその言葉が、岬の心に深くと突き刺さっていた。レイナの事を想っていても、否応なしに彼女から拒絶されているのだと思ひ込み、彼女に近付き寄り添う事が出来なかったのだ。

このままで……良いのか？

本当に、レイナの言葉通りに彼女の事を忘れ、従う事で構わないのか？ レイナを想っているからこそ彼女の『意』を汲むべきなのだろうか？

以前、岬はそうして『玲奈』を失った。危険な賭けだと承知していたのに、彼女を愛するが故に、真に自分が譲るべきではない部分までをも手放してしまったのだ。

「……？」

岬は自室テーブルに置いていた携帯から、F C Iの緊急呼び出し音が鳴っているのに気が付いた。

「はい？」

「岬、俺だ」

携帯の向こうで重苦しい声がした。

「ジン？」

何かあったのだろうか？ ザワザワと胸騒ぎがして厭な予感に襲われる。

「召集だ。レイナが……逃げ出した」

\* \* \*

「予定変更だ。逃走したのなら、此方も容赦無しだ」

ジンはそう言って召集を掛けた四人のメンバーを見渡すと、大型のショットガンを岬に向って有無を言わず押し付けた。岬は戸惑いの表情を浮かべながら仕方なく銃を受け取る。

「これは？」

岬は銃身に視線を落した。見掛けは通常のショットガンと同じだが、銃口部が三箇所に分かれていて、中から楔のような鋭い針が不気味な顔を覗かせている。

「開発技術部からの間に合わせだ」

ジンは手元にあった3 Dグラフィックのスイッチを入れた。機器の起動に室内の照明が呼応して暗室になり、中央には岬の手に在

る物と同じ銃が原寸大の3 Dとして浮かび上がる。

「目標の周囲二メートル以内の三箇所を、このフィールド発生装置で取囲む。いいか？ 完全に取囲まないと駄目だ。で、自動で球状のフィールドが出来る。これで目標は完全に脱出不可能になる」

ジンの言葉に反応して、銃の使用方法が3 Dアニメーションで解説される仕組みだ。

「そして、このスイッチを入れる」

最後に、ジンはペンライト型の起動スイッチを取り出して、親指でスイッチを入れて見せると、球状のフィールドに取囲まれた人型のシルエツトが、一瞬にして霧状に分解されてフィールドごと消失した。

その場に居合わせたメンバーからざわめきが起こり、3 Dを凝視していた岬の左手が強く握られて血の気を失った。

「高圧力を掛けた。この中は一瞬で摂氏二千度以上になる。」

「これって電子レンジの理論かよ……焼き殺すのか？ 人間を？」  
ジンの解説に、表情を険しくさせたテッドが問い質す。

「人間じゃない。相手は化け物だ」

「化け物……ねえ。そいつはチョット……随分な言いようだよな？  
オイ」

目標が誰であるのかを知っているテッドは、岬にちらりと一瞥を遣した。

二人の遣り取りが聞えたのかどうか不明だが、岬は渡された銃に視線を落して俯き、押し黙ったままだ。

「しかし、その役目が、何故高城なんだ？」

テッドは腑に落ちない素振りや異論を唱えた。その言葉の端々に、是が非でも岬とターゲットであるレイナを会わせるべきではないと言っ、彼の気遣いが窺える。

「そうだ。コイツには無理だ。捕らえる機会は何度もあった。なのに尽くしくじっている。きつと今回も同じだ。出来る訳が無い。一任させるのは反対だ」

銃をじつと見詰めている岬の背中に、半ば野次とも取れるキリーの不満の声が向けられた。木下が同感だと相槌を打って見せるのだが、二人はテッド程岬に対して甘くは無い。飽くまでも任務遂行の為の見解からだ。

「高城以外では無理だ」

ジンは静かに首を振って言い切った。

「どうして？」

「ヤツは高城だけは気を許している。見て判るだろうが、この装備は射程が短い。接近しないと確実にフィールドに閉じ込められないし、万が一外したとしても臨時の調達品だ。換えの残弾は残り一発。それにカートリッジを交換している間に狙われたらどうする？ 相手はサイバノイドじゃない。インターセプタがヤツにどれだけの効力を発揮出来るのかも現時点では不明だ。だからこそ至近距離でもって一発で決める確率が高くないと駄目なんだ。それでもって言うのなら……どうだ？ 代わりにどちらかが遣ってみるか？」

ジンは反対していたキリーと木下に向って視線を送ったのだが、補足説明で二人共口を閉ざしてしまった。

「他は高城のバックアップに廻ってくれ。部長からの指示をこれから……」

言い終わらない内にジンの携帯が鳴り、応対したジンの表情が強張った。

「目標を発見したようだ。説明は移動中にする。行くぞ」

\* \* \*

移動中のヘリの中、ジンが息を詰めてモニタを見入っている岬の肩を叩いた。岬の肩がビクリと大きく跳ね上がる。

「大丈夫か？」

「あ？ ……ああ」

岬はモニタに捉えられたレイナの姿に、動揺を隠せないでいた。

「本当に……彼女なのか？ この……獣みたいなモノが？」

岬はジンに何度も念を押した。画面には他の課からの応援部隊に追い込まれて猛り狂い、咆哮を上げる白い生物の姿が映っている。

肩口から上は人間らしい頭部で、下は真っ白な毛に包まれた四肢を持つ獣。しかも全身に蒼い刺青を配した幾何学的な模様が浮き出ている。人間の頭部と言っても、長い白髪こそ保ってはいるが、見開かれた真っ赤な眼に、尖って立つ小さな耳。裂けた口許からは剃刀のような鋭い牙が見え隠れしている。部分的には『豹』だと見えなくも無いが、全体を見れば想像上の獣か魔物……より近い表現と言うのであれば、細身に見える古代エジプトのスフィンクスの例えが近いだろう。

「さっきも言った通りだ。何度も言わせるな。俺が駆け付けた時にはもうあの姿だったんだよ。死への恐怖であの女の野生が目覚めでもしたんだろう？」

敢えて自分と小島の件も、レイナが襲われてこの姿になってしまった事も伏せておいた。今は岬に余計な事は言べきでは無いと、ジンはそう判断したのだ。

これからレイナと対峙する岬に、雑念を与えさせる訳にはいかなかった。一瞬の躊躇いや気の迷いが命取りになる。余計な言葉を口走って岬に動揺を与える訳には行かない。唯でさえ勘の鋭い岬から気取られないようにするには、不自然であろうとも言葉数を少なくして無理を押し通すしか無いのだと、ジンは自分に言い聞かせていた。

「しかし……」

岬は言葉を濁した。こんな半端な変身がレイナなのだろうか？

彼女は意識不明だった場合でも、完璧な美しい白豹に変身出来ていた筈だ。しかも先程まで、総ての機能を強制的に停止させる薬液の中で拘束されていたのだ。誰かが手を貸さなければ、脱走した事実と辻褄が合わない。レイナの変身する姿を見ていただけに、モニタの半身獣の中途半端な彼女の姿が、俄かには信じられなかった。そ

れに、彼女の肌に浮き出ている紺色の紋様も、明らかに豹紋とは違って人工的に創り上げられたモノにしか見えない。

「高城、目的地上空に到達するぞ？」

モニタを食い入るように見詰めている岬の意識に、テッドの声が割って入った。

「了解」

岬は抑揚の無い返事をする、シートベルトを外して立ち上がる。搭乗している全員が特殊繊維で出来たジャケットに、ヘリから降下する為の装備一式にフルハーネス姿だ。岬はゴーグルを着け、摩擦に強い特殊繊維のグローブを嵌めながらヘリの後部ハッチへと移動した。

移動中、岬は軽く右手の握力を付けるように何度か握ってみた。

右手の腫れは多少引き、既に薬で痛みは散らしてはいるが、まだ完全では無い。

「気を付けるよ」

「へぼるな」

ジンをはじめ、全員がそれぞれに声を掛け、岬に檄を飛ばす。

岬は軽く頷いて応え、装備フックにワイヤを繋いでハッチから身を投げ出した。

岬が降下を始めた直後に、ヘリのA・Iが異変を察知した。

「三機ノ機影確認。識別、不明」

「何イ？」

降下する岬を映しているモニタから、テッドが慌てて顔を上げる。

「低空飛行デ接近シタ模様。ろつくおんサレマス。緊急回避」

咄嗟にヘリのA・Iが自動操縦に切り替わった。操縦席に座っているテッドの目の前のコンソールが一斉に赤色表示になる。同乗していた全員がそれぞれに身構えた。

「止める！ 今回避すれば降下中の岬が！」

テッドはA・Iに指示を出す。

「指示八拒否サレマス。指示八拒否サレマス。指示八拒否サレマス  
……」  
「クソツッ！」

テッドが拳で保護カバーを叩き割り、レバーを引いてA・Iの自動操縦回線を強制的にカットした。へりは機体を大きく揺らせて回避行動を中断する。

降下中の岬の身体が、振り子のように大きく振り廻された。

「岬！ 大丈夫か？」

テッドがマイクにしがみ付く。辛うじて岬の無事を確認出来たが、休む間も無く接近して来る未確認の機影から、幾つもの光を確認した。

「撃つて来たぞ！」

「当たる！」

「間に合わん！」

テッドは舌打ちしてへりの機首を下げ、機体で以って降下中の岬の身体を光源から庇った。

幾つもの光の筋がジン達の機体を擦過する。激しい横揺れと衝撃が、彼等と降下中の岬を襲った。

「テッド！ 無事か？」

「ああ掠っただけだ……けど、マジでヤバイ」

岬からの通信を受け、テッドの手が目まぐるしくコンソールの上を奔るのだが、彼の目の前の計器類は瞬く間に赤色表示に変わって、次々に沈黙して行く。

「このままだと墜落は免れん」

「ワイヤを切れ！ こっちも外す」

「しかし……」

「いいから早く！ 今のはレンジ外からの盲だが、次は当たる！」

「岬……すまん」

テッドは岬を繋いでいたワイヤを外した。へりは一旦機体を上昇

させると白煙を靡かせて、ふらふらとよたりながら高層ビルの間  
消えて行った。

ワイヤを外された岬の身体が急速に自然降下し始める。素早く自  
分のフックからワイヤを外すと、すぐ傍のビルの外壁目掛けて予備  
のワイヤを撃ち込んだ。

ビルへと身体を急速に引き寄せられながら落下している岬に、未  
確認のヘリの一機が急速に接近して来た。ヘリの機銃が岬を狙って  
火を噴き、銃弾が横方向から雨のように叩き込まれる。

岬は銃を手にして光学シールドを起動させた。落下速度を利用し  
て銃弾の雨を掻い潜りながら、ビルの窓を狙って撃つと、インター  
セプタを起動させて罅の入った二重ガラスを蹴破り、無人のオフィ  
スに飛び込んだ。突然の侵入者に、建物の非常ベルがフロア内で一  
斉に鳴り響く。

ヘリの機銃は猶も執拗に岬を追い掛け、次いで小型ミサイルが撃  
ち込まれた。

岬は横っ飛びに身体を投げ出して、小型ミサイルを遣り過ぐす。  
ミサイルはビルの反対側の壁を突き破って貫通し、爆発した。

ミサイルの破壊力によって、岬の居るビルの上部分が真っ二つに折  
れ、地上へと落下する。

「うわ……」

先に光学シールドが切れた。

爆風で煽られて身体が簡単に吹き飛ばされた。背中から強く壁に  
叩き付けられて、床に落ちる。無意識に身体を丸めて受身の体勢を  
採ったが、保護シールドのインターセプタを起動していてもかなり  
の衝撃だ。脳が揺らされてクラクラし、鼻の奥がキナ臭くなる。

「っ……」

顔を顰めて両手で後頭部を抱え込んだ。鼻の奥から生暖かいもの  
が流れ出し、違和感を覚えて片袖で拭う。

拭った袖が真っ赤に染まっていたのを眼にした岬は、顔を顰めた。



奇跡的にも何とか無事……だったようだ。耳を澄ませて外部の様子を探ってみるが、どうやら次の攻撃は無さそうだ。連中は、先ほどの攻撃で岬を仕留めたものだと思っただけらしい。

それまでは息を詰めていた岬だったが、自分の取り敢えずの安全を確保出来たと察して大きな息を吐いた。

「テッド！」

非常用階段に向かって走りながら、応答して来ないテッドへ繰り返し呼び掛ける。オフィスの壁に大きく穿たれた風穴からは、まだ外での銃声と爆音が断続的に鳴り続けている。

戦闘をしていると言う事は、まだ生存者がいると言う事だが、皆は無事なのだろうか？岬の焦りと不安が、胸一杯に大きく広がった。

\* \* \*

ジン達を乗せたヘリは爆発は免れたものの、機首を下げ、尾翼部を空に向けて逆立ちをしているような状態で路上に着陸していた。機内に装備されていた物のうち、固定されていなかったものが床と化した操縦席フロントにはば撒かれて雑然としている。

ジン達は辛うじてシートベルトで身体を固定されていたが、逆立ちをしているヘリの機内で宙吊り状態になっていた。それぞれがお互いの身の安全を確認し合って安堵すると、今度は軽口を叩き始める。

「マズイぞ。奴等分かれて追い掛けて来やがる」

連中の雑談には加わらなかつたテッドが、GPSからの情報で状況を把握して呻った。彼は事故で視力を失い、脳内視神経系統を電子制御措置で補っているバイオノイドだ。

「一機、岬に就いた」

状況を死んでしまったヘリのモニタに強制リンクさせて、ジン達に補足説明する。

画面には、光学シールドを展開してモニタでは捉えられなくなっ

た岬の影を、ホバリングして執拗に追っている武装ヘリが映っていた。カメラは高層ビル屋上等に防犯用として設置されている一般向けのもので、カメラ映像を失敬してテッドが勝手に引いて来ているものだ。

「奴は光学シールドを掛けているのに……連中には丸見えなのかよ？」

モニタを睨んで木下が唸った。

「眼クラマシ（光学シールド）をしても影は映る。だがコイツはどつやら眼クラマシを知り尽くしているな。コイツは影を追っているんじゃない。映像フィルタで中和してやがるんだ」

「映像フィルタ……って」

「軍関係者？ 身内かよ？ 相手は」

木下が言葉を失い、キリーが後を続けて忌々しそうに舌打ちした。「の、ようだな。シュライバーを起動させて注意を逸らせる。此方もその間に脱出だ」

テッドが吼えた。

「了解！」

それぞれが肩に迫撃砲を担ぎ、手早く脱出の支度をしている最中、テッドの義眼には、上空のヘリを見上げて放心状態になっているジンの姿が映っていた。

「俺の……せいだ……」

ジンは独り言のように呟き、テッドは眉を寄せて、そんなジンの様子を窺った。

三機のシュライバーを散開させると、案の定二機が機銃でシュライバーを追尾し始めた。動く物体を追尾するようプログラムされている所から、その二機は無人のリモートだと簡単に判断出来る。

九課のヘリ（エア・ブレイズ）から細心の注意を払って、先にキリー、続いて木下の順に脱出して行った。

少し遅れてテッドとジンが出て来る。その直後、ヘリは機銃の掃

射を浴びて爆発し、安全圏にまで離脱出来なかったジンとテッドを爆風が襲い巻き込まれたが、二人共インターセプタを起動させて、辛うじて難を逃れていた。

「野郎……舐めやがって……」

爆破されたエア・ブレイズを眼にして激怒ったキリーが、路上で片膝を着いて対空砲のステインガーの照準を敵機に向けた。キリーの照準が、拡大投影された機影を捕捉する。

「いい度胸だ。身内だろうが何だろうが、九課だと承知の上で喧嘩仕掛けてンだろっうな？ ……う？」

引き金に掛けていた指が凍り付き、キリーは合わせていた照準を慌てて逸らせた。彼が捕捉した機影は、自分達が乗っていたヘリと同じ型式のものだったからだ。

「あれは……武装したウチ（FCI）のヘリじゃないか？」

『身内』だと聞いてはいたが、まさか同じFCI所属専用機が現れ、自分達を襲って来るとは夢にも思わなかった事だ。

ビル風が舞う片側三車線の路上で立ち竦んでしまったキリーに、立ち並ぶビルの間を縫って背後より忍び寄ったヘリの攻撃照準が向けられる。

「伏せろ！」

瞬時にキリーの身体が反応した。

木下がキリーに駆け寄り、素早く腰を落として引金を引いた。右肩に担いだ木下のステインガーが耳を劈く砲撃音と衝撃を伴った炎を放つ。

木下の砲撃に慌てたヘリが回避行動を執ったが、既に手遅れだった。

追尾装置内臓の砲弾はどこまでも執拗にターゲットを追い掛ける。一度狙われれば回避は至難の業だ。

命中した砲弾は炎を機体に喰い込ませる。ヘリは失速し、爆発音を轟かせて空中で四散した。

テッドとジンは、エア・ブレイズの残骸に身を潜めていた。テッドは先程の爆発の煽りをまともに受け、インターセプタを起動していたにも関わらず左足を骨折していた。

対機械化人間白兵戦用防衛シールドではあるが、大元は使用者本人の『気』に呼応する物だ。同じ人間であつても、『気』の力が強い者が居れば弱い者も居るように、処置を施した人間にも『気』の個体差強弱がある。使用者総てに同等の効果は期待出来ない。

ジンが彼に添え木になる金属プレートを宛がって、応急処置を施していた。

「一体、どう言う心算だ？ あんな所で突っ立って、死ぬ気かよ？」  
「……」

テッドは、黙々と自分の手当てをしているジンの様子を訝り、首を傾げた。F C Iが人獣の情報を外部に開示した覚えも無ければ、ましてや陸防にその件を委譲したと言う事実等何処にも無い。事は秘密裏に行われている筈なのだ。

何者かが機密を漏らさなければ、こうも好いタイミングで自分達が襲撃される訳が無いのだ。だが、自分達はこうして襲われてしまった。予想外で起こった事実と、目の前で蒼くなり、俯いて思い詰めた表情を浮べているジンが、テッドの頭の中で何気にリンクして結び付く。

「ジン、お前まさか三課の……」

「言つな！」

言い掛けた言葉を鋭くジンが遮った。

「ああ、俺だよ。居なくなった彩香の情報欲しさにな。田幡に踊らされていたが、彩香は戻って来た。もう……もうあの女とは縁が切れたものだと思っていたのに……」

「馬鹿かお前は。相手に手札見せておいて、それでお終いだなんて無いだろよ。素材提供したオトシマエを、お前、どう着ける心算だ？」

「……」

テッドの野太い声に問い詰められて、ジンは益々小さくなった。

「それで三課がお出ましか。お互い内部事情がある程度知っているから、遣り辛いな」

テッドは舌打ちして『厄介な事になったな』とぼやく。

テッドは九課の輸送用ヘリ、エア・ブレイズの専属パイロットだ。実際に事件を捜査・関与する権限は与えられてはいない。しかし、普段から九課のメンバーと言葉を交わして交流している事と、彼の持ち前である『人柄の良さ』で、意外にも部内全員の個人情報に最も精通している人物だった。

勿論彩香が三課の一員であり、彼女がジンの大切な女性である事も十分承知していた。彼女が捜査会社の企業機密を盗み出した犯人だと噂されていた時も、彼女は無実だと信じていたし、先日無事に救助されたと知った時は心から喜んだ。その裏でジンが田幡と取引していたのを知り、胸中穏やかである筈も無かった。

だからと言って、ジンをそれ以上責める気にはなれなかった。彼女を信じて眠る間も惜しみ、毎日バイオ・ケミカルに足を運んでいたのを、具にテッドは見て知っていたからだ。

新たな方角から、断続的に機銃の音がした。林立する高層ビルに銃声が反響して響き渡る。

テッドは再び『視覚』を電網に泳がせた。端末の一般外部カメラに次々とリンクさせ、機銃が狙っているものが何であるのかを着き止める。

「お！」

思わず声が出た。テッドが見たのは、神々しくくらいに真っ白な獣の姿を持つ『獣のレイナ』だった。話には何度か聞いてはいたが『玲奈』を知っていたテッドも、彼女の姿には流石に言葉を失ってしまった。そして、この人獣である『レイナ』を仕留める為に向った岬の胸中を慮って、他人事だとは思えずに同情して気が滅入って

しまう。

「見付けたのか？」

「ああ。今の掃射で高城の居るビルに目標が逃げ込んだ。裏口からだが……こりゃあ、じきに鉢合わせするぞ」

テッドが状況をジンに伝えると、続いてヘリと戦っているキリー達二人を物陰から垣間見た。追尾装置を搭載しているステインガーなら簡単に墮とせると思っていたのだが、相手から建造物を盾に取られて、殊の外苦戦を強いられているようだ。

「クソッ！ これじゃバツクアツプ処じゃない」

テッドは忌々しそうに固定された自分の脚を睨み付けて歯噛みした。

「……」

テッドの処置を終えたジンが、自分の拳銃をぎこちなく左手に持ち、すつくと立ち上がった。軽装備のワイヤレスヘッドセットを着けると、何度か首を左右に振って、自分の耳に馴染ませる。

「何をする気だ？ おい？」

「俺が行く。テッド、ナビを頼む」

そう言い残すと、ジンは踵を返して走り出した。

「ジン！ 利き手が遣えないのに無理だ！ 止める！」

テッドの声が空しくジンの後を追いつけた。

\* \* \*

「あ！」

突然、横方向の通路から現れた白い獣に、走っていた岬は軽く腰を落とし、急ブレーキを掛けて立ち止まった。

人獣も、岬の出現にハツとして一瞬怯んだように見えた。しかし、相手が人間だと察知すると、たちまち鋭い牙を剥き出しにして低く呻って牽制する。

人獣の瞳は既に正気を失い、狂ったように白い髪を振り乱し、咆

哮して岬を威嚇した。頭の中を鋭いナイフでキリリと抉られるような高音域の咆哮が、左右の通路に張られたガラスを共鳴させる。共鳴したガラスが激しく打ち震えると、次々と大きな音を立てて罅割れ、破裂して行く。

獲物を狙う残虐な赤い眼に鋭く射抜かれた岬は、その『獣』が持つ気迫に圧倒されて怯み、その場から一步も動けずに立ち尽くしてしまった。

「レ、レイナ？ レイナ……なのか？」

問い掛けた岬の聲が上擦り、擦れる。

岬の聲が届かなかったのか、人獣は四肢を低く撓ませると、一気に岬に襲い掛かった。

岬はインターセプタを起動させようと意識を集中するのだが、雑念が生じているのか起動出来ず、そのまま人獣に押し倒されてしまった。ジンから受け取っていたショットガンの銃身で、人獣の顎を押し上げて揉み合いになった。眼の前で、鋭い牙がガチガチと咬み鳴らされる厭な音がする。

「止せっ！ 俺が判ら無いのか？ レイナッ！ 俺だッ！」

人獣は鋭い牙を剥き出し、岬に喰らい付こうとして猛然と襲い掛かる。

「レイナッ！ 止めろッ！」

何度呼び掛けても無駄だった。人間の力とは思えない圧倒的なパワーを持った人獣の鋭い爪が、特殊繊維の防護服を紙細工のように意図も簡単に引き裂いた。

返り血が、人獣の白い身体を紅く染める。

「岬！」

もう駄目だと思って覚悟をしたその時だった。

自分と呼ぶ声がして、銃声が響く。

人獣は岬の身体からひらりと身軽に飛び退いた。そして、後から現れた声の主を標的に変え、恐ろしい唸り声を上げてジンに襲い掛かる。

ジンのインターセプタは正常に起動していたが、床に押さえ込まれた圧迫感は回避出来ない。堪らずに悲鳴を上げた。

「離れる！ ジン！」

岬は上体を跳ね起こし、自分の拳銃を構えた。しかし、激しく揉み合う相手を目前にしていながら、引金を引く事が出来なかった。

ジンがインターセプタを起動しているとはいえ、その相手は変わり果てた姿になったレイナだ。躊躇いが岬の照準を鈍らせる。

「駄目だ……出来ない！」

岬は固く眼を閉じて天を仰いだ。

「い……今だ！ 岬！ その銃で俺ごと狙え！」

揉み合っていたジンの腕が人獣の首を捉えた。暴れる人獣を必死で押さえ込みながら、ジンは声を張り上げる。

「しかし……」

言われるまま岬はショットガンを構えたが、その引き金に掛けた指は微動だに動かさなかった。岬の脳裏に、FCIで観たシミュレーションCGの映像が浮かんだからだ。

「俺に構うな！」

人獣は猛り狂ってジンを襲うが、インターセプタで保護されているので、牙はジンの身体までは届かない。

「何をしている！ は、早く！」

「めだ……俺には……」

「愚図々すんなッ！」

「駄目だっ！」

岬は激しく頭を振った。

「『命令』だ！ 岬ッ！ 遣れ　　ッ！」

声を限りにジンが叫んだ。

「っそおおお　　！！！」

『命令』だと言われても、岬は従う事が出来なかった。

この武器を使用すればフィールドに閉じ込められた者は跡形も無く消し去られてしまう。そのターゲットがジンとレイナであれば、



尚更使用する事が出来ない。

FCIは『謀報』的な部類に属するが、決して人命を軽んじる部門では無い。ましてや岬は外科医でもある。そして、岬が所属している九課は、本来ならば助かる可能性が低い者を救う為の部署だ。

岬は両手で構えていたショットガンを素早く右手に提げると、腰に携帯していた自分の銃を利き手に持ち、二発の威嚇射撃をした。

ジンの両腕が解け、人獣は彼の腕から素早く飛び退いて距離を措く。

「馬鹿野郎ッ！ 折角仕留めるチャンスな……ッ！」

顔を紅潮させたジンは、右肩を庇って上体を跳ね起こし、岬を睨み付けて罵倒した。が、次の瞬間、ジンは顔を顰めて蹲った。どうやら今ので右の鎖骨を折られたようだ。

人獣は一瞬、燃えるような真つ赤な眼で二人を交互に睨み付けたが、岬の手にしている銃に身の危険を察知してか、ぱつと身を翻して背を向け、その場から逃走しようとした。

「！」

反射的に岬の手が動き、腰だめに構えたショットガンの引金を引いていた。三本の楔が発射され、人獣の三方を確実に捉えて包囲する。

強力なフィールドに捕えられた人獣は、驚いて狂ったように大暴れした。

「……」

岬は何も考えられなかった。このままの姿で 人を憎む獣の姿のレイナを逃亡させてはいけなと思った。ただそう思っただけなのに、自分の身体が勝手に動いたのだ。

思いも依らなかった自分の行動に驚き、呆然と立ち尽くす岬の手から、力無く銃身が解けて滑り落ちた。

「遣っ……た」

面を上げたジンが奇跡でも見たように歓声を上げる。

「遣った……遣ったぞ！ さあ、スイッチを入れる！」

「く……」

「何をしてる？ 岬？」

岬の様子を訝ったジンの声のトーンが急速に下がった。

岬はフィールドに完全に包囲された人獣に向かって、引き摺るように足を一步踏み出した。興奮して手放しで喜んでいるジンとは反対に、岬の顔は蒼白だ。

「岬？」

「ナ……レイナ、判らないのか？ 俺が」

人獣には、もう岬の声が届かないのだろうか？

岬の呼び掛けにも応えず、人獣は必死になって抜け出そうとフィールド内で暴れ狂っている。

「まだ判らないのか！ その獣は人間じゃ無い！ お前の女でも無い！ 岬！ スイッチを入れる！ それで総てが終わるんだ！」

ジンは意を決して、冷たく言い放った。

「れ……いな……」

岬は捕獲したフィールドの傍に立ち、俯いた。

目の前がぼやけて人獣の姿が見えなくなってしまう……その岬の片手には、既に受け取っていた消滅用起動スイッチが固く握られていた。

第17話 譲れない、護るべきもの（後書き）

鳩尾：みぞおち

肋骨が正面中央で繋がっている三角形の空間部分。横隔膜と胃の辺り。相手側正面に向って正確に突き上げると、非力でも大男に対してKO可能な急所。

## 最終話 マテリアル・メモリ

「駄目だ。俺には……俺には出来ない！」

岬の眼から雫が零れ、レイナを囲むフィールドの表面をパタパタと濡らした。

レイナを囲んでいるフィールドは、岬達が使用しているインターセプタの応用品。フィールドを発生させている三箇所の楔は、フィールドを維持するための高エネルギーが内臓されているが、彼女との別れを惜んでいる間を与えてくれるほどの持続性は無い。

「……」

緊張して張り詰めていた周囲の空気が一変した。

様子がおかしいと察して面を上げた岬の眼には、その場に座り込み肩を落として頂垂れている人獣の姿が映った。ぴんと立っていた小さな耳は後ろに倒れ、全身が小刻みにブルブルと震えている。燃え盛る炎のような紅い眼がゆっくりと閉じられたかと思うと、その眼からは、岬と同じものが溢れて落ちた。

まるでこれから自分の身に襲い掛かるうとしている恐怖が何であるのかを承知し、覚悟しているようにも見て取れた。岬は変身したレイナが未だに人の心を忘れずに持つていて、わざと自分の目の前で捕らえられたのだと瞬時に覺った。

岬の手の中には、フィールドごとレイナを焼き尽くしてしまう、恐ろしい起動装置があると言うのに。

レイナは一度、捕らえられた自分を助け出そうとしていた岬に『自分の事は忘れて』と言った。それは彼女が岬を嫌うが故に発した言葉であり、そして生きる事総てに対しての諦めの言葉であったのだと、そう岬は解釈していた。

しかし、あの時も　そして今でも彼女は泣いている。この涙は、彼女の絶望の涙でしか無いのだろうか？ 『死にたくない』との意思表示では在り得ないものなのだろうか？

「どうして『俺』なんだ？」

思わず言葉が口を突いた。

レイナの総てが今、岬の手中に託されている。そう思うと、正気では居られなくなりそうだ。大切にしたいと想っている彼女の命に、何故自らが手を下さなければならぬのか？ たとえ世界中を敵に廻し、レイナ本人から嫌われていたとしても……それは断じて譲れない自分の護るべきものなのではないのかと

FCIに所属している者として、指令に逆らい遂行出来ない事は最も恥ずべき行為であり、ともすれば裏切り行為と見なされ、連法会議ものの不祥事になる。

勿論岬は、その総てを承知していた。

『一人の男として、ただ彼女に就いていたい』その気持ちに偽りは微塵も無い。

岬の視界が、人獣となつたレイナの延髄部から太い針のような物が打ち込まれているのを捉えた。銀色に光る太さ三ミリ程の針は、レイナの首筋を刺して、肌から禍々しく露出している。

彼女が再び変身して逃げ出したのは、その針が原因だと岬は覺つた。

「やはりお前には無理だったな」

冷淡なジンの声に、岬はハツとして振り返つた。ジンの手には、岬が持つている物と全く同一の起動スイッチが握られている。

「悪い。お前を最後まで信用出来なかつた。だが、俺ならコイツを殺れる！」

「止めるおおおお！ 消すなあああ　　！」

スイッチに宛がったジンの親指に力が込められるその刹那、岬の絶叫が辺りに木霊した。レイナが逃げたのは彼女の意味では無いのだと、今更説明出来る猶予など無い。

岬の『気』が爆発的な勢いで昂り、超人的な反射神経と集中力が研ぎ澄まされて、周囲の状況を一気にスローモーションに変換させ

た。

ジンの動きが、岬にとっては緩慢な動きにしか見えなくなる。インターセプタの強烈な閃光に包まれた岬は、足元に打ち込まれていた楔の一本を力一杯蹴った。

楔は床から引き抜かれて高速で回転しながら、ジンに向かって一直線に飛ぶ。

ジンは悲鳴を上げながら、瞬時に腰を抜かして座り込み、難を逃れた。楔は今まで彼が居た丁度頭部辺りの壁を穿ち、深々と突き刺さった。

フィールドの均衡が崩れ、中から自由になつて飛び出して来た人獣を、岬は動きを見切つて素早く背後に廻り込み、刺さっている針に手を掛けると力任せに一気に引き抜き、空いていたもう片方の手で素早く傷口を押さえて止血した。止血に間に合わなかった血飛沫が、岬の上半身へと勢い良く撒き散らされる。

人獣は恐ろしい雄叫びを上げた直後、その場で意識を失つて崩折れた。

飛んで来た楔を寸での所でかわしたジンは、一旦立ち上がると、よろけて二、三步後退し背中から壁伝いにへたり込んだ。恐怖で暫らく声が出せず、顔を強張らせて口をパクパクさせている。

「お、俺を……こ、殺す気か？」

「悪い……そんな心算じゃ無かった。けど、もう大丈夫。彼女はコイツで操られていたんだ」

肩で息を切らせて顔面蒼白になりながら、やっとの思いでジンがぼやいた。恐怖で両膝ががくがくと戦慄いて止まらない。岬も肩を激しく上下させていた。そしてたった今彼女から抜き取った血塗れの針をジンの足元に放つて遣す。

乾いた金属音に、思わずジンが身体を竦めた。

「そんな心算も、こんな心算もあるかよっ！ ったく！ も、漏らさそうになつたじゃないかよ！」

涙眼になったジンは、仁王立ちになっている岬から、変身が解けて彼の足元に倒れているレイナの姿に向けて視線を這わせた。

彼女は人獣の姿が解けて床に突っ伏し、白い髪の女性の姿に戻っている。

「ほ、本当に操られていたのか？ も、もう、大丈夫なんだろうな？」

「ああ……おい、何見てるんだよ？ あっち向いてろ！」

岬は断熱用の保護フィルムを装備から取り出すと、彼女の肢体をジンの眼に触れさせまいとして、意識を失っている裸身のレイナを素早く包んで抱き上げた。

岬の落ち着いた様子に、ジンはほっと胸を撫で下ろして二人に近づく。

「お前には、もっと詳しく事情を訊いておく必要があるみたいだな？」

「……」

軽々とレイナを抱え直した岬は、そう言って恨めしそうにじろりとジンを睨み付け、ジンは気不味くなって、岬から視線を逸らせた。

「岬！ ジン！ 無事か？」

「今頃ノコノコと……遅せえんだよッ！」

苛々した岬は、やっと通信を回復させて連絡を遣したテッドに咬み付いた。

\* \* \*

レイナの新しい身体が完成するには、ほぼ一月に渡る期間を要した。通常の過程では、依頼者の体細胞からコピー培養し、身体に必要な箇所を製作する手順で、完成するには数週間あれば十分だ。

ところが、オリジナルのDNAを残さない条件を前提とした、完璧なレイナの模造品コピーの製作は特殊であり、容易では無かった。受注先の製造会社は大いに悩み、莫大な経費と時間を費やして試行錯誤

を繰り返していたのだ。

本人の意思では無かったが、逃亡したレイナの件を憂慮したFC工上層部は、彼女の首に逃亡防止の枷を付け、更に新しい身体が出るまで、以前と同様に薬品浸けで眠らせる方針を採っていた。

岬は眠らされているレイナの個室に足繁く通っていた。

勿論彼女の医療面での健康維持チェックと言う、ご大層な名目付きで。けれど、眠っているレイナを訪ねたからと言って、特別何をする訳でも無かった。必要項目の簡単な医療チェックを済ませると、日々時間が許す限り、残された時間を眠っている彼女の傍に就き、静かに寄り添っているだけだ。

他人が見れば、悪戯に時間を費やしているように思えるのだが、彼女に意識が無くても、言葉を交わす事が無くても、岬はただ黙って傍に居るだけなのに不思議と気持ちや和らいで落ち着く心地好さを覚えていた。それは、岬が心身ともに疲れ切っていたからこそ、特別に感じられた安らぎであったのかも知れない。

けれども、いつまでもこうしていきたいと岬が願った時間は、そう長くは与えられ無かった。

あと数分後で『玲奈』の総てが失われる処置が始まる。

岬はそう思うと堪らなくなった。何度彼女を維持装置から助け出し、二人で逃げ出そうと思った事か……此処が普通の病院であれば、簡単に逃げ出せる。そうであつたら良かったのにと考えずには居られなかった。

けれど、此処はFCIの地下医療室。幾ら頭の中でシミュレーションを繰り返しても、出て来る結果は一つだった。

室内の各所に設置された監視カメラが常時稼動して、岬と眠っているレイナを捉えている。此処で彼女を連れ出せば、捕まって引き戻されるのは必至。そうなれば自分はおろか、彼女も問答無用で消されてしまうだろう。FCIが岬に約束していた『サイバノイド』として生きると言う、その存在を維持する事さえ叶わなくなっ



まうのだ。

岬は重い腰を上げて、眠っているレイナに近付いた。普通の管理であれば、呼吸可能な医療用水溶液に沈められている身体は、皮膚が水分を過剰に摂取してしまい、本人とは思えないくらいに浮腫んでしまうのだが、彼女の場合は違っていた。

毎日岬が細やかに管理している為、彼女の身体には醜い浮腫み等一切見られない。それどころか、総合栄養剤を与えられたレイナは、以前よりも更に美しくなっていた。蒼白くくすみがちだった肌は肌理を整え、淡い薔薇色に変わっている。煤けていた長い白髪は補修成分を摂取して、艶やかな銀髪へと変化して輝いていた。

岬はレイナを包んでいる硬化ガラスにそっと左手を載せた。

維持されているレイナの体温が、そのまま直に掌に伝わって来る。サイバノイドの身体には、残念ながら体温は無い。今、岬の掌で感じ取っているこの温もりこそが、彼女の『命』であり、生きている証なのだ。

「レイナ、サヨナラは……言わないから」

そう言葉に出して言ったものの、岬の心は暗く沈んでいた。

自分がかもつと強ければ、彼女を如何にか出来たのでは無かったのかと思ひ込み、力が及ばなかった事を悔いて、岬は心の中で二人の『れいな』へ何度も何度も詫びていた。

「……………」

不意に、眠っている筈のレイナから、何かしら心に触れるものを感じた岬は、顔を上げて彼女を見詰めた。

生命維持装置の水溶液に何日も浸かっているレイナの閉じた瞼から、微かな気泡が現れて長い睫毛に絡まり、それが水溶液に弄ばれるようにして浮上する。

ゆっくりとレイナの瞼が開き、明るい栗色の瞳が自分を見詰めている岬を映し出した。

薬に依って眠らされている筈のレイナが、自力で覚醒して眼を開

けたと言っただろうか？ 在り得ない状況が目の前で起こっているのに、岬にはそれが何故だか不自然な事だとは思えなかった。

「私に……泣いてくれているの？」

レイナの物憂げな視線は、そう岬に問い掛けていているようだった。そして彼女は緩慢な動作で、ガラスに触れている岬の掌に、内側からそっと細い指先を重ねると、軽く顎を上げて再び眼を閉じる。

「レイナ……」

岬は彼女に向かって包むようにゆっくりと上体を倒し、ガラス越しにキスをした。

背後で静かに自動ドアが開き、数人の気配がした。サイバノイド処置を担当する、医療チームの面々だ。その中に、術衣を着用したジンが居る。

「岬？ ……いいか？」

ジンは二人を直視する事が出来ず、視線を逸らせて問い掛けた。

「今のは幻だったのだろうか？」

薬の作用で再び眠りに就いてしまったのか、眼を閉じたまま動かなくなってしまうた彼女を前にして、項垂れていた岬はジンの声に反応し、ゆっくりと顎を引いた。

\* \* \*

昼間、厚い雲に覆われていた空は雷雲を呼び寄せ、夕方にはとうとう大粒の雨をもたらせた。

「ひゃあ、やっぱ降って来たよう」

環が、ベランダに干していた自分のテニスシューズを慌てて取り込み、駆け戻って来た。

「お兄、洗濯物」

声を掛けるのだが、部屋に居る岬はカウンターテーブルに頼杖を

つき、視線は何も無い床の一点を見詰めて動かない。

環は動かない岬を訝った。

いつもは雨が降り出せば、環よりも先に洗濯物を取り込んでしま  
うのに、今日は全く違っている。けれど、その理由を尋ねられる雰  
囲気では無かった。環には、岬の周りの空気だけが一際異様に重た  
く感じられて、口を挟む事さえ憚られるような気配すら感じていた  
からだ。

「お兄？ 聞えてるの？」

それでも勇気を出してもう一度声を掛けてみたが、返事はやはり  
返っては来ない。

雨は一向に止みそうに無く、それどころか雨足が次第に強くなっ  
て来ているように思えた。

「ん、もぉー、しょーがないなあ」

環は仕方なく雨の中に飛び込み、洗濯物を取り込み始める。

携帯の呼び出し音が聞こえて、環の背後で部屋のドアが閉まる音  
がした。仕事の呼び出しかと思ひ、気にしないでいた環だったが、  
岬が出て行ってドアが閉まった後なのに、まだ携帯の呼び出し音が  
聞こえている。

「あゝ！ お兄携帯……」

テーブルの上には、呼び出し音が鳴り続けている岬の黒い携帯が  
放置され、傍にはいつだったか環があげた、蒼い組み紐が解かれて  
残されていた。

\* \* \*

岬は傘も差さずに降頻る雨の摩天楼を当ても無く彷徨った。

「馬鹿野郎！ 何処見て歩いてんだ！」

フラフラと覚束ない足取りで歩道を行く岬に、擦れ違いざまに他  
人の腕が当たり、汚い罵声を浴びせられたのだが、今の岬には彼の

怒鳴り声など少しも耳に届いてはいなかった。どんなに罵られようと、凄まれようと、心が抜けてしまったのか放心状態のまま表情一つ崩さない。まるで何かに憑かれたように機械的に歩き続ける姿を眼にした誰もが、岬を薄気味悪く感じて道を譲り、拘わるのを嫌って煙たがった。

気が付けば、岬はいつの間にか爆破されたクラブ・ラジエンドラの跡地に佇んで居た。一階を中心に数階の上下フロアを消失して廃墟と化してしまっただクラブのビルは、未だに解体されずに放置され、華やかだった頃の面影は微塵も無い。

夜になり、繁華街の中で最も賑わい華やかになる通りに面していると言うのに、岬の前にある廃屋だけが時間の片隅に忘れられて、取り残されているようだった。昼間でも尚薄暗い廃屋には、ホームレスや怪しげな取引をする者達の格好の屯場になっているらしい。

岬は上半分が無惨に消し飛んでしまったビルの入り口の濡れた壁に、そつと左の掌を押し当て俯いた。

「何も出来なかった。俺はレイナを護ると言っておきながら、何も……」

F C I 三課が解体され然るべき処分が下された後でも、レイナの状況は何ら変える事は出来なかった。悪戯に彼女の処置が日送りされただけだったのだ。

レイナの E・D をコピーしてサイバノイドに換装したとしても、所詮は偽者だ。自我を持つオリジナルの彼女はもう何処にも居ない。ただの機械人形となったレイナが居るだけだ。

「明日から……俺はどうすればいい？ どんな顔をして彼女に会えば良い？」

岬は誰にもなく問い掛けた。

任務の完了を告げられた今となっては、どうする事も出来ない。

抛り所としていたレイナの存在を奪われてしまったのだ。もうこれ以上、自分に何が出来ると言うのか？

最後まで彼女を救えなかった岬は、虚しさを覚えて空を仰いだ。強い雨が容赦無く岬を打ちのめす。まるで自分が総てのものから拒絶され、非難されているような気分だった。

「レイナ……何故逃げなかった？ 俺はあの時ジンと刺し違えてでも君を逃がす事が出来たのに」

何度後悔しても悔やみ切れない。

「駄目よ……」

優しく諭す彼女の声が聞こえた気がした。

ハツとして背後を振り返り、視線を左右に奔らせ、必死に「声」の持ち主を探して彷徨わせるのだが……岬の視界には、雨に濡れた繁華街で道行く他人の雑踏と、煌びやかなネオンが瞬く見慣れた光景しか映らず、彼女の姿を見い出す事は無かった。

人獣の確保と処分。FCIから下された指令には逆らう事が出来ない。逆らえばそこに待っているのは「死」が待っているだけだ。その先に未来は無い。

それでも構わなかった。彼女が逃げ出して生き延びたいとさえ望めば、喻え自分の命を投げ打ち引き換えにしても、その望みを叶えて遣ろうと決心していた。

なのに彼女は、そんな岬を頑なに拒んだ。

初めて逢った時、岬を陥れようとして逆に服毒させられ、死への恐怖から逃げ出したくて岬に縋った彼女の姿を思い出す。あの時のレイナは、酒に酔って弱っていた振りをしていた岬に対して、顔色ひとつ変えずに毒物を飲ませようとしていた女であり、岬との記憶を一切失くしていた「他人の女」であった。

任務だとは言え、レイナが自分の記憶を取り戻してはくれないだろうかと、淡い期待を胸に抱き、ずっと陰ながら彼女を見守って来た心算だった。想いが先走ってしまい、彼女に何度も近付いたが、その度に彼女は悲しそうな眼で岬を見上げて来た。そして岬は失意を感じて落ち込むばかりだったのだ。

結局、レイナが岬との関係を思い出してくれた様子は全く窺えな

かったのだが、彼女が岬に対して、利用価値を見出し出していたかどうかは別にして、何らかの想いを抱いてくれたのは明らかだ。そうでなければ岬に身体を許したりするような真似はしなかっただろう。岬を知らなかった頃のレイナが言った『死にたくない』と言っていた言葉と、岬を知った後の『忘れて』と言った諦めの言葉……しかし、自分の存在を否定したレイナの瞳は、ずっと岬を映していた。彼女の言葉には、岬の身を案じた彼女なりの想いが在ったからこそその言葉ではなかったのか？

何処からが彼女の嘘で、何処までが彼女の真実だったのだろうか？ 変身してしまう自分の身体に絶望し、自らの命を絶つ事しか他に術は無かったのか？

時折凄まじい威力で落下する雷に、佇む岬の姿が暗闇から照らし出され、濃い陰影を作った。

「おい！」

背後から、岬を乱暴に呼び止める少年の低い声がした。

「取引に来てんだろ？ ブツを渡しな」

いつの間にか、気味の悪い薄ら笑いを浮べた十七、八歳くらいの男女六人に囲まれていた。それぞれが手にナイフや金属バットといった獲物を握っている。どうやら彼等は、岬が麻薬か何かの取引に遣って来たのだと勘違いしているようだ。

「さっさと出せよ！」

岬の肩を乱暴に引いて、少年の一人が凄んで見せる。

落雷が、振り返った岬の表情を逆光にして隠したが、異様な光を帯びた岬の鋭い眼光までは隠す事が出来なかった。皆、岬の眼光に驚いて怯み、はっと息を飲む。

「と？ は、ははっ……ひ、人違いでした……すいませーん」

瞬時に岬が只者では無いと察した少年達は、あっさりと引き下がった。

「何だよ」

岬は不快感を露わにして、ボソリと吐き棄てる。

「う、ごめんなさーい！」

少年達は這々の体で逃げ出してしまった。

岬の視線は少年達ではなく、彼等の後ろで傘を差して立っているジンの姿を捉えていた。今の一言は、ジンに対して掛けた言葉だったのだ。そして、その険しい視線はジンではなく、彼の後ろに隠れるようにして傘を差している、長い銀髪の女性へと注がれていた。「こんな所に居たのか」

岬の不機嫌極まりない様子を察して、ジンは一瞬口籠る。

「さ、捜したぞ。環ちゃんから聞いた。お前、ちゃんと携帯持っている！俺は伝言板じゃねーからな」

「任務はもう終わっただろ？」

岬は素っ気なく言い放つ。尤も、今の岬にはレイナと関わった総ての者を遠去きたい気持ちで一杯だった。携帯をわざわざ家に置いて来たのはその為だ。

「こんな所へまで俺を追い掛けて……そうまでして俺を『人形』に会わせたいのかよッ！」

カツとなつて言い放ち、忌々しそうに彼女を睨み付けると、彼女は岬の鋭い視線に射抜かれてビクリと肩を震わせた。長い髪がさらりと肩から流れ落ちる。

「え？」

落雷の光に照らされて、一瞬ではあつたが『人形』と岬から呼ばれた彼女の表情がハッキリと見て取れた。

岬の心臓がドキリと大きく脈打ち、それまで生気を失っていた瞳の奥で、何かが瞬時に灯された気がして、思わず眼を大きく見開く。彼女は訳も判らないまま目の前にいる岬に酷く睨まれて、軽く身体を退いて戸惑い、萎縮してしまつたようだった。

「レ……レイナ？」

まさか？

岬は自分の眼を疑った。

目の前に居る彼女がサイバノイドではなく、紛れも無くレイナ自身 生身のオリジナルである事を岬は直感的に覺ったからだ。

\* \* \*

「言い忘れていたが、彼女は三課が使用した薬物の副作用で記憶喪失になっている。お前と知り合った頃の期間。つまり、彼女にとつての忌まわしい記憶一切が失われている。まあ、何かのきっかけで記憶を取り戻すかも知れないが」

「俺との事が『忌まわしい記憶』だつてえのかよ？」

ジンのあまりな言いように、岬はムツとなつて口を尖らせた。

「ま、本人が失くしてしまつたんだ。気の毒だがそう言う事になるんじゃないの？ 断つておくが、此方が勝手に記憶操作して消した訳じゃ無い。本当はそうする手筈だつたらしいけどな。彼女には多少の矯正処置が施されているだけだ」

「多少の……つて、これの何処が多少だよッ！」

岬は不用意に彼女を抱き締めようと手を出してしまい、痛烈な平手を喰らつて真つ赤になつた左頬を指差して訴える。

ジンは岬の左頬に残つた見事な手形に感心しながら笑つた。

「何故、彼女がココに居るのかつて顔だよな？」

「ああ」

岬は当然だと言わんばかりに頷いた。

「俺を含めて九課の全員がF C Iの決定に反対だつた。陸防や三課が動いてくれたお陰で、彼女を消す機会は何度だつてあつたんだ。だが、お前はその度にそれを妨害、回避した。お前は最期まで彼女を護り通したんだよ。自分が消されるかも知れないのを覚悟の上で、誰にでも出来る簡単な事じゃ無い。エラーだつたインターセプタさえ監視測定ゲージぶつ壊して起動させてくれたものな。分析課の連中も、お前の数値見て真つ青だつたよ」



そこまで言うとはジンは真顔に戻り、急に声を低くした。

「悪いが自宅を調べさせて貰った。お前の部屋から、許可の下りて無い拳銃数丁と銃弾が発見された。お前、まさかたったあれだけの装備で？」

「……………」

「俺達をなんだと思ってるんだよ？」

ジンは問い詰めるような視線を岬に送ったが、岬はジンの視線から逃げ出すように顔を背けてしまった。

あの時の岬にはこの世に未練など無かった。ジンの言った通り、レイナのサイバノイド処置を見届けた後で、行動を起こして遣ろうと決心していたのだ。しかし、FCIから不穏分子としてチェックを受け、要監視を言い渡されてしまった岬には、それが手配出来る精一杯の装備であった。

「死に行くようなモンじゃねーかよ……バカ。俺等だってなあ、お前を敵に廻すような馬鹿じゃない。後味の悪い処分の方向だって出来る事なら遠慮したいし……願い下げだってーの。ならいっその事、このままお前に護らせてしまえって結論になったんだよ」

「ジン？」

「でな、その事を部長に伝えたら、小島さんもお前の親父も、同じ事をそれぞれが伝えて来ていたそうさ。勿論、部長も同意だった。で、FCI幹部連中を説き伏せたんだ。こう言っちゃアレだが、部長は生きた標本が『ツガイ』だと仄めかしたらしいぜ？」

「つがい……って、俺と？」

ジンに指された岬は複雑な心境だった。やはり部長の三島は、岬が人獣である母親の血を濃く継いでいるものだと思知していたようだ。それは岬自身、強く自覚した事では無かったのだが……恐らく、三島の根拠は『レイナ』に執られた措置を回避する為の、だからこそその場当たりの苦し紛れの発言だったのだろう。

しかし、事情を知らない部外者が聞けば失言になり兼ねない。或いは、部長の三島が乱心したと思われても仕方が無い発言だ。下手

をすればレイナはおろか三島まで失脚し、岬も捕らえられてしまう諸刃の刃になってしまつてはないか。

「何でお前が『ツガイ』だと決め付けられたのか、俺には皆目判らん。が、まあ、その場凌ぎのハツタリでもかましたんだらうよ。だがな、モノは言いようだ。研究部門の連中にとつちやあ、奮い付きたくなる垂涎モノのネタだったらしいぜ？ 流石は百戦錬磨の老獪なジジイだぜ」

「ロウカイなジジイ……」

上司に対しての失礼極まり無いジンの言いように、岬は退いた。ジンは普段から岬との会話でも、余り口の利き方が上品な方では無かつたのだが、流石に今のジンは岬でもおかしいと勘繰つてしまつ。「ジン？」

岬はジンの様子を窺つた。暗がりでも良くは判らないが、ジンの顔はやつれて疲労の色が濃いように思える。

自分はレイナに付き添つて、ここ一月余りジンとは顔を合わせてはいなかつた。つい数時間前に、ジンは彼女を呼びに遣つて来ただけだ。その間、彼は何をしていたのだらうかと、急に岬は気になつた。

自分の様子を勘繰つている岬に気付いたジンは、ふと表情を和らげる。

「俺も少しは役に立てたのかな？」

「どう言う意味だ？」

「彼女を強制的に変身させた薬なら、その逆もありかな？ って。ま、発想の転換が功を奏したつて処かな？ チョットは感謝してくれよ？ あれから俺はその薬の解析と開発処方ですつと徹夜続きだつたんだからな。俺がサボるとでも思ったのか、傍にずつと小島さんが居てさ、居眠りしそつになつたら容赦なく引つ叩くんだけぜ？」

三島さんとお前の親父は度々……ってか、卒中様子を覗きに来るわでタイヘンだったんだぞー。後で、完成までのタイムリミットがあつたのを知つただけだな？ 何とか間に合つた。これでお前へ

の借りはチャラになるかな？」

話の後半は殆どボヤキ状態になっていた。ジンは軽く肩を聳やかし、ポケットから個装した白い錠剤を取り出して見せる。

「変身の抑止が出来るのか？」

「ああ。以前、お前がおかしくなってしまった妙な制御装置無しで何とかなる。尤も、変身は潜在的な能力に拠る処が大きいから、記憶を失った現時点での彼女には投与する必要は無いだろうよ。結局、予備薬的な物になっちまったけどな」

ジンはそう言って薬を岬に手渡した。

最新鋭のサイバノイドよりも、リスクを度外視し、可能性を信じて彼女の命に重きを置いてくれたジンや三島達、それぞれの想いを察した岬は胸が熱くなるのを禁じ得ない。

「此処に俺を追って来たのは、その事を伝える為か？」

「うんにゃ、それだけじゃない」

ジンは真顔になって姿勢を正した。

「彼女が新しく入った九課のメンバーだ。ま、お前には改めて紹介する必要は無いだろう？ 早速で悪いが、三島部長から装備E 二でカデナの軍総合病院への召集があった。高城、レイナの両名は、本日午前〇四〇〇までに当目的地へ急行。追って指示があるまで現場にて待機。以上だ」

「了解……やっぱりな。タダで此処まで追い掛けて来るとは思って無かったよ」

つくづく人遣いの荒い課だなど思いながら、それでも岬は渋々了解する。

「当たり前だ。今回俺は一回休み。お陰でリハビリ中の彩香と仲良く出来るってモンだ。そっちこそ上手く遣れよ？ ダンナ」

ジンは包帯に巻かれた右手を軽く挙げて見せた。傷は殆んど塞がっているが、普段通りに動かすのには、まだもう少し時間が掛かりそうだ。

ジンはニヤリと笑って左の親指を立てて見せ、岬は軽く応えて表

情を緩めた。

\* \* \*

レイナは気付かれないように、車のハンドルを握っている岬の横顔へ、そつと視線を奔らせた。

不安な気持ちは相変わらずだったが、それでも彼の横顔を見詰めていると、懐かしいような不思議な安堵感が心の片隅に湧き上がる。どうしてそんな気持ちになったのか不思議だった。『高城岬』と言う人物のパートナー契約は無期限。自分の主な業務は、FCIと岬との中継連絡だ。いきなりそんな条件を突き付けられても、レイナは戸惑うばかりだったのだが、何故だか拒否することが出来なかった。

それは、ずっと以前から岬を知っているような、そんな不思議な気がしてならなかったからだ。眼に見える物では無く、レイナの心の琴線に、岬がレイナに対して持っている『何か』に触れて惹かれたような……そんな気がした。

『貴方は……誰？』

言葉には出していなかったのに、呼ばれたように振り向いた岬と視線が絡み合い、レイナは緊張して顔を強張らせてしまった。

「ヨロシク」

必要以上に自分の事を警戒するレイナが妙に可愛く思えて、岬は表情を崩して優しく彼女に微笑んだ。

マテリアル・メ

モリ 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6156f/>

---

マテリアル・メモリ

2011年10月22日03時13分発行